

せめて幸せであれるな  
ら

酢酸のいも太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある少女のお話。

※少女を取り巻く人間達と、少女自身の葛藤みたいなものを描けたらいいなあって思ってる自己満足妄想垂れ流し小説なので矛盾もあれば御都合主義もあるのでまあ見たい人と性癖やら妄想やらを共有できたらいいなって思ってる。

※シリアスの皮を被ったただの性癖暴露小説。なので割と好きなように書いていきます。現時点では、淡々とした日常的なものが続くと思います。それこそ、本来ならばそんなものを書く必要性があるのかと問われるような話を書きます。

※ちなみに昔の自分のエタツた作品のリメイクのようなものなのですが、設定が改変

されているのでそこら辺の区別は微妙になっています。

※原作の時系列に行くまで時間かかると思います。

# 目次

E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	プ ロ ロ グ
1 1	1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
216	195	169	152	129	111	91	66	50	36	20	1

E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.	E P.
2 2	2 1	2 0	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4	1 3	1 2	
442	426	402	381	358	345	331	312	292	276	242	

# プロローグ

「話を聞かせてください」

「……なんだ、ガキ。貴様と話すことなどありはしない、失せろ」

「……………」

「——この世界の正義と悪という構造には不確かな欠陥が存在するように思えます」

「誰が貴様の世界に対する感想を聞かせろと言った」

「初めて会ってから随分と経ちましたし、そろそろそれなりに中身のある話だった  
いじゃないですか」

「むしろ空虚な話題だろ、それは」

「——これ、知ってます？ 甘味処の最新メニューなんですよ」

「………知らん」

「食べたくないんですか？」

「………要らん」

「ふうん、夏だと言うのに冷たいアイスも食べないなんて。変わり者だって言われませんか?」

「縊るぞ」

「——もうそろそろ私とちゃんと話をしてくれたりしません?」

「存外にしつこいな、貴様」

「一人相撲は趣味じゃないんです」

「初耳だよ。趣味どころか生き甲斐なのではないかと疑っていたが」

「……………」

「あなたにとって、正義ってなんですか」

「それを私に聞くのか。悪の大魔法使いであるこの私に?」

「初めからこれが目的でしたから」

「今までの、およそ二年間にも及ぶ、くだらん話題の数々はなんだったんだ」

「それはあなたが聞いてくれなかったからじゃないですか」

「……………」

「黙らないでくださいよ」

「はい、ちーず」

「……………」

「うわ、吸血鬼でもちゃんと写真には写るんだね、驚き」

「失礼なやつだな、お前は。その携帯はどうした」

「もうすぐで九歳になるし、頑張ってるから、つて。学園長おしちゃんが買ってくれた」

「甘やかされてるな」

「自覚はあるよ。自重はしないけど」

「……………」

「なに？」

「なんでもない」

「ふうん？ とりあえず番号を交換しよう」

「は？」

「いつでも連絡できるようにしたい」

「勘弁してくれ」

「聞いて？ 私、四年生にして英国へ課外授業に行く権利を貰ったんだよ。凄いやね？」

「それは外に出ることができない私に対するあてつけか」

「まさか。むしろ一緒に来てもらえないことに関してはあるあなたよりも悲しんでるよ。一人は怖いし、寂しいし」

「随分と弱気だな」

「現実的なだけ。吸血鬼に近づこうとしてくる厄介事なんていないでしょ？」

「人を厄除け祈願のお守りかなにかと勘違いしていないか？」

「……………」

「おい、何故目を逸らす」

「……………」

「おい」

それは、彼女との会話。その欠片。断片。一挙に押し寄せてきた光景は、あまりにも眩しくて、楽しかった。

恐ろしき凶悪の塊とされていた彼女は、存外にしつこく迫ってみれば、人並みに言葉を並べてくれる理性的な少女だった。





でも、きつと会えない。

もう会えない。

会いたくない。

私を見てほしい。

見てほしくない。

抱き締めてほしい。

殺し尽くしてほしい。

——なにかが、お腹の中でぐるぐると、唸った。

まただ。

空虚な路地裏で。

真つ黒な路地裏で。

もう、何日もぼうつとしていた気がする。壁にもたれ掛かって、しゃがみ込んで、そのまま。なにをするでもなく、本当にただ、呆然と。

——どうして、こんなところにいるんだっけ。

ぐるぐると、また、お腹が呻く。

そうだ。外の大通りにパン屋さんがあつたじゃないか。人通りの少ない、その通りで、パンを買おう。食べよう。そうしよう。

立ち上がると、世界が逆転した——ような気がした。

立っているのかも定かではない。いや、もしかしたら、もう立つてもないし、座つてもないのかもしれない。

頭の中で五十音を意味もなく並べてみる。素数を数えるみたいに。元素記号を読むみたいに。

だけどそんなものではお腹の中の唸り声は止んでくれない。

ふと、手が見えた。それは自分の手かもしれないし、他人の手だったかもしれない。赤黒くて、気持ち悪い。

「っ——」

気持ち悪い。

気持ち悪いから。

だから、切り落とした。

多分、それは無意識。頭の中に残っている、覚えている魔法だったと思う。断罪の剣。本来ならば、剣というよりも、対象への強制干渉とも言うべき魔法。個体であろうと液体であろうと、気化させるもの。斬るのではなく、溶かすような、溶断するような、そんな得物。

近接において、*「殺すための手段」*としては、最適解と呼べるものだろう。

——おじいちゃんに、褒められたような気がする。その年齢で、それを覚えられるのは、凄い、つて。

でも、それはあまりにも不出来で。安定もしてなくて。過程を飛ばして。そう、なんか、すごく錆びた鋸のようで。正に、千切るようで。

「  
」  
なにかすごいこえが出た。

あーつて。

たぶん、そんなこえ。

熱くて、熱くて、熱くて、耐え難くて。

八つ当たりするみたいに、その手を粉々にする。小間切れに踏み付けて、木っ端微塵に磨り潰す。もう手とは呼べないくらいに。原型を綻ばせて、血肉という概念すらも消滅させるみたいに。

すると、もう一本。

手が見える。

やつぱり、気持ち悪い。赤くて、黒くて、どろどろに溶けてるみたいで、気持ち悪い。

——精一杯の力で噛み付いて、噛み千切る。

手は、千切れなかった。ただ、血肉が抉れただけ。骨が見えている。口に残った肉片

が、不味すぎて、吐き捨てる。

こんなのは、ダメだ。こんな中途半端は、ダメだ。耐えられない。

痲癩を起こした赤子のように、駄々をこねるように、その手を壁に叩きつける。

何回も、何回も。

当然、千切れはしない。

何回もそうしているうちに、尻餅をついた。

既に感覚の無い手を、足で踏みつける。そのまま引き抜こうとすると、壊れかけのからくり人形のような、錆びた駆動部を無理やり動かすような、歪な音が聞こえた。

あとは、簡単に。

布を裂くみたいに、手首から先が、――。

「――。――」

誰かの声。誰だろう。

朧気な視界の中で、大通り側を見やる。殆ど条件反射のようなものだった気がするけれど、それは間違いではなかったようで、そこには大きな大きなパンがあつて、ああ、手間が省けたなあつて、そう思ったような気がした。

食べられるかなあなんて、思つて。ぼうつとして。

「――ッ！――ッ！――」

なんか叫んでる。

そつか、パンは喋らないか、なんて。ふと、そんなこえが頭に浮かぶ。じゃあ、あれはなんだっけ。つて。

誰——誰か……。誰つて、なんだっけ。何に對して、使う言葉だったっけ。もう一回、無意味に五十音を並べてみようかなつて、そう思ったけど、うまくまとまらなかつた。でも、匂いは分かつた。

今まで何回も何回も何回も食べてたはず。

いま迄何度も何度も何度も飲んでたはず。

そう、じゃあ、あれは、食べられるんだから、まあ、なんだつていいんじゃないだろうか。どうやって食べればいいのかは忘れたけど、まあ、噛み付いてしまえば、食べるという行為にさえ繋がられれば、なんだつて、いいのではないだろうか。

真つ白な腕を伸ばして、捕まえようとして。

「——鈴葉」

「あ——？」

なんか、脳みそに残つてるような言葉が聞こえた気がした。思い出したくても、思い出せない。凄く歯痒くて、痒くて、でも、まあ、思い出せなくても、なんでもいつか。

「随分と帰りが遅いと思つて来てみれば、こんなところで寄り道か……。……馬鹿者め」

なんだか酷く抑揚のある音だった。なんだか無性に溺れたような感覚がして、分からなくなつた。

でもそれは、今も尚私の脳内に響いて渡る女の子の声に酷似しているような感じがして、じゃあきつと、その音は、「福音」なのかな——なんて、そう思った。

「帰るぞ。じゃないと、ジジイが五月蠅くてかなわん」

冷たい。寒い。いやだ。嫌だ。寒いのは、嫌い。熱いのは、もつと嫌い。

何かが弾けるような音がする。怖い。

音の方向を見てみれば、そこはさっきの大通りとは反対側で、でもそつちは行き止まりのはずだった。だって、覚えてる。私は、その壁にもたれ掛かつていた。でも、音はそこから聞こえてくる。

黒く沈みかけている視界で、どうにか頑張つて色を探す。中央には眩しいくらいの金色が、外の明かりを反射させて、星のように光っている。

その一番星に向かつて、流れ星が飛んでいって、一番星に近づくと同時に、弾けていた。

——そうだ。

これは、私の、魔法だ。多分。もう、名前も思い出せないけれど、私の、魔法だと、思う。私の魔法が、弾かれている。

「……最早、私のことすら覚えていないか」

雑音の中に混じるその音が、やけに心地よかった。いつか、私にとって、そこは居場所だった。ような気がする。

「薄情とは言うまい。だが、悲しいものだ。ああ、お前とのくだらん会話ももう出来ないのかと思うと、そりや悲しくもなるさ。なあ、そうだろう、鈴葉」

でも、やつぱり、その音は、私を溺れさせる。胸まで込み上げる水は、出口を知らない。

「私は存外に、貴様のことを気に入っていたようだ」

——分からない。分からない。分からないけど、なんだか、とても美味しそうな匂いがすることだけは確かだった。パンなんて質素なものじゃない。出来損ないなんてもんじゃない。

完成された、晚餐。

「——せめてもの情けだ。苦しませることなく、一撃で沈めてやる」

でも、それは手が届かない。冷たくて、寂しくて、痛くて、熱くて、とても手が届きそうにない。

無性に腹が立って、でも、なによりも、その色を消したくて。

「——！」



視界が失せる。なんでだろう？

遠くでうるさい音が、サイレンのような音が、聞こえる。手が熱い。目が熱い。色が消えない。網膜に直接張り付いてしまったかのように、そのまばゆい金色は私を侵す。

「ツ……。なにをしている……。お前は、なにを——」

あー、あーって。

サイレンみたいなの、本当に、うるさい。

私は自分の眼孔から指を引き抜いて、今度は鼓膜を破ろうとして——。でも手が動かなかった。当たり前かも知れない。だって、こんなにも冷え切ってしまったている。

もう、だめ、いや、大丈夫。意識。意思、石いし。あああたまの中の不等号が正義とコーヒーとテールブルが綺麗きんいろ。一たす、縄。悪。開い、開い、会いた、肺。妹、静あ。勉強しなくちや。赤ちやんになるから。生まれて歩いて走って下校して、在ってごめんさい。食べて、ごめんさい。ごめんさい。お父、さ。いいよ。夜。泣いて。いいよ。良いよいいよ。いいよいいよいいよいいよ行きたくない生きたくない知りたくない叩かないで全部あげる、駄目やだ逃げて。殺して、殺して、やだ殺したくない。解放して。解放させたい。でもやだやだだだだ。ああ、無視無視無視無視おいていかないで、離す話して離さないでやだやだやだやだ。手手手手やめて来ないでやだやだやだ——

——許して。

「……ごめ……ん、……な……さ、い」  
 「……もういい、休め。——《凍ゲリドウスカブルスてつく氷柩》」

Archive.

七月三〇日。

英国魔術協会から、課外授業生徒の蒼井鈴葉が行方不明になったという報告が入った。

授業中は通訳と英国魔術協会の人間の三人で行動しており、その日、集合時間になっても姿を見せない蒼井鈴葉に違和感を覚え、彼女の仮拠点であった郊外のホテルへ向かうものの、そこにも蒼井鈴葉の姿は無かった。

英国魔術協会はロンドン全域を拠点とする巨大組織であり、ロンドンの街には専用監視カメラと魔力感知システムが設置されていたため、捜査は容易だろうと思われた。

しかし、ロンドンは当時、全域に謎の魔力溜まりを検出。同時に、監視カメラも一部がシステムダウンを起こしていた。

唯一残された関連する映像は、深夜二時頃、仮拠点から遠く離れたロンドン中心部に

て正体不明の不審人物に詰め寄られている蒼井鈴葉の姿だった。なにか言葉を交わした後、蒼井鈴葉は腕を捕まれ、路地裏へと連れて行かれ——そこから先の痕跡は辿れなかった。

仮にも魔法使いである蒼井鈴葉が一般人相手に誘拐される可能性は極めて低いときれ、魔法使いによる誘拐事件として捜査が開始される。

しかし、蒼井鈴葉の誘拐とほぼ同時に出現した謎の魔力溜まりにより魔力感知システムは機能せず、残された痕跡はあまりにも少なかつた。

正体不明の魔法使いに連れ込まれた路地裏の先には、なにかしらの儀式魔法が行われた形跡があり、魔法陣には蒼井鈴葉の血液が使用されていた。

しかしそれ以上の情報は掴めず、捜査は難航する。

八月二日。

ロンドン市内にて変死体が発見される。

路地裏での犯行だった。遺体は七割以上損壊しており、身元の特定は困難だった。強力な顎で食い千切られた様な傷から、野良犬に襲われたのではないかと疑われていたが、その歯型は人間のものだった。

早急にDNA検査が行われた結果、損壊部分では被害者とは別の人間のDNAが検出された。それを怪しく見た協会は警察協力のもと、蒼井鈴葉の仮拠点にて採取した毛髪

のDNAを検査。それが見事に一致した。

それから、後に《ロンドン未解決連続殺人事件》として語られるこの事件の捜査全権は協会が握ることとなる。

また、その結果報告を受けた関東魔術協会は、高畑・T・タカミチを筆頭とした緊急チームを結成。即日ロンドンへと転送された。

八月十六日。

魔力溜まりはより一層酷くなっていた。また、蒼井鈴葉の魔力反応を知る者もおらず、捜査は徒歩による人海戦術。既に三人目の犠牲者が発見されており、しかし、蒼井鈴葉の影すら捉えられない状況が続いていた。

それまでに集まった蒼井鈴葉の痕跡は決して多くはないものの、次の犯行現場を予測できるだけの情報は集まっていた。

まず、蒼井鈴葉の動向。最初の犯行現場から、順番に三つの現場を地図上に明記すると、それは真つ直ぐの線で結ぶことができた。更に、向かう先は仮拠点としていたホテルのある方向である。更にその歩みは牛歩が如く遅い。断定はできないものの、そこから次の犯行現場となりうる地域を特定した。

また、犠牲者の魔力保持量は平均を上回っていたことが現場の捜査にて判明。上質な魔力とその肉を捕食する行為が目的であると憶測が立てられた。

同日。

タカミチと英国魔術協会の混成チームにて、囮作戦を決行。警戒させないように、タカミチを含めた極めて戦闘力の高い迎撃組がアンブッシュ。被害者と同等の魔力量を持つメンバー三人がそれぞれ三つの地点で魔力を垂れ流し、釣り上げる。

その目論見は当たり、見事に蒼井鈴葉の捕捉に成功。即座に迎撃組が目標へと捕縛魔法と攻撃魔法の同時展開による鎮圧作戦へと移行した。

しかし、蒼井鈴葉の“不可解”な魔法と、人間には“不可能”な戦闘能力により、チームは奮闘するも半壊。タカミチを含めた上級職員が重症を負った。また、一部の職員は肉を食い千切られたとされる。

蒼井鈴葉にも相応のダメージを負わせたものの、深追いでできるだけの余力は無く、撤退を余儀無くされた。

また、今戦闘にて蒼井鈴葉は正気と理性を失っていることが確認された。

ちなみに、本作戦の参加者は、皆口を揃えてこう言ったという。“あれは何もない所から突然現れた。転送魔法なんかじゃない。それに、血が——血が意思を持っているようだった。あれは血を使って攻撃してくるし、あれは腕を飛ばそうが足をぶった切ろうがすぐ再生する。人間なんかじゃない、化け物だ”と。

八月十七日。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが、関東魔術協会会長近衛近右衛門に、自らの出撃を申請した。

タカミチが動けなくなった今、これ以上の戦力は正攻法では望めないことは、両協会の共通認識であった。

両協会会長はエヴァンジェリンの出撃申請を受諾。

先日の作戦と同様のものを三日後に発動することとなった。

また、本事件は本国には偽装報告するものとして扱うことを英国魔術協会は提案。エヴァンジェリンを利用することによるお咎めは関東魔術協会としても不本意であったため、その提案を受け入れた。

八月二十日。

作戦開始。

メンバーによる蒼井鈴葉発見の報告を受けて、エヴァンジェリンを超長距離転送魔法で現場へと急行させる。制限時間を三〇分とし、その間、複雑高度な儀式魔法と両協会の協力による強力な認識阻害魔法により「登校地獄」の精霊を騙し続けた。

結果、数分と経たずしてエヴァンジェリンの《凍てつく氷枢》にて蒼井鈴葉の確保に成功する。

また、この時、蒼井鈴葉はタカミチ達との戦闘で見せた「不可解」な魔法を発動する

ことは無かったが、人間には“不可能”な再生能力を保持していることが改めて報告された。

## E p . 1

Archive.

「あー、もうー！ こんなにどう解析すればいいのよー」

麻帆良の地下牢獄の様子が映し出される巨大モニターの前で、その女性研究員はついに悪態をついて両手を投げ出した。力なく息を漏らしながら、白衣の右内ポケットから煙草を取り、火をつける。

蒼井鈴葉が確保されてから、既に一ヶ月の時間が経とうとしていた。

エヴァンジェリンの魔法《凍てつく氷枢》から解放された鈴葉に意識はなく、そのまま身柄を拘束され、複数人の術者による《眠りの霧》の重ね掛けにより、その地下牢獄で静かな眠りにについている。

女性研究員としては《封印》して《無かつたこと》にしてしまえばいいのではないかと思ってしまうが、上層部の決定には逆らえない。故に、今もこうしてモニタリングをしながら蒼井鈴葉の身体について日夜解析を進めていた。

しかし、これがあまりにも難解。

複数の魔法陣と、なにかしらのマジックアイテムと思われる反応が観測されたもの



の、それは未知の魔法であった。

ロストテクノロジーとでも言うべきか。古代の魔法に類似する特徴を持っていることは判明したものの、現代の解析魔法は鈴葉の状態に対し「異常なし」という結果を叩き出した。

しかし、心拍数は常に一五〇を記録している上に、脳波もまた見たことのない波形を見せている。血中の魔力濃度は平均の五倍にまで膨れ上がり、蒼井鈴葉とは別の魔力反応の塊が収まることなく身体から放出されている。ロンドン全域を包んでいた魔力溜まりが、まさか小学四年生女子の矮軀から漏れ出た、変質した生命<sup>オ</sup>魔力<sup>ド</sup>反応であると、誰が予想できただろうか。

はつきり言って、これを異常なしと判断する解析魔法に懐疑心が生まれてしまう程だった。

「あー、逃げ出したい。なんでこんな意味不明正体不明な現象の解析を私なんか任せのよお……」

それは、彼女があらゆる解析魔法に長けた研究職員である上に儀式魔法に精通した有能な人材であることが原因なのだが、今はそんな事を言われたとて、素直に喜ぶことは出来ないだろう。

カップの半分ほど残っていたコーヒーを、下品にも一口で飲み干し、一息。叩きつけ

るようにカップを机に置き、モニターに移る鈴葉を見つめた。

「……そんな小さな身体で、あなたは一体なにを孕んでしまったというのよ」

研究対象に同情することはない。むしろ、できる事なら解剖して物理的な解析に及びたいとすら思っている。それができないのは、彼女が《ロンドン連続殺人事件》の犯人であり、その凶暴な戦闘能力が故に《眠りの霧》を絶やすことができず、地下牢獄内へと立ち入ることができないからだ。

仮に《眠りの霧》を解いて彼女の目の前に立つてみる。

報告にあった、彼女の“不可解”な血液を用いた魔法によって串刺しにされ、その命を終わらせる羽目になるだろう。

そうでなかったとしても、人間には不可能な再生能力によって、切り開いたそばからたちまち傷が塞がってしまう。

——正直、手詰まりだった。

と、煙草の灰が、燃えている箇所からごっそりと落ち、麻の生地のパンツをじりじりと燃やした。

「熱つつつつう！ これだから安物の煙草は……」

「なにをしているんだ、貴様は」

タイミング悪く、誰かが研究室の扉を開けた。

ツイてないなあなんて思いながら「見たらわかるでしょ、休憩よ」と返答する。焦げて穴が空いたパンツに「根性なしめ」と呟くと、研究員はその来訪者へと視線を寄せた。

「は？　ダ、《<sup>ダイク・エヴァンジェリン</sup>闇の福音》……!？」

蒼井鈴葉を確保した張本人。

不死の魔法使い。

吸血鬼の真祖。

闇の福音。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは、さも興味なさそうに、女性研究員を睨み付けていた。

「どうしてここに……？　どうしてこんなところに……？　意味分かんない、私の人生が分からない、なんなのよもう、死ぬの？　私、ここで死ぬんだあ……」

学園結界により、エヴァンジェリンの能力は平均以下まで下げられている。しかし、それがどうしたというのだろうか。「覚悟」が違う。どんなに彼女の能力を抑えたとしても、人を殺したこともない女性研究員からすれば、逃げようとしている間にエヴァンジェリンは自分を百回殺すだろうという確信があった。

——しかし、そんな研究員の恐怖は杞憂に終わる。

エヴァンジェリンは部屋に入ると、空いている椅子に腰掛け、蒼井鈴葉が映し出されているモニターを見た。

「手詰まりか」

「うっ……。はい、手詰まりです……。そもそも、なんなのよっ、これ！ 儀式魔法の本はディーデリヒの法則だっちゅーの！ これは絶対の法則よ！ なんでこんな構築で成立しちやつてるわけ!? 精霊に忖度されてるの!? なんなの!? そんなの人の成せる魔法なんかじゃないわ！ 魔法と呼ぶのも烏滸がましい、神の領域よ！」

「そこまで言つて、女性は肩で息をしながら「ごめんなさい、いろいろ溜まって……」とエヴァンジェリンに謝罪する。しかし、やはりそんなものに興味はないのか、エヴァンジェリンはモニターを見つめたまま、腕を組み、足を組み、傲岸不遜な態度で一言、呟くように言つた。

「——成立してないんじゃないか？」

「は——？」

その一言は、あまりにも不可解だった。

「いやいや——いやいやいや。そんなはずはないですよ、エヴァンジェリンさん。こういった肉体の変質……言うならば存在そのものに干渉する儀式魔法に失敗した場合、対象は存在から瓦解してしまいます。それこそ、分子レベルで消えてなくなりますよ。も

しもそうでなくとも、確実に死は免れません」

故に、そういった魔法は禁術として、その技術を故意的に失われてきた。

「現代の常識に当て嵌めてものを考えるのは止せ。これが古代の魔法に類似していると結果を報告したのは貴様本人だろ」

エヴァンジェリンは、研究員が今までの経過をまとめた書類を勝手に読み漁りながら、その態度を崩すことなくそう言つてのけた。

しかし、それはあまりにも暴論と言う他にない。実証されてきた魔法の常識に当て嵌まらない魔法の解析など——「から魔法を作成するようなものだ。」

「成立していない——というよりは、成立するはずがないのだろう」

またも、意味の分からないことを言うエヴァンジェリンに、研究員は顔を顰めた。

「不老不死の研究は知っているな」

それは——エヴァンジェリンにとって地雷のようなものだということとは、誰よりも何よりも、研究員である女性が理解していた。言葉を選ぶことすらできず、無言で肯定する。

「この現世に存在する不老不死は、私のような吸血鬼や精霊——超常の理に座する者共だ。しかし、結果は見ての通り。成功例は限りなく少ない。そもそも、人の身が到達していない現象ではないのだから、当然だ」

シニカルな笑みを浮かべながら、続ける。

「研究員としては、それは僥倖と呼べるものだった。既に失われた『吸血鬼』へと至るための儀式魔法——その成功例が発する言葉、たとえばどんなものでも貴重であると言えた。」

「では、この現世に存在しない不老不死は、どうだろうな」

現世に存在しない存在。

そんなもの、思い当たるものはたったの一つしかない。

「——まさか、本当に神だとしても……本当に神に成るための儀式だとしても、言うつもりですか」

「さあな。だが、それに近い事をしようとしているのだろうか」

古代の魔法。

否、それは古代よりも更に時代を遡った魔法。

人類の歴史をも遥かに超えた、創世の魔法。

——神に至るための、禁忌。

「ま、待つてください。蒼井鈴葉はただの魔法使い見習いですよ？ 神に至るというのであれば——それこそもつと良い素材があるはずですよ。それこそ、そう、魔法世界の住人や幻想種のほうが適任なはず。なぜ、人間である蒼井鈴葉が？」

幻想をもって幻想を成す。

しかし、もしも幻想などではなく、現実的に、この現世に神を造るといふのであれば、それは――。

「そこまでは分らん。――いや、これは私なんかよりも、貴様の方が理解できるのではないか？」

「……………は、はは……。ええ、なるほど、そういうことですか。そういうことなんですわね」

女性はニヒルに笑う。

どこまでも空虚に、笑う。

理解できてしまう。

本当に嫌になるほどに、理解できる。

「蒼井鈴葉は、マウスということですか。本当の意味で、人の身でありながらその禁忌に足を踏み入れるための、踏み台ということですか」

――結果を残すための実験体。

成熟しきつた魔法使いなど、強く抵抗される危険性を孕んだ猛獣など、そんなものは実験体にはなり得ない。実験体に高いコストを払ってはいは、それは長続きしない。

もしかしたら――蒼井鈴葉が原型をとどめていることこそが奇跡であり、それ以外の

者は、それこそ存在ごと瓦解してしまっただけで、その禁忌という言葉すら生温い実験は、日夜研究され続けているのかもしれない。

背筋が、絶対零度まで冷えたような気がした。

「……鈴葉には素質があつた。ジジイのコネもあるとは言え、この歳で単身ロンドンへと課外授業に行つたのだ。ジジイとて蒙昧の風見鶏ではない。立派な魔法使いの端くれだ。そんな奴が、鈴葉のことを信用していた。一人で課外授業に行かせても無事に帰つてくるといふ信頼があつた。……そんな都合の良い魔法<sup>実</sup>使い<sup>験</sup>見習<sup>材</sup>いがのこのことやつて来たら、手を出したくもなるのだろう」

「そして、中途半端に儀式魔法が成立してしまつた……?」

「戯け。さつきも言つたがな、それは成立するはずもない実験だ。魔法と呼ぶのも烏澁がましい、ただの実験なんだよ。小さな器に——たった一杯のコップに、海の水全てを収めることは不可能だ」

「——やはり分かりませんか。では、何故蒼井鈴葉は今もなおその原型を留めているのです?」

「神が作れないならば、神の出来損ないを作ればいい——そうは思わんか?」

「は?」

「実験が大好きなマッドサイエンティストの気持ちなど、考え方など、私には理解できん



がな。だが、その目的が、不老不死に対するアプローチであるならば、それは神そのものでなくてもいい。——要するにな、わざと成立させないことで、初めて成立する儀式、ということだ」

それは。

女性にとつてはあまりにも理解のできない仮説で、思わず思考を停止させてしまった。だが、もし仮に自身が不老不死の実験に日夜勤しんでいた場合——神よりも精霊よりも吸血鬼よりも、成功する確率の高い手段があるのなら、きつとその手段を取るだろう。

「……故に、鈴葉は既に人ではない。その身体を構成するために必要なものがあるとするれば——」

エヴァンジェリンがそこまで口に出したところで、それは唐突に耳を貫いた。

まるでアラームのように鳴り響くそれは、心電図から。蒼井鈴葉の心拍数が、二〇〇を超えていた。

更に魔力感知システムが狂ったかのようにその数値を上昇させ、やがて測定不能の四文字をその画面に映し出す。

「な、なにが」

「……崩壊だ。神のなりそこないが、蒼井鈴葉という器から抜け出そうとしている」

「どうして……」

——それは、*“どうしてそんなことが分かるのか”*という疑問でもあったが、エヴァンジェリンはそんな意図に気づいているのかいないのか、椅子から立ち上がり、研究室の出口へと向かった。

「あいつがロンドンでなにをしたのか、忘れたのか？ ——そういうことだよ」

それだけを言い残すと、エヴァンジェリンは研究室から姿を消した。

学園長に連絡を取り、牢獄と隣接しているこの研究所の職員に避難指示を呼びかけ——そうしている間に、モニターには蒼井鈴葉と向かい合うエヴァンジェリンの姿が写し出されていた。戦うのか、と思ったが、エヴァンジェリンは学園結界によって吸血鬼としての——大魔法使いとしての能力は制限されている。それはあまりにも無謀な対峙だった。なにをどうするつもりなのかと見守っていると、それまで微動打にしていなかった鈴葉が唐突に拘束具を引き千切り、エヴァンジェリンへと食らいついた。



「驚きましたよ。ええ、本当に。心臓が口から出るどころか、全身の内臓が破裂するんじゃないかってくらい、ショックな光景でした」

モニターから目を離すことは、研究員として——観測者として許されなかった。故に、その光景を見てしまった。

無抵抗なエヴァンジェリンの肉という肉を食い荒らす鈴葉の姿は、正しく異形の一言。

その脂肪を食い千切り、筋肉を噛み千切り、内臓を引きずり出して、脳漿をぶち撒けて、血液を浴びて、それら全てを飲み込む。

そんな姿は、とても小学四年生の女子児童とは思えなかった。エヴァンジェリンの言っていた、*“神のなりそこない”*という言葉が、延々と頭の奥からこちらを覗き見していた。

——なによりも驚いたのは、エヴァンジェリンのその姿だった。

どんなにその皮膚を食い破られようと、悲鳴を上げることもなく、まるで慈愛に満ちた聖母のように——我が子を守る親のように、その蒼井鈴葉の小さな頭を撫でながら、無抵抗に食べられ続ける。そんなエヴァンジェリンの姿を、誰が想像できるだろうか。

「ふん、こうなることすら予測できなかったのか？ 麻帆良の研究員というのも高が知れているな」

血塗れの金髪をそのままに、肉と一緒に食い千切られたゴスロリの衣装もそのままに、エヴァンジェリンは腕を組んで堂々と立っていた。

エヴァンジェリンを散々喰らい尽くした鈴葉は、まるで満腹になった赤子のように再び眠りについた。その様子を確認した麻帆良の上級職員が、新調した拘束具に鈴葉を縛り付けている。

「あなたは、分かっていたんですか、エヴァンジェリンさん」

白衣のポケットに手をつ突っ込みながら、その凄惨な現場を目の当たりにする。既に《眠りの霧》は解かれており、嫌になるほど澄み渡る視界が、そこで行われた殺人の残骸を克明に写す。ただでさえ鉄臭い牢獄に、他の鉄の臭いが混ざっていた。

「憶測だったがな。ロンドンでのこいつは無差別に人を殺して食っていたわけではなかった。きちんと選別して、殺して、食っていた。それは、上質で強い生命<sup>オ</sup>魔力<sup>ド</sup>反応だ。

——コイツの身体は、精霊と結びつきやすい人間の血肉を必要としている」  
頭の痛くなるような話だった。

それでは、ただの食人族だ。人間を殺さなくては生きていけない、憐れで哀れな成り損ないの成れの果て。それは——生きることが許容してはいけない、化け物だ。

「事前にジジイに忠告はしていた。——生憎と、こういつた巫山戯た儀式魔法には敏感な身でな。緊急時には、この牢獄に掛けられた魔法全てを解除し、学園結界による私へ

の干渉を停止させろと伝えてあった」

——まさか、憶測そのままの現象が起これとは思ってはいなかったがな。

おどける様に、彼女はそう言った。

研究員の目が細くなる。まるでエヴァンジェリンを睨みつけるような構図になるが、本人はそれに気付いていない。

——本当に、思っていないかったのか、と。

まるで示し合わせたように研究所へと足を運び、まるで知っていたと言わんばかりに鈴葉に施された儀式魔法についての解釈を述べてみせたこの吸血鬼は、本当にただの憶測で喋って行動しているのか、と。

「あまり詮索するような目で見られても困るな。さつきも言ったが、私はこういうものに敏感なんだよ。巫山戯てる、馬鹿げてる、だが、そんな倫理観をぶっ飛ばした強欲な欲望の体現者——ああ、全く、度し難い。いつの時代でも、そういう輩は一定数いるものだ」

「……いえ、失礼しました。ですが詮索したくなる気持ちも理解していただきたい。私

はただの人間。数百年を生きる魔法使いの頭の中身までは、理解できません」

「別に、頭の中身が違うということでもあるまい。本当にただ——昔に似たような物を見たことがあるという、それだけのことだ」

エヴァンジェリンはそれだけ言い残すと、名残惜しそうに鈴葉を見つめた後に踵を返してその場を後にしようとする。

「最後にひとつだけ——」

そんな女性研究員の一言が、エヴァンジェリンの足を引き止めた。それは気紛れだろう。エヴァンジェリンは決して優しくない。話を聞いてやってもいいと思わなければ、その足を止めることはない。

「犯人は——蒼井鈴葉を『成り損ない』へと変質させた変質者は、どこへ消えてしまったのでしょうか」

結局、今回の事件はなにも解決していない。鈴葉を回収できたことだけは僥倖だったが、それは決して解決などではない。

勿論、それは研究員にはなんの関係もない話だ。犯人が捕まろうが、捕まらなからうが、鈴葉に施された『呪い』とも言える魔法を解析し続けることに変わりはない。

——だが、それでも、なんとなく、気になった。

それはただの気紛れと言ってもいい、なんの中身もない話。

それに対し、エヴァンジェリンは一瞬だけ鈴葉を一瞥してから、怒気を孕ませた声色で言葉を返した。

「案外、既に死んでしまっているかもしれないな。——少なくとも、私なら殺す。跡形も

なく、塵芥すらも残さず、血肉の一片たりとも許さず、その存在を消してやる」

———「そうですね、と。研究員は真つ黒な天井を仰ぎ見た。

エヴァンジェリンも止めていた足を動す。

気紛れの応酬は、そこで終了した。

それから、蒼井鈴葉の「捕食行動」は絶対に避けられないと断言していたエヴァンジェリンは、自らの血肉を提供する事を約束した。

魔法先生を含めた職員の間では、「エヴァンジェリンの様子がおかしい」と噂され、それが尾びれを引いて「黒幕はエヴァンジェリン説」が提唱されるまでにかかった時間はたったの一週間程だった。

まあ、無理もないか、なんて。

女性研究員は、孤独な研究室でコーヒーを喉に通しながら、そう独りごちた。

## E P . 2

遠くから、声が聞こえた。

眠っていたのだらうか。眠っていたのだらう。酷く喉が乾いているし、意識もどこかはつきりとしめない。瞼を持ち上げても、暗闇ばかり。

カツン、カツン、と。

革靴の音が聞こえる。先程聞こえた声の正体だらうか。でもそれはあまりにも遠すぎて、音も反響しているようで、正確な位置がわからない。

上体を起こそうと思って、気づく。

私はどうやら、既に立っているようだ。

否。厳密には、立たされている。

拘束具のようなもので体が固定されていた。

このような状態で良くものんびりと眠れていたものと、自分の凶太い神経に驚かされる。

やがて、なにかが開く音と同時に、光が差し込んだ。先程まで遠かった足音は、いつの間にか目の前まで迫ってきていたようだ。



「ここは、慣れませぬね。ガンドルフイーニさん……」

男性の声だった。

なんだか聞き馴染みのある、落ち着いた若い男性の声。

「同感だ。……やはり君には辛いだろう。前にも言ったが、無理しなくてもいいんだぞ。ただでさえ危険なのだから」

「いえ、僕が担当していた子ですから。最後まで責任を果たしたいんです」

「……責任感の強さは人一倍だな。だが、今の彼女に理性はない。それに君は優しすぎる。前々から思っていたことだが、危なっかしいんだ」

「分かっています。でも……」

「みなまで言うな。私も理解しているよ。ただの忠告だ」

「……はい」

声が近づいてくる。光に慣れていない眼球が悲鳴を上げて、その姿をはつきりと目視することはできなかつた。

「しかし、エヴァンジェリンもよく分からん奴だな。『提供』してくれる人物として今では重宝されているが……。もう一年にもなる。ヤツだつて見返り無くしてこんなことを続けはしないだろうと考えていただけに、どこか奇妙だ。なにを企んでいるのやら」

「その言い方は、あまりにも酷ですよ。鈴葉ちゃんがエヴァンジェリンと会話している姿は何度も目撃されていきました。鈴葉ちゃんも、エヴァンジェリンは『優しい』と、そう言つてましたし……」

「全く理解できないな。童姿の悪鬼だぞ。今でもエヴァンジェリンは自作自演を疑われている。無論、私も疑っている者の一人だ。言わば、生徒を一人人質に取られているような気分だよ。最悪極まりない。事実、蒼井くんの強大だった魔力反応も今では……。エヴァンジェリンの実験の失敗だと仮定すれば——」

「——ガンドルフイーニさん。そろそろ、始めましょう」

「……ああ」

二人の男性は目前まで迫ると、なにか杖のようなものを取り出し、よく分からない言葉や葉を並べ始めた。聞き取れそうで聞き取れない言葉の羅列に、少しだけ不安を覚える。なにより、その言葉が進むにつれて、拘束具が私を締め付けてくるようで、酷く苦しかった。

「……つ。——だ、れ……？」

やつとの思いで、声が出せた。声帯に千切れるような激痛が走るが、悲鳴を出すことすらできない。

二人の男性は動きを止めて、此方を凝視しているようだった。聞こえなかったのだら

うか。

何度か咳き込み、もう一度、声を捻り出す。

「だ、れ……です、か？」

しかし、やはり反応らしい反応は返ってこなかった。自分の鼓膜でさえ聞き取れるか怪しい、か細い声しか出せない。二人の男性に私の声が聞こえていなかったとしても、なんら違和感はない。

しかし、私にできることは声を出すことだけ。

ならば、何度だって声を出してやろうと考えて、もう一度深く空気を吸った。喉と肺が逆剥けているように痛いのが、気にしてはいられない。

拘束されているという現実は、あまりにも恐ろしかった。

「ガ、ガンドルフィーニさん……」

いざ声を出そうとした瞬間、若い男性が声を上げた。それは私に向けたものではなかったが、反応を貰えたという判断で間違いはないだろう。

「あ、ああ……。意識が、戻ったのか……？」

「鈴葉ちゃん！ 僕が見えているかい？」

若い男性が、私の顔を覗き見る。光に慣れた今の私の視界には、その表情がよく見て取れた。

期待と、不安。そして、安堵。それらが入り混じった表情が、その整っている顔のパーツを歪めていた。

声を出すのはやっぱり辛くて、私は精一杯頷いた。拘束具のせいでその動きはあまりにも小さかったが、それでも男性には伝わったようで、表情を喜色に染めた。

「瀬流彦くん。私は救護班と学園長に連絡を入れる、「給餌」は任せてもいいか」

「はい！」

「頼んだぞ。それから、拘束具はまだ解かないように」

褐色肌の男性は急ぎ足で部屋を出ていき、若い男性と二人きりになる。

男性は手に持っていた杖を懐にしまうと、鞆の中から洋紙に包まれたなにかを取り出す。包みを丁寧に剥がすと、中からは真っ赤な肉が——美味しそうな生肉がその姿を現した。

乾ききっていた口の中が、唾液で満たされて、口の端から溢れる。

「食べられるかい？」

綺麗に切り分けられているそれを、私の口元まで運ぶ。

芳醇な香りが鼻腔をくすぐった。

力が入らないが、それでもなんとかして口をいっぱいに向けて、その肉に噛み付く。瞬間、濃厚でクリーミーな味の深さに驚かされる。

なんだか、数年ぶりの食事のように思えて、涙が零れた。

咀嚼して飲み込むまでの時間が無限に感じられる。それは比喻などでは無い。実際、顎は疲れきっていたし、飲み込むという動作が、まるで忘れてしまったかのように酷く難しかった。

それでも、牛歩が如く遅い食事を、その男の人はゆつくりと見守ってくれていた。とうより、肉の端を手にとって私の咀嚼を支えてくれているのだから、見守らざるを得なかったのだろう。

やつとの思いで最後の一切れが食べ終わるといふ頃に、彼等はやってきた。

先程の褐色肌の男性と、胸にマークのついた外套を被っている複数の団体。それに追従するようにやってきた、一人の老人。

外套を羽織った集団は慣れた手つきで私の頭や腕や胸になにかしらの装置を付け、また、先程男性たちがしていたように、よく分からない言葉を並べ始めた。

拘束具が締め付けてくることはない。むしろ、冷えきった体が温まるような、不思議な感覚。

突然、私の周囲を不可解な光が取り巻く。それらはただの光ではなく、なにか記号や文字のようなものが入り乱れていて、なんだか、とても懐かしい気持ちにさせた。

「——意識レベル、数値、全て正常。異常、ありません！」

装置を弄っていた一人の女性が、その言葉を口にした瞬間、周囲から“おお……”と声漏れた。

セルヒコと呼ばれていた男性は、涙を流し、褐色肌の男性に肩を抱かれている。

——なんだか、とても嬉しかった。

よくわからないけれど、嬉しかった。

「……鈴葉」

一人の老人が、私の目の前にやってくる。後頭部が長い、なんだか、変なおじいちゃんだった。

「良く、耐えたな。頑張ったな……」

そのおじいちゃんは私の頭を撫でてくれて、それがまた妙に懐かしかった。

耐えた覚えも、頑張った覚えも、ないけれど。それでも、なんだか褒められているのだと言うことは理解できて、無条件に嬉しくなる。

でも——。

「わしが分かるか？」

——嬉しさの反面、不安だらけでもあった。

「だれ……ですか？ あな、た、たちは、……私は、だ、れ……？ す、ずはって、わたし……？」

知らない人間。そして、今も尚続く拘束。

この人たちが私に害を及ぼす悪い人だとは思えないが、それでも、怖いと感じて、警戒する私の気持ちと思考は、この上なく冴え渡っていた。

だからこそ、浮き彫りになる。

分らないこと。

覚えのないこと。

なにか大事なものが、欠落している感覚。半身が溶けて、消えてしまったような、喪失感。

ただ、不明瞭な感傷だけが、胸にジクジクと残り続けていた。



暫くの時間を、私はあの部屋で過ごした。

照明の一つもない寂しい空間は、しかし、落ち着いて頭を動かすには最適な場所だったとも言える。

拘束具は外された。常に監視は続くと言われたが、特に気にするようなこともなかった。

冷静になった頭なら、理解できないこともない。事情の説明はされなかったものの、ある程度の憶測はできる。

拘束するということは、異常な行動に出る可能性があったということ。牢獄のようなあの部屋は、正しく牢獄で、私を監禁するだけの理由があったということ。彼等を敵ではないと断定するには情報が足りないものの、殺すことなく生かしていたということは、現時点で殺す理由は存在しないということだ。

あれから、いろいろな人達が数日おきに代わる代わる私の元を訪れ、私の大好きな「お肉」と飲み物を渡してくれた。

ベッドと小さな電灯も用意してもらい、急造ながらもお手洗いまで設置してくれた。暇潰しも兼ねて、「残っている記憶」に関するデータも見たいということで、いろいろな本を持ってきてくれた人もいた。

その時点で、彼等に対する「敵かもしれない」という疑惑は無くなっていた。

そんな地下牢獄での生活が一ヶ月ほど続いた後、私は地下の部屋で軟禁されることになった。



これだけ聞くと物騒だが、環境的にはかなり改善されていた。牢獄ではなく、そこは正しく部屋だった。薄いピンクの壁紙や、ハート柄のベッドなど、如何にも「女の子」を意識した部屋。胸焼けしそうだった。

やはり、ここもまた急遽私用に改築された部屋だった。元々は地下一階にある修道女たちの宿直室のような場所だったらしく、今までの場所が地下三五階に位置する特別な牢獄だった事を考えると一気に地上に近くなったと言える。

部屋を出て少し歩くと見えてくる階段を上がれば、そこには麻帆良のカトリック教会があるとかないとか。

頻繁に私のもとへ訪れる瀬流彦先生は、とてもいろんなことを教えてくれた。

元々、「魔法生徒」であった私に魔法を教えるための「魔法先生」だったということ。

魔法先生として魔法生徒をマンツーマンという形で担当するのは、彼にとつて私が初めての経験だったらしく、でも、私が優秀だったから困ることも少なかったということ。

私が良く懐いていた「吸血鬼」は、今も私のことを心配してくれているということ。

私が何故、このような状態になっているのかは、訊いても「ちよつと大きな事故にあったんだよ」の一点張りだったが、仮にそうだとしたら、私は相当特殊な入院の仕方をしていたと言える。拘束されて磔にされていたのだから。

そういう、誤魔化された情報も幾つかあったものの、私が地上に出たとしても然程困らないであろう程度に、いろんな情報を教えてくれていることは確かだった。

——ここへ引越してしてから、どれだけの時間が経ったか。カレンダーはあつても、地下での暮らしは時間感覚が分からなくなる。少なくとも二度ほどカレンダーを交換したから——二年は経ったかもしれない。とにかく、膨大な時間をこの空間で過ごした事だけは確かだった。

本を読むくらいしかやることがないとは言え、流石に活字を追うのも飽きるし、それなりの退屈も感じてきた。

しかし、飽きというものは一過性のものに過ぎず、ある程度時間を置けばむしろ本を読みたいという欲求に駆られるのだから、人間の体は良く出来ている。

退屈に殺されるなんて、真つ平ごめんだつた。

「鈴葉ちゃん。ちよつとただけだけど、外に出れる許可が貰えたんだ。どうかな、外に出てみるかい？」

唐突に、瀬流彦先生はそんな提案を持ちかけてきた。

その提案が魅力的かと問われると、とても難しい。『外』という概念は記憶にあるし、ある程度イメージしてみろと言われれば、簡単に頭に思い浮かべることができる。

故に、「外」に思いを馳せることは無かった。むしろ、この部屋は十分に満たされている。

体感時間にして、二年間、文句も言わずに閉じこもっていたのだから、この部屋がいかに充実しているのかはお分かりいただけるだろう。

強いて不満を言うならば、入浴が難しいことだろうか。基本的に体は毎日拭いているものの、シャワーを浴びることが出来るのは一週間に一回だけ。

元から修道女が使っていた空間ということもあり、地下一階にはシャワールームが取り付けられていた。だが、それは部屋の外にある。つまり、この部屋から出なくてはいけないということだ。それは最低限に抑えさせてくれという、学園長からのお願いだった。

勿論、私はそれを承諾した。彼等にはいろんな要望を聞いてきてもらった。その上で自分の欲求を押し通すほど、厚顔無恥ではない。

それに、監視役の人達は皆男性だ——やんごとなき理由があるのだろう——。私は私で、一応女性という自覚がある。私の体がいかに幼児体型であるとは言っても、やはり、信用できる人を選びたいというのは、我儘ではないだろう。シャワールームの前で待ってもらうだけとは言え、裸を見られないとは限らない。

故に、基本的に監視役の人は空き時間を作って不定期に訪れるのだが、毎週金曜日の

決まった時間には必ず瀬流彦先生か高畑先生がやってくる。その時だけ、シャワーという至福の時間が訪れるのだ。

——やはり、その一点に限ってはどうしても不満があった。

決して外に興味があるわけでもないが、もしかしたら、「外に出しても大丈夫」という認識を持つていただけの可能性があるというのは魅力的だった。

それは要するに、監視の目を緩めることに繋がるだろうし、そうすれば「毎日シャワーを浴びれる」という特典に結びつくやもしれない。それどころか、私にとって未知の経験である、「浴槽に貯めたお湯に浸かるといふ、いわゆる入浴という行為」に到れるかもしれない。

——で、あれば、乗らない手はないだろう。

「……………ん」

か細い声で返答し、頷く。

未だに声を出すのは苦手だった。喉に妙な違和感を覚えるのだ。一方通行の弁を、無理やり弄くり回すような、気持ち悪さ。

月に一度ほど私の診察にやってくる救護班の先生は、それを「心的外傷」が原因なのではないかと言っていた。

声を出すことへの恐怖。

……特にイメージでできることはない。

なにより、記憶を失くした私に、心的外傷というものは当てはまるのだろうか。

「それじゃあ、さくつとシャワー浴びてから外に出てみよう。あと、これも事前に了承しておいてほしいんだけど……」

そう言うと、瀬流彦先生は鞆の中から、妙な道具を取り出した。

「チョーカー型のデバイスなんだけどね、これを付けてもらわなきゃならない。いいかな?」

頷く。

制限が有るのは当然だ。ここまで嚴重に監禁しておいて、いきなり制限のない自由を謳歌しろと言われるのは、むしろ違和感でしかないだろう。

黒い革製のそれは、オシヤレとも呼べなくはないし——まあ、いいのではないだろうか。

## E p . 3

昔の私はとても饒舌で、毒舌だったと言うのは、言うまでもなく瀬流彦先生の言だ。別に違和感はない。むしろ、喉の違和感さえなければ、今でも饒舌に毒を吐くくらいのことではできるだろう。それくらいに元気な思考をしていると自負していた。

しかし、あくまでそれは人に対して働く能力であり、自然界にまで適用されるのかと言われると、そういう訳ではない。

外だね。

感想、終わり。

久しぶりの——と言うよりは、初めての外と言っても過言ではない。しかし、だからどうした。イメージして、そのイメージのままの光景が飛び込んできて、どう感動すればいいというのか。

勿論、感動することを強制されているわけではない。ただ、あまりにも無感動で無表情な私に、なにか言いたげな目線を寄越す人が隣にいるのだから、毒を吐きたくもなるのだ。

なるほど、毒舌というのは言い得て妙なもので、いやむしろ、毒舌というよりは、私

は多分とても素直な性格の持ち主なのだろう。そういうことにしておいてほしい。

だがしかし、地下の空気と比べれば、やはり外の空気は別格であると言えた。

加えて、今までの部屋を窮屈に感じたことはなかったが、改めて外というものを経験すると、やはりあの部屋は少し窮屈だったのだと認知する他にない。

今は授業中ということもあり、人は疎らである。心地の良い日光を独占しているような気分だった。

元々私が通っていたという校舎。

私が良く利用していたという路面電車。

私が住んでいたという借家。

私が足繁く通っていたという甘味処。

それらを目の前にして「なにか思い出せたかい」と聞かれる度に、私は素直に首を横に振った。

なんとなく道に既視感は覚えたが、残念ながら失った記憶は失われたままである。

甘味処で瀬流彦先生に買ってもらったアイスクリーム——キャラメルとバナナのハーフアンドハーフ——を片手に、今は公園の隅っこにあるベンチで休憩中。

流石にあれだけの長い期間を密室で過ごせば体力も酷く低下するようで、私の足は既に生まれただけの子鹿のようだった。それになかなか気づかない瀬流彦先生に「かい

しようなし”と心の中で毒づいたが、この冷たいアイスクリームに免じて許してあげることにした。

唐突に、遠くからサイレンのような音が聞こえてきて、思わず耳を塞いだ。

アイスを持っているせいで片手しか使えないということは、片耳しか塞げないということ——防御力は皆無である。

「——チャイムが鳴っちゃったね。これ食べ終わったら帰ろうか」

ああ、そうか。これは——この耳障りな音は、授業の開始と終了を告げる合チャイム図というやつか。

なんだかぬるりと納得してしまい、驚く。“記憶が戻る感覚”がこれなのだと思えば、あまりに呆気ない。これはどちらかと言うと、“忘れたものを思い出しただけ”の感覚だ。決して、“失ったものを取り戻した”感覚ではない。

「ん……」

領きながら、甘すぎるアイスクリームをちびちびと食べ進める。

それにしても、本当に甘い。甘すぎる。昔の私は本当にこれを好き好んでいたのだろうか。別に苦手な甘さではないが、足繁く通う程かと言われると微妙だ。

記憶を失くした程度で味覚まで変わってしまうのか、或いは甘味処がメニューを変えたのか。分からないけれど、恐らくは後者だろう。月日というものは残酷だ。



コーンまで食べ終わり、溶けて手についたアイスを舐め取る。『汚いから拭きなさい』なんて言つて、ハンカチで手と口を拭つてくる瀬流彦先生に『うざい』なんて感想を抱いていると、どこからか誰かが走っているような音が聞こえてきた。

それは段々とこちらに接近しているようで——ある程度の距離まで近付くと、それはその足を止めた。

肩で息をする女子生徒と思しき女の子が、ゆつくりと此方に近寄ってくる。

綺麗な人だった。

身長は私とそこまで大差ないが、地面にまで届きそうなブロンドヘアは、まるで星を編んだようで——。

「……………鈴葉」

その綺麗な碧眼で、私をしっかりと見つめながら、私の名前を呼んだ。

私の隣に座る瀬流彦先生を一瞥する。いつもよりも緊張しているようで、その表情は硬い。ただの一般生徒に、そのような反応を見せるというのは違和感でしかない。

つまりは、そういうことなのだろう、と。

話には聞いていた。

私が良く懐いていたという、『吸血鬼』の存在。

魔法界限におけるその評判は最悪で、それでいて最強の一角である、と。

私かなぜそのような人物と関係を持っていたのかは分からない。だが、極めて仲良しげに接していたと聞いている。むしろ、私の友人関係について、その吸血鬼以外の話は聞いたことすらない。

ならば、私の名前を呼ぶ彼女こそが例の吸血鬼であるということは、堅実な事実なのだろう。

「……………」

「エヴァンジェリンさん。鈴葉ちゃんは——」

「——知っている。黙っている、若造」

瀬流彦先生を見ることもなく、吐き捨てるようにそう言った。なんなら、*「見るな話しかけるなぶち殺すぞファツキンビツチオーラ」*が全開である。これは流石に可哀想だった。私を素直と評するなら、彼女のそれは正しく毒そのものである。

一蹴された瀬流彦先生に心の中で哀悼の意を示していると、その吸血鬼は私の眼前まで歩みを進めた。

ここまで近くで見ても、思い出せない。彼女との会話、生活、関係。その全てが不透明で、やはり私にとって、彼女とは初対面であるという認識は拭えなかった。

なにより、私を良く知る人物であるならば、きっと、今の私は、多分、彼女の知る私ではないはずだから——。

「——はじめ、まして」

だから、酷く掠れた声でそんな言葉の口にすることは当然だった。

一瞬だけその碧眼が揺れたような気がしたのは、私の都合のいい錯覚なのだろうか。

「若造」

そんな私を無視して、それでも、私から視線を外すことなく、吸血鬼は瀬流彦先生に向かつて言葉を投げる。

「こいつはもう外に出ても良いのか」

「……限定的にですが」

「……そうか」

なにかを躊躇っているようだった。

或いは、言葉に困っているのか。

もしも私が彼女の立場なら、きつと、投げかける言葉を見つけることは叶わないだろう。記憶を失ったかつての知人や友人に、なんて言葉を掛ければいいのかなんて、分かりやしない。

「はじめまして、蒼井鈴葉」

彼女のそれは笑顔などではなかった。

苦笑でもないし失笑でもない。

悲しそうでもないし、寂しそうでもない。

苦悶のような、なにかを堪えるような、なにかを我慢しているような、そんな顔。

「ん。あなたの、おなまえは？」

知っているのに、訊いた。

事実の確認なんてものではない。私は知っている。それこそ六百年以上前から知っていたはずだ。彼女が誰なのか、なんて。宇宙の創世から知っている常識のようなものなのだ。

それでも、彼女とこれからも会話をしたいと思えたから、これからの関係を続けるには、〃はじめまして〃を伝える他になかった。そうでなければ、彼女はきつと私の前にはもう現れない——これは確信に近かった。

だから、名前を訊く。それは当然の過程であり、必然の道程だった。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

知っている。一語一句違わず知っている。それは多分、記憶を失つてもなお身体に刻まれた名前。初めてその名前を聞かされたときの衝撃は忘れられない。それこそ、失った記憶が蘇ったような、強い衝撃だった。

それでも、私は知らない。

知らないけれど、きつと、私にとっては、彼女が支えだったのかもしれない。

瀬流彦先生でもなく、学園長おしいちゃんでもなく、なによりも心を許していたのは、多分——。  
 「元氣そうでなによりだよ、鈴葉」

彼女は——エヴァンジェリンさんは、それだけ言うと同を返した。

さよならも言わず。

またねとも言わず。

エヴァンジェリンさんはその流れるような金髪を靡かせながら、素つ気なく帰路に着いた。

「はああああ……」

その深いため息は、私の横から聞こえてきた。

見遣れば、頭を抱えて恐怖に打ちひしがれている瀬流彦先生の姿がある。あれだけ強い「拒絶反応」を受けたのだ。頭を抱えるのも理解できる。瀬流彦先生に非はない。

いや、それ以前に——。

悪の代名詞とまで謳われる吸血鬼の前にして、無事でいられる精神力など、並大抵の人間が持ち得るわけもないのかもしれない。

瀬流彦先生からすれば、正しく事故にあつた気分だろう。

今の私が彼女に対してなにも思わないのは、私が純粹に無知であることと、昔の私が懐いていたという事前知識があつてこそである。

なんとなく、ドンマイの意味を込めて、瀬流彦先生の丸まった背中を撫でてあげた。それから、私達は予定通りに教会の地下へと帰った。

黒いワンピース——監視役のうちの誰かが私にプレゼントしてくれたもの——を脱いで、汗をかいた体を本日二度目のシャワーで軽く流して、寝間着に着替える。

瀬流彦先生はその様子を見た後に、“仕事があるから”と言って去っていった。いつもの一人の時間である。

首から外したチョーカーを弄くり回しながら、ベッドにうつ伏せた。

——例えば、私が記憶を失う程の《事故》の被害者にならずに、安寧なる日々を謳歌していたとしたら、私はどのような人格が形成されていたのだろうか。

言わば、今の私は、過去の私からすれば“あったかもしれない自分”に他ならない。平行世界の私だ。根本は共通していても、辿り着く先はまるで形の違う世界であることは確かである。

一卵性双生児は、生まれ落ちたその直後から離れ離れにされても、似たりよつたりの成長を見せると言う。

しかし、私と私は、決して似ることはないと断言できる。

選択する過程が既に分岐点なのだ。

否。

こんなものは戯言でしかない。それこそ、"もしも"の話だ。双子の話は、逆に言えば"成長に伴う環境の差異よりも、遺伝子がその人を形成する"という話である。

たとえ記憶を失ったとしても、私は私であり、その遺伝子はなによりも強固だ。ただ、生まれてから今までの空白期間ブランクがあるだけで、私は私以外の何者でもない。

——ただ。

私よりも私を知っている人たちと顔を合わせると、考えてしまう。

私は私だけど、でもやつぱりそれは別人と呼んでも遜色なくて、そんな私を本当に理解してくれる人は、いるのだろうか、なんて。

いや、理解してもらわなくても構わない。

そんな必要性はない。

現実はいつだって必然性だ。私が記憶を失ったのも、必然と必然が邂逅した結果でしかない。"何故だ"、"どうしてだ"等という追求も、"知る"必要もない。当然、"知ってもらおう"必要もないのだ。

きっと、世界とはそういうものだろう。かくあれかしと言葉を並べても、それは希望でしかなく、妄執でしかない。過ぎ去ってしまったえばそれはただの結果だ。そんな必然性の前では、やはり、私が私ではなかったとしても、それは些細な問題と言える。

ただ一つ言えることがあるとするならば、私からすれば、過去の私こそが"もしも"

の私なのだ。

だから、知ったことか。

私は、私でしかないのだから。

考えても詮無きこと。

だから、はい、おしまい。

Archive.

チャイムが鳴つてから、随分と時間が経つた。数時間にも感じられた先生の話が終わる。

宿題が出された教科の教材を鞆にしまい、鈴葉はさつさと教室を出る。廊下を足早に通り、下駄箱に上履きをしまつて革靴に履き替えた。昇降口を抜けたと同時に、駆け足になつて路面電車の駅へと向かう。

電車を降りて桜通りに入る。春になれば読んで字のごとく桜が道の脇を彩る観光スポットだ。残念ながら、今は夏。虫も多くなるこの時期の桜通りは人通りも疎らだ。



その通りを無視して、女子中等部エリアの近くの公園に辿り着く。ふと感じ慣れた小さな小さな魔力を感じて、ちらりと公園の様子を見ると、ベンチに一人の少女が座っている姿が見て取れた。

「何故こんなところに」と内心で驚くも、鈴葉の表情に変化はない。

程良く延びきった木々が木陰を作っている。

夏の日差しから逃げるように、その吸血鬼は矮躯をベンチに預けていた。

公園の出入り口近くにある甘味処で、鈴葉はアイスクリームを二つ購入した。ベシツクなバナラと、新商品として堂々と宣伝しているキャラメルとバナラの HALF アンド HALF。ドハーフ。

幸いにも、購入している時間のうちに逃げられるということもなく、相変わらず吸血鬼はベンチで垂れていた。

「こんにちは」

無難に挨拶を試みるも、吸血鬼は鈴葉を一瞥するだけ。特に反応はない。それをい事に、鈴葉は吸血鬼の隣に腰を掛けた。

暫時、蟬の声だけが公園に木霊する。

「——これ、知ってますか？ 甘味処の最新メニューなんですよ」

左手に持った、バナラとキャラメルの HALF アンド HALF を微かに掲げながら、鈴葉

はそう問いかけた。

吸血鬼は夏の暑さにしてやられたのか、首と視線を僅かに動かすだけというエコな動作でそれに応える。

「……知らん」

どうせそう言われることは分かっていた。この吸血鬼は、知っていようとも知っていないかろうとも、どうせ事も無げに会話を打ち切るだろう、と。

「食べたくないんですか？」

だから、無理矢理に会話を続けた。見せつけるように、右手に持ったバナラのアイスをお小さな口で頬張る。

吸血鬼はその姿を横目で眺める。

鈴葉の口の端についたアイスを、ぼうつとした目で。

「……要らん」

これも分かっていた。どうせそう言われるだろう、と。予測していた。

これでも、出会った当初と比べると、会話の内容は改善されていた。殆ど鈴葉一人が吸血鬼の背中を追いかけながら喋るだけという光景を、何度繰り返したか。

「ふうん、夏だと言うのに冷たいアイスも食べないなんて。変わり者だつて言われませんか？」

だから、素直こんなことな意見を言つても、怒りはしないことを鈴葉は知っていた。

「貴様に言われたくない」と、吸血鬼は内心で毒吐く。

「縊むすぶるぞ」

言葉とは裏腹に、その声に迫力はない。

この少女——艶のある黒髪を腰まで伸ばした、雰囲気だけで言えば中等部のクラスメイトよりも大人びているおとなしい少女は、どんなに突き放しても諦めることなく執拗に追いかけてくる。

正義がどうか、なぜ悪いことをするのかとか、そういうことを童心ながらに追求してくるのかと思えば、そんなこともない。

正直、この蒼井鈴葉という少女の目的が見えず、しかしそれでもコミュニケーションを取ろうとしてくるその様子に、吸血鬼は少しだけ辟易としていた。

「貴様、放課後は友達と遊ぼうとか、そういう発想には至らんのか」  
貴様くらい歳のガキは、そういうものだろ。何故私の元に来る。

そんな含みを持たせた言葉に、鈴葉は少しだけ躊躇っているようだった。だが、そんな様子は一瞬で、アイスを一口だけ食べると、鈴葉は特に動揺することもなく極めて冷静に返答する。

「学校に友達はいません。……姉のような人ならいますけど」

「そうか」

「は、」

それから、二人は暫く口を開かなかつた。

吸血鬼も、少女も、ただ、公園の中央にある噴水を眺めながら、それが自然であるかのように、無言を貫く。

時には遠くに微かに見える陽炎を。

時には木から木へと飛び移る蟬を。

時には制服のまま駆け回る生徒を。

そんな光景を、見ているようで見ていないような視界をそのままに放つたらかして。

吸血鬼は溶けてしまったかのように力のない瞳で。

鈴葉はアイスを食べながら。

無言。

「旨いのか？」

その無言を破つたのは、吸血鬼だった。

バニラのアイスを完食した鈴葉は、「おいしいですよ」と一言だけ呟きながら、溶けて手についたアイスを舐め取る。

「バニラは隠し味にハーブソルトが混ぜとってんです。こっちはキャラメルが濃厚で若

い女子からの注目の一品。とにかく拘ってアイスを作ってくれる、隠れた名店なんですよ、あそこ。……食べます？」

「……………ああ」

既に溶けてその背丈を縮めているアイスを受け取る。それから、ポケットからハンカチを取り出して、鈴葉の口元を強引に拭いた。

「……………ありがとうございます」

「手は洗ってこい」

「はい」

とてとてと、拙い足取りで公園に備え付けられた水道に向かう鈴葉の小さな後ろ姿を見遣りながら、吸血鬼はアイスを一口だけ含んで顔を顰める。

「……………甘すぎるな」

愚痴のような独り言は、蝉の声に紛れて消えていった。

## E p . 4

大きなお庭。

端っこに置かれたベンチから、■が元気に走り回っている姿が見て取れた。二匹の大きな白い犬——グレート・ピレニーズ——に追いかけられている姿は、まるで猟犬と獲物のような構図だが、それが遊んでいるだけだということを私は知っている。

ほら、だつてあんな小さな歩幅なのに、犬達はいつまで経つても■に追いつかない。やがて、■が転ぶことでその狩りごっこに終止符が打たれた。犬達にべたべたに舐められて、■は嬉しそうに、しかしどこか虚無を彷彿とさせる無表情な様子でそれを甘受していた。

幸せな光景。

楽しい憧憬。

いつまでもこのままだったら良いのにと思わずにはいられない情景。

光に満ち溢れた、ありふれた家族の、たった一部を切り取った一幕。

この頃から、■と私は対象的だったと思う。だけど、それも良いのだろう。

そんな点対称だつて、ありふれているじゃないか。

そんな鏡の外側と内側のような姉妹なんて、どこにでもいるではないか。

別に恨めしいこともなければ妬ましいこともなかった。むしろ私は■■■のことが好きだったし、■■■も私のことは好きだったと思う。多分、きっと、恐らく。

目線を落として、私は手に持っている本を開く。

多分、童話だったような気がする。

ありふれた童話だ。

囚われたお姫様を助ける王子様のような、怖い人達から魔法の力で抜け出す悲劇のヒロインのような、呪われたお姫様を王子様がキスをして助けるような、そんなありふれたお話だったと思う。

——■■■。

呼ばれて、顔を上げる。

気づけば■■■は私の眼前にいた。その後ろで大きな犬達は舌を垂らして獲物を見るような目で私を見つめている。

「どうしたの？」

■■■の髪の毛についた芝生の葉を取ってあげて、それから私によく似た真つ黒な髪の毛を梳くように撫でる。

——一緒に遊ぼ？

ああ、なんて可愛らしいのだろう。

だけど、そのお願いを聞くことは、私にはできなかつた。

だって、私はもう■■■■から。

「ごめんね、私は本を読まなきゃいけないの」

別に読まなきゃいけない訳でもないけれど、遊ぶことは絶対にできないから、そんな言い訳をした。

すると■■■は不思議そうに小首を傾げるのだ。

本当に可愛らしい。愛らしい。

——なに読んでるの？

そう聞かれて、私は分からなくなつた。

なにを読んでいたのか。

それは多分、お姫様を捕らえる悪者のような、とにかく憂さ晴らしをするように可愛い女の子を虐げる悪女のような、お姫様に呪いをかける魔女のような、そんなお話。

「……お姫様を不幸にするお話、かなあ」

多分、間違っていない。

——ふうん？ でも■■■はお姫様を助けてあげたい。

「うん、そうだね」



それは本心だったと思う。

誰かを助けられるようなヒーロー。悪に立ち向かう強い心を持ったお姫様。愛した人のために奮闘する王子様。

それは、どうしようもないくらいに眩しくて、どうにかできるくらいには羨ましい人たち。

——だからね、■は正義の味方になる。

「……………うん、そうだね」

それはね、無理なんだよ。

絶対的に不可能なのだ。

絶望的に不可能なのだ。

相対的に不可能なのだ。

だって私達は——。

——■も、■と一緒に？

「……………うん、そうだね」

この頃から分かっていた。

だけど足掻いたような気がする。

この頃からわかっていったのに。

藻掻いたような気がする。

どうせ、■■■の血は私を追いかける。

そして、結局追いつかれてしまったではないか。

「ずっと、一緒。ね、■■■」

嘘つき——。

——……うん、ごめん。



最悪の目覚めだった。

寝汗で寝間着はしつとりと蒸しているし、そのせいで肌に纏わり付くような感覚が持ち悪い。更に汗はマットレスまで侵食し、掛け布団もまた湿り気で冷たくなっていた。荒れた息はなかなか整わないし、悪夢の残滓が脳裏を掠めているし——とにかく最悪だった。

布団を蹴飛ばすようにして退かして、上体をもたげた。ベッドのすぐ横にあるサイド

テーブルの上に置かれたリモコンのボタンを押すと、照明が点いて暖色の光が部屋を明るくさせる。

視界の確保に成功してやっと安心を覚えたのか、呼吸が落ち着きはじめた。

胸元のボタンを外してパタパタと仰ぐ。冷房の風も相俟って、熱くなつた体が急激に冷えていくのが分かった。それはとても気持ちのいい感覚だったが、しかしこのままでは風邪をひいてしまう。例えば風邪をひいたとしてもなにか不都合があるわけでもないが、自ら病気を患おうとする程、私は酔狂ではない。

ベッドから下りて、改めてマットレスを見ると、それはそれはもう酷いなんてものはなかった。人間の体からこんなに水分が抜けるなんてことがあるのかと感心したくなる。これはもう、湿っているというより水溜りだ。

ため息を零しながら、マットレスカバーを外す。ついでに掛け布団のカバーも外し、部屋の隅にあるハンガーラックに掛けてみる。冷房の風があるから乾いてはくれるだろうけれど、これは流石に洗濯案件だ。諦めて、洗濯かごに投げ入れる。

あとは着替え——いや、着替える前にシャワーだ。暑いお湯を浴びなくては、本当に風邪をひいてしまう。

そう、私の目論見通り、私の行動範囲が少しだけ広くなった。今やこの教会の地下一階は私に所有権がある言っても過言ではないだろう。好きな時に好きなだけシャワー

を浴びれる幸せとはかけがえのない喜びなのだということを実感した。

### 閑話休題。

兎にも角にも、寝間着をさつきと脱いでしまおう。

濡れた衣服を纏ったままで動くのはとても気分が悪い。

インナーに手をかけて、いや待てよ、と。冷静になった。いくらここが地下で、最近あまり監視役の人達の立ち入りも少なくなってきたとは言えども、真つ裸で部屋の外に出るのは、流石に開放感が強すぎるのではないかと。

この地下一階というフロア全体が最早私の部屋のようなものではあるけれども、流石にそれは、露出趣味の痴女の行いなのではないかと。

そんなことをぼうつと考えていると、突然部屋の扉が開いた。

「お、つと……」

「……………」

人の部屋に入る前にノックをするという今時縄文人だつて知ってる常識をかなぐり捨てた闖入者は、意外なことに高畑先生だった。

いつでも清潔感のある白いスーツに身を包む無精髭のヘビースモーカー。

高畑先生という人物を要約するとしたら、こんなところだろうか。瀬流彦先生の話では、なんでも魔法世界の大戦にて功績を重ねた超一流の魔法使い——その仲間の一人

だったらしい。正直、そんなことを言われても、私から見ればただのダンディなおっさんでしかないので実感はない。

「ごめんごめん。僕としたことが、ぼうつとしててね」

そんなことを言う暇があるのなら早く退室していただけません？

おい、後ろ髪を搔くな。

カバーを貫通したマツトレスの水溜まりを見るな。

そんな、＼あー、おねしよか。まあ君くらいの年齢なら無い話でもないから、気にすることは無いさ＼みたいな顔をするな。

……………。

「…………おねしよじゃ、ない、です」

「へっ!? あ、ああ。うん、そうだね。大丈夫、誰にも言わないよ」

おい。



拙いながらも事情の説明と、それからシャワータイムを終わらせて、私は高畑先生と二人でベッドに腰掛けていた。サイドテーブルには湯気の立つ紅茶が置かれている。高畑先生が「さつきのお詫びに」と、上の教会のキッチンを借りて淹れてきたらしい。

高畑先生は私の監視役のうちの一人だった。こうして二人で時間を過ごすことは決して珍しくはない。ただ、ここ最近はあまり顔を見せることも無かったので、意外と言えば意外だった。超一流の魔法先生ともなれば、その多忙さは想像に難くない。てつきり、私の監視役からは既に外されたのかと思っていたのだが。

湿っている髪の毛をタオルで軽く拭いてから、早速紅茶をいただく。ここに来る度に淹れてくれるおかげで、その味は既に知っている。意外性も何もあつたものではない。

いつもの味を舌で感じ、喉に通し、一息。

まあ、嫌いではない。

「許してくれたかい？」

図に乗るな、と言いかけるものの、私はとても優しく素直な子なので無難に頷いておく。

そもそも、別に高畑先生は嫌いではない。むしろ、好感を持つて接していると言つても過言ではない。スーツに染み付いた煙草のニオイでさえも、今となつては「落ち着く」と思えてしまう。

常に余裕のある彼は瀬流彦先生と比べてとても相談もしやすく、おじいちゃんとのコネクションも強いのでこちらのお願ひもある程度は聞いてくれる。

普段はその落ち着いた物腰と柔軟な思考に助けられているのだ。今回のような紳士にあるまじき失態こそ、イレギュラーである。タイミングの悪さから女難の相が見えていざと伝えたい。

高畑先生は「良かった」と、心の底から安心したと言いたげな声色で呟くと、手に持ったコーヒを一口だけ飲んだ。

「瀬流彦くんから聞いたよ、先週から勉強を始めたんだってね」

その通りである。

《とある事故》で私はいろいろと厄介な爆弾を抱えているらしい——残念ながらその爆弾がなんなのかは教えてくれない——が、私の本分は「生徒」もとい「児童」である。記憶を失くしているとは言っても、その現状に甘えて勉強を疎かにするのは十全ではない。故に、私からお願ひしたのだ。

国語に関しては問題ないと思う。目が覚めてからずっと本を読んでいたし、同時に国語辞典も用意されていたので、分からない言葉は調べる事ができた。分からなかった言葉の復習なんかは良い暇つぶしになる。だが、問題は計算だった。理科や社会なんかはもつと問題だ。まるで覚えていなかった。一部の単語こそ覚えていても、「何故そう

なったのか”までは分からない、というのが現状。正直、文法や漢字以上に厄介だった。なので、内容は小学一年生から。教科書とドリルとノートを用意してもらって、一人で黙々と、監視や食事を持ってきてくれる先生が来たときは教えてもらいながら、しっかりと勉強を始めたのである。褒めろ。

「もう提出できるドリルはあるかな？」

言われて、私は頷いた。

サイドテーブルの棚を引き、算数と社会と理科のドリルと道徳の課題プリントを取り出す。

「え、もうこんなに提出できるのかい？ 凄いじゃないかー！」

そうだ、いいぞ、その調子でもっと褒めろ。

とは言え、私にとって、暇な時間は無限にあると言っても過言ではない。指定されたページまで進めるくらい、なんてことはなかった。

小さく胸を張る私に何を思ったのか、高畑先生は私の頭を優しく撫でた。いや、うん、これは流石に恥ずかしい。だがまあ嫌な気分ではない。

「じゃあ、これはきちんと預かって、採点したらまた持つてくるよ」

コーヒーをサイドテーブルの上に置くと、高畑先生は鞆にドリルをしまう。

……それにしても、いつまでそこにいるのだろうか。いつまでそこでそうしているつ



もりなのだろう。

私がシャワールームに向かう時にも上手く隠れたつもりなのだろうが、正直に言えば、それは気づかざるを得なかった。如何せん、匂いまでは隠せない——というよりは、匂いなんかでバレれるとは思ってもいなかったのだろう。

……何故か、口の中の唾液量がいつもより多くなる。

隠れているということは、見られたくないということだ。変に詮索しない方が身のためか。

思わず部屋の外を凝視しそうになるが、紅茶に口を付けることで強引に意識を匂いから引き剥がした。

「……今日は他にも話があるんだ」

暫時、互いに飲み物を飲むだけの時間が続いたあとに高畑先生はそう切り出した。

「エヴァと会ったんだってね?」

頷く。

もう数週間前の話だが、あの対面は今でも夢に見る。分かっているけど困惑してしまふ、そんな自分自身に困惑しているかのような表情が、瞼に焼き付いてしまっていた。

「……君はエヴァととても仲が良かったんだ。学校が終わると一目散に中等部エリアに向かつていく君の姿は、いろんな先生たちの目についてた。勿論、僕も見かけたことが

あるよ。その時の君は、なんだかとても楽しそうだった」

それは、もしかしなくても、悪い意味で目立っていたのだろう。

「瀬流彦くんとも良くその話をしていたよ」

……相談してたんだろなあ。

自分の教え子が悪の代名詞と仲良くしてるなんて、どんな気分なのだろう。

……今の私はエヴァンジェリンさんについて知らなすぎる。だから、彼女がどうしてそこまで「悪」とされているのかは分からない。それでも、ガンドルフイーニ先生の様子を見ていると良く分かる。彼女の嫌われ方は尋常ではない。

なにしたらんだろ。

やっぱり万引きとかかな。

いや、他人に万引きを強要していたのかもしれない。

或いは煙草か。飲酒か。はたまた無免許運転か。暴走族なのか。

——やめておこう。不良なエヴァンジェリンさんをイメージするのは何故か容易いのだが、これ以上は彼女の名誉を傷つけてしまう。

なにより、壁一つ越えた向こう側までこの思考が漏れてしまったら——おお、考えるだけで身長が三センチくらい縮みそうだ。

「だから、もう一度、エヴァと仲良くしてやってくれないかな。これは君の為でもある

し、——エヴァの為でもある」

なんだかとても優しそうな声色と表情に、私は納得した。再確認したと言ってもいい。高畑先生は、本当に裏表のない、純粹な心でその言葉を並べているのだと。まるで浄化されそうではないか。毒を吐くことの多い私の心までも溶かしてしまいそうな、暖かな心。正義の味方とは、こういうものなのだろうか。立派な先生とは、こういうものなのだろうか。ああ、光そのものではないか。こんなの、眩しすぎて、直視できない——

と、そんなことを考えていると、唐突に部屋の扉が蹴破られた。見なくても分かった。

それは、まさに、今まさに話題の中心にいた、悪鬼羅刹の権化である。

「……………」

「ど、どうしたんだい、エヴァ？ 僕はまだ鈴葉ちゃんとお話が——」

エヴァンジェリンさんはそのままずかずかと部屋の中に入ると、高畑先生の胸ぐらを強く掴んだ。

「——タカミチ！ 貴様ツ、話と違うぞ！」

「ええ？ そうかな？ 僕はエヴァに言われたとおり、もう一回友達になってくれないかっていうお願いを——」

「戯けか貴様!? そんな話をしろとは言っていないわ!」

そんな夫婦喧嘩——夫婦喧嘩がどういうものなのかはよく分からないが——のよう  
な応酬を聞きながら、まあ、少なくとも、高畑先生に伝言をお願いすることは、これか  
ら一生絶対に無いだろうなど、そう思ったのでした。



エヴァンジェリンさんの話を要約すると、〃貴様の話し相手になつてやる光栄に思え  
ガハハ、なのでこれから頻繁にこの部屋へ訪れると思うのでよろしく〃ということだつ  
た。多少の脚色と曲解は隠し味。むしろ、これ程までに的確な要約は他に存在しないだ  
ろう。

将来の夢は通訳に決定かな。

しかしなるほど、高畑先生の友達云々の話も領ける。エヴァンジェリンさんは強く否  
定していたので、わざわざそれを口に出すつもりはないが。

それにしても、隣に座るエヴァンジェリンさんの匂いが、どうしても気になってしま

う。

いや、決してクサイと言いたい訳ではない。

むしろいい匂いだ。頭がくらくらする。シャンプーの香りなら私も負けじと噴出しているだろうが、そういう類のものではない。もっとナチュラルな、人間的な香り。——これがフェロモンというやつだろうか？

未だにエヴァンジェリンさんと高畑先生は漫才のようなやりとりを繰り返している。挟まれている私の身にもなつてほしい。これでは激しいツツコミからボケを守るための緩衝材だ。

しかし、そんな嵐の渦中においてもお構いなしに、エヴァンジェリンさんがそんな魅力的な香りを振り撒くせいで、こちらとしては気が気でない。なるほど、もしかしたら昔の私はこの匂いに釣られた——まるで花の蜜に誘われる蝶のような儂くも美しい存在だったのかもしれない。

……そろそろ自己評価が天元突破しそうなので自重を覚えよう。

エヴァンジェリンさんの匂いは、しつこく私を追い回していた。

数週間前から、あの出会いから、私の頭の隅っこには常にエヴァンジェリンさんがいたし、時折、ふとこの匂いを思い出しては、安眠に誘われている気がして布団に潜りこんでいた。だけれど、その度に胸中に靄がかかるような気分になる。

冷たいのに暖かい、妙な感覚を覚えるのだ。

私の松果体を、脳髓を、まるで指でなぞられるような、そんな寒気と共に、それに呼応する脈動が、熱い血流が、全身の毛細血管を刺激する。

頭の中枢にあるもう一人の自分が垂涎していた。

願望を剥き出しに、欲望を掻き立てる。

だけれど、いまいち、なにがしたいのかがはつきりしない。

漠然とした欲求。判然としない欲求。それは最早、三大欲求の一つとして、さも当然のような顔をしてそこに鎮座している。それは底の抜けた水瓶だ。満たし方が分からない。

エヴァンジェリンさんに会えば、満たされるのだろうか——。そう思っていた。だが現実はどうだろうか。脳を直接くすぐられるようなもどかしさが、余計に欲求を加速させている。

全身が痺れる。

体の奥深くから、じんわりと滲むような熱に、身体が疼く。行き場もなく曲がりくねる衝動が、身体の中で暴れている。

どうしようもない程に快感を求めているのだろうか。欲求とはそういうものだ。だが、その快感を得るための手段を知らない。痒いところに手が届かない。意識の中に存在

する選択肢には解決策がない。時間が経てば経つほど、私の意識と思考は蒙昧になる。黒洞々たる闇に沈んでいく。

陶酔して、心酔して、泥酔して、浸水する。

——そうか、私は既に溺れているんだ。と、それに気付いたときにはもう手遅れだった。

深く息を吸う度に、心臓が跳ねる。その鼓動が脊髄をよじ登って、延髄を抉って、脳幹を貫いて、髄液と脳細胞を沸騰させた。

「——す、鈴葉？」

唐突に、今まで外界の音を遮断していた鼓膜が、機能を取り戻す。

気付けば私はエヴァンジェリンさんの背後に回り込み、両腕でその瘦躯を拘束して、星を編んだような金の髪を掻き分けて、首筋へと鼻を押し付けていた。

すんすんと、嗅ぐ。

おお、これはなかなか。やばいかもしれない。

「おい、聞こえてないのか……？」

エヴァンジェリンさんが持つそもそも匂いとシャンプーの匂いと混ぜて、身体の中がぐちゃぐちゃになる。

その長い金髪は綺麗だったけれど、今は少しだけ、それが邪魔だった。

なんとかその髪の毛を掻き分けて、退かして、そのきめ細やかな首筋に頬ずりをすると、お腹の奥が、ぐるぐると鳴る。

「——はああ」

自分でも驚くくらいに、恍惚とした溜息が漏れた。

私は——知らない。

こんなの、知らない。

だけれど——頭の奥のどこかで、誰かが、私の身体を操っているようで。

かぶり、と。

その吸血鬼の首筋を、優しく噛んだ。

「っん、……ちよ、ちよつと待て、鈴葉」

残念ながら、今の私に「待つ」という選択肢は無かった。端から用意されていない。私の身体を動かしているのは、私ではない。だから、待てない。

あむあむ、と——甘噛みする。

「——ええい、待たんか！」

エヴァンジェリンさんは勢い良く立ち上がることで、無理矢理私の歯牙から離れた。振り返って、真っ赤にさせた顔をそのままに、私を恨めしそうに睨む。その激怒している様子に、私は萎縮した。いや、萎縮したところでどうなるというわけでもないのだが、



これは一種の防衛本能だろう。ベッドの上で割座した姿勢のまま、俯く。

嫌われたらどうか。

嫌われたのだろう。

私にとってはそれは私ではなかったのだけれど、エヴァンジェリンさんからすれば、実行犯は私ただ一人なのだ。

エヴァンジェリンさんは私が噛んだ首筋に手をあてながら、一言。

「時と場所を弁えろ！」

「……………弁えたら、いい？」

この期に及んで言質をとろうとしている自分が空恐ろしい。

「あ、いや、違つ…………。そもそも、一体何をしているのだ、貴様は！ 腹はまだ減つてないはずだろ！」

それはその通り。

なぜエヴァンジェリンさんが私のお腹の状態を知っているのかは分からないが、ご飯は一昨日食べたばかりだ。

だからこれは、食欲とは別の欲求。未だに不明瞭な、私の知らない、私の欲求。

そもそも、空腹になったからと言ってエヴァンジェリンさんを食べるなんてことはない。

「お腹じゃ、なくて」

下腹部を両手で抑える。そう、本当にお腹は減っていないし、眠くもない。残念ながら、性的な欲求については未だに理解が乏しい。しかし、これがもしも性的な欲求なのだとなれば、私は同性であるエヴァンジェリンさんでその欲求を発散しようとしたことになる。それは、あまりにも、自然的じゃないと思った。

男性は女性に、女性は男性に、そういう欲求を持つものなのではないのか——？  
少なくとも、私はそう認識している。

だが、私は男性にこんな感情を持ったことはない。瀬流彦先生にも、高畑先生にも、こんな——丸呑みにしたくなるような、衝動は、持ったことがない。

「心——？」

分からない。

分からないなりに解析する。

エヴァンジェリンさんに、なにかを求めている。

それは物欲的な、それでいて即物的な、他人の感情も、利害の勘定も、それら全てを度外視した、素直なまでの——。

そんな私の様子に、エヴァンジェリンさんは小首を傾げる。それに倣って、私も小首を傾げる。

「——えっと、僕はそろそろ仕事に戻るんだけど……、エヴァはどうする？」

その声に驚いて、私は左を、エヴァンジェリンさんは右を向いた。——ああ、そういう  
えば、いましたね。なんて、言いたげに。

いつの間にか、高畑先生はポケットに手を突っ込みながら、部屋の出口に立っていた。

額にしつとりと汗を浮かべている。まあ、仕方のないことなのかもしれない。私は意味も不明な行動を取るし、エヴァンジェリンさんは激怒しているし、この場を収めなくは、去るものも去れないだろう。

「……………ああ、そうだな。私も今日は帰るとしよう」

一瞬だけ躊躇して、エヴァンジェリンさんはそう結論を出した。最早怒りも冷めてしまったのか、呆れたものを見るような目で私を見る。

なんとなく、既視感を覚えた。

「エヴァン、ジェリン、さん……」

立ち去ろうとしたエヴァンジェリンさんの、その、なんか独特なひらひらとした真っ黒な服を、身を乗り出してつまんで、引き止めた。

その背中を、私は多分、追いかけてしまう。

今、私の身体は、主導権が奪われてしまっている。頭からイニシアチブを引き剥がさ

れてしまっている。

だから、追いかけないためにも、私は彼女の足をそれ以上前へと進ませないことに必死だった——のだと思う。

「また、来て、くれます、か……？」

喉が掠れて痛い。

だけれど、それでも声に出す。

私に出来ることは、それだけだから。

「……最初にそう言ったはずだぞ」

それは、そのとおり。

もうこれ以上引き止めることは出来ないだろう。次は、私のこの衝動を引き止める番だ。そう考えて、指を離す。

自由になったエヴァンジェリンさんは、しかし、振り返り、何故か私の頭を梳くように撫でた。くすぐったくて、気持ちよくて、目を閉じる。

「エヴァと呼べ」

「……？」

最初、その発言の意味を捉えることができなかつた。

「その喉じゃ、長い名前は呼び辛いだろ。だから、エヴァでいい」

そこまで言われて、やつと理解する。

「……エヴァ」

「……うむ」

——呼び慣れない。だけど、喜んでいる。

自然と頬が緩んだ。

——誰が？ ——私が。

「エヴァ」

「な、なんだ」

湧き上がる気持ちだが、制御できない。

ダメだ。

これ以上、主導権は、預けられない。

「……エヴァ。……またね」

だから、これが最後。本当に、これが最後。

——もういいでしょ？ これだけ名前を呼べたなら、もう、それでいいでしょ？

「ああ」

やっぱり、エヴァは「ぎよなら」とも「またね」とも言わず、去っていく。エヴァが部屋を出たのを確認して、高畑先生は「ふう……」と一息ついた。それから、「じゃあ、

また来るから」と言い残し、エヴァの背中を追いかけるように部屋をあとにする。

——いいなあ。

なんて。

思うな。考えるな。

ベッドの上で、背中を壁に預けて、膝を抱えた。

脚が動かないように。追いかけないように。

我儘な身体を、必死に抑えつけた。

——洗濯かご、外に出しておかなきゃ。

そんなことを考えながら、しかし私の身体は言うことを聞かず、ぱたりと横に倒れた。

マットレスに染みた汗は未だに乾いてなくて、ちよつとだけ湿っていた。

——不貞腐れないでよ。髪の毛だって、まだ乾かしてないのに。

本当に、わがまま。

## E p. 5

Archive. 二〇〇一年。七月十七日。

麻帆良教会の地下一階。修道女達の宿直室として使用されていた過去は、もう遠い昔の話である。だからこそ、その地下に足を踏み入れる修道女はいなかったし、整備が行き届いていない等の理由でそもそも立ち入りを禁止されていた。

しかし、そういう、人の出入りのない場所ほど、妙な噂が流れる。

例えば、そこには血塗れのボロ布のような修道服を着たシスターの幽霊が現れる、とか。

例えば、そこは秘密の地下施設の入り口が隠されており、日夜人体実験が行われている、とか。

例えば、そこは金銀財宝が隠されており、それを守るためのトラップとゴーレムが目を光らせている、とか。

「——ひゃー……。いや、これは予想以上だね、ココネ」

十三歳にして修道女の衣装に身を包んだ少女——春日美空は、冷や汗をかきながら、闇を飲み込む石畳の階段を覗みつける。シスターとして教会に従事する美空だが、地下

があると噂を聞いて早速探してみれば、それは呆気なく見つかった。

立入禁止と記された看板を退かしてみたはいいものの、じんわりと肌に滲むような温風はあまりにも気持ち悪く、不気味だ。

地下と言えば季節に問わず冷え込んでいるというイメージがあるだけに、なおさら。

「ミソラ、本当に行くの?」

その声は美空の頭上から。

ダウナーな声の主は、褐色肌の童女。美空に肩車されながら、その地下へ続く階段を覗いている。

「そりゃ、行くしかないっしょ! 金銀財宝が眠ってるなんて言われたら、ねー?」

シスターに有るまじき俗物だった。

「でも、オバケも出るって」

「アハハ! オバケなんているわけないじゃん、ココネは怖がりだなあ。それに、シスターシャークティから隠れるには良い場所だし、下見しとかなきゃだしね」

もともといたずら好きがたたって罰則を課されることの多い美空からすれば、その「立入禁止」と記された地下はいい隠れ蓑になると憶測していた。そもそもいたずらなどしなければ済む話なのだが、そんな選択肢は美空の頭の中には無かった。

「よーし、行ってみるか!」



「……………」

最早忠告する気も起きないのか、ココネは自分のパートナーの自由奔放なその行動に身を任せることにした。



当たり前だが、地下は暗い。

初級魔法の《火よ灯れ》で視界を確保してみるものの、それはあまり十全とは言えなかった。

ライトくらい持ってくれば良かったなどと考えるものの、今から引き返すのも面倒だったのでそのまま突き進む。

石畳の階段は足場としてはあまりに不安定で、転倒しないように注意するだけで精一杯だった。ネズミの一匹でも現れようものなら、驚いた反動でそのまま転がり落ちてしまうだろう。壁の側面には蝋燭が一定の間隔で並んでいるが、これらに火を灯してしまおうと形跡が残ってしまう。バレたらお仕置きどころではないだろう。

石と石の狭間なのか、はたまた罅が入っているのか。隙間から僅かに冷たい風が吹いていた。ちよつとした地震で崩れ落ちてしまいそうだ。地下らしくなってきたな、と考へながら、慎重に歩を進める。

やがて、階段を抜けて、通路へ出る。

《火よ灯れ》が照らし出した壁には見慣れたスイッチがあり、それを押すと、通路の天井にぶら下げられた電灯が次々と暖色の光を点していく。

「……ひえー、なんだこりゃ」

石畳の階段とは違って、近代的な施設がその姿を現した。

杖に灯していた《火よ灯れ》を息で吹き消して、それを見渡す。広い通路はコンクリートが打ちっぱなしになっているブルータリズム建築。構造から敵意を感じるといふ経験は、美空にとつて未知の領域だった。これ以上足を進めることは許されないとでも言いたげな雰囲気漂う。外の音は一切が遮断されている。二人分の呼吸と鼓動だけが鼓膜を揺らす。

しかし、そんな美空は雰囲気には負けるような性格の持ち主ではない。好奇心とは猫も殺す凶器なのだ。

一步。

足音が静かに響く。

もう一步。

足音が静かに響く。

なんの義務もなく、義理もない。もしもこの通路を歩くことを命令されたのであれば、きつと、美空はその命令に逆らうだろう。しかし、命令をくだしているのはなによりも自分自身。

状態の良い地下空間に、興味がそそられる。

如何せん、立ち入りを禁止されている理由は、「整備が行き届いていなくて危険だから」。しかし、その実、蓋を開けてみればそこは今でもメンテナンスが施されている様子が見て取れる設備である。つまり、立ち入りを禁止したい理由が、他に存在する。

美空の脳裏に、金銀財宝の四文字が過る。

——しかし、やはりこの空間は不気味の一言に尽きた。

暫く進むと、二つの部屋が見えてくる。

手前側の部屋の扉を開けて中を覗き見れば、タイル張りのシャワールーム。シャンプーかボディソープか。とにかく、そんなフルーティな香りが漂ってきていた。なにより、一番奥のシャワーはつい最近使用されたような痕跡が残っている。

部屋の中を漂う湿気と、排水しきっていない水溜り。

また、そこから部屋の出口に向かっていると思われる、小さな足跡。

立ち入りを禁止されているはずのエリアで、一体何処の誰が呑気にシャワーを浴びるというのか。

「これは……なんかヤバイ……？」

美空の脳裏にあつた金銀財宝の四文字が、シスターの幽霊と人体実験という二つのワードで上書きされる。

眉唾ものと一笑に付していた二つの可能性が色濃く滲み出していった。

美空は決して度胸のある少女ではない。その奔放な性格のせいで、厄介事に首を突っ込みそうになることも多いものの、基本的に面倒事は嫌いだし、なにより——怖いものは怖い。

立ち去るべきか、と判断して、踵を返す。

「アハ、アハハ！ ココネ！ 震えてる!? もー、ほんとうに怖がりだなー、ハハ！」

「……震えてるのは、ミソラの膝」

やばいニオイが漂い始めていた状況に、美空の膝が笑う。

こうなつてしまえば戻るのも地獄だった。いるはずもないと高をくくつていた幽霊の存在。それが好む環境。妙に湿気が多くて、暗くて、不気味な、石畳の階段。

と——。

そんなお化け屋敷のような階段へ向かおうとしたときに——。

その音は聞こえた。

「ミ、ミソラ……！」

ココネが美空の頭を叩く。その視線は、背後。

がちやり、と。

扉の取っ手が回される音。

見たくもないはずなのに——美空は振り返ってしまった。

それは、シャワールームとは別の、未確認の部屋の扉。

引っ掻くような軋む音が、その扉の蝶番の年齢を物語っていた。

真つ青になるほどの冷気が風に乗って、二人の身体を打ち据える。

まず見えたのは、外開きの扉のドアノブを握る真つ白な手と、それに付随する腕。

そこから、ぬるり、と。

それは不自然な程に湿っている、黒髪。

やがて、それは全身を見せた。

ココネにも引けを取らない、矮躯。真つ暗なワンピース。雪よりも白い肌。小さな頭からぶら下がる黒髪は腰まで届く程に長い。白すぎて輪郭も曖昧な小さな顔には、大きくて虚な黒い瞳。

そして、片手にぶら下げた洗濯かご。

三人の視線が交差する。

「……………だ、れ？」

その囁くような声は、打放しコンクリートの壁に反響して――。

「オ、オバケさんダ……………」

「い——いやあああああああああ！ 出たああああああああ！」

その様子は、脱兎が如く。

ただの人間にはとても再現できない速度で、美空はその場からの離脱を図った。

残されたオバケ——もとい、鈴葉は、訳も分からず、立ち尽くす。

なんとなく、部屋を出てすぐそばにある通路の電灯を操作するスイッチをオフにした。

遠くで、悲鳴が聞こえる。

もう一度オンにしてみた。

また、悲鳴が通路に響き渡る。

「……………？ ……う？」

鈴葉の困惑だけを残して、美空の足音はやがて聞こえなくなつた。



「はあ、はあ、はあっ——はああ……」

階段を上り切り、封印するように“立入禁止”と書かれた看板を元の位置に戻す。アーティファクトを使用した、全力の逃走劇だった。

通路の電気が消えたり点いたりする度に悲鳴を上げて、階段の隙間風に怯え、終いには肩車しているココネの脚が視界に入って驚いて——七転八倒の全速力。

最早立つ気力もなくて、その場に座り込んだ。肩の上で振り回されていたココネも、同じくグロツキー。ふらふらと危うい足取りで地面に降りると、しゃがみ込んで美空へともたれ掛かる。

噂など、噂でしかない。

自身の金銀財宝の夢を柵に上げて、そんなことを思っていた美空にとって、それはイレギュラーな事態だった。まさか、本当に幽霊が現れるなど、どうして予測できるだろうか。

絵に描いたような幽霊だった。

思い出すだけで身震いする。

「あなたたち、何をしているんですか？」

しかし——安心するには、まだ早かった。

「し、しし、シスターシャークティ！ た、助けて！ お、オバ、おばおば！」

「誰がおばさんですか！」

「違う違う、そうじゃなくて！ ち、地下！ 地下でオバケがあー！」

「ミ、ミソラ……！」

言うべきではなかった。

助けを乞うべきではなかった。

美空達に声をかけた存在は——その人は、シスターシャークティ。教会の最高管理者にして、春日美空を担当する『魔法先生』。

「ほう……。おかしいですね。地下は立入禁止と、そう教えてきたはずですが——入ったのですか？」

それは比喻表現など必要のない、純粹な怒気。

幽霊から助けを乞うために、幽霊よりも恐ろしい存在を出現させてしまった。しかし、美空とてそれで萎縮してしまふほど繊細ではない。でなければ、立入禁止の地下に潜り込もうとは思わない。

「あ、いや、違うんです！ いや、違くないんすけど、違うんすよ！ オ、オバケ！」



オバケが!」

「はい? オバケ?」

周囲に浮かび始めていた十字架を象った魔力が収まっていく。怒るよりも先に事情を聞かねばならない、と、そう判断した。

「はい! 黒髪の、長髪の、ちっちゃい女の子!」

「……………はあ」

シスターシャークティは頭を抱えた。

麻帆良教会の最高管理者である彼女は、当然蒼井鈴葉について知っている。鈴葉と直接会えるだけの権限は無かった——その権限はタカミチを始めとした上級職員のみが持っている——が、地下の宿直室を明け渡したのは他の誰でもないシスターシャークティであった。それだけではなく、密かに鈴葉の洗濯物を預かって洗濯して干して返却するという、ちよつとしたお世話係まで務めていたのだから、知らない訳がないのである。

だからこそ地下は立入禁止にした。理由もちゃんと考えた。普通の人間ならば、整備の行き届いてない地下施設になど、足を踏み入れない。崩落すれば助かりようがないのだから。

悔っていた。

イタズラが好きで好きで堪らなく、好奇心で生きている、この春日美空という少女が、その程度で止まるはずがなかったのだ。

「……あなたの場合、隠した方が厄介なことになりそうですね。ええ、はつきりと分かりました」

「はい？」

「誰かに聞かれたら困りものですね」

シスターシャークティはそう言うと、人払いの結界を周囲に展開させる。それから、しやがみ込んでいる二人に正座するように命令し、一方でシスターシャークティは壁に寄りかかった。

「とは言え、どこからどこまで話せばいいのでしょうか。私も全てを知っているわけではありませんし……。——まず、あなた達が遭遇したというオバケですが、彼女はオバケなんかではありません。歴とした、生きた人間です」

「えー……」

「……なにか不満でも？」

「生きてる感じしませんでしたよ……。？　なんていうか、生気が感じられませんでした」  
虚ろな目。あれを生きている人間の目と呼ぶのは、抵抗があった。

シスターとして教会に従事していると、いろんな人間と会うことになる。精神を病ん

でいる人や、病氣の人、疲れきった人など、そのレパートリーは決して少なくない。彼等は神に助けを乞い、祈りを捧げる者達だ。人生に絶望している者達を、幾度と無く見てきた。孤児院にいた頃も含めると、それは数えるのも馬鹿馬鹿しい程の数になる。

だが、それでも、あの少女の目は、見たことがなかった。生きている人間の中で、あんな目をしている者は、いなかった。

「……そうですか、私は見たことがないのでなんとも言えません。ですが、間違いなく生きています。それでいて——とても危険な存在です。敢えて隠さず伝えますが、彼女は人を何人も殺しています」

「は……? いやいや、シスターシャークティ。それは流石に……え、嘘ですよね? 誇張表現つてやつですよね?」

「いいえ。事実です」

「な、なんでこんなところにそんなのがいるんですか!? 刑務所は!? 警察は!? 警察なんかじゃ手に余るからここにいるのか! そりやそうだ!」

「自己完結してくれるのは有り難いですけど、もう少し冷静になってくれませんか?」

「……はい」

「彼女が人を殺したのは、数年前の話です。もつと具体的に言いますよ。三年前の《ロンドン連続殺人事件》——通称《夜霧のゾンビ》の実行犯、それが彼女です」

「へー。未だに犯人が見つかってないあの事件ですか。ちゃんと犯人いたんすねえ。それはそれは……って、はいいい!？」

「静かに。防音まではしてないんですから」

「はいいい……」

「よろしい。では、なぜ彼女が今、この教会の真下に位置する地下で暮らしているのかですが——当時、彼女は理性を失っていました。私が聞いた報告では、謎の呪いにかかられている、とされています。とても強力な呪いです。それをなんとかして無力化させて麻帆良の地下牢獄へと閉じ込めたのです。それから一年以上、彼女は理性を失ったままだったとされています」

「一年以上、理性を失ったまま……」

反芻して、イメージして、戦慄した。

そして、容易く同情した。たとえ、かの有名な連続殺人事件の犯人だと言われても、それは、あまりにも悲惨な結末だった。

しかも、呪い。それがどのようなものかは分からないが、決して気持ちの良い言葉ではなかった。

地下で見かけた少女を思い返す。

あんな矮躯で、あんな華奢な身体で、一体、どんな呪いを身に宿してしまったのか。

「しかし、彼女は理性を取り戻しました。なので、今では人道に則り、地下ではあるものの、彼女の衣食住を確保しながら経過を観察している状況です」

しかし——それは、あまりにも可哀想ではないか、と。

そう思わずにはいられなかった。

監獄から出してもらって、その結果が、陽の当たらない地下での暮らしなど——それでは、監獄となにも変わらない。

それに——。

「シスターシャークティ、あなたは彼女を危険と言いましたよね？ 今の話を聞いていると、もう危険なんて無いように思えるんすけど……」

理性を失い、人を殺し、しかももう一度理性を取り戻した少女。

それだけの話ではないか。

「——呪いは、終わっていません」

「呪い……」

やはり、気分が悪い。

「私も、全てを知っている訳ではありません。しかし、それでも、絶対に伝えなくてはいけない情報」として伝えられた事が、一つだけあります」

シスターシャークティは、顔を顰める。口にするのも憚られる、と言いたげに。

「——彼女の呪いは、その性質上《人肉を食らうこと》が避けられない」  
「……………へ？」

「人肉を食らわなければ、生きていけない身体なのだそうです」

それは、理解の度を超えていた。

範疇を超えていた。

——生き血を啜る吸血鬼すら生易しいと思ってしまう、そんな日が来るとは、思いもしなかった。

「彼女は、今でも人肉を食べています。そんな生活が、理性を失った頃も含めて、既に三年も続いているのです」

そんなこと——どんな精神力なら、それを続けることができるのだろうか。あまりにも、あまりにも、可哀想だと、そう美空は思ってしまった。

それこそ——ひと思いに殺してあげた方が、彼女は幸せなのではないかと、そう思ってしまう程に。

「——美空。私達は、神に従事する信徒です。どんな形であれ、人の死を願うことは絶対にあつてはいけませんよ」

肩が震えた。

思考をまるまると読み取られてしまったことに驚くのと同時に、今、自分がどんな表

情をしているのかが、自分でも分かかってしまう。

「そもそも、彼女は元々麻帆良学園の生徒でした。本来ならばあなたの同級生として日常を過ごすはずだった、極めて一般的な魔法生徒だったんですよ」

——もともと、当時のクラスメイト達は、既に蒼井鈴葉という存在を忘れてはいるはずですが。

そこまで言われて、あまりに悲惨な彼女の人生に、嫌気が差した。

今から三年前で、自分たちと同級生で——つまりそれは、当時小学四年生だったという事である。そんな、まだ遊び盛りの子供が、唐突に日常から引き剥がされる苦しみとは、どのようなものなのか。

想像すらできない。

「——あれ？ でも、あの子、凄くちっちゃかったですけど……」

鈴葉と同じレベルで小柄な同級生は何人かいる。それはやんちゃな姉妹であったり、吸血鬼であったり。

だが、そんな彼女達と比べても、更に一回り小さな女の子でしかなかった。勿論、現実的に比較したわけではない。あの空間での物差しは自分の視点しか無く、気も動転していた。しかし、美空自身が抱いた、“ココネにも引けを取らない矮躯”という見え方は、どうしたって事実だ。

美空とココネは長い時間を共にしている。

その物差しは、狂いようがない。

「……あくまでも、彼女の情報は規制されています。先述したとおり、私も知らないことの方が多し。しかし、あくまで仮説を立てるならば、それもまた呪いの影響なのかもしれません」

成長の停止。

それを聞いて思い浮かぶのは、何故かクラスメイトとして同じ教室に身を置くことになってしまった吸血鬼。数百年という膨大な時を生きながら、自分よりも小柄で華奢な闇の福音。

それが、自分たちの生きる現代で、同じ時間軸で、再現されてしまったのか、という、理不尽な現実への違和感。

——神よ。何故、人は平等ではられないのですか。

その呼び掛けに答えてくれるものは、どこにもいない。

「とにかくー！」

シスターシャークティは、声の調子を一段階だけ上げて、手を叩き、人払いを解除した。それが、〃この話はもう終わりだ〃という意思表示だった。

「あなた達が立入禁止の区域に侵入したという事実は、どうあっても覆りようのない規



律違反行為であることに変わりはありません。全く、卒業まではおしとやかに、という取引を忘れたのですか？」

「……………」

「ミソラ…………？」

今は、逆らうだけの元氣は無かった。

世の中に蔓延る理不尽な不幸。それを、久しぶりに目の当たりにした気分である。いつもと打って変わって静かな美空に、主であるココネですらも違和感を覚えた。

「…………とはいえ、既に反省もしているようですから、罰は軽いものにします」

シスターシャーケティはそう告げる。

それは、世界の理不尽を目の当たりにした彼女に対する遠慮だった。なにより、呪われた少女——蒼井鈴葉の話こそが、既に罰である。

「今から私は彼女——蒼井鈴葉さんの洗濯物を回収してきます。なので、あなた達は洗濯を手伝ってください。これは今回限りではありません。これからも、定期的に手伝ってもらいます。……それから、この話は他言無用でお願いします。あなた達に情報を開示したという報告は私がおきますから、もしも地下の話が噂となつて漏れ出るようなら真つ先に疑われるのはあなた達であることを胸に刻みつけなさい。——もつとも、口が羽毛よりも軽い美空でも、こんな話を吹聴するほど愚かだとは思っていませんが

……。いいですね？」

「は、……」

それからの行動は早かった。

慣れた様子で石畳の階段を下りて、さほど時間もかからずに戻ってきたシスターシャークテイの手には、先程鈴葉が片手にぶら下げていた洗濯かごがあった。その衣服の小ささに、改めて驚く。今ここでココネに着せても違和感はないだろう。

「お、おー……？」

干してる最中に、なんだか凄く際どい下着があつて、素っ頓狂な声が出た。

黒の紐パン。

「いやいやいやいや、なんですか、これ」

「……刀子さんのプレゼントらしいですよ。神多羅木先生が刀子さんに渡されて、その

まま鈴葉さんにあげたとか」

「なにやってんスカ、あの人達」

「ないわー、と思いながら、プレゼントされたものはちゃんと履いてあげてるんだなあ、と。」

それは優しさなどではなく、「まあ履けてその機能を果たしてくれるのならなんでもいいや」という投げやりな妥協なのだが。

## E p. 6

逃避とは、生物の本能である。

自分の身に合わない環境から逃げる。

自分を捕食しようとする外敵から逃げる。

自分の痛覚を刺激する物体から逃げる。

自分の臭味を刺激する物体から逃げる。

自分に降り掛かる火の粉から逃げる。

自分が抱く危険信号に従って逃げる。

兎に角、逃げる。

立ち向かうという行為は最終手段である。

当然だ。逃げられるのであれば、逃げた方が生存率も高い。立ち向かって命からがらに勝利したとして、致命傷を追ってしまえばその先に未来はない。

故に、端から戦うという手段を持つて生まれた生物とは欠陥品であり、収奪者である。生物なんて、呑気な顔をして植物を齧つてるだけで生きられるのなら、それが勝者だ。だから逃げることに特化する。肉食性の動物を嘲笑うように、それでいて必死になって

命を絶やささない為に。

時には純粋な脚力で。

時には攪乱させて。

時には錯覚させて。

時には姿を隠して。

時には群の中の一を犠牲にして。

抵抗の手段を最低限として、逃避の手段を最大限に選択する。

それは、持つべくして持った生存本能。

無意識に囚われた、生き残るための行動。

だからこそ、私は恨む。

痛覚を持つて産まれた身体を恨む。

どうせなら、痛覚もないただの餌として産まれたかった。痛みもなく、苦しみもなく。

それはただ搾取されるだけの存在かも知れないけれど、それでもいいと思えた。

——慣れない日差しに焼かれた肌がヒリヒリする。熱い。痛い。日影が恋しい。

あれから数日後。エヴァは“夏休みに入った”と言って毎日私の部屋へ訪れるようになった。

話し相手になつてやると言つていた割には、エヴァは口数が少ない。

ただ、裁縫道具を持ち込んだのでは、サイドテーブルの上でなにかをちくちくと縫つてい

る。その最中で、時折、  
“一人の時はなにをしているのか”とか、“飯はちゃんと食べているのか”とか、そういう無難な質問をしてくるのだ。

その度に短い言葉で答えたり、頷いたり、時には首を横に振つたりして、また無言の時間が訪れる。だが、その無言の時間は決して苦痛ではなかつた。ベッドの上で横になりながらその様子を見ているだけで楽しかつた。

一度だけ、“試しにやつてみるか”と言われて、針に糸を通した事があつた。しかし、その手際は最悪の一言。エヴァに手伝つてもらいながらなんとか完成させた花の刺繍は酷く不細工で——見てるだけの方が楽しいや、という結論に至つた。

そんな日常の中で——エヴァが持つてきてくれた食事を食べている時に、エヴァは唐突に「今は夏休みで人も少ないから、外に出てみないか」と聞いてきた。

実を言えば、“外出申請”してそれが受諾されれば、私はいつでも外に出ることができる。勿論、付き添いは必須だし、チャーカー型のデバイスとやらも身に着けなくてはいけないが。

シャワールームの自由を勝ち取つたときの副産物である。

だが、逆に言えば私からすれば「副産物」としての認識しかなかった。

瀬流彦先生なんかは私の記憶を取り戻させたくてしようがないらしく、そのきつかけになるようならばとあれからも外出を提案してくるのだが、私からすれば、それは疑問の残る行いであった。

——目を覚ました瞬間の光景は、今でも覚えている。

嚴重に拘束した上で、地下深くの牢獄へと閉じ込められていたあの光景は、やはり忘れようにも忘れられないものだ。

なにをすれば、あそこまでのことをされる？

私は、なにをしたのか？

記憶を取り戻すということは、その過程をも思い出すということだ。それは、やっぱり怖い。

逃げていると言うならば、好きにしろ。

逃げられるのなら、私はどこまでも逃げてやろう。

記憶を取り戻したとしても、良い事ばかりではないことは、やはり確実なのだから。ともかくとして、私から進んで外に出ることはなかった。

だが、エヴァに言われてしまうと、それを断ることはできない。何故かは分からないが、普段からあまり表情を変えることのない私の顔が綻んだ。自分でも分かるくらい

に、破顔した。

素直に言葉にするなら、嬉しかったのだ。

こんなことを言ってしまうと、瀬流彦先生は悲しむかもしれない。だけれど、事実なのだ。瀬流彦先生に誘われた時とは比較にならない程に、私の心は喜んでいた。

一つの目的が、理由だけでネガティブにもポジティブにもなるということを学んだ。

そして、その提案の翌日——つまり、今日、私は麻帆良の地上を歩き回ることを学んだ。

まずは商業エリア。

これはエヴァの用事の付き添いと言つてもいいだろう。人形の服を作るための素材が欲しかったらしく、良質な生地を手に入れて満足そうに目を細めていた。ついでに私の服を買おうとしていたが、どうしてもニツチなゴスロリ——名称はエヴァに教えてもらつた——を選んでくるものだから、謹んで遠慮させてもらつた。最終的に、「お前が気に入る服を私が作つてやる」と言つていたが、はたしてそれは普通の服なのだろうか。

次に向かつたのは、食堂棟。地下から地上まで全て飲食店で成立しているエリアらしい。エヴァは吸血鬼だが、吸血だけで生計を成り立たせている訳ではない。むしろ、学園結界とやらに能力を制限されているらしく、その身体は一般的な十歳ほどの子供と変

わらないのだとか。それでなくとも、吸血鬼とて腹は空くし喉は乾く。

一週間に一度程度しか食事をしない私にとって、一日三食が一般的であるという話は違和感として胸に引っかかりを覚えさせた。

——なんとなく分かつてはいたけれど、私は普通ではないということ<sup>を</sup>を改めて認識した。いや、高畑先生や神多羅木先生が持つてきてくれる小説等でなんとなく把握してはいたし、意味記憶の片隅にある常識という項目にそれは明記されているのだが。

それでも、現実としてそれを突きつけられると、やはり驚いてしまう。意識するまで数日おきの食事に違和感など無かったのだから、尚更。

まあ、私は燃費の良い生き物なのだな、とだけ理解して、それ以上は考えないようにしたが。

“連れ回しておいて一人で食べるのは気分が悪い”と言われて、私も昼食に相席する。

数ヶ月前に読んだ小説に登場していた黒パンとボルシチがメニューにあったので、それを注文。

私が普段食べているものとは全く違った様相の料理にちよつとだけテンションが上がった。

そして、今、私はふらふらとした足取りでエヴァに手を引かれながら、また別の目的



地へと向かっていた。

季節が夏であることは話に聞いていたが、前回とは全く様子の違う容赦のない太陽に對して、心の中で恨み言と呪詛を重ねがけで吐き出す。

エヴァに「大丈夫か」と訊かれる度に、私は領き、少し乱れた歩調を正した。

やがて辿り着いたのは、エヴァが通っている女子中等部の校舎。既に私の肌は焼けていて、最早手遅れだったが、それでも日影に入れるならばそうしたい。早々と、夏の猛撃から逃げるように、私とエヴァは校舎の中へと足を踏み入れた。

“本来ならばお前は私と同じクラスにいるはずだった”というのは、エヴァの言である。瀬流彦先生よりも核心的な情報を教えてくれるエヴァには頭が上がらない。

それと同時に、自分の異常性をまじまじと見つめるきっかけにもなった。

今まで気にしていなかった——というよりも、逃避していた現実がそこにはある。

この前、部屋の前で目にした二人の少女。高畑先生の話では、そのうちの一人は私と同じ年齢だと言う。肩車されていた小さい方ではない。その肩車をしていたシスター姿の女性の方である。

それと比較して、私はあまりにも身長が低い。

人間は——生物は物理的に成長するものだ。今の私は、その女子生徒と比べると、あまりにも小さすぎた。

数百年を生きるといふ吸血鬼のエヴァを、ちらりと横目に見る。成長することのない、その矮躯が視界に入る。

——そして、また目線を戻す。逃げるように。

校舎の内装は、まるで教会のようだった。大きなガラスが規則正しく並び、容赦のない陽の光を差し込ませている。階段の踊り場にあるガラスなんか、正しくステンドグラスのような意匠が施されており、瀟洒な雰囲気を漂わせていた。

「暑いな……。教室に着くまでは我慢してくれ」

頷きながら、ずっと私の手を握って先導してくれるエヴァに素直に着いていく。廊下は外の熱をそのまま吸収して閉じ込めている上に風がない。普段ならば窓は開いているのだろう。だが今は夏休み。窓は全て鍵がかかっていた。

エヴァが在籍しているクラスの教室に着くと、エヴァは早速冷房をつけた。天井のクーラーから冷たい空気が流れ始める。そのままエヴァは教室の最後列の机に座った。廊下側に位置するそこが、エヴァの席なのだろう。

その隣の席に座って、私は机に突つ伏した。まさか、外がここまで過酷な環境だとは思わなかった。計算外。想定外。でも——まあ、たまにはこんな日も悪くはない。

「それで、こんなところになんの用があるんだ？」

そう——この女子中等部の校舎に行ってみたいと言い出したのは、他の誰でもない、

私だった。

教室を見渡す。

一定間隔で並べられた机と椅子。一部の机の上には持ち主に忘れ去られたのか、体操服を入れるための袋などが所在無きげに居座っている。教室の前方には一際大きな机——教卓が堂々と鎮座していた。

深い緑色の黒板。汚れた黒板消しと、色とりどりのチョーク。

外から聞こえてくる、部活動に精を出す生徒達の声。

「……覚えてる」

失ったものを取り戻すことはない。

だが、それは抜け落ちることはなく、覚えていた。

友達がいいたのかは知らないけれど、覚えていないけれども、記憶をなくすまでは毎日通っていただろうこの教室という雰囲気、私は覚えていた。

「覚えてる? ああ、記憶か」

怪訝そうな声音で私の言葉を反芻したエヴァは、しかし一人で完結させた。

「久し振りの教室の雰囲気はどうだ、懐かしいか?」

「ん……」

突っ伏したまま、エヴァを見る。

頬杖をついて私に目線を寄こしていた。袖のないセーラー服のような真っ黒な服は、教室とは相容れない空気を出している。勿論、私もいつもの黒のワンピースなので、学校に来ているという気はしない。私服で学校に来ることなんて、きつと無かつたのだから。

それは、私の中の、学校という定義と概念があつてこそ捉えられる違和感だつた。小等部の制服がどんなものだったかは覚えていないけれども、目にした瞬間に「懐かしい」と思えるはずだ。それだけ、私の記憶に色濃く残っている場所であり時間だつた。

——それと同時に、思ってしまう。

エヴァと同じクラスで、こうして隣に座つて、授業を受けて、お昼になったら机を合わせてご飯を食べて——そんな、あつたかもしれない光景。

それは、きつと、とても楽しい日々なんだろうなあ、と。

「エヴァ」

「ん？」

「私、学校に、戻れる？」

エヴァは逡巡した。

目を伏せて、私から目線を逸らす。

少し、ずるいことを聞いてしまったかもしれない。

どうせ、私は戻れない。

それならそれで、構わない。

別に、戻りたい訳じゃないから。エヴァがいるだけで私は喜びを覚えるし、楽しいと感じている。それだけで十分だった。

その感覚は、エヴァと会ってからそんなに時間が経っていない私からすると違和感でしかないけれど、私の中の私はそれでも容赦なく、その感情を暴れさせるのだ。

「……分かん。だが、いつまでも地下暮らしという訳でもないだろう。そしたら、また通えばいい。時間だけは有り余っているのだからな」

頭の後ろで手を組んで、体重を椅子の背もたれに預けながら、エヴァはそう言った。

「いやー！ 今日もいい汗かいたあ！」

と、唐突に、その声が廊下から聞こえてきた。エヴァが「む……」と顔を顰める。

「早乙女と綾瀬は探検部だっけ？ つつても図書館島で本読んだりするだけでしょ？」

汗かくもんなの？」

「馬鹿にしないでほしいわね。そりやあもう、ハードなんてもんじゃないわよ！ 気分

はインディージョンズ！」

「ハットも鞭もありませんが」

「探検帽とロープならあるわよ？」

「それで、失われたアークは？ 見つかった？」

「そんなのとつくの昔に見つけてるわよ」

「二十年前にですか？」

「そして今はエリア五一に隠されてるってわけね。てか近衛と宮崎は？」

「二人ならまだ図書館島よ」

「大量に借りた本の返却をしてから戻ると言っていましたよ。本の虫ですから」

「それ、綾瀬にだけは言われたくないと思うよ」

「むう……」

「てか朝倉は報道部どうしたのよ。夏休み中にデカイ記事を書き上げるとか言ってたかった？」

「それがさー、ぜんっぜん事件も何も起きないもんだから、書ける記事も書けないっていうかさー」

「ちようどいいです。目の前のインディージョンスに取材してみては？」

「うーん、まずはハットと鞭を装備してもらわないと」

「言っておくけど、インディアナの本体はハットと鞭じゃないからね？」

取り留めもなさそうな会話が、だんだんと近付いてくる。

エヴァは軽く舌打ちをして、立ち上がった。それから自身の荷物を手に持って教卓の

方に向かうと、私に手招きをした。素直に言うことを聞いて、教卓の近くまで行くと、エヴァは私の手を取って、教卓の下に潜り込んだ。

それから、小声で私に耳打ちする。

「クラスメイトだ。教室に用があるのかどうかは知らんが、どっか行くまではここでやり過ぎぞ」

私は頷くものの、気が気ではなかった。

エヴァの言いたいことはわかる。面倒事を避けたいのだろう。少なくとも私は部外者であり、そんな私とエヴァが一緒にいるところを見られれば、質問攻めは避けられない。故に、隠れる。

気が気でない、というのは、その隠れる場所のこと——ではない。

教卓の下なんて心許ないと思われるかもしれないが、その実、教室の中では最も意識の行かない場所であると言える。教師のいない教卓に用のある生徒など、そうそういない。

問題は、この距離感。二人で潜り込むには、少し狭すぎる。

今まで我慢していただけあって、今の私は堪え性がない。この、エヴァと密着しなくてはいけない状況は、あまりにも毒だ。できることなら、このまま教室をスルーしてもらいたい。

が、無情にも、教室の引き戸が開く音が室内に響く。

「おー、涼し。……あれ、なんか椅子が動いてる」

「別におかしなことではないでしょう。私達のように、誰かが教室に荷物を取りに来たんじゃないですか？」

「んー……でもここって、確かエヴァンジェリンの席じゃなかった？」

「あー、あの金髪幼女」

ビシツ——と。

エヴァの額に青筋が走る。幼女と言われたのが嫌だったのだろうか。

「それに隣の席も椅子が動いてるわね……」

「おかしいですね、そこは空席のはずですが」

「エヴァンジェリンが友達連れてきたんじゃないの？」

「えー、あの無愛想な金髪幼女に友達？ 絡繰さんと一緒にいるところは良く見かけるけど、あれって友達なのかね？」

ビシビシツ——と。

ステイ。ステイだよ、エヴァ。

というか、早く出て行ってほしい。私も、そろそろ限界なのだ。

「失礼ですよ、ハルナ」



「そーそー。友情の形は人それぞれってね」

「そーだけどき。なんていうか綺麗な顔してるのに勿体無いわよね、いつもむすつとしてき」

「あ、そっち？」

「でも、確かに綺麗な人です」

「そのくせして目付きめっちゃ悪いし、話しかけるなつて感じの雰囲気だし、仏頂面だし、幼女だし」

ブチッ——と。

なにかが切れる音は、多分、エヴァの堪忍袋の緒が切れる音。

それと、私の理性が千切れた音。

息が荒くなる。まただ。また、私の身体は主導権を私から剥奪する。

でも、だめなのだ。

この前は許してもらえた。

だが、二度目はない。

「——鈴葉？」

クラスメイトに文句の一つでも言うために身を乗り出そうとしていたエヴァが、私の顔を覗き見る。

多分、今、すぐくだらしない顔してる。

だから、見られなくなかった。——見られてしまったら、恐らく、勘づかれてしまう。一度目の経験から物を考えない人ではないから、多分、気づかれてしまう。

自分の肩を抱いて、俯く。身体が震えていた。

「——まあいつか。よし、それじゃあ図書館島に残った二人を迎えに行くわよ」

「お、いいね。せっかくだからついていこつかな」

「……事件なんて起きませんよ?」

「起きないなら起こせばいいじゃん」

「ちよつとー、なんかあつたら先輩に小言を言われるの私達なんだからね?」

そんな会話をしながら、彼女達は教室のドアを閉めた。

足音が遠ざかっていくのを聞いて、私は気を緩めた。緩めてしまった。それは失態だった。言い訳のしようもない油断であり、言い逃れのできない、失敗。

「やつと行つたか……」

そう言つて立ち上がるエヴァが履いているミニプリーツスカート裾を掴む。掴んでしまった。当然、エヴァは不思議そうな顔で私を見る。そして、やはり、気付いたよ  
うで——。

「す、鈴葉? ここじゃダメだぞ?」

ダメと言われて止まれるのなら止まっている。それはエヴァに言われるまでもなく自身自身が自身に下している命令だ。

立ち上がり、ふらふらと、ふわふわと、軽い足取りを咎めるものの、それは本当に花の蜜に誘われる蝶のように、本能的に、色を、匂いを、識別して、今、それを、エヴァを。僅かな身長差を埋めるために少し背伸びをして、その肩に、ぱくり、と。

噛み付いた。

「んっ、……。おい、くすぐったいから、やめんか……!」

いつの間に壁にまで追い詰めていたのだろうか。縫い付けられたエヴァに逃げ場はない。壁に額をぶつけた衝撃でちよつと正気に戻れそうだったけれど、その首筋から香ってくる柑橘系の甘い匂いが私を逃させてはくれない。

あむあむと甘噛み。

これが好きなのだ。

特に、今日は暑かったからか、汗がしよっぱくて、美味……

……。ん？ 美味しいというのは、なにか、違うような。

いや、人を噛んで甘噛みして、どんな感想を抱けというのか、という話なのだと。

その時。

教室のドアが開いて。

「ちっ……っ」

「お……っ」

目が合ったらしいエヴァは舌打ちをして、何故か帰還を果たした女生徒達は、密着する私達を見て固まっているようだった。

うーん。

どうしよう。

## E p. 7

——こうなつてしまつては、成す術はない。

私は私のことをどのように説明すればいいのかも分からない。それはエヴァも同様だろう。仮に、私の背丈から小等部の児童であると勘違いしてもらつたとしても、何故エヴァを壁に縫い付けているのかという説明は難しい。なによりも、エヴァと私の関係性の答えにはなつていない。

私とて、馬鹿ではない。

無知ではあるかもしれないが、決して状況の把握が出来ないほど、愚かではない。ちよつと我慢の仕方があやふやなだけ。

エヴァが他者に対して高圧的であることは知っているし、先程の女生徒達の話からするにエヴァのキャラは“孤立”そのもの。だがそれは、恐らくエヴァが望んでそうしているはずである。

エヴァは優しい。

優しいけれど、他者に対しては、そうでもない。

それは、あの初対面の時——瀬流彦先生に見せつけてくれた雰囲気からしてあからさ

まと言える。

つまり、女生徒達からすれば、エヴァを壁に縫い付ける女子児童という存在は、間違  
いなくイレギュラーだ。

私が下手な誤魔化しをしまえば、今後のエヴァの立場が変わってしまいかねない。

しかし、女生徒達に解釈を任せてしまつて、後は野となれ山となれ、という訳にもい  
かない。

つまり、この状況をどうするかは、エヴァ次第である。

——これすら逃避と呼ぶのなら、そうすればいい。

私が背負うには、少し重すぎるのだ。これ以上、妙な誤解を植え付けるのは、得策で  
はない。学校でのエヴァを知らない私には、これを解決するための情報が不足し過ぎて  
いるのだ。

「き——」

と、誰かが、声を上げる。

「来た——！ これは、一大スクープだよ！ まさかあのエヴァンジェリンに、ちっちゃ  
なガールフレンドがいたなんて！ 綾瀬！ ナイス忘れ物！ 戻ってきた甲斐があつ  
た！」

おい。

いや、そう解釈されると弁解が難しい話ではある。

依然として私はエヴァを壁に縫い付けて甘噛みしている。私の知る友人関係という概念は、決して肩に噛み付いて甘噛みをするような関係ではない。そんなスキンシップは知らない。だがしかし、所謂恋人関係というものは、こんなスキンシップをするのだろうか？ 恋愛小説というものは読んだことがないので分からない。

あむあむ。

「待て。少し、待て」

エヴァは冷静だった。

頭を抱えているような気がするけれど、きつと気のせい。

「確か貴様は——朝倉和美、だったか」

「お、意外。覚えててくれたんだ？」——パシヤリ、と。

「あと、早乙女」

「なに!? 今スケッチで忙しいんだけど!」——ガリガリガリ、と。

「そのスケッチしている手を止めるために呼んだのだが?」

聞こえてくる音からして、カメラで撮られたのだろうか。早乙女という女性については自分の行動を報告してくれたので考えるまでもない。

どちらも、今見えている現象を、景色を、一つの媒体に収めるといふ行動である。被写体になるといふ経験は間違ひなく初めてだが、気恥ずかしいものがある。その一方で、ちよつとした優越感。モデルになった感覚。神多羅木先生が昔持ってきた雑誌の女優は、さて、どのようなポーズを取っていたらうか。

そんな感慨に近い気持ちを抱く私を——言い方を変えれば質の悪い現実逃避に勤む私を放置し、エヴァは冷静に弁解を開始した。

「誤解はするな。ガールフレンドという訳ではない。こいつは、ジジイ——ジジイといふのはつまり学園長のことだが、その遠い親戚の娘だ」

「それでそれで？ その学園長の遠い親戚の娘とやらとどうしてそんな親密な関係になつてゐるわけ？ いつから交際してゐるの？ 次期学園長の座を狙つてたりもする？」

強かだなあ、なんて。他人事に思う。

報道部がどうか言つていたか。いわゆるマスコミスピリットというやつなのだろう。質問の仕方が強引だ。仮説を肯定される前提として投げかけている。

それはどちらかと言うと嫌われる手口なのではないだろうか。具体的な例は挙げられないが、そういうメディアが嫌われているということとは分かる。

「誰が質問を許した？」

その声はなかなか鬼気迫るものがあるが、それが彼女達の耳に入っているのかは、



甚だ疑問である。

「先にも言ったが、付き合っている訳ではない。ジジイからの依頼でな、こいつに校舎の中を案内してやってほしいと頼まれたんだ」

「そしてそのままエヴァンジェリンのあんなどころやこんなところも案内してあげてたってことなのね!？」

鼻息荒く、早乙女さんが訊く。

なに？ 人の話を聞かないことが流行りなの？

そんな流行を生み出したインフルエンサーなんて滅んでしまえ。

あむあむ。

「……流石にそろそろ怒るぞ」

「そうですね、一人とも。冷静になってください」

朝倉さんでもない。早乙女さんでもない。と、なると、綾瀬と呼ばれていた人だろうか。とても落ち着いた声音で、今にも噴火を超えて地殻変動しそうなエヴァに同調する。

「——この二人は、まだ子供ですよ？」

おつとそれは怒髪天を衝く発言だ気をつけたまえ。

とは言え、そんな私の忠告は、多分、今だけは必要ないはずだ。エヴァとしては、子

供扱いは不愉快極まりないだろう。だが、少なくとも、*「私達が付き合っている」*という固定観念を譲らない二人に比べれば、それは良心的な物の見方と言える。

「随分と、好き勝手に言ってくれるじゃないか……」

……………あれ？

「貴様ら、死ぬのと死ぬのと死ぬの、どれが好きだ、言ってみろ」

ひくひくと口角を引き攣らせているのか、声が震えていた。

このままでは本当に殺りかねない。血染めの夏休みとは、なかなかゾツとする話だ。背筋が凍る。この猛暑にはもってこいかもしれないが、当事者として警察のお世話になるのは十全ではない。

なので、少し、状況をリセットしよう。

権力闘争の関係は、リセットして零の状態から再びマウントを取る努力をしなくては、一生マウントを取られ続ける。そんなことが、なんかの本に書かれていた気がする。私はエヴァの肩から口を離し、エヴァの二の腕に添えていた手をそのまま下ろして、エヴァの腰に巻き付くように抱き寄せて、そのデコルテに顔を埋めながら、控えめに三人を見遣った。

本当にその場で固まっていたのだろう。三人は教室の出入り口から然程遠くない場所立っている。

そして私は、眉を小さく八の字に歪めた。不愉快そうに、と言うよりは、懇願するよ  
うに。

「……………」

無駄に言葉は発さない。

ここで誤つて「エヴァ」と呼んでしまえば、その親密な関係という部分に対する燃料  
の投下に繋がってしまう。少なくとも、エヴァをエヴァと呼んでいる人物は、私の知る  
限りではとても少ない。おじいちゃんと高畑先生くらいだ。

エヴァは私が動いたことで意識が三人から離れて、三人もまた同じく、私へと意識が  
向く。

三人に向けて離さない視線は、エヴァの話を聞いて欲しいという希望を込めたもの。  
まさしく、懇願。下の者が上の者へと向ける、視線。

マウントとは、常に強くあることではない。

どれだけその人をコントロールできるか、だ。

私に出来ることは、こうやって少しでもエヴァが喋りやすい状況を作ると言う――  
たったそれだけのこと。

「お……………」

「あ……………」

「……二人が泣かせたです」

——どうやら涙目になってしまったらしい。

下手に出ようとは思っていたけれど、ここまでするつもりはなかった。女優魂にでも火が付いてしまったのかもしれない。いや、そんな魂を持っていたのかと言われると、私としても首を傾げざるを得ないのだが。まあ、今日はいろいろと歩き回ったから、どこかで拾ってしまったのかもしれない。

——いや、そんな概念を拾ったとか拾ってないとかではなく、単刀直入に言うならば、いろいろと我慢しきれなかった情けさ故の涙に違いないのだが。

「いやいやいや、私達なにもしてないわよ！　ね、朝倉！」

「も、もも、もちろん！」

「勢いが怖かったですよ？　正直私もドン引きでした」

それこそまさか。

こんなことで怖がるような可愛いけど面倒くさがられるような性格なんかしていたら、エヴァとの初対面なんて失禁していたに違いないはずだ。

……はずだ。

「はあ——。もういいか？　さつきも言った通り、私はこいつの案内をしなくてはならないんだ。暇じゃないんだよ」

と、エヴァがついに離脱の方向へと話を転換させた。

暇じゃない、というのとは間違いではない。この教室だけが今日の目的ではないのだ。この前瀬流彦先生に奢ってもらった甘味処に——エヴァと初めて視線を交差させたあの公園に行くというチエツクポイントがあるし、そこでゆつくりした後にはエヴァの家にお邪魔するという予定もある。残りの目的地はこの二つだけだが、如何せん、麻帆良学園は広すぎる。のんびりと心に余裕を持つて移動しようと思うと、計画を立てなければいけないのだ。

厳密な時間制限がある訳ではないが、せめて暗くなる前には地下に降りたい。

「ごめんごめん、うちらも悪気があった訳じゃないんだよ。ただ、美少女二人が抱き合っている光景なんてなかなか見れないしさ。ね、早乙女！」

「全く以てその通りよ、朝倉！」

謝るのか犯行動機を自白するのかどっちかにしていただきたい。

「……兎に角」そんな言い訳には興味もないのか、エヴァは素っ気ない調子で言う。「私達は付き合っている訳ではないし、仮に付き合っていたとして、それは記事になるような大事でもない。——さっきのもの、こいつの調子が少し悪そうだったから様子を見てただけだ。貴様等の考えているようなことは絶対がない。いいな？」

「イエスマム！」

「イエスサー！」

最後の力の籠った一言に気圧されたのか、早乙女さんと朝倉さんの二人は綺麗なフォームで敬礼をした。

しかし、調子が悪い云々は少し無理があるのではないだろうか。いや、もしかしたら、私もエヴァも髪が長いから、噛み付いてる箇所は隠れていたのかもかもしれない。

——なんにしても、ここまで付き合っている可能性を零にまで突き落とすような言い方をされると、なんとなく、どことなく、悲しい気持ちになる。いや、同性だから当たり前前なのだが。

あれ、涙が。

おさまれ、我が女優魂。

エヴァは荷物を回収し、私の手を引いて教室を出た。

その直後に「でも、あの二人、私達が最初に教室に入ったとき、いなかっただわよね……？」「隠れてたつてこと……？」「やつぱデキてるんじゃない!？」なんて会話が聞こえてくるが、もはや取り付く島もないと判断したのか、エヴァは大きな歩幅で歩き続けた。時折ちらりと見える頬が真っ赤に燃えている。これは相当怒ってらっしゃる様子。触らぬ神に祟りなし。というか、事のきっかけは私の不甲斐ない忍耐力にある。触れれば大爆発は避けられない。

……エヴァが喋り始めるまでは黙っていよう。説教までの時間稼ぎなんて、姑息かもしれないが、怖いものは怖い。

逃避というならば、それを受け入れよう。

こればかりは、言い訳のしようもない逃避だった。

熱の籠った廊下を抜けて、昇降口を抜けて、外に出る。

先程よりも風が強い。夏は雨がよく降る。今の所、雲は少ないが、いつ夕立に襲われてもおかしくはない。エヴァの歩幅は依然変わらず、着いていくのが少しだけ辛い。それは、やはり雨に怯えているからなんて理由ではなく――。

「エヴァ……怒ってる?」

耐えきれなくて、そんな一言が出たのは、桜通りを過ぎた辺りだった。

逃避し続けるのは楽かもしれないが、しかし、精神力をすり減らす行為であることもまた事実。ましてや、これからエヴァ本人の家に行こうというのに、この空気は少し重たすぎる。

「ん……? ああ、すまん。考え事をしていた」

その返事は意外なものだった。

エヴァが、少し駆け足になっている私に「今気付いた」と言わんばかりに振り返る。怒っているから私と距離を置きたいのかもしれないと勘繰っていただけに、拍子抜け

だ。

私が隣に立つのを確認してから、いつの間にか離されていた手をエヴァがもう一度握ってきた。夏の日差しの中で密着する面積を増やすのは得策ではないが、それを振り払うことはない。むしろ、私に対して激怒していないというなによりの証拠である。私から離すことは絶対でない。

「……お前、あれは無意識なのか？」

あれ、と言われましても。

いいや、心当たりがないと言うつもりはない。ただ、それについては私自身が理解できていないのだ。それを無意識であると言つてのけることは造作もないが、残念ながら、それは無意識というよりも強制力に近い。

これを口で説明することは困難だ。

だが、無意識だと言つて逃げてしまつては、要らぬ誤解を故意的に与えるということに繋がる。

分からないなら、分からないなりに、説明義務を果たすべきだ。

「……無意識、じゃ、ない。本、能……？　噛みたい、つて。エヴァの、匂い、もつと、嗅ぎたい、つて。それ、は、抑えるのが、とても、大変……」

……まるで変態ではないか？



いや、やってることは変態のソレなので、否定しようがない。

「ふむ……」

顎を指で撫でながら、真剣に思案を始める。

変態的な性癖を真面目に考察されている気分。端的に言えば、羞恥心。なぜそのような事を訊くのか、というのは、野暮な話である。如何せん、私の性癖と呼んでいいのかわからない、不明瞭な生態系の被害者は、今の所、エヴァただ一人である。

被害者であるエヴァからすれば、そういった迷惑な行為から遠ざかるための手段を考えて然るべきなのだ。

もつとも単純な手段は私でも考えつく。

私に近寄らなければいい。

でも、それは、ちよつと、悲しい。

だから私は知らん振りをする。逃避というよりは、隠匿だった。

「まあ、いいか」

例の公園が見えてきたとき、エヴァはそう言つて思案することを止めた。それでいいのか、と思つたが、それで良かったのだろう。少なくとも、私はその一言を聞いて、どこかで安堵してしまった。なら、今は、それでいいのだろう。

「ある程度だが、憶測はできている。そしてそれは、確かにお前が制御することは難しい

だろう。なに、要は欲求不満の解消となんら変わらん。満足さえすればいいのだから。今はそれでいい」

エヴァはそれだけ言い残すと、公園の出入り口に寂しげに居を構えた甘味処へと入っていった。私は公園の中のベンチでお留守番。エヴァの荷物（商業エリアでの戦利品。鞆には財布が入っているので相変わらずエヴァの手元にある）を預かったので、その見張り番である。

木陰に隠れるようにひっそりと佇むそのベンチは、しかし、地面の熱までは避けられないらしく、気分としては蒸される小籠包が如く。体液という体液が沸騰しそうだった。

公園の中央では水鉄砲を使って遊んでいる児童達の姿が見える。わざわざ中等部エリアにまで来て——小等部周辺には公園がないのだろうか。確かに、この前瀬流彦先生と小等部周辺を歩いたときにはそれらしい施設は見当たらなかったが。

そんな彼等の声を掻き消すように、姿の見えない蝉が煩わしく鳴いていた。

頭の中を飛び回っているように思えて鬱陶しい。時折混じる蝸の声だけが、どこか哀愁を漂わせてくれる。だからと言って、この合唱団を許せるのかと言われると、少し難しい。別に、鳴きたきや鳴いてればいいとは思わず、私が鳴き止めと言ったところで鳴き止むはずもない彼等に構うのは、いくら何でも無意義が過ぎる。

鼓膜を揺らす以外に生き甲斐もない彼等の生き方くらいは、肯定してやらないこともない。少なくとも、日々起きてはシャワーを浴びて本を読んで寝転んで勉強して寝転んでたまにご飯を食べてシャワーを浴びて寝て——そんな、なにを生き甲斐にしているのかも分からない私と比べれば、その一生も、悪くはない。蟬にすら負ける人生というもの、なかなか奇々怪々と言えるだろう。

いや、厳密には、彼等は生き甲斐なんてものは無くて、ただ機械的に鳴いているだけなのだろうけれども。

もしかしたら、やる事が無さすぎて鳴いているだけなのかもしれないけれども。或いは、自身が鳴いていることにすら気づいていないのかもしれないけれども。

仮にそうだったとしても、私の敗北は揺るがない。

少なくとも、目を覚ましてから今までの時間を、有意義に過ごそうと、そう考えたことすらない私は、その時点で蟬以下だ。

はて。

昔の私は。

なにか、生き甲斐と呼べるものがあつたのだろうか。

今でこそ、なし崩し的に勉強をしたいと申し出てみたものの、それは、本当に私がしたいことなのか。

ただ、この歳の人間は、皆学業に勤しんでいるからという、それだけの同調ではないのか。

——と。

短い悲鳴のような声を上げながら、一匹の蟬が、ぽとりと落ちてきた。真上にある木の枝に捕まっていたのだろうか。それは私の足元で、壊れたラジオのように、短いノイズを吐き散らしている。

「……………」

なんとなく。

足元にある木の枝を拾い上げる。

少し太い、丈夫な枝だ。まだ生命力に溢れているものの、なにかの拍子にそのレールから外れ、栄養を貰えなくなったはみ出し者。

蟬を小突く。

一際大きく、ノイズが響く。

無様にも飛ばうとして、羽を必死に動かしている。

——これもまた、機械的な行動なのだろう。害意から逃げるように、飛ぶ。今彼は、飛んでいる気分なのかもしれない。少なくとも、なぜ飛べないのか、なんて、そんなことは考えてすらいない。

その蟬の胸部を枝の切っ先で抑えつけて、暴れる翅と足をぼんやりと眺めた。

そして、そのまま、その胸部の奥深くまで枝をゆっくりと挿し込んで、やがて貫通させた。それでも、蟬は鳴き止まない。

それは断末魔かもしれない。

それでも、聞こえてくる声は、未だ木の上で鳴き続ける蟬と、なんら変わりはない。

「……………なにしてるんだ」

いつの間にか、二人分のアイスを両手に持つて近くまで来ていたエヴァが、小首を傾げながらそう訊いてきた。

「……………」

まさか、「ムカついたから八つ当たりしてました」なんて言えるはずもなく。たつぷりと言いつく口の中に溜め込めど、吐き出せるものはなにもなかった。

やがて、興味も失ったのか、エヴァは「まあ、なんでもいいが」と言った。そして、右手に持った冷たいそれを、私に差し出す。

蟬の刺さった木の枝から手を離して、持つてきてもらったアイズに手を伸ばす。

空振り。

見れば、差し出してくれたはずのアイズは、私の目線よりも少し上に掲げられていた。ラオウごっこだろうか。

「ばつちいぞ、手を洗ってこい」

エヴァは先程まで私が手に持っていた杖を一瞥してから、そう言った。なるほど。確かにそれは納得である。

私は小さく頷くと、隅っこに置かれた水道へと走った。正直、蒸され続けて、限界である。早く冷たいアイスを口いっぱい頬張りたいたい。

蛇口を捻ると、当たり前だが、冷たい水が出る。

公園の中央で遊んでいる児童達は水鉄砲の弾の補充をここにするのだろうか、とぼんやり考えながら、蛇口を締めて、私は濡れた手をそのままにエヴァの元へと駆け寄る。

座って一人でアイスを食べ始めていたエヴァに「カバンの中にハンカチがある。勝手に使え」と言われたので、言われたとおりに鞆を勝手に御開帳。薄い手提げ型の鞆の身はとてもしっかりしていて、財布と二枚のハンカチ以外に入っているものと言えば給用水用の小さな水筒のみである。

そういうえば、エヴァが化粧している姿は見たことがないなあ、なんて思いながら、ハンカチを拝借して手を拭う。

それからエヴァの隣に座って、アイスを受け取る。ベーシツクなバナラアイスだった。既に溶けかけているが、気にしない。

「ありがとう……」

「ああ」

早速、一口。

冷たい。月並だが、体の芯まで冷えるようだ。なにより、この前食べたアイスよりも甘さが控えられていて、後味がすつきりしている。なるほど、足繁く通っていた理由はこれか。この前食べたアイスがどんなアイスだったかは忘れたが、選択したメニユーが間違っていたのだろう。

「おいしい」

と、それは無意識の一言だった。

そのままの感想なのか、エヴァと会話をするための一言だったのか、私にも分からない。い。

「……隠し味程度だがな、ハーブソルトを混ぜているらしい」

なるほど、と。さっぱりとした口当たりはそれのおかげか。

「エヴァは、スイーツ作ったり、するの?」

「ん……? いや、あまりそういうことはしないな。最近じゃ料理すらしなくなっ

……。何故だ?」

「味が分かるの、凄いから」

「……昔、人から聞いたことがあったんだ」

人から……?」

早乙女さん達の言葉を借りるようではないが、エヴァとバナラアイスの味について喋る仲の人がいたというのは驚きだ。いや——高畑先生となら、割とそういう世間話をするのだろうか。

今度、それとなく聞いてみよう。

それから、私達は無言でアイスを食べ続けた。正直、喋る余裕は無かった。なにせ、暑すぎてアイスがすぐに溶けていつてしまう。ただでさえ食べるのが遅いことに定評のある私からすると、時間経過と共に質量を少なくしていくアイスとは相性が悪い。

それにしたって、食べたいものは食べたいのだから、難儀なものだ。

やがて、エヴァはアイスを食べ終え、それを追いかけるようにして私も完食した。

「お前は相変わらず、アイスを食べるのが下手なんだな」

——なんだか、随分と懐かしむような顔で、エヴァはそう言った。相変わらずということは、記憶を失くす前から、私とアイスの相性は最悪だったのだろう。

鞆から取り出したハンカチで、無理矢理に私の口元を拭う。溶けてる溶けてない関係なしに、口元にアイスが付いていたらしい。なるほど、食べるのが下手とは、そういうことか。

そう言えば、瀬流彦先生にも手と口元を拭いてもらったな、と。



「ほら、手を洗っていい」

「……ん」

本日二度目のお手洗いである。

先程と同じ、ベンチから水道までの直線ルートをなぞった。

水は先程よりも冷たくなっていた。手の温度が奪われていく。このまま全身にこの冷水を浴びたい。それこそ、今そこで水鉄砲を使っている男児達の輪に混ざってしまいたいくらいで――。

「あ……！」

「…………」

いつの間にか水道に近寄っていた男の子が、背後からの猛攻を避けた。その弾道の弾着地点にいた私は、回避行動すら取らせてもらえず、正面からそれを受け止めることになる。

不条理を嘆くな。

理不尽を喚くな。

必然は必然。こうなることは、彼等と私が同じ空間にいた時点で、決定していたに違いない。

「ごめん！ 君、大丈夫？」

そして、そんな男子児童達が、私を同年代と勘違いして接してくることもまた、必然なのである。

——幸いにも、エヴァのように憤ることはない。むしろ、目が覚めてから今までが私の人生であり、言うなれば私は三歳なのだ。

そう考えると、なんだか気持ちが悪くなった。

「……ん。大、丈夫」

精一杯親指を立てて、サムズアップ。

「良かった！ じゃーねー」

うん、別にになにかして欲しかった訳ではないけれども。良かった、の一言でそのまま遊びに戻る姿は、なんというか、うん。強かだなあ。

「……夏とはいえ、風邪ひくぞ」

「ん……」

いつの間にか荷物を持って近くまで来ていたエヴァが、ハンカチを優しく頭に乗つけた。いくらこれで拭いたとしても、応急処置にすらなるまい。

最近の水鉄砲の技術は凄。必殺技みたいなものなのだろうか。まるで滝に打たれたような衝撃だった。いや、滝に打たれたことは無いのだけれど。

おかげさまで全身びしょ濡れである。

「とりあえず、さっさと私の家に行こう。着替えくらいは貸してやる」

「え……」

「なにか文句でもあるのか？」

「……ないです」

「うむ」

できれば、ゴスロリ以外の服がいいです、とは、言えなかった。

## E p . 8

小川を抜けて、林を抜けて、その先の開かれた場所に、そのログハウスはぼつりと建っていた。

せせらぎと小鳥の囀りが鼓膜を優しく撫でる。蟬の声さえ無ければ完璧だ。つまるところ、夏よりも冬の方がこの立地には合っている。或いは秋や春先だろうか。紅葉に染まったログハウスというのは、風流なものだろう。

「帰ったぞ」

エヴァはそう言いながら、その扉を開けた。中からエヴァの匂いの塊が私を襲うが、ここは自制。「お邪魔します……」と小さな声で呟きながら、エヴァの後に続いた。

まず、感嘆。

ログハウスの内装というのはなかなか想像することが難しい。安易なイメージとは全く違った、意匠の凝らし方に驚いた。

そして、木の内装に——というよりは、その人形の数に、まず目が行く。ソファの上に、椅子の上に、テーブルの上に、所狭しと人形が佇んでいる。見れば、窓の近くには人形のために拵えたのだろう、背の低い長椅子にもずらりと並んでいた。

西洋人形やテディベア、ウサギもいれば、ファンシーな二等身ほどの女の子の人形や、糸繰り人形、腹話術人形もいる。これら全て、エヴァの手作りなのだろうか。

教室の中の「時間は有り余っている」という言葉を思い出した。

あれは私にばかり向けられた言葉だと思っていたが、どうやらエヴァ自身についても向けられたものだったようだ。そして、そんな有り余っている時間を、上手いこと趣味の時間として昇華させている、なによりの証拠だった。私なんかとは違う——有意義な時間の使い方。

そして、ふと思う。

あの時、私に裁縫道具を差し出して「やってみるか」と言った、あの言葉。あれは、私に向けて、「どうせ趣味と呼べるものがないのなら、手始めに私の趣味に付き合ってみろ」という意味で投げかけた言葉だったのではないかと。

深読みしすぎだろうか。

「おい、茶々丸。いないのか?」

不躰にも内装を見渡している私には目もくれず、エヴァは誰かを呼んでいた。

間を置かずに、その声は上階の方から聞こえてきた。

「はい、いいえ。マスター」

そうして、階段を下りてきた者は——人間と呼ぶには少しだけ違和感のある姿形をし

ていた。

いや、胴体があつて手足がきちんと揃つていて頭もある。丈の短いエプロンドレスとホワイトブリム——つまるところのメイド服を纏う姿はあまりにも似合い過ぎている。形は人間そのものだが、人間ではない。無機質な瞳は私を見透かすように僅かに光っているし、頭部側面——つまり、本来ならば耳が付いているはずの箇所には、なにかしらの端子がエルフの耳のように伸びている。

「おかえりなさいませ、マスター」

階段を下りて床を両足できちんと踏んでから、その人型のロボットは、腰を曲げて頭を下げた。模範的で、完璧で、それでいて優美な御辞儀である。

怖い——とは思わないが、なんだろう。よく分からない感情に押し負けて、私はエヴァの背中に隠れるように張り付いた。

「ああ。急で悪いが、風呂を沸かしてくれ。……その、なんだ」歯切れ悪く、ぼりぼりと頬を掻きながら、エヴァが言う。「友人が、不幸にも雨に降られてしまつてな」

友人。

改めてそう言われると、なんだかむず痒かった。

そして、そのロボット——茶々丸は、真っ直ぐに私を見つめた。緩慢とした動作が、人間臭さを消し去っている。

「はい、いいえ。マスター。刑法二二四条により、未成年の誘拐は三ヶ月以上七年以下の懲役となります。マスター、どうか考え直してください」

あ、この人も人の話聞かない人だ。

「何故そうなる！ 友人と言っているだろうが！」

スパーンツ、と。エヴァは床に鞆を叩きつけながら叫ぶように言った。豪快なフルスイングである。

いきなり犯人扱いされるのは不本意だろう。

出会い頭にいきなりオバケ扱いされたことならあるが、感覚で言えばそれに近いはずだ。端的に言えば、*“そんな馬鹿な”*。

不愉快とまでは言わずとも、愉快ではないことは確かだった。

「はい、いいえ。誘拐された者を安全な場所へ解放することで減刑も有り得ます。刑法二二八条には刑法二二五条の二を犯した者に対する減刑が表記されていますから、まだ希望を捨てる時ではありません。どうか考え直してください、マスター」

「人の話を聞かんか！ そう言えば貴様、外部電力からゼンマイ式に換装したとか言っていたな！ ゼンマイはどこだ！ 巻いてやる！ 限界を突破するような過剰な魔力で巻いてやる！」

「ああ、いけません、マスター。人前でそのようなことは。どうかお許しください。面会

には必ず行きますから」

「捕まる前提で話を進めるな！」

「ですが、今日は雨など降っていません。マスター、誘拐の言い訳にしては、いささか理由がぞんざいすぎませんか？」

「話すと面倒くさくなるからてきとうを言っただけだ！　公園にいたら、そこで水鉄砲で遊んでいたガキにかけられたんだよ。これで満足か！　このロボ子め！」

「……マスターが公園に？」

意外が過ぎる、と言いたげな顔で、茶々丸さんはそう問いかけた。ロボットだからだろうか。完璧な表情だ。エヴァが公園にいたことに対する疑問が尽きないと言わんばかりである。

いや、無表情は崩れていない。雰囲気の話だ。最低限の変化でそれを伝えてくる。

それから――

「……水鉄砲で遊ぶのは、楽しかったですか？」

につこり、と。それは、そう、言うなれば、慈愛に満ちた微笑だった。無表情だけど。

「――んな訳があるか！　何故私が水鉄砲で遊んでいたことになる！」

だから面倒くさくなると言ったんだ、と愚痴るように呟く。

なるほど。エヴァをこここまで疲弊させる存在がいるとは。あの教室で遭遇した三人



はただの中学生。疲弊させるよりも先にエヴァの沸点を軽く超えてしまつていた。この絶妙な火加減は——ロボットである彼女の演算があつて初めて成立するのだろう。む、なんだか鼻がむずむずする。

「……つくしゅん！」

口を抑えたが、その音だけは抑えられなかった。

自然と、エヴァに向けられていた茶々丸さんの視線が私に向く。エヴァも振り向いて私の様子を窺っているようだった。なんとというか、意図して集めたわけではない視線は、ちよつだけ居心地が悪い。それから逃げるように、またエヴァの背中に張り付く。「とにかく、風呂だ。沸かしておいてくれ」

「はい、マスター」

先程までの応酬はどこへやら。エヴァの命令を素直に聞き届けた茶々丸さんが、おそらく浴室があるのだろう方向へと足を向かわせ、一方でエヴァは私に向き直つた。

「冷房が効いているから、濡れた服を着続けるのは寒いだろ。——脱げ」

確かに、道中乾いてくれるだろうという憶測は外れた。水が滴るほどではないが、水を含んだ重さと肌に張り付く感覚は消えていない。ログハウスに至るまでの林道は影が多くて陽の光を浴びれなかつたから、まあ、仕方ない。

しかし、エヴァの眼前で服を脱ぐというのは、いささか——というか、かなり、恥ず

かしい。

私はふるふると首を横に振った。

「マスター。猥褻行為が目的の誘拐は一年以上十年以下の懲役です。……二人で入浴するのであれば、別荘を利用されてはいかがでしょうか」

浴室の方から茶々丸さんが言う。なんとというか、抜け目がない。

「貴様は余程私を犯罪者にしたいらしいな！……別荘は、ダメだ。まだ鈴葉は麻帆良の管理下にある。あれを使うといろいろと狂うからな」

そう言いながら、エヴァは私のワンピースの裾を持つて無理やり脱がそうとしてくる。「ほら、バンザイしろ、バンザイ」なんて言われて、さすがの私も抵抗をやめて素直に従う。

「……………お前、なんで紐パンなんだ…………？」

「山より高く、谷より深い、理由がある」

神多羅木先生曰く、葛葉刀子という魔法先生に「女の子にプレゼントするならどんなものがいい？」という質問をしたら「パンツよ、パンツ！」と言われ、その流れでランジェリーショップに連れ回された挙げ句の果てにこの紐パンを購入させられたとかなんとか。葛葉先生の感性はよく分からないが、神多羅木先生の心労を讃えて有り難く使わせてもらっているのだ。

まあ、紐パンとは言っても布面積が狭い訳ではない。意外としつかりした下着だ。いや、かと言つて好き好むのかと言われると微妙だが。

「とりあえず服はこつちで洗濯しておいてやる。明日か明後日には返すから安心しろ」

言いながら、濡れているそれをソファの背凭れに掛けた。

下着までしつかりと濡らされているせいでソファに座することもできない私は、さて、どうしたものかと立ち尽くす。エヴァはエヴァで上階に上がつていつてしまったし、できることがない。

決して退屈というわけではない。

私の部屋とは様相の違う建築に惹かれない訳ではないし、なにより数々の人形を一体ずつ見て回れば時間なんて言うものはあつという間に過ぎてしまふだろう。

そしてその読みと言うにも杜撰な思惑は、幸いにも遠からずとも当たつていたようで、エヴァから「準備が終わつたぞ」と呼びかけられた時には、私は十体目の人形の鑑賞を終えていた。

脱衣所でインナー類を脱ぎ——チョーカー型のデバイスは耐水仕様なのでそのまま——、シャワーを浴びて、表面張力の限界まで満たされた浴槽へと恐る恐る足を浸けて、入浴剤の影響で乳白色に染まつたお湯に全身を浸らせた。

流石は小柄が過ぎる私の体躯といったところ。足をぐんと延ばして、背筋を延ばし

て、腕を延ばす。

それでも余りある浴槽に、満足感。

今にして思えば、この二年間、湯船に浸かるという行為に至ったことは一度たりともありはしなかった。久々——というよりは、やはり初めての感覚。お湯と外界の境界線が、こそばゆい。なにより、日に焼けた肌が今まで以上に絶叫していた。

しかし、そんな痛覚も慣れてしまえばなんてことはなく、体の芯まで茹でられるような感覚は、体の中身までも一新させるような魅力に溢れていた。

そうこう考えながら浴槽の縁に頭を預けてぼんやりと天井を眺めていると、浴室のドアが開かれる音がした。見れば、生まれたてのままの姿を星で編んだような金髪で覆ったエヴァが、柔らかな笑みを浮かべている。

「湯加減はどうだ」

「ちょうど、いい」

「そいつは重畳だ」

言いながら、エヴァは当然のように浴室に侵入して、私の行動をなぞる様にシャワーを浴びた。

そして、湯に足を滑らせ、まるで私と対面するように、滑らかな動作で湯船へと身体を、極自然的であると言わんばかりに、浸入してきた。

別に、慌てるようなことではない。

そう、慌てるようなことではない。

エヴァは「ふう……」と息を吐きながら、どこから取り出したのか、タオルを頭の上に乗っけながら、ぼんやりと、私に倣うように天井を見上げた。

「エヴァ」

と、私は、鈍くなっている思考回路をそのままに、口を開いた。

「私、このまま、で、いいのかな」

「判然としない言い方だな」

判然としない。

判然としていない。

どこまで言っても不明瞭。

これが天然なのか、逃げているだけなのか。

それすらも不透明。

「このままという言葉の意味が停滞をさすならば、それはそもそも不可能だ。お前がこのままになりたいと思っても、人間は立ち止まれないし、行き止まることもできない」

立ち止まれない。

行き止まれない。

それはまさしくそのとおり。

気が付けば、私はいつの間にか、地下に閉じこもったまま、二年という月日を無駄にした。

この際、客観視というものは一切合切必要なく、切り捨てて、捨て置いて、私の主観からものを言わせれば、今までの時間はその殆どが無駄であったと言っている。そう、断言できる。

だけれど、それとは、少し違う。

このまま、というのは。

それは。

停滞というよりは。

そもそも呼吸すらしていないような、鬱蒼とした木々の中でただ独り枯れ果てているような、違和感。

「私は、なにも、知らない」

私は、なにも、識らない。

「分からない」

それはなにも自分自身が。

そして、周囲の人間たちの、考えていることが、分からない。振り回されているとは

思わない。別に、なにか不満があるわけでもない。

ただ——

「そんな、の。許され、ない」

「——誰がお前のことを許さないというのだ？」

エヴァは、お湯を両手ですくい上げながら、そしてそれを溢れさせながら、言う。

「少なくとも私は、お前を許す。本来なら許すも許さないもないが、敢えて言わせてもらうなら、私はお前を許す。——選択次第だがな。それは私だけではない。ジジイも、タカミチも、あの若造も」

そして、エヴァはその長い脚を持ち上げて、その、少しふやけてしまっている足の平で、私の頬をむにと蹴った。身体が柔らかすぎやしませんかね。

「はん——」と、鼻で笑いながら、エヴァは言う。「加えて言うがな——この際、言わせてもらうがな、許されるとか許されないとか、そんな話、お前は決してそのようなくだらん話に頭を悩ませるタイプではない。いかに記憶を失おうが、忘れようが、根本は変わらない。根源はただ一つだ」

むにむに、と。ぐりぐり、と。私の頬を足蹴にしながら続ける。

「お前のその悩みは、言わば、時間が解決してくれるだけのものだ。知らない？ 分からない？ それは当然だ。私が——私達が、そうなるようにしている」

——どうして。

「他の連中がどういふつもりかは分からんが、少なくとも、私は隠すつもりはない。隠し事をしているというのを隠すつもりは、毛頭ない」

頬を弄んでいた足が降ろされて、今度は私の胸を軽く蹴りつけた。

「お前は、ただ覚悟をすればいい」

「なに、を——？」

「さて。——気付いていることを、わざわざ聞くべきではないな。さつきも言ったがな、立ち止まれないし、行き止まれないんだよ。やがて、その時が来る」

やがて、時は来る。

今は、その時ではない。

だから、気にするな、と。

「その時が来ても許されなと思うのなら、せいぜい足掻け。そして、自らを律するのではなく、受け入れろ」

——言わなくても、お前なら分かりきっているだろう。

そう言い残すと、エヴァはいよいよ足を浴槽の床に着けて、それから立ち上がった。すらりと伸びた肢体から目を逸らしながら、私もそれに倣うように立ち上がる。

これ以上は、逆上せてしまう。



それから、エヴァからインナーとおとなしめのゴシックフアッションを借りた。なんだか、ベルトとか帽子とかネックレスとか、いろいろ付属品があるらしいが、とりあえず、服だけを預かった。袖を通してしまえば、それが大人しいだけのゴシックフアッションであるということは、あまり気になるものでもなかった。

夕飯も食べていけ、と言われて、特に断る理由もなかった私はその申し出に甘えることにした。

時間になるまで、エヴァはリビングのソファで読書を始め、私は人形鑑賞を再開させた。触ることはしない。耐久性を疑っている訳ではなかったが、もしも触った拍子になにかを破損させてしまったら、私は私が満足するまでエヴァの足を舐めかねなかったのだ——ソレはソレでいいのかもしれないなんていう邪な思考を捻じ伏せて、ぼうつと——ただ呆つと、人形を眺めるだけの時間だった。

茶々丸さんがテーブルの上のものを手際よく片付けて、配膳を始める頃には、さて、何体目の人形を眺めていただろうか。

メニューは白米と焼き魚とほうれん草のおひたしと味噌汁だった。めちやくちや和風でびつくりしたのは、まあ、心の中で留めておくとして、流石はロボットがメイドをしているだけあってその味は完璧の一言だった。

いや、ずっと同じようなメニューを食べ続けてきた私の舌が馬鹿になっているだけな

なんてことはない。少なくともエヴァが文句を言わずに、むしろ美味しそうに食べているのだから、間違いないだろう。

それからエヴァは私の帰宅を付き添い、特になにか言葉をかわすこともなく、教会へと帰還を果たした。

一応シャワーを軽く浴びて、私は濡れた髪をそのままに——服すら着ることもなく、ベッドへと横になった。脱いでそのままにしていたエヴァから借りた服を手繰り寄せる。抱き寄せて、抱き締める。

——覚悟。

そうは言われても、分からない。

——気付いている。

そうは言われても、分かりたくない。

——隠すつもりなど毛頭ない。

ああ、全く以て、そのとおりだ。

いや、やはり、それは、隠すべくして隠された、なにか。どんなに核心に迫るヒントを与えられていたとしても、それをどうにかして咀嚼することは、きつと今の私にはできっこない。

——許せるとか、許せないとか。

——どうでもいい。

許されるとか、許されないとか——。

私には関係ない——。

なるほど。エヴァが言っていたことは、間違いなく私のことだ。私と、私のことだ。

根本は変わらない。

根源はただひとつ。

私は、私。

——あなたは どう思う？

——ねえ、答えてよ。

—嘘つき。

## E p. 9

——ついに自由な外出が許可された。それと同時に監視の目も今まで以上に緩くなり、プライベートで瀬流彦先生や高畑先生、エヴァが訪れること以外では、食事を運んでくれる職員くらいしか私の部屋を訪れる者はいなくなつた。

確か、それが十月頃の話で、今は十二月。

埼玉にある麻帆良は四季がはつきりとしている。陽が高く昇っているにも関わらず、吐く息は白い。暑いのも寒いのも得意ではない私からすると、どんなに自由な外出を許可されたとしても、あまり積極的に外に出ることはない。

それでも、時折こうして地上を散歩する。

理由としては二つほど。

一つは、運動不足の解消。これほど現実的で健康的な理由も他にはないだろう。事実、少し歩くだけで膝が笑い始めるといふ貧弱な体質も今は改善され、人並みに麻帆良を練り歩くことが出来るようになった。

もう一つは、落ち着かないから。

身体が魔法について思い出し始めているのか、近くを魔法関係者が通るだけで敏感に

それを察知してしまう。元々魔力感知能力は人一倍長けていたと聞かし、その影響だろう。

時折教会付近に複数の魔法関係者が彷徨くことがある。そうになると、なんだか落ち着けないのだ。視界に入れたくなくても入ってくるような感覚と言えば分かりやすいだろうか。就寝時に周囲を蚊が飛び回っているとそれだけで眠れなくなる、あの現象に近い。歩き回っていても必ずどこかに魔法関係者はいるけれど、じつとしているのと歩き回るのでは感じ方が違う。

勿論、そうやって歩き回っていると、なんだかんだ言っても疲れてくる。膝が笑うこととはなくても、疲労感は蓄積されるのだ。故に、こうして、てきとうな公園を見つけて、その隅っこでしゃがんで、虫を潰す作業に及んでいたりする。

近くに巣穴があるのか、大量の蟻は潰せども潰せども湧いてくる。木の枝の切っ先で潰すとなると一匹一匹に焦点を合わせなくてはいけないので、かなりめんどくさい。しかし、その分、蟻と一緒に時間も潰せるのでそれも悪いことばかりではなかった。

少なくとも、靴で踏みつけて纏めて殺すよりは、こうしてちくちくと針に糸を通すように殺したほうが、無心になれる。

哀れ、ありんこ。恨むなら、何故か冬眠できなかつた不幸な己の巣を恨め。

一匹、潰して。

一匹、潰して。

一匹、潰して。

一匹、潰して。

「なにしてんだ、蒼井」

一匹、潰して。

それから、顔を上げた。

私のことを名字で呼ぶ人物は、とても少ない。エヴァに関しては「鈴葉」だし、先生方はだいたい「鈴葉ちゃん」。茶々丸さんですら「鈴葉さん」である。

つまり、私を名字で呼ぶだけで、既に人物の特定は容易である。

サングラスをかけて、髪をオールバックに固めて、高畑先生とは真逆の真っ黒なスーツを着こなす長身の男性。今日もお髭がとってもキョートね。

「神多羅木先生」

「おう」

神多羅木先生——私の監視役だった魔法先生の中で一番素性の知れない人だ。感情的になることも少ないし、表情も硬い。ユーモアからは大分かけ離れた男性。

しかし、こちらのコンディションについては何故か敏感で、調子が悪い時には無理やり休ませたりしてくる、地味に世話焼きな御方だ。

正直、得意ではない——が、苦手でもない。

高畑先生以上にヘビースモーカーで、ここは禁煙地域だというのに平気な顔をして煙草を吸っている。間違いなく教育者として間違つた姿だ。生徒がグレルぞ。

「煙草、貸して?」

「……煙草つてのはな、蟻を潰すための道具じゃねえんだ。俺の貴重な活力源なんだよ」  
むう。まあ、正論。

特に、煙草は彼の活力源と言うよりも、生命源に近いだろう。顔には出さないし、本人もわざわざ口に出したりはしないが、滲み出る苦労人な雰囲気は、なにかと鈍い私でも気取れてしまう。

監視役の先生達が私になにかとプレゼントを送る姿を見てなにを思ったのか、葛葉先生に相談を持ちかけてみれば、なにを勘違いしたのか「パンツよ、パンツ! 女へのプレゼントには一つ一つに意味があるのよ! とにかく、そのパンツを脱がしたいとでも伝えればいいのよ!」そしてそのまま疎遠になればいいのよ! どいつもこいつも異性とイチヤイチャして! 私だけ仲間はずれってわけ?! 今からパンツ買いに行くわよ、いいわね!」と、まあ強引にランジェリーショップを転々として挙げ句の果てに黒の紐パンを買わされたらしく——いつも以上に瘦けた顔をしながら「これ、葛葉からのプレゼントだ」なんて言つて本当に黒の紐パンをプレゼントしやがったというエピソード



ドを持つこの人を、苦勞人と呼ばずしてなんと呼ばいいのだろうか。

どこかデリカシーに欠ける人だから、どうせ相談というのもぶつきらばうな物言いをしたのでらうけれど、それにしたつてこんなヤクザな風貌をした人をランジェリーシヨップに連れ回す葛葉先生は只者ではない。未だに会ったことはないけれど。

「こんなところで蟻なんか潰してたつていいことねえだろ」

「あう……」

脇に両手を差し込まれ、軽々と持ち上げられてしまう。これが女生徒に対する扱いですか。だからデリカシーが無いって思われるのだぞ、と伝えたい。いや、絶対言わないけれど。

そのまま地面に降ろされて、仕方無しに手に持つていた杖を捨てる。またしやがんで蟻を潰す作業を再開しようものなら、そのまま抱えてどこか虫のいない場所に連れて行かれかねない。勿論、私のそんな姿は誰にも見られたくないし、神多羅木先生もそんな姿を誰かに見られるのは不本意だろう。ただでさえ見た目がカタギじゃないのに。茶々丸さんじゃなくても通報するに決まつてる。今この状況だつて、見ようによつては案件発生現場でしかない。

髪の毛や服に砂が付いていたのか、神多羅木先生がそれを乱暴に叩いて払つた。

「さ、お嬢さん。今日の予定は？」

今更取り繕つても遅いぞ、グラヒゲめ。

しかし、予定と言われても、特には思い浮かばない。暫く考え込んでいると、「まさかこの季節に蟻を潰す目的で出歩いていたのか？」と訊かれ、流石にそれはない、と顔を横に振った。

「……………」  
本屋さん」

神多羅木先生が三本目の煙草に火をつけようとしたところで、私は無理矢理に目的地を絞り出した。正直、本なんて腐るほど読んでいたし、瀬流彦先生か高畑先生に願ひすれば買ってきてくれるから、わざわざ私が足を運ぶ必要はないのだけれども、正直、それくらいしか思い浮かばなかった。

目的もなくなつたふらふらと歩いていたい、と言つても良かったのだが、流石に三本の煙草を犠牲にした挙げ句の果てにそんな回答を出すのは気が引けた。

「は、こ、よ」

と、神多羅木先生はそれだけ言つて、歩き始めた。

少し離れてしまつた背を追いかけて、とととと小走りに近寄つて、なんとなく空いている神多羅木先生の右手を握つた。

神多羅木先生は少しだけ驚いたようだったけれど、小さな声で「迷子になられるより

はいいか」と呟いて、そのまま私の手を引いた。わざと足を踏んであげた。

やがて、チャイムが鳴って授業の終わりを告げてから数十分後。辿り着いた先は、書店——というよりは、島だった。

ツツコミ待ちだろうか。思わずジトリと神多羅木先生を睨んでしまう。

「……なんだ。図書館島を知らないのか？　そこらの書店に行くくらいならここに来た方がいろんな本を読めるぞ」

そう言いながら神多羅木先生は島と陸を繋げる橋を渡り始めた。流石に図書館では煙草を吸わないという良心が残っていたのか、ポケット灰皿に中途半端な吸い殻をねじ込む。

「明治からある世界有数の巨大図書館だ。世界中の本が集められている。地下には魔法関連の本もあるぞ。もともと、地下に入れるのは一部の魔法関係者だけだがな」

……この学園には魔法に関するものは地下に隠しておけという諺があるのだろうか。いや、私と境遇を重ねるわけではないけれど。

しかしなるほど、世界中から本が集められているというのは興味深い話だった。別に目的の本があった訳ではないけれど、それだけの蔵書数を誇るのであれば、本に興味がない人間だって興味を持たざるを得ないだろう。

——んっ……？

「どうした？」

「……なんでも、ない」

今のは、魔法関係者がどうかというものではない。よく分らない、塊のような——存在感？　ともかくとして、なにかを知覚した。しかし、神多羅木先生は特にいつもと変わらない様子で歩き続けている。きつと、それは日常的な、そこに当たり前に存在しているものなのだろう。

そう結論づけて、私の歩幅に合わせてくれる神多羅木先生に甘えて、酷く緩慢とした足取りで歩き続けた。

やがて、島全体を覆うような、図書館というよりはお城のような建物の、開けっ放しになっている大きな扉を潜り抜けて、その中へと足を踏み入れた。

——まず、感嘆の声が漏れた。

世界有数の蔵書数というのは、比喻でも何でもないのだろう。高い天井の、広い空間。本棚の一つ一つはその天井にも届くほどに屹立しており、人が二人通れるかも怪しい距離感でびっしりと並んでいた。

天井の照明だけでは足りないのだろう。その通路毎に控えめな照明器具が幾つか用意されており、柔らかな光と寂れた雰囲気は現実のものとは思えない。

これだけの蔵書数を誇ると、一冊の目当ての本を探すのも一苦勞——どころか、百苦

劣。そのために本の管理はしっかりと担当の係がいるらしく、その人に聞けば目当ての本を探すことは造作もないとのこと。

しかし、私にはこれと言った目的もない。

故に、手前の本棚から順繰りに歩いて興味の湧いた本を手に取ることにした。

ぼんやりと、何語なのかも分からないタイトルの本を眺めていると、どこかに消えていた神多羅木先生が帰ってきて、一冊の本を差し出してきた。

絵本だった。

足を蹴つてあげた。

「なんだよ、絵本だってなかなか捨てたもんじゃないぞ。式集院はよくこういうのを娘に与える」

それは娘の年齢が絵本に適しているだけだろう。式集院という人を私は知らないからなんとも言えないけれど。

別に絵本を低く見ているわけではない。この場合、神多羅木先生が私を低く見ている。足を蹴つた私は悪くない。

「じゃあ、俺は出口でてきとうに寛いでるから、用事が終わったら言え」

「仕事、ないの？」

「無職みたいな言い方をするな。今日は非番なんだよ」

……非番というのは、つまり、有事の際には緊急的に招集されるということだと思ふのだが。この際、そういうことを私が言及するのも変な話だ。私は黙つて納得して、本を眺める作業を再開させた。

それから、どれくらい歩いただろうか。

やつと興味の湧く本を見つけて、後はゆつくり休みながら読める場所を探すだけである。本を胸に抱き抱えながら、迷路のような通路を右に左に曲がりながら歩き続ける。

歩いて、曲がつて、歩いて、曲がつて、歩いて、曲がつて——誰かにぶつかつた。

「ひゃつ……」——と、女生徒。

「んぶつ……」——と、その女生徒の鳩尾に顔をぶつけて声をくぐもらせる私。

幸いにも、お互い倒れるほどの衝撃ではなかつたものの、びっくりして身体を仰け反らせた瞬間に本を落としてしまった。

「わ、わ……。ごめんなさいっ……! 大丈夫ですか……?」

見れば、その女生徒は学校帰りのエヴァと同じ制服姿をしていた。つまり、女子中部に所属しているということだ。変な話、私の学友だつたかもしれない人だつた。

運命なんて信じるほどロマンチストではないが、しかし、どことなく嫌な予感を覚えさせるくらいには、それは運命的だつたと言える。

「のどかー? 大丈夫かえ?」

その少女の奥から、数人の人影が見えた。

「わ、私は大丈夫……。えっと、これ、落とした本、です」

そう言つて、しゃがんで——私に視線を合わせてくれる少女は、しかし、目が合っているようで合つていなかった。前髪がやたらめつたら長い。それで前が見えているのだろうか、と思わずにはいられなかった。

青、というよりは濃い紺色の髪の毛。全体的にはショートヘアなのに、前髪だけを伸ばしている。それは、顔を見られたくないのか、或いは顔を見たくないのか。分からないけれど、ひと目見て引つ込み思案なのだと思わせてくれるくらいには、分かりやすい人だった。

拾つてくれた本を受け取り、小さく頭を下げる。

「あり、がと」

「いえ……」

鈴虫の鳴き声よりも小さい声だった。

「あれー？ 君、夏休みにエヴァンジェリンと一緒にいた子だよね？」

斯くして、嫌な予感の的中である。

それは、聞いた覚えのある声だった。図書館だと言うのに声を抑えることのない無慮な声。

あの時、カメラを所持していた女生徒と共に私とエヴァの関係を《恋人》として解釈していた、話を聞いてくれない人。

「……インディー、ジョーンズ?」

「誰がおっさんよ、失礼な」

「間違つてはないですね」

たった一度の、たった刹那の出会いだったけれど、覚えていた。

確か、早乙女さんと、綾瀬さん。

特に早乙女さんは凄い勢いでスケッチブックに私とエヴァの姿を写生していたから、よく覚えている。良い意味でも、悪い意味でも。

「もう、夕映までそんなこと言つて……」

「あーんつ、かわええ子やわあつ。ハルナ達知り合いなん?」

んぶつ。

綺麗な黒髪を臀部まで伸ばした、早乙女さん達と同じ制服を着ている人が、唐突に私を抱きしめた。

なにこの人、すごい母性。

なにこの人、すごい魔力。

「ん? エヴァンジェリンの話だと学園長の親戚の子らしいけど……。木乃香、知らな



いの？」

「んーん。ウチはなんにも聞いとらんで？」

まあ、親戚なんて、知ってる人もいれば知らない人もいるものだ。ここであの嘘がバレることもないだろう。知らないけど。——というか、嘘と言えば嘘なのだけれど、嘘と言わなければ嘘でもない、というなんとも言えない話なのだ。少なくとも、私の保護者は、現実的には近衛近右衛門の名義が使われているはずである。

「こんなかわええ子が親戚におるんやったら、教えてくれないもええのに。いけずやわあ」  
ついに私の身体を抱き抱え始める。いや、確かに私は小柄な方だけれども、体重的には二五キロくらいだけれども。そんな軽やかに扱えるものなのだろうか。そりや、高畑先生や神多羅木先生は軽々と私を持ち上げることができけれども、成人男性と比較してもなにも意味はないだろう。

両腕で支えられながら、僅かに宙に浮いた足をぶらぶらと揺らす。身長差が無いわけではないが、私だつて身長一二五センチ程度の立派な少女である。

——そんな立派な少女としての矜持も、私の後頭部に頬擦りする彼女の母性の前では、無いに等しいらしい。

矜持を失った私の頬を人差し指でつつく早乙女さんが、私と私を抱く女生徒を交互に見ながら言った。

「んー、でもこうして比べてみるとちよつと似てるわね。親戚つてのも納得だわ」  
それ、髪型だけで判断してない？

どうでもいいことだが、最近髪の毛を切る時期を遅らせているので、そろそろ毛先が地面に触れそうだったりする。流石にもう切った方がいいかもしれない。個人的にはエヴァと同じくらいまで伸びた髪を切るのはちよつと切ないけれど。ちなみに前切った時は前髪をぱつっんにしてもらった。別に意識はしていない。してないっただけだ。

ほら、今はちよつと不揃いだから。

そして、この時点で、やつと気付いた。木乃香さん——近衛木乃香さん。

学園長——おじいちゃんこと近衛近右衛門の孫だ。

時折、本当に時折、それこそ半年に一回くらい、私の部屋に訪れては「孫の木乃香の結婚相手なんじゃが……」と言ってお見合い写真を見せてくる。数々の若いイケメンを見せつけられて、その度に「どうしろと？」と困惑させられていた。それと同時に、おじいちゃんの孫は「結婚できる年齢なんだなあ」と印象を植え付けられていたが——。まさか、まだ中学生だったとは。

「あ、あのー。それ、吸血鬼の本ですか……？」

おじいちゃんの孫の正体にちよつとだけ驚いていると、のどかと呼ばれていた少女

が、少し控えめな様子でそう訊いてきた。

今私が生手に持っているのは《吸血鬼伝説の系譜》という本である。折角だから、エヴァ——ひいては、吸血鬼について調べてみようと思つたのだ。本人を前にしてこういうのを読むのも気が引けるし、良い機会だった。

頷いて、肯定する。

「も、もしも興味があるなら、これとかもいいですよー」

そう言つて、のどかさんはどこから取り出したのか、数冊の本を掲げた。

「こつちは《吸血鬼ドラキュラ》、それと《吸血鬼カーミラ》、《図解・吸血鬼》、これは《吸血鬼大全》ですー」

お、おう。

有り難いけれども、困る。

それら全てを一気に読むのはちよつと。

私は、読むスピードが早いわけではないから。

「こらこら、のどか。急にそんな言われても分からんでしょ」

苦笑しながら早乙女さんが論じた。正直、助けてくれるとは思わなかつた。

勢いで言えば、早乙女さんの方が強いというイメージはどうしても拭えない。

強引というよりは、引力——というか、重力だ。巻き込めるものは巻き込むし、周り

が巻き込まれるなら、それすらも自分の渦中に巻き込むような、そんな人だと、思っていた。

「あ、えつと、ごめんなさい……」

「本のことになると周りが見えなくなるのはいつものことです。ところでこつちには西洋のモンスターにまつわる本があつてですね」

「ここらここら、夕映も。ちよつとは落ち着きなさいな」

もしかして、早乙女さん、割と大人しい人？

あの時はただ夏の暑さにやられておかしくなっていたのかもしれない。少なくとも、今のように場を沈める人には見えなかった。

決して、綾瀬さんとのどかさんが暴れている、という訳でもないのだけれど。

「ごめんなあ？ 一人とも、本好き仲間ができたと思つてはしゃいでんねん。堪忍な」

それは別に構わない。ジャンル問わず本を読んできたのは事実だし、いろいろ飽和状態だった今の私にとって、それは新しい刺激にもなるだろう。人から具体的なジャンルをオススメされることはなかったの、そういった手の伸ばし方は新鮮な風である。

ところで、早乙女さん。あなたはいつまで私のほつぺをつついてるんですか。そろそろ挟れて貫通しそうなのですが。

「ところで、こくないなところだなにしとつたん？」

「……本、座って、読める、場所。探し、てた」

それは多分、何故図書館島にいるのかという質問だったのかもしれない。しかし、ここに来た理由と言えば、《特に理由はなかったけど捻り出した結果な上、図書館島という存在も知らない状態で神多羅木先生に連れてきてもらった》という過程を説明しなくてはならない。口下手な私にとって、その説明責任はあまりに重たかった。

「ほなら、案内したるわあ。こつちやで〜」

どこかぼんやりとした雰囲気の木乃香さんは、そのまま私を丁寧に抱き抱えたまま移動を開始させた。流石に恥ずかしいのだが、妙に居心地が良いのだから悪い気がしないというのは、少しズルいように感じた。

この図書館には慣れ親しんでいるのか、迷うこともなく、然程時間もかからずに、開けた場所に辿り着いた。長テーブルがいくつ設置されている、私が思い描いたとおりの休憩所だった。

結局最後まで私を抱き抱えていた木乃香さんは、少し背の高い椅子に私を下ろすと、私の隣の椅子に座った。他の三人も各々自由な椅子に座り、好き勝手に持ってきた本を読み始める。

図書館にいる時点でなんとなく分かつてはいたけれど、この四人は、総じて《本の虫》なのだろう。同一の趣味、目的を持ち、その関係を結んだ友人達。それは少し、羨まし

いとすら、思えてしまう。

やはり趣味と呼べるものを持つべきなのだろうか。……あとでエヴァにもう一度、裁縫を教えてほしいと頼んでみるのも良いかもしれない。

早乙女さんと木乃香さんは時折言葉交わしていたが、綾瀬さんとのどかさんは真剣そのもの。今まで、読書なんて暇つぶし程度にしか思っていなかったこともあり、本当に本が好きなのと同席するのは、なんだか居心地が悪かった。

それでも、無言な空間というのはとても都合が良い。

喋るのは得意ではないし、根掘り葉掘り質問されると答え辛いものも出てくる。だからこそ夏休みの時、エヴァは誤解の訂正をするだけして教室をあとにしたのだ。そのエヴァの気遣いを、ただの偶然の出会いで無下にするのは、流星に酷い話である。

それから、『吸血鬼伝説の系譜』を読み終える頃には瞼が重たくなっており、それを気取られないためにも早々にその場を立ち去った。木乃香さん達は「どうせなら出口まで道案内したるか？」と手を差し伸べてくれたが、私はそれを丁重に断った。

木乃香さんが私の眠気に気付けば、先程のように私を抱き抱えて移動することは目に見えていた。抱き抱えられた状態で人の出入りが激しい場所に行くのは相当恥ずかしいし、なによりこれ以上、迷惑をかけるわけにもいかない。あまり人と深く関わることの少ない私にとって、貸し借りを作るのは気が引けた。

のどかさんが紹介してくれた四冊のうち二冊を借りることにして、残った本に関しては「片付けておくよ」という彼女達の良心に甘えた。

さて、いくら広い図書館と言えども、出口を指そうと思えばそれは容易いだろう——と、そう思っていた。

天井から吊り下げられた看板には通路の本棚の情報を書かれているし、それを頼りに今まで歩いてきた道を逆に歩き続ければいい。それだけの話だ。それだけの話だったはずなのだ。

端的に言えば、やはりと言うべきか、道に迷った。

うーん、困った。

周囲を見渡せば、残念ながら、見たことがない本の群れ、群れ、群れ。

あれは見たような気がするけど、それは見なかったと思うし、じゃあこれは見ていたのかもしれないけれど記憶にはないなあ、なんて。

まるで記憶が頼りにならない。

そういう混乱は、必至だったのだろう。

夏休みに、彼女達の会話の中にあつた探検部というワードを思い出した。

探検かあ……。

これは納得するしかない。

いよいよ見たこともない様式の収納スペースに出て、帰れないことを覚悟して、もういつそのことここに移住してしまおうかな。

なんて。

冗談でも、思うべきではなかったのかもしれない。

「困りますね。あなたがここに住むとなると、少しばかり、都合が悪い」

そんな声が、どこからともなく聞こえてきた。音は反響していて、位置の特定ができない。敢えて言うなら、それは頭の中にいた。脳内で反響する。頭の中に大きな空洞が出来てしまったような、ぽっかりと空いたそこを、誰かが土足で踏み荒らしているような。

少し不愉快だった。

「おやおや、あまりレディが顔を顰めるものではありませんよ」

うるさい。

「おっと、お口が悪いですね。なるほど、そちらが本性でしょうか。……いいえ、冗談です。なんてことはないジョークです。むしろ、それがあなたの強がりであることは知っていますよ。あなたのそういうところは、理解しています。——あの少女の真似だということも、そうすることで強くあろうとしているということも。——ええ、全て、知っていますとも。ああ、でも勘違いはなさらないでくださいね、私はあなたの心を読



んでいる訳ではありません。あなたは分かりやすい。人の前では無表情なのに、なるほど、人と顔を合わせない時は、そういう表情をするのですね。これは新鮮だ。そんな、明らかに暴言を心の中で吐き散らかしていると一言わんばかりに眉間に皺を寄せないでください。虚空を睨みつけないで。会話をしましょう。安心してください、周りに人はいませんよ。あなたが虚空に話しかける、痛々しい人だと思われることもありません。はい、会話のキャッチボール。できますか？ 私はパスを出していますよ」

それはとても、パスを出しているとは、言えない。所謂マシンガンの、一方的な、会話でもなく、独り言だった。

「……………」

無言。

まさか、本当にパスを出しているつもりなのだろうか。私とは違うベクトルで会話が下手すぎるだろ。

「……………あなた、は、誰？」

無難なところから質問を投げしてみる。

「ふむ、それは確かに、間違いなく、今のあなたが抱くべき疑問ですね。しかし、それについてはまだ答えられません。私がこうしてあなたに話しかけているということそれ自体がイレギュラーなのです」

いざボールを投げ返してみれば、それはあまりにひよろひよろとした弱々しいボールとなつて返つてきた。名前すら言えないつて、どういうことなのか。

この現象について、どう説明を付けなければならないのかは、分かる。頭に直接話しかけてくるような芸当は、とてもシンプルな言葉で説明できる。

魔法というやつだろう。

ここまで明確に対象を私とした魔法をぶつけられるのは初めての経験だった。

それを理解できたところで、私からなにかをアプローチすることはできない。この、いわゆる念話というものを遮断する術はない。

当然、無視すればいいだけかもしれないが、ここまで自己主張の強い念話を無視するのは、さうとう気疲れするだろう。

しかし、かと言つて、これ以上、なにを質問しろと言うのか。いや、質問ばかりが会話だとは思わないが、世間一般的な雑談をするには、そういう世間話というやつをするには、情報が少なすぎる。知らない人間といきなり世間話をしてみましようなんて言われても、困惑するだけだ。

というか、イレギュラーだと言うならば話しかけないでほしい。別に、本心から住もうと思つていた訳ではない。

「そんなことよりも——私の名前なんかよりも、あなたは今、現在進行系で、己の力では

どうすることもできない無力感に苛まれてはいるはずですが、そちらについては質問しなくてもよろしいのですか？ 私の手を借りなくても、いいのですか？」

……いい性格してるなあ、なんて。

決してポジティブな意味ではないけれども、そう思わずにはいられない。

しかし、確かに彼の言っていることも、間違つてはいない。彼が何者なのかは分からないけれど、ここまで知つて、いることを強調してくるのだから、訊けば、答えてくれるのかもしれない。

「帰り道、教え、て」

「すみません。私にも分かりません」

………ほんつとうに、いい性格してるなあ。

「冗談ですよ。教えてあげます。ですが、見返りも必要でしょうか？」

「……なに、が、欲しい？」

「そうですねえ。その本、借りるのでしよう？ それはつまり、図書館島に再び訪れなくてはいけないということの意味している。その時に、またここへ来てください」

話し相手になれ、ということだろうか。

「——裸コート、は少し直接的過ぎますねえ。ふむ、コートにビキニなんていいかもしれません。いえ、折角ですからロングパーカー水着にしましょう！ それと猫耳と尻尾を

着けて、ここに来てください」

「……………? ……!?!」

理解するのに五分くらいかかった。

なにがどう折角なのか教えてほしい。

と、いうか。

「そんな、服、持って、ない……………!」

「ご安心ください、こちらで用意してあります。足元に袋があるでしょ?」

言われて見てみれば、そこには確かに、紙袋が置かれていた。ちようど、服一式が入りそうな袋だった。

なんだこいつ。

……………。

ほんと、なんだこいつ。

「ちなみにその服を着てこなかったら——もつと非道い服を着させます。それはもう、無理矢理にでも。あなたが来なかった場合は、返却期限が切れた直後にその非道い服を着せます。ちなみに脱ぐためには私の許可が必要になるように細工もします」

「……………拒否、権」

「別に拒否しても構いませんが、その場合はあなたはこの迷路のような図書館からの脱

出を自力で遂行しなくてははいけません。いやはや——日付が変わっても帰れないかも  
しれませんね?」

——死ぬ、と、言いたかったけれど、言ったら言ったでなにをされるのか分からなかつたので、その言葉は飲み込むことにした。

そして、大変不本意ながら、私は彼の契約を承認することにした。なんなら道中も意地の悪いことを言われ続けるのかと思つたがそんなことはなく、素直で簡潔な道案内はたつたの数分で私をエントランスまで導いた。

最後に「今日のことは他言無用でお願いしますね。それでは、次会える日を楽しみに待っています」と言い残して、彼は念話を切つた。

そこでは神多羅木先生が壁に寄りかかりながら本を読んでいた。

「遅かつたな」

「ずっと、待つてた、の?」

「そりやな」

「……………ごめん」

「別に構わねえよ。それより、それ借りるのか?」

「んっ」

「時間的にギリギリだから、さっさと受付済ませてこい」

言われたとおりに受付を済ませて、返却期限を確認してから、その二冊の本を名も無き変態からの贈り物である紙袋にしまってから、私は神多羅木先生の手を握ってさつさと歩き始めた。

「……なんかあつたのか？」

「別に……」

「……蒼井、お前、そんな荷物持ってたか？」

「……持ってた」

「……そうか」

まさか、全知気取りの変態ストーカーから貰った、とは言えなかった。

## E p. 10

返却期限までの日数を四日ほど残して、私は借りた二冊の本を読み終えた。

珍しくもないが、図書館島に行った日を堺にエヴァが連日に渡って私の部屋を訪れるというのは、正直想定外だった。やはり吸血鬼を前にして吸血鬼の本を読むのは少し気が引けたので、いつも以上の遅読となってしまったわけだが、期限のことを考えればそれは特に問題はない。想定外ではあるが、誤算という程ではなかった。

むしろ、問題があるとすれば、なにかエヴァに勘づかれている気がするということだろうか。

これが私の被害妄想なのか、自意識過剰なのかは分からないが、「お前、なんか変なところに行ったか？」と聞かれたときにはどうしようかと。

嘘をついても仕方がないので、「図書館島に行った」と伝えれば、エヴァは「そうかと相槌を打ったただけで深く追求してくることは無かった。

あの胡散臭い意地汚い図書館の亡霊からは「他言無用に」と言われているし、エヴァにぼろりと漏らしてしまったら、あの変態の歯牙がエヴァに向いてしまう可能性もある。

それは少し——いや、かなり厄介だ。

エヴァなら問題なく対処するかもしれないが、下手をすれば、事も無げに人の神経を逆撫でにするあの男を殺しかねない。

そう思わせてくれることこそが、悪の大魔法使いたる由縁なのだろうけれど、もし本当に人殺しなどしてしまつては学園も黙つてはいられない。だから、これはエヴァがどうのこうのというよりは、私がエヴァと会えなくなるのが嫌だからという、蓋を開けてみればそれだけの理由である。

サイドテーブルの上にノートの切れ端で「借りた本を返してきます」と書き置きをして、部屋を出た。

時間的にいつエヴァが来るかも分からないので、念の為。

コンクリートが剥き出しの通路を歩いて、真つ暗な石畳の階段を上がつて、地上にある教会の一室に出る。私の洗濯物を干しているシスターに頭を下げて、この前神多羅木先生に案内された図書館島から教会までの道を逆算して思い返す。

一通り記憶を掘り返してから、私は歩き始めた。

特に日にちの指定も無ければ時間の指定も無かったが、彼の口振りから察するに、彼はいつでもあそこにいるのだろう。

さて——道中は暇である。この暇というのは、決して悪い事ばかりではない。



私としては、考えておかなければならないことが一つだけあった。

いや、それは、考えるというよりは、整理に近い。

あの男との出会い——出会いと呼ぶには酷く一方的なものだったが、ともかく、あの邂逅は、決して、偶然などではない、ということだ。

そこばかりが、ずっと引つかかっていた。

私は、決して記憶力が悪い訳ではない。意識していないことに関しては右から左へ受け流すために全く覚えていないが、意識して覚えようとすれば、人並みか、それ以上には記憶できる方だと自負している。

少なくとも、半年ほど前に、刹那的に出会った女生徒達の名前を——自己紹介すらしていないあの少女達の名前を覚えていられるくらいには、記憶力がある。

まさか、あんな迷路のような図書館の来た道を記憶しない、意識しない、なんてことが有り得るだろうか。それは正しく自滅行為だ。私とて、そこまで愚かではない。道は覚えていた。

今、こうして図書館島から教会までの道を思い出して歩いているように、あの休憩所から出入り口までの自分が来た道を辿ってエントランスに帰れる、という自信があった。だからこそ木乃香さんの道案内の申し出は断れたし、だからこそ、のどかさんがどこからか取り出して渡してきたあの本の片付けは彼女達の良心に頼った。

知らないものは知らないが、知っているものは知っている。

極めて、常識的な、理論とも言えない単純な理論だが、これは揺るがない。

なればこそ、私が道に迷った理由なんて、限られてくる。

イレギュラーだと断言した。

この出会いは、イレギュラーであると、あの男はそう言い、名乗ることを拒絶した。

しかし、それだけのことだった。イレギュラーではあるものの、あの邂逅は至らなければならぬ過程であり、道程。

通過点であり、交差点。

あれをイレギュラーそのままだと受け入れるのであれば、こうして再会の約束を取り付けてくるはずがないのだ。約束というよりは、脅迫だったけれども。

あの男がなにを考えているのかは分からない。

ただ、一つ言えることは、目的があるということ。

それは例えれば、

偶然を成立させるための必然<sup>プロット</sup>。

それは喩えれば、

運命を成立させるための伏線<sup>プロット</sup>。

こんな陳腐な言い方しか出来ないが、しかし、仕方ないだろう。あれは、そういうも

のだ。

説明不足甚だしいと思う。

着替えと二冊の図書が入っている紙袋を握る手に力が入った。

出来うることならば逃げてしまいたい。このまま二冊の本を返却したらさっさと帰ってしまおうかとすら思う。

そもそも、あの変態に会う事自体、本意ではないし、なにより――。

――立ち止まることもできないし、行き止まることもできない、か。

しつこく耳に残るエヴァの声が、今だけは、少しだけ、疎ましかった。

斯くして、図書館の門をくぐった。

受付の女性職員に不審な目で見られながら返却手続きを済ませ、図書館内部へと深く潜っていく。どうせ、記憶は頼りにならない。そうならないように出来ている。いつそのこと直線的に通路を歩き続けた方が最短距離を行けるだろう。

十枚目の本棚を通り過ぎて――二十枚目の本棚を通り過ぎて、三十枚目の棚を通り過ぎた。

やがて、景観が変わっていき、広い休憩所に出た。人の気配は見られない。ふと左を見れば、半円を描くようなベンチと、白の大きな丸テーブルがあった。高い位置にある

窓から日が差し込み、いつそのこと幻想的な雰囲気醸し出している。

そのベンチの中央に、なんとなく、人影が座っているように見えた。

それは幻影のように一瞬で消えたが、《彼》であることは明確だった。

「意外と素直に来てくれましたね。もう少し躊躇すると思っていました」

その丸テーブルに少しだけ寄って、先程見えた幻影に対峙するように立つ。

「着て、きた。満、足？」

顔を隠すようにして覆っていたオーバーサイズのフードを脱いで、服の下にしまっていた髪の毛を外気に晒す。それと同時に、折り畳まれていた猫耳が元氣よく飛び出した。少し首を振って適当に髪を整えて、前方を睨みつける。

「ええ、私の目に狂いはありませんでした。良くお似合いですよ、蒼井鈴葉さん」

ふふふ、と。気味の悪い笑みを溢しながら、彼はそう言った。

「いえ、まだお互いに自己紹介をしていませんでしたね。あなたのお名前を呼ぶのは、少し不躰でしたか」

「一方的、すぎる。気に、食わない」

「それは失礼。そうですね——私のことは、クウネル・サンダースと、そうお呼びください」

「クウ、ネル」

彼がただの亡霊なのか、魔法使いなのか、その判断は悩ましいものがあるが、念話を使っている以上は後者に違いない。

当然、私の魔法に対する知識はごっそりと消えているため、彼がエヴァのような有名な魔法使いであるのかどうかすらも分からない。

それでも、私のことだけが筒抜けなんて、流石にそれは気分が悪かった。

「あれから寝る間も惜しんで考えた名前ですよ、気に入りませんか？」

「……………」

偽名だった。

まあ、別に、いいけれど。

「ふむ、ここまでノーリアクションだと、ちよつと寂しいですね。まあ、いいでしょう。さて——なからお話致しましょうかね？」

積もる話があると言いたげに、ため息を混じらせた。

私と彼はそんな関係にあるはずがない。そんな、十年來の友人のような、積もる話はないはずだが、彼はそう言いたげな調子で、続ける。

「昔話でもしますか？ それとも、御伽噺？ 私としては世間話も捨て難いのですが」

「……………まず、聞かせて」

「はい、お好きなように」

「……何故、私に、構う？」

これだけははつきりさせておきたかった。

どんなに私が私の中で理論立てて解析しようとしたって、それはただの稚拙な状況整理にしかならない。

それを私に教えたとして、彼にとつて、どのような利益があるのか。または、教えないことによつて、どのような損害を被るのか。

はつきりさせないと、それ以上は、前には進めない。

「理由としては、二つ程」

そう前置きをしてから、男はどこか愉しげに、ころころと笑うように続けた。

「一つは、他者の人生の蒐集。趣味みたいなものです」

嫌な趣味だった。

「もう一つは——あなたが、昔のキティに良く似ているから」

「キティ……？」

「ええ、それ故に、とても不安定だ。触らずとも崩れ去る砂の影、吹かずとも消え去る蠟の灯」

——それがあなたです。

クウネルは、戯けた調子で、続ける。

「なので少しだけ、その砂に水を、その灯に油を、注いであげようと思ひまして。端的に言えば老婆心ということですよ」

「その水が、その、油が、これ、って、こと？」

——紙袋の中に入っていた、一枚の羊皮紙。

それを取り出して、突きつけた。

彼がなにを目的としているのかについて、ある程度 of 状況整理が出来たのは、この羊皮紙があつたからと言つても過言ではない。

「おっと、それについて喋れと言うのであれば、やはり、見返りが必要ですね」

「……………」

「そのパーカーのチャックを下までおろしてください。結構悩み抜いたんですよ、あなたがパーカーの下に着ているその水着」

ここまで来て、有耶無耶にされるのは、本当に、不本意である。

まあ、別に誰かに見られているというわけでもない。敢えて言うならこのクウネルとかいう悪霊が見ているのだが、私の前に姿を見せない以上は、見られているという意識も薄い。

そういう言い訳を咀嚼して、飲み込んで、少しだけ躊躇つてから、フアスナーのスライダーを下へと滑らせた。噛み合っていたエレメントが離れていき、膝まである長い丈

の終着点に辿り着く。最後にスライダーから蝶棒を外して、パーカーで隠れていた水着と肌が露出した。

真つ黒なビスチェタイプのトップス。胸元の下から緩めのフリルが控えめに伸びている。ボトムはミニスカートタイプ。

「おおー。素晴らしい！ ええ、やはり控えめな体型にはフリル満載レースだらけのかわいい系が似合う！」

「……………殺す」

誰がぺったんこか。

いや、まあ、無いものは無いけど。

虚無だけど。

「おやおや、怖い怖い。いいのですか？ 私がここで《やっぱり教えないことにします》と言えばそれまでですよ？ あなたがその恥ずかしい姿のまま外を出歩いていたという過程を残して、結果はなにも残らないのですよ？」

……………。

「ああ、それはとても残念です。パーカーの下におへそが丸出しの水着という露出趣味すら疑われてしまうような服を着てここまで来てくれたのに。まるで痴女のような行いをしてまでここに来てくれたのに！ ああ、本当に残念です。もしかしたらふとした



拍子に誰かがあなたのその下に着てきた水着に気付いてしまっていたかも知れませんね。いえいえ、もしかしたら、すれ違った人全員があなたの露出趣味に気付いていたかもしれません。そんなリスクを抱えてまでここまで来たのに、辿り着いたのに、残念です。なにも得ることが出来ないまま帰ってしまわれるなんて」

.....

両手を握り拳にして、こめかみに持つてきて、あざとく上半身をちよつとだけ傾けて、  
 どういう仕組みなのか分からないけれど、猫耳もひよこひよここと動かして――

「にゃーん」

サービスしてみた。

「よろしい」

いいのか。

「まあ、元々、本当にその服を着てくるとは思いませんでしたし」

.....

「今の私の能力なんてたかが知れています。せいぜい念話を送ったり、小さな小さな物を転送したり、それくらいです。あなたの服を換装コンバートして、尚且つ脱げないようにするなんて、そんな芸当、今の私には出来ません。無理です。不可能です」

「昇天、してしま、え」

本当に、良い性格を、してらっしやるようで。

「そういう口振りは、なかなか、似てますね。あなたの本質を隠せるくらいには、良く出て来ている。柔らかくなつたキティとでも言いましょうか。いえ、柔らかいあなたがキティの真似をしているだけなのですから、それは当たり前なのですが。おかげさまで、少しだけ愉快です。あのキティをいじめているような気分になれます。欲を言えばもう少し慌てふためいてほしいところですが——この私が及第点をあげましょう」

「意味が、わから、ない」

キティというものが、誰を、何を、指しているのか。

意味としては子猫だが。

まさか、ハローなキティでもないだろうし。

まさか、キティなプライドでもないだろう。

もしかしてさっきの「にゃーん」のことを言っているのだろうか。事此処に至つて煽つてるのか、この男。

「まあ、そんなことより——そのメモ、読んでいただけましたか」

読むな、と言う方が難しいだろう。

事細かに書かれた文の羅列の集合体であるならば、それは目に入った程度では読めないけれども、簡潔な短い文ならば、目に入った段階で既に脳が勝手にそれを読み上げて

しまう。

“私は鍵を持っています”。

たった、それだけ。

羊皮紙に書かれていた文は、たったのそれだけ。

目に入っただけで、それは読めてしまう。

「……鍵、つて？」

「そのままの意味です。錠に挿し込んで、がしやりと、開けるための道具です」

ならば、その錠はどこにあるというのか。

そもそも、なんのための鍵なのか。

ただの鍵に価値はない。

錠がなければ、鍵は必要ない。

ならば——それはきつと、錠がどこかにあるという話だ。

だから——この男はその鍵のかかった錠を、開けるために、こうして私を呼び出したのだ。

「キティはキティで、きつと考えているのでしょう。どうやってその鍵を開けようかと。まるで智恵箱を弄るような気持ちで、薄氷の上を歩くような面持ちで。ですが、それはとても難しい。今まで、自分のことだけを考えれば生きてこられたキティには、荷

が重たい」

「……………」

「立ち止まらないし、行き止まらないのです。なので、私がお手伝いしてあげます。お節介というやつです。あなたの中の重荷を、少しだけ肩代わりしてあげます。その力を抑えるのは容易ではないでしょう。今まで、よく頑張りましたね。あなたの気持ちは確かに受け取りました。でも、もう大丈夫です。少しだけ楽になるはずですよ。これも、古い友人の好というやつです」

「……………」

「青山の分家とは言えども、最早そんな昔のことを彼に尻拭いさせるのは可哀想ですし。ええ、もう責任を持てる人がいないんですよ。困りものです。境遇としては、その身体に成る前からキティに似ている。彼女がここまで肩入れするのも分かります」

「……………」

「いえ、彼女の場合は、もっと違うところにある感情で動いているようにも思えますね。きつと、似ているだけならば、彼女はあなたの事など、気に掛けることはあつても肩入れすることはないでしょう。どちらかと言えば気に欠けるまであります。獅子は子を崖に突き落としますからね。そういう意味では、彼女はあなたに救われているのですよ。だからこそ、あなたにも救われてほしいと、私は思っているのですよ。あなたが救

われなければ、彼女はまた独りになってしまう」

「……………」

「……起きてますか？」

「起きてる」

危ない。

ちよつと寝てた。

「……本当ですか？」

「にや、にやーん」

「……………まあ、いいですけれど」

むう、誤魔化せないか。

そもそも、話が長いのが悪い。回りくどいのだ。回り回って、話がどこに行き着くのかも曖昧で、分かりにくいのが悪いのだ。

私に話しかけているのか独り言なのかすら怪しい言葉の羅列を並べられたら、そりや、眠くもなるでしょう。

前から分かっていたけれど、私とは別のベクトルで本当に会話が下手なのだ。

「まあ、私も話し過ぎましたね。こんな話をして、あなたは理解できない——いや、理解させてもらえない」

理解も何も、寝てしまつては話なんて聞けたものではない。どんな有能でも、天才でも、寝ながら人の話を聞ける人はいないだろう。

えーつと。なんだっけ。

確かキティちゃんが鍵を持ってて智恵箱を開けようとしたり薄氷の上でスケートするんだけどそれは技術的にキティちゃんには荷が重いつて話だっけ。

呼び出しておいてなんの話をしてるんだ、この変態。

「なので——」

瞬間。

窓に差し込んでいた陽の光が、何者かによつて遮断された。

深くフードを被つた、外套を来た不審人物が、いつの間にか私の目の前に立っていた。

「話はここまでです」

その男は、私の頭を、くしゃりと、撫でた。

「やはり、今の私では、実体を持たせるのはなかなか厳しいですね。……これは、半年ほど眠りにつくことになりそうだ」

どうやら、今までさんざん私の頭の中に語りかけてきた男の正体らしかった。なるほど、変態に相応しい不審人物だ。

だけれど、私の頭を撫でるその手は、変態らしからぬ暖かさを持っていた。

また、眠くなる。これは、多分、さつきとは少し違う質の眠気だ。故意的な意識の介入。意識が沈んでいく。沈まされていく。剥奪されていく。また、主導権が、失われる。泥が足に絡みついてくる。視界から光が失せていく。

ベンチの上で目が覚める頃には、もう陽の光の色は消え失せていた。

陰って寂れた雰囲気の図書館の中にはそれでも人の気配がそこかしこを行き交っている。すっかり夜更けまで眠ってしまったのかと思つたが、まだそこまで遅い時間ではないらしい。冬は日が短いから、こういうとき、分かりづらくて困る。

上体を擡げて、視線を下げる。

パーカーはそのままだが、水着は私が着替え用に持ってきていた黒のワンピースに変わっていた。人の装備を換装できるような能力は無い、とあの変態は言っていたが、どこまでが本当でどこまでが嘘なのかがいまいち分からない。

本当に、要領を得ない人だ。

未だ眠気眼で重い瞼を手の甲で擦る。なんだか、とても長い夢を見ていたような気分だった。寝たのに、寝ていないような疲労感。これは帰宅したら即就寝コース間違いな

しだ。

シャワーは、まあ、いいか。起きてからで。

身体は依然として重かったが、帰らない訳にもいかないので、なんとかして立ち上がる。

なんとなく視線を落とすと、丸テーブルの上に羊皮紙が置いてあった。

“私は鍵を持っています”と書かれた文の下に、新たに文章が追加されている。

“そのパーカー、もとい、外套には加護を施しています”。多少傷ついても大丈夫ですが、大切に扱ってくださいね”。P.S. 水着も差し上げます”。夏になったらそれを着てキティと水浴びなど如何でしょうか”。きつと喜びますよ、彼女”。

……この場でパーカーを引き裂いてやろうかと思つたけれど、折角の加護なので素直に受け取っておくことにした。

しかし、せめて加護とやらの内容についても書いておいてほしかった。毎度思うのだけれど、説明が不足しすぎている。もっと大事なことを教えろ。どう考えてもその追伸よりも必要な情報があつただろ。

羊皮紙を紙袋にしまって、パーカーのファスナーを胸元の下まで持ち上げてから、私は図書館を後にした。

パーカーの加護とやらのおかげなのか、不思議と冬の夜空の下でも寒くない。吐く息



は依然として白いものの、これなら風邪を引くこともないだろう。なんだ、あんな変態でも気遣いが出来るのだな、なんて思っていたら、白いロングコートを着たエヴァに遭遇した。

いや、遭遇というよりは、会って然るべきだったのだろう。エヴァの手には私が部屋に残したノートの切れ端が握られていた。

「全く、探したぞ」

そう言つて、私の手を握る。その手は少し——というか、かなり冷たかった。

溜息混じりの白い息が、幻影のように消えていく。

握られた手を握り返して、少しだけ、エヴァの腕に擦り寄つた。

「心配、して、くれた？」

「……別に」

冬の夜風のせいかな、エヴァの頬は赤く染まっていた。

「というか、どうしたのだ。そんな愉快なものを頭に乘せて」

デイズニー気分か、なんて言われて、空いてる手で頭に触れる。猫耳がつけっぱなしだった。この調子ではパーカーの下では尻尾が揺れ動いていることだろう。

あの変態め。どうせ着替えさせるなら外しておいてくれても良いだろうに……。

……エヴァが握ってくれていた手を離して、両手を握り拳にして、こめかみに持って

きて、あざとく上半身をちよつとだけ傾けて、どういふ仕組みなのか分からないけれど、猫耳もひよこひよここと動かして――

「にゃーん」

なんて、鳴き声を上げてみる。

「うぐつ……」

エヴァが奇妙な鳴き声を上げた。

「……………あまり、他の人の前ではやるなよ、そういうこと」

気味悪がられるぞ、なんて言われた。

失礼な。

「やらないよ」

「それでいい」

「ねえ」

「あ?」

「……………キティ」

「……………あ!?! お、おまつ! その名前誰から聞いた! いや、図書館で何を読んだ!?! ま

さか、私にまつわる文献とかじゃないだろうな! というか、その名で呼ぶな! 嫌な

奴を思い出す……………!」

どこか遠くで、意地の悪い図書館の地縛霊がくすくすと笑った気がした。

## E p. 11

— ■■。

「なに？」

— 今、楽しい？

「……わかんない」

— 楽しくないの？

「…………わかんない」

— そっか。

「悲しいよ」

— なんで？

「寂しいから」

— 独りじゃないのに。

「………■■■■が、いないから」

— うーん、困ったね。

「うん、困ったね」

夢。

なんてことはない言葉だ。

大した言葉ではない。

どちらかと言えば、大それた言葉だと思う。

詰め詰めば詰め込むだけ妄言となる言葉だ。

突き詰めれば突き詰めるだけ言葉としての価値は色付くかもしれないが、それは——  
夢ではなく、実現可能な将来設計と呼んだ方が語弊もないだろう。

夢見がちという言葉がポジティブな意味で使われることは少ない。

しかしその言葉の通り、夢とは、見るものなのだ。

決して辿り着けない終着点。

それこそが夢である。

しかし、現実的なことを言っていると「夢がない」などと呆れられるのだから、不思議な世の中だと思う。

余談だが、エヴァに「将来の夢はぐうたら寝てるだけで生きていられる人間になること」と言ったら、「鏡を見る」と一蹴された応酬は記憶に新しい。悲しいかな、言い返せなかった。

——どのような経緯でそんな話をしたのかは、あまり覚えていないけれど。

### 閑話休題。

つまるところ、夢とは、現実的であつてはならないという固定観念が生み出した光そのものだ。大きすぎる光は、捕まえようとしたつて、あやふやになる。視界は奪われ、熱は身体を焼く。光源に届く者はたったのひと握り。

しかし、光無くして、世界は立ち行かない。

太陽光が無くなつた世界に未来が無いように。

生まれたその時から、人は光を求めて歩く旅人である——気取つた言い方だが。

だが、敢えて、今更ながら、敢えて言わせてもらえらるのならば、私が言いたい夢というのそういう屹立する壮大な不公平についての話ではない。

寝ているときに見る夢だ。なんてことはない、起きた瞬間には覚えているけれど、それから時間が経てばある程度消えてしまう、夢よりも儂い夢の話である。

夢を見た。

それがどんな夢なのかと言われると、まあ、覚えていないのだけれど。

ただ、決して幸せな夢ではない。

優しい夢でもなければ、楽しい夢でもない。

ただ漠然として、幸せを掴みとれない誰かの物語だったと、思う。幸せを掴みとることを、諦めてしまった、誰かの物語だったと、そう思う。

だからこそ、私は目を覚ましてもなお、こうして布団を頭まで被って、ベッドの上でぐだぐだうだうだと寝返りをうって悶えているのである。

この行き場のない悲壯感をどこにぶつけければ良い。

この行き場もない寂寥感をどこに捨て置けば良い。

どうせ忘れてしまうのなら、この感情すらも忘れさせてほしかった。このような中途半端が一番困る。解析のしようがないから、解消のしようがない。

あーだのうーだのと寝返りをうち続けていると、なにかが足に当たった。

「何をしてるんだ、お前は」

エヴァだった。

ベッドの端に浅く腰掛けて、不審人物を見るような目で私を見ている。

私が起こした時から——起きる前からここにいたのだろうか。だがそれは変な話だ。

「エヴァ、学校、サボリ……？」

まさか、今の時間が放課後——つまり午後の六時や七時というはずはないだろう。そ

ここまで寝坊はしないし、起きてからそんなに時間は経っていない。私の生活リズムは余程のことがない限りは崩れないので、恐らく、今は朝の七時や八時のはず。

今から登校すれば間に合うだろうが、この時間に私の部屋へ訪れた例は今まで一度たりともありはしない。なので、私の行き着いた回答は、サボタージュという、極めて不健全なものだった。

「今日は土曜日だぞ、休みだ」

——そもそも、ここではサボれないしな。

ため息まじりにエヴァはそう言った。呆れているようだった。

今日は土曜日。

それはつまり、昨日は金曜日だったということだ。金曜日——いつもなら「ご飯」を食べる日だが、食べた覚えがない。特別空腹感はないが、ルーティーンが崩れたのが少しだけ不本意だった。

だが、今はそんなことはどうでも良くて——今この場にエヴァがいるということこそが、私にとって僥倖だった。

——残留する寂寥感を、ぶつけられる。

私は上体を起こすと、緩慢とした動きでエヴァの制服の裾を摘んだ。それから、引き寄せようとするものの、エヴァは不動。なので、私から近づく形になる。そうして、私



の体は軸を失ったように前へと倒れていき、額をエヴァの肩に着地させた。

「……………どうした？」

私が聞きたい。

おかしいぞ。本当はこう、ぎゅつと抱き締めたかったのだが、なんか、躊躇ってしまつた。おかげさまでとても中途半端な姿勢になってしまう。こんなはずでは。

「……………わかん、ない。でも、その、えつ、と……………」

口籠る。

行動に移せないのなら、口でお願いしてみるしかないと思つたのだが——見通しが甘かつたようだ。これはこれで、少し、難しい。思えば、こういうことを口にするこは、私の短い一生の中では一度たりともありはしなかつた。

「……………？」

「うう……………」

エヴァの視線が刺さつてる——気がする。

「……………ぎゅつ、て、して、ほしい」

言つてしまった。

なんだこれ。

なんだこれ。

凄く恥ずかしい。

というか、今の一言で寂寥感なんか吹っ飛んだ。

「い、い、め……！　なん、で、も、ない」

取り消す。

羞恥心に上書きされて、寂寥感は紛失。目的達成。任務遂行。ミツシヨンコンプリートというやつだ。もはやエヴァの体温を求める必要性は消えてなくなった。むしろ、今度はこの羞恥心を鎮める方法を探さなくてはならない。

羞恥心の消し方など知らない。知らないが、兎に角、時間を置く他にないだろう。今回ばかりは原因も明瞭だ。解消策はあるだろう。それこそ、無心になって散歩でもすればいい。今日の予定が完成した。ならばいざ征かん麻帆帆良の地。図書館には絶対近づかないようにしなくては——と。

ふと、思考がずれた。

昨日、私は、図書館から帰ってきて、そのあと、どうしたのだったか、と。そんな疑問は、次の瞬間には、また別のものへと塗り替えられたしまった。

「——ほうっ？」

にやり、と。

どこか悪戯心が芽生えた少年のような、意地の悪い顔をして、エヴァはベッドの上へ

と足を上げた。そして、言葉を取り消した際に少しだけ後退った私との距離を埋めるように、四つん這いで近寄ってくる。

——食われる。

それは、獐猛な肉食獣だ。獲物を見つけてしまった、食物連鎖の頂点だ。

「そうかそうか、愛い奴め。どれ、可愛がってやろう」

これは、逃げられない。

要求したからには逃げるのは失礼とか——そんな感情論ではない。ただ、ただ、物理的に逃げる事ができない。身体は一切の身動きを封じられ、血流から細胞分裂に至るまで全てが支配されている。

指先一つだつて動かせない。まばたきすら禁じられている。鼓動すら——止まっているかもしれない。

やがて、エヴァと身体が交差しようという瞬間に、全身を熱が駆け巡った。

そして、エヴァは私の肩に顎を乗せ、その腕で——蛇のように靱やかな腕で、私の身体をホールドする。

「お前——昨日、誰かになにかされたらろ」

——鼓膜が溶けるかと思つた。

首筋あたりに吐息が触れて、足の指先から頭のとつぺんまでを、液体窒素で撫でられ

るような感覚が走る。

「な、に……か、つて？」

「それが分からんから聞いています。お前は、昨日、どこで、誰と、なにをしていた？」

——昨日。

図書館に行った。そして、あの声の主と必然的な再会を果たして、それから、エヴァと帰った。

それだけ。たったの、それだけ。あの声の主は「私にできることなどたかが知れている」と言っていた。「念話を飛ばしたり、小物を転送したり」——「それが限度」と言っていた。それ以上のことは、不可能だと、言っていた。

それに、私はあの男について、あの男自身から口止めされている。他言無用、と。封じられている。

「昨日、この部屋に帰って数秒と経たずして、お前は倒れた。意識を失った。医療班を呼んで診てもらえば、魔力がこつそりと消えている、と——魔法を憶えていないお前が、どうして魔力を失える？」

背中に、エヴァの爪が刺さる。脅されている——というよりは、無意識に力んでいるようだった。

エヴァの声からは怒気すらも感じられる。

なぜエヴァが怒っているのか、分からない。

その怒りが、どこへと向いているのかも分からない。

行き場のない怒り——だった。

「分から、ない」

私は、なにをされたのかも分からない。

なにかをされた覚えはある。

あの男——図書館の亡霊が、私の頭を一撫でした時に、私の意識は何かに絡めとられてしまった。なにかされたとするのなら、あの時だろう。それが分からない程に愚かではない。だが、なにをされたのかは、分からない。

そもそも、あの男について——どのような説明をすればいいのか。

「無意識のうちになにかをされた、か。結界に反応はなかった——内部の人間か」

それは、心当たりがありすぎる、と。

エヴァはそう言いながら、溜息を溢した。

「エヴァ……。看、病、してくれ、た？」

エヴァは制服のままの格好だ。土曜日に制服を着る理由はないだろう——もしかしたら部活動があるのかもしれないが、それにしたってこんな時間にここへやってくる道理は、経験則上ありはしない。ハンガーラックを見れば、白のロングコートがかかって

いる。

聞くまでもなく、診てくれていたのだろう。

「放っておけば勝手に回復するらしいが、万が一の可能性もあったからな」

直接的ではなかったが、それは肯定だった。

なんだか、無性に嬉しくなつて——私は抱き返すようにエヴァの背中へと手を回した。

こうして抱き締めてみると、想像していたよりもずっと華奢だった。

エヴァの首元に鼻を埋めて——下品な言い回しだが、その匂いを堪能する。こればかりは、エヴァから差し出してきたようなものなので、怒られるような筋合いはない。

私は、業突張りな人間なのだ。

許可さえあれば、貪欲なのだ。

ついでに、かぷりと囁んだ。

——初めて、私が私の意思で、囁み付いた。

私のそんな奇行にも流石に慣れたのか、エヴァはなにも言わず、一瞬だけ身体を震わせただけに留まった。

うーん、なにも言われない。

正直、匂いを嗅ぐという行為に関してはそれが故意的であるかどうかなんて主観以外

では分からないし——だからこそ怒られないと思っていた。

匂いを嗅ぐという行為は、まあまあ失礼な行動である。それくらいは、常識だろう。私だって、誰かに突然匂いを嗅がれたら、その相手に平手打ちを喰らわせるくらい自信はある。

自覚はあるのだ。

自重の仕方がちよつとあやふやなだけで。

だけど、噛むという行為に関しては、なにがどう転んだって故意的でしかない。意識的にならなければそのような行為には至れない。

だから——まあ、私の意思で行った愚行に関して私が責任を果たせるのならそれでもいいか、と。怒られるのを覚悟してただけに、拍子抜けである。

……あむあむ、と。甘噛み。

なにも言われない。

これは好きだけ甘噛みをするチャンスなのではないだろうか。ここまで物言わぬエヴァというのものなんだか珍しくて嵐の前の静けさ的な恐怖を覚えさせるが、いや、まさかここまでやって怒らないのなら、これ以上どれだけ甘噛みしたところで怒られることはないのだろう。

溢れそうな唾液を飲み込みながら噛み付くというのは——なんだか吸血鬼になった

ような気分だった。吸血鬼の前で吸血鬼の真似事をするというのは、なんとも言えない背徳感を覚える。

それから、どれだけ時間が経ったか。

五分とか、十分とか、そんなものだろうか。

満足して口を離す。

「噛んでいいのは、噛まれる覚悟がある奴だけだぞ」

あむ、と。

「あう——っ」

今度はエヴァが私の首元を噛んだ。予想外過ぎて——なにより、血を吸われると思つて、身を竦ませた。

吸血鬼に血を吸われるなんて、未知の領域だ。ただ、歯で皮膚に穴を穿つのだから、痛くない訳がない。そう思つて、その痛みに備えたのだが、いつまで経つても痛みみらい痛みは訪れなかった。

ただ、私に倣うように、甘噛みを繰り返し返す。

ワンピースの肩紐をずらされて、剥き出しになった肩から二の腕まで貪り尽くされる。

強く噛まれたり、弱く噛まれたり、その加減が変わる度に、くすぐったくて変な息遣



いになった。もうこの際、大声でげらげらと笑いたい気分なのだ、こんな時でも私の喉は正常に異常なようで、抜けるような息が出るだけだった。

ついで、五分くらい嘔み続けてから、「仕返し」とやらの満足したらしいエヴァはその口を離した。

私はと言うと、こそばゆい感覚に晒され続けて、息も絶え絶えである。笑い死ぬかと思つた。いや、笑えてないんだけども。

「血、吸わない、の？」

なんとなく、疑問をぶつけてみた。

「ん？ 前に言わなかつたか？ 今の私は、学園結界のせいで吸血鬼としての力の大部分を失われている。満月じゃなきゃ、血も満足に吸えない身体なんだよ」

ほら、と言いながら、指で口角を持ち上げて歯を見せつけられる。

確かに、そこには小振りな犬歯が見えるだけで、吸血鬼らしい牙は影すら残っていない。

少し、残念。エヴァに血を吸われるならば、それもまあありだろうと考えていただけに、掠られた気分。というよりは、ドックフードを前にしてお預けを食らった犬の気分か。

「まさか、血を吸われたいとか言うつもりじゃないだろうな？」

まるで私の思考を読んだかのように、エヴァは言う。

「……………」

「酔狂なやつだな。吸われたからっていい事なんかないぞ」

吸われることによるメリットについてはどうでも良くて、エヴァに吸われることそのものがなんとなくメリットに思っているのだけれど、これを言ったところで理解されるかと言われると難しいところだろう。私だつて理解していないのに。

「兎も角として、シャワーを浴びてきたらどうだ。魔力はもう十分に回復しているようだし、問題はないだろう。その間に私は“飯”を持ってこよう」

それだけ言つて、エヴァは部屋を後にした。

シャワーを浴びて、髪も乾かして、適当なシャツとスカートに着替えてから部屋に戻ると、エヴァは既に帰ってきていた。

サイドテーブルにはトレイに乗せられた“料理”が並んでいる。いつもの生肉と、白米と、あと暖かそうなコーンスープ。いつからか、スライスされた生肉だけだった食事は、メニューと呼べるものが付属するようになっていた。もつとも、普段からお腹が空

くわけではないから、その量も少なめにしてもらっているが。

エヴァに礼を言ってから、サイドテーブルに付属している小さな椅子に座って、「いただきます」と言つて手を合わせてから食べ始める。

スライスされた生肉で、白米をくるんで、一口。

——相変わらず、鼻腔をくすぐる香りと味わいに、くらくらとしそうになる。これは、いつまで経つても、慣れない。

エヴァはそんな様子を、ベッドの上で横になりながら、どこか興味深そうに見ていた。

——駆け足になった鼓動の音がする。

それは私かもしれないし、エヴァのものだったかもしれない。こんな緊張感のある食事が、この世の中に存在するものなのだろうか。

今思えば、エヴァが私の食事を用意するのは、あの時——エヴァと初めて麻帆良を歩き回った日の前日以来か。

……ちようどいいのかもしれない。

別に逃げてても良いのだけれど、これは、はつきりとさせたいことの一つだった。なに  
より、エヴァの言うところの“隠し事”の一つでもあると思う。

でも、そろそろ、暴いた方が、いいのではないかと。

隠し事をしていることを隠すつもりはないと言っていた。

それはつまり、隠し事を、自分で暴いてみせろ、という言葉に置き換えることだってできる。

今日このとき——エヴァの前で食事を取るといふ行為に至っている、この瞬間が、そろそろ、現実を見ると言っているように思えた。

立ち止まらないし、行き止まらない。

それならば、今このとき、覚悟を決めて聞いてしまったほうが、きっと自分のためにもなる。

ただ——それは食べ終わった後にしよう。

「……美味いか？」

唐突に、エヴァはそう言った。

お肉を咀嚼したままエヴァを見遣ると、なんとも言えない、複雑な表情で私を見つめていた。

——隠し事下手か。

これは、隠し事を隠さないと言うよりは、隠せないと言ったほうがいいのかもしい。

なんだか、それがちよつとだけ面白くて——そんなエヴァが可愛くて、気持ち、少しだけ楽になった。

「ん。おいしい、よ?」

「そ、そうか……」

やっぱり、複雑な表情。

——ああ、どんな気分なのだろう。

でも、きつと、多分、エヴァは、私を見限りはしない。「選択次第」だと言っていたような気がするけれど、それと同時に「許す」と言ったエヴァは、きつと、許してくれる。そんな気がした。

むしろ、待っているのかもしれない。

私が、選択する、その時を。

もうそろそろ、気付いていることについて、気付いていないふりをするのは止めよう。このままでは——選択しないことを選択し続けたままでは、それこそエヴァは私から離れてしまうかもしれないから。

最後の一口を頬張る。

それから、コーンスープも飲み干して、一息。

いざ、その時が来たのかと思うと、やはり緊張する。

むしろ、私は病み上がりなわけ——自覚はないけれど、病み上がりなことから、こんな緊張しながら事実確認などするものではないのではないか?

そんな言い訳を、溜息と一緒に吐き捨てた。

——ダメだ。流石に、もうダメなのだ。

もう、これについては、十分逃げた。

そろそろ、逃げるのは止めに行こうと、そう決めたばかりではないか。

洗面台に行つて、歯を磨く。ついでに顔も洗つて、頬を両手で引っぱりたい。

部屋に戻ると、エヴァは未だにベッドの上にいた。体を起こして、壁に背中を預けて、お人形さんのように割座している。

なにを考えているのか、どこかぼうつとしていているようだ。

なので、私はいそいそとベッドの上へのぼつて、エヴァと対面するように割座した。

「エヴァ。……………お話、が、あり、ます」

「なんだ、改まって」

心なし、エヴァの顔にも緊張が浮かんでいるような気がした。彼女の場合、気付いていないふりをしているというよりは——。

いや、下手な解釈は止めよう。覚悟が揺らいでしまう。

それから、私は呼吸を何度かした後、口を開く。

「……………なん、て、言えば、いい？」

「はあ。」

エヴァに呆れられた。

いや、だって、仕方ないではないか。しようがないではないか。こんなことを口にする経験など、誰にだってありはしないだろう。非常に言語化が辛い。し難い。度し難い。

さてどうしたものか。

いや、口にするのは簡単なのだが、しかし、どうしても失礼な言い回しになってしまふ気がする。この際なにか失礼でなにか失礼じゃないのかも分からない。事例がない。前例がない。当たり前だ。こんなことを口にする人間なんて、この世にいたのだろうか。いや、いないだろう。知らないけど、いないに違いない。

——ダメだ。混乱するな。落ち着こう。

こんな思考をしている間にも時間は刻一刻と過ぎ去っている。このまま無言の時間が続けば続くだけ不利になる。覚悟が、鈍る。

私は深く息を吸ってから、改めて、言葉を選びながら、それを口にする。

「私、が……食べ、てる、お肉、のこと」

「……………ああ」

「まさ、か、とは、思う。結界、の影響、で、吸血鬼として、力が、残って、ない、エヴァ、じゃ、きつと、それは、無理だ、から」

「……………」

喉が辛い。

だけれど、直接的な言葉を出すには、まだ少しだけ時間が欲しかった。

「だから、もし、違う、のな、ら……はつきり、そう、言つて、ほしい」

「ああ」

エヴァは、伏目がちに頷く。

「私、が、食べてる、のつ、て——」

もう一度、深く息を吸った。

「エヴァ……。エヴァの……。エ……。エヴァ……。エヴァのおつ……。エヴァ……」

むう。

「——ええい！ 言いたいことがあるならばつきり言わんか！ こつちが緊張するわ

！」



エヴァは叫ぶように言いながらベッドを何度か叩きつける。前にエヴァの家に行った時もそうだったが、なにかもものに八つ当たりするタイプなのかもしれない。

それから私に詰め寄ると——もう一度、さつきそうしたように、私を抱き寄せた。

死に物狂いに暴れていた鼓動が一つ大きく跳ねて、水面の波紋のように静けさを取り戻していく。

「覚悟を決めたのだろう。逃げることを、私は悪いことだとは思わない。だが、逃げないことを選択したのなら、進め。一度踏み込んでしまえば、もう後戻りはできない」

……なあんだ。じゃあ、逃げてればよかった——なんて、そんなことを思ってしまう私は、悪い子でしょうか。

だけれど、今更逃げることは、許されないらしい。これが『選択次第』というものなのだろうか。一度立ち向かって——そのくせ惨めに我が身可愛さに逃げ帰るという選択は、許されないということなのだろうか。

エヴァの匂いは、不思議だ。

私の意識を混濁させる。でも、今はそれが有難かった。

「……がんばる」

「ああ」

今なら、頑張れる。

私が恐れているのは、自分自身がどうのこうのというよりは——エヴァに嫌われないかどうかのただ一点のみ。

たとえそれがどんなに杞憂なものだったとしても、可能性としてはない話じゃないから——怖かった。

でも、抱きしめてくれるエヴァが、私を唐突に突き放すなんてことは、きつと、ない。だって、エヴァは優しいから。

「……………私、が、食べてる、お肉は、エヴァ、の、お肉……………」  
「——ああ」

嗚呼——やっぱり、と。

不思議と気持ちは落ち着いていた。自分でもびっくりするくらい、冷え切っていた。「いつから気付いていた?」

「エヴァと、初めて、会った、とき、から」

あの匂いは、間違えようがない。

他に可能性があるとするれば、エヴァも私と同じ生肉を食べていたということ。或いは、調理係だったとか、そういうこと。だけれど、エヴァが生肉を食べる理由などありはしないし、調理をしたってその匂いが恒常的に残るはずは無い。

私の言う匂いとは——私の中でも不確かだけれど、多分、エヴァの魔力だ。

如何せん、生きてる牛の匂いを嗅いで「あー、牛肉の匂い！」ってなるはずがない。エヴァとエヴァのお肉の、実質的な匂いは、絶対的に違う。

共通しているのは、内蔵している魔力。

「そうか」

私の回答に、エヴァは驚くこともせず、そう相槌をうった。

エヴァも気付いていたのだろう。

「気付いていることをわざわざ訊くな」と、あの時のあの言葉が既に物語っている。

「エヴァ」

——ここに至って、まだ不安を抱いてる自分がいた。

多分、今の私は、不安定なのだと、思う。

理解はしていても——その実、理解できていない。或いは、理解を拒んでいる。実際にその言葉を聞かないと、”理解なんてただの自己満足な自己解釈でしかない”と思いついてしまっている。

その思い込みという言葉すら思い込みで、結局のところ、聞かないと分からないではないか——と。

「ずっと、一緒にいてくれる？」

その言葉は、いつの日かの言葉をなぞるように、まるで流れるように発せられた。

「お前がそれを望むなら、叶えてやらんこともない」

それは、少し乱暴な言い方だったけれども、それ以上に食い気味な回答だった。答えは決まっていたと言わんばかりに、食い気味な言葉だった。

「んっ……」

さっきのシーンを繰り返すように、私はエヴァの背中へと手を回す。だけど、さっきよりも少し強い力で、その矮躯を寄せる。

そのままエヴァの身体を枕のある方に押し倒した。

二人で、こてん、と転ぶように寝そべる。そのまま、私は少しだけ下の方に移動して、エヴァの胸に顔を埋める。

「鈴葉？」

「エヴァ、私の、看病、して、た。寝て、ないで、しよ？」

それは明白だった。

少しだけけど、目元にくまがある。それに、少しだけぼうつとしているように思えた。エヴァは吸血鬼だから、もしかしたら夜型の生活こそが本望なのかもしれないけれど——だとしたら、それこそ今は就寝の時間だ。

「……そうだな。確かに、少し疲れたかもしれん」

「あり、がと」

「……ああ。お前も寝るのか？　まだ眠くないだろ」

それはその通りだった。

私はついさつき起きたばかりである。

私の生活リズムはそう簡単には崩れない。

だけれど——

「んー。大、丈夫」

横になって目を閉じていればそのうち寝れるだろう。

それに——今度は、良い夢を見られるような、そんな気がした。

## E p. 12

クリスマスと聞いて、思い浮かべるもの。

サンタクロース。

イルミネーション。

キリスト。

ツリー。

まあ、いろいろあるとは思いますが、一切合切引つくるめて——そんなもの、この部屋とは無関係だ、と。そう思っていた。

十二月二十四日。世間一般的にはクリスマススイヴというイベントの当日。私の部屋は着飾ることもなく、雪が降るわけでもなく、プレゼント交換をする相手もなく、ただ淡々とした日常だけが我が物顔で居座っている。

裁縫について教えてくれることになったエヴァが、「私がないときはこの本を参考にしろ」と言つて置いていつてくれた裁縫の手引書を読みながら、いつもどおり、ベッドの上でうつ伏せになつてぐうたらと過ごす。

今週分の勉強はもう終わらせてあるし、図書館から借りてきた本もついさつき読み終わってしまったし、やることと言えば、これくらいしかない。

いや、分かっている。

手引書を読むだけでは上達などしない。実践して実物と向き合いながら読むからこそ手引書を読むという行為に意味が追従してくるといふことは、分かっているのだ。

しかし、今日は、なんだかやる気が出ない。

上の教会では今頃クリスマスパーティーとかやっているのだろうか。やっているんだろうなあ。なんか人の気配がするし。冬休み前のテストも終わって、打ち上げ感覚でパーティーしているのだろう。

私はそんなミーハーな性格はしていないし、騒がしいのも得意ではない。だから、パーティーが楽しそうだなあとか、そういうことは一切思ったりはしないのだが——少しだけ、人肌が恋しかったりするのだ、これが。

最近、エヴァが来てくれなくなった。

いや、最近と言っても今日を含めて三日くらいの話なので、こんな時もあると言えばあるのだが、如何せん、寂しいものは寂しい。かと言って、いきなりエヴァ宅に向かうのは迷惑だろう。

むう。

これいかに。

まあクリスマスということは、師走の時期ということでもある。思えば、去年もこの時期は監視役の先生すら忙しそうにしていた。事実、忙しかったのだろう。顔を見せても一瞬で、やるべきことをやって、確認すべきことを確認して、そしてそそくさと帰っていった、ような気がする。

まあ、今更、孤独感なんて、ないけれども。

——と。

足をバタバタとさせながら手引書を流し読みしていると、部屋の扉がノックされた。ノックする時点でエヴァではないことは確定だが、そうすると、元監視役の誰かだろうか。

本を閉じて、枕元に置いてから、身体を起こす。流石に寝転がりながら対応するのは失礼なので、ベッドに腰掛けることにした。

なにか余程の事でもない限りは鍵も閉めない。私のことを理解している人は勝手に扉を開けて入ってくるので、出迎えは不要だ。

斯くして、扉が開いて、その来客がひよつこりと顔を現した。

「やつ、鈴葉ちゃん」

まあ、予想通りというか、なんというか。



瀬流彦先生だった。

「メリークリスマスマス！」

まだイヴのはずだが、なんだか随分と気合が入っているようで、その姿はなんとというか、うん、形容できるのだけれども――。

赤い帽子と、もこもことした暖房効果だけを追求した赤い服。それぞれに白のトリミングがところどころ施されている。着膨れした姿からは、いつもの瘦身は想像できない。おまけに白い付け髭を大袈裟にぶら下げていた。

いわゆる、サンタクロースというやつだった。

「メリー、クリスマス、マス」

一応、ノツてあげた。

イヴだけど。

まあ、サンタさんはイヴの夜にやってくるものだから、セーフだろう。

右手になにか大きな袋を提げているが、もしかして今年はプレゼントまで持ってきたのだろうか。

「ほら、高畑さんと神多羅木さんも！ 入って入って！」

部屋に入ってきた瀬流彦先生が手招きをすると、追加で二名が案内された。言わずもがな、白スーツのダンディメガネと、黒スーツのダンディグラサンである。

「こんばんは、鈴葉ちゃん」

「よう」

「……ん。メリー、クリスマス」

……大所帯だ。

地味に、この三人がこの部屋に集まるのは初めてだった。当たり前と言えば当たり前だ。彼等は普段、学校で教員をしている訳で、時間の都合が合うことなんて稀なのだろう。

「蒼井、お前の部屋にテーブルなんかあったか？」

部屋の中央に置かれた新たなオブジェクトに、神多羅木先生は指をさした。

「そういえば神多羅木さんは知りませんでしたっけ。最近エヴァンジェリンが持ち込んだらしいですよ」

「そうそう。エヴァに裁縫を教えてもらってるみたいで、テーブルがあった方が便利だろうって」

私が説明をするまでもなく、二人が捕捉してくれるのは有り難い話だ。喉を無理させないで済む。

そして、部屋の中央付近に置かれたテーブルについては、二人が言ったとおり、エヴァが置いていったものだ。ちなみにその時はカーペットまで新調して……なんだかり

フオームしてるみたいで楽しかった。ベッドや本棚、小型の冷蔵庫なんかは茶々丸さんが部屋の外に運んでくれて、その間にメイプルの床材を敷いて――。

あの日は柄にもなくはしゃいだなあ……。

三人はそのテーブルを囲むように座って、カーペットの感触を確かめて「上質ですよね」なんて感想を言い合っている。

二、三年もここに通っていると、自分の部屋のような気でもしてしまうのだろうか。なにか変化がある度にこの調子だ。

それにしても、この三人が揃って喋っている光景は、なかなか珍しいし新鮮だ。

流石に大人の男性で囲むとテーブルも小さく見えてしまうなあなんて思いながら、私は冷蔵庫からお茶を取り出して、四人分の紙コップにそれを注ぐ。

「お、手伝うよ」

流石、白スーツ紳士。注ぎ終わったコップをテーブルに運ぶ作業を率先してやってくれた。

高畑先生と瀬流彦先生の間に割って入って、座る。

むう、こいつらでかい。狭い。

「そうそう、外は凄かったですね〜！ ここに来てから結構経ちますけど、毎年驚かされますよ。鈴葉ちゃんも、明日時間があるようなら見てきた方がいいよ。多分、明日が本

格的なイルミネーションだからね」

「ん」

「毎年、うちの生徒はエネルギーギッシユだからねえ」

「言うてもありややりすぎだと思うが」

「もう、神多羅木さんはもう少しテンション上げましょ？ 折角のクリスマスなんです

から〜」

「俺はそういうキャラじゃねえんだよ……。ほら、それよりプレゼント、渡すんだろ？」

「あ、ほら！ すぐそうやって〜。もう少し雰囲気とか大事にしないと彼女もできませ

んよ〜」

「耳が痛いな」

「ははは……」

……楽しそうだなあ、このオッサンたち。

瀬流彦先生はそうは言うものの、特にサプライズするつもりもなかったらしく——  
まあ瀬流彦先生のその格好が既にサプライズだが——傍らに置いていた袋からごそごそと梱包された袋を一つと箱を二つ、取り出した。

「これは僕からで、こっちが高畑さん。最後に神多羅木さんのプレゼント！」

「開けても、いい？」

「もちろんー！」

まず、袋。かなり大きい。

緑色のテープを解くと、茶色の毛が飛び出た。大きすぎて袋のサイズが無かったのだろうか。無理やり詰め込んだ感。

そんな窮屈な空間から解放されたのは、巨大なテディベアだった。上質な毛並みと、つぶらな瞳。首元に赤色のリボンが結ばれている。

袋から取り出すのに苦労していたら、瀬流彦先生が手伝ってくれた。

「うちの大学の生徒が作った特製品なんだって。こんな大きいの見たことなかったから、衝動的にこれだ！ って思ってた。買って買った。気に入ってくれた？」

「ん……。好き」

これは……：気に入らないほうが難しいだろう。

すっごいもつふもふ。寝る時に抱き枕にしたら、すっごい良く眠れそう。

なるほど、月並みながらハズレのないチョイスだ。神多羅木先生に彼女云々と言うだけある。無難と言えば聞こえは悪いが、これほどツボを抑えてるプレゼントというのもなかなかない。こんなの、プレゼントしたモン勝ちだ。早い者勝ちとも言おう。

一通り感触を楽しんでから、私の後ろにそれを置く。大きすぎて抱きかかえる事が難しいので、とりあえずまたあとでもふもふすることにしよう。

とか思ってたなら、後ろのテディベアが私を抱き締めてきた。ぎよつとして振り返る。まさか中に人がいるのか、これ。

「あ、そうそう。それね、目の前に人がいると抱きついてくるんだって。凄いやね〜」  
いや、スタンドみたいになつてますが。

まあ、悪い気はしないからいいか。

次いで、細長い黒の箱を手取る。

「お、それは僕のだね。気に入ってくれるといいな〜」

ははは、と笑いながら、高畑先生が少し恥ずかしそうに後ろ髪を掻く。

あなた、いろんな女性を口説いてきたような風格持つてるのに、そんな初な反応します？

高級そうな箱の質感にまず驚く。これ、大丈夫だろうか。あまり高価な物は流石に受け取りづらい。

金箔で縁取られた白のリボンを解いて、開ける。

「時、計？」

腕時計だった。ピンクゴールドのベゼルに、ローマ数字のインデックス。濃紺のダイヤルと、淡い桜色のベルト。

小振りだけれど、ずっしりとした重みは、いやらしい話だが、なんとなく値段に比例

しているような気がした。

「その企業ロゴって、もしかして……!」

「おいおい、タカミチ。随分と気合い入ってんなあ」

「ええ!? いやあ、はは。気合いは、そりや入ってるけどさ。ほら、最近良く外に出てるみたいだから、時間くらい分かったほうがいいかなあって思ってるね」

いや、お二方のリアクションが非常に怖いのですが。

これ、高級品なのは。

早速左手首に付けてみる。ゆったりとしたホールド感。

「……ありがと」

「うん、使ってくれると嬉しいなあ」

「んっ、好き」

「ははは、ありがとっ」

涼しい顔してますけど、こっちはこっちで涼しくなってるんですよ。冷や汗的な意味で。値段は……聞くのは野暮だろう。

配色とは裏腹に小振りなこれは自己主張も控えめだし、合う服も多いだろう。今まで時間という概念とは遠い位置にいたのも事実だし、とても有り難い。

最後に、神多羅木先生からのプレゼント。

この人、葛葉先生に頼るからなあ。また紐パンとかじゃなければいいけれど。白の小さな箱に黒いリボン。

ちやんと梱包されてる……。

開けてみると、また箱が出てきた。

マトリョーシカ？

「ヘアアレンジセットとかなんとか。まあなんかいろいろ入ってるらしい。最近なにか変化は無かったかと訊かれてな。髪を伸ばしてるみたいだつて答えたら、それならこういう方が喜ぶだろうって——葛葉が」

うわあ……。

「えげつないですね、神多羅木さん……。葛葉さん、荒れませんでした？」

「荒れてたな」

「ははは……」

高畑先生の乾いた苦笑いを聞きながら箱を開けると、なるほど、まさしくヘアアレンジセットというやつだ。

猫や花がモチーフにされたヘアゴムやピン、リボンのついたクリップ、ヘアスプレーなんかが入っていた。

私、こういうの使ったことないから使い方分からないんだけど。まあ、使ってるう



ちに慣れるか。

それに、なんだかんだ言って可愛いものが多い。瀬流彦先生や高畑先生が少し値段を感じさせる物だっただけに、安心感すら覚える。

いや、もしかしたら、これもなかなか値段の張るものかもしれないけれど。ヘアスプレーとか入ってるし。

「気に入らないならいつでもクーリングオフできるが、どうする?」

なあんでそういう言い方をするのだろうか、このヤクザ。デリカシーとかそういうのを母親のお腹の中に置いてきてしまったのか? もしかして、真の苦労人は葛葉先生なのではないだろうか。

そもそも、気に入らないはずがない。

最近髪の毛が伸びすぎて邪魔に感じることも増えてきたから、纏められる道具というだけで嬉しいのだ。かわいいし。

私はいつもより大袈裟気味に首を横に振った。

「好き、だよ」

「そうか」

それだけ言うと、神多羅木先生は胸の内ポケットから煙草を取り出した。

こいつは、本当に……。

仕方ないので、部屋の換気扇を付けに行く。

地下だけど——地下だからこそ、換気性能は十全である。

「高、畑、先生も。……吸って、いい、よ」

「んん……。駄目だよ、鈴葉ちゃん。副流煙とかもあるからね」

その気遣いの心をそこのヤクザにも分けてやってくれ。

「俺が吸ってんだ、一本も二本も変わらねえよ。吸いたきや吸え」

「神多羅木さん……」

「ははは……」

ちなみはこの部屋には唯一、私が絶対に使わないものが置かれてたりする。

考えなくても分かると思うが、灰皿だ。

吸うなら灰皿を買ってこいって言ったら本当に買ってきた。吸いたい欲求が強すぎる。私のエヴァに対する欲求に近いのかもしれないと思ったら理解できなくもなかったのと言及しないけれど。

えーと……。その灰皿は、どこにやったかな。

「蒼井、灰が落ちそうだ」

こいつ……。蹴ってやろうか。

いや、うん、まあ、いいんだけど。

残念ながら私はプレゼントなんてものは用意できなかったわけで、今日くらいはそんな態度も許してやらないこともない。今日だけ特別だ。

あ、あつた。

臭いがアレだったから消臭スプレーをぶち撒けてベッドの下に置いておいたのを忘れていた。

「はー」

「どっつとっ」

それから、変哲も無い会話が続いた。

神多羅木先生のグラサンを外した姿を見たことがない、とか。

エヴァが頻繁に訪れていることを、ガンドルフィーニ先生が心配してる、とか。

来年度はこのクラスを受け持つことになるのだろうか、とか。

私の勉強の進捗具合、とか。

二人は禁煙しないのか、とか。

学園長がまた孫の見合いを検討してる、とか。

そんな会話が続く中で、瀬流彦先生が少し残念そうな顔をして口を開いた。

「それにしても、まさかどこのお店もケーキが売り切れとは思いませんでしたね」

話によると、数週間前から予約を取ろうとしていたのだが、どこのお店も既に先着が埋

まっつてしまい、当日残ってれば売れることはできると言われたものの、結局売り切れで購入に至れなかったという話だ。

まあ、麻帆良学園は生徒だけじゃなく、小等部の家族とかも住んでいるから、仕方のないことなのだろう。少なくとも、麻帆良内部は勿論、周辺のお店はどこもパンク気味なはずだ。

「——くつくつく」

と、唐突に、そんな魔女のような笑い声が室内に響いた。

「——大人三人が集まってケーキの一つも用意できないとは。烏合の衆も甚だしいな。なあ、タカミチ」

「なッ……い・エヴァンジェリン!?!」

瀬流彦先生の驚愕は納得できる。

いつの間に部屋の中に入っていたのか。

壁に寄りかかりながら、愉快そうにくつくつと肩を揺らして笑うエヴァがいた。

なんか悪いスイッチが入っているような気がする。

「そうは言うけれど、エヴァはどうなんだい？　まさか、ケーキを買えた……というわけでもないんだろう？」

平然としているのは、高畑先生と、既に十本目の煙草に火をつけて煙をくゆらせる神

多羅木先生だけだった。

私は私で、内心で驚いている。

まさか、吸血鬼がクリスマスを祝いに来たのか——とは言わないが、少なくとも、ここ数日姿を見せなかったエヴァがこのタイミミングで部屋を訪れることが意外だった。高畑先生以外とは然程親交も深くないどころか、好感度はマイナスを突破しているだろうに。

「そ、そうですよ、エヴァンジェリン！ どのお店も売り切れだし、予約もいっぱい……！ いくら大魔法使いたるあなたでも、用意などできるはずがない！」

「ク——フハハハハハハッ！ 戯けか、貴様等。店が用意できないなら、自分で用意すればいいまでのことだ。そうは思わんか？」

「なんだって？」

「バ、バカな——！ まさか、作ったというのですか！ クリスマスケーキをッ！」

……楽しんでそうね、あなた達。

もしかして、ここに来る前にお酒とか飲みました？

高畑先生はともかく、瀬流彦先生はエヴァとそんな会話が出来る程に仲良くなつていたとは思えないのだが。

「はん、当然だ。……茶々丸！」

「はい、マスター」

呼びかけに応じたのは、当然、ガイノイドこと絡繰茶々丸さん。

なんか赤い服を着て白い髭を蓄えている。

ガイノイドというか、サンタクローズだった。

いや、あなたもか。あなたもなのか。

その手には、ケーキが入っているとされる箱が抱えられている。

「——我が下僕が作った最高傑作だッ！ ふん、当然だが、貴様等にはくれてやらんぞ。私と鈴葉で食べるために持ってきたのだからな。今日と明日とで、じっくりと、ゆっくりと味わい尽くしてやる」

「くっ——そんなことが、許されるとでも思っているのですか、エヴァンジェリン！」

「食いたいか？ ああ、食いたいだろうなあ。仕事終わりの甘味はさぞ美味かろう。だ

が、果たして貴様等にその資格があるのか——胸に手を当てて考えてみる」

「ぐっ……！」

とりあえず、エヴァの分のお茶を用意しておこう。

茶々丸さんは……確か、飲食は出来ないはず。

冷蔵庫を開けてお茶を取り出す。

「ハッ——。言い返すことすらできないようだな」

「で、ですが！ 仕方がなかった！」

「——いいや、仕方なくなどないはずだ。麻帆良周辺の店は予約を開始してから一時間と経たないうちに予約を終了する。そんなのは埼玉じゃ常識なんだよ、若造！ それを見越して行動することもできず、ましてや己の手でケーキを作れないなど、言語道断！ 己の無力を呪え！」

むう、エヴァの座る場所がない。いや、もう少し詰めてもらえればいけるか。あとケーキも有るらしいからテーブルの上を片付けなくては。開封した箱を元々の形に戻して、サイドテーブルの上に置く。高畑先生の時計は保証書とかもあるから、捨てないように注意しなくては。

「ぐ、ぐう……。——その通りだ、あなたは正しい」

「くつくつくつ、そうだ。認める、貴様等の言い分など全て戯言！ 故に、貴様等はケーキを食べる資格などありはしない！ 資格無きものに誰が手を差し伸べるものか！ ククツ——これぞ《悪》だ！ 貴様等は我が《悪》に平伏し、せいぜい床でも舐めておけ！」

みみっちい悪だなあ。

「あの、鈴葉さん。これ、マスターからの贈り物です」

そう言つて茶々丸さんは瓶が三本ほど入った袋を渡してきた。

飲み物であることは理解できるのだが、ラベルには読めない言語が書き並べられている。エヴァの贈り物……クリスマスプレゼントなのだろうか。

とりあえず、お茶を保存するくらいしか用途のなかった冷蔵庫へしまおう。

それから茶々丸さんがケーキをテーブルの中央に置いて、御開帳。見るだけで分かる、美味しいやつだ。ホイップクリームと大きなイチゴが贅沢に使われた、ショートケーキ。それがワンホール。なるほど、今日と明日でじっくりゆっくり味わうというのも納得だ。二人で食べるには少し多すぎる。

六等分して……あ、でも茶々丸さん食べられないのか。そもそも包丁も無いこの部屋でどうやって切り分けるべきか。フォークすらないし。

「包丁と食器類は持ってきたので、ご安心ください」

「ん……。あり、がと。茶々丸、さん」

「いえ、全てはマスターの提案ですから」

未だに高笑いを上げているエヴァと、なんかショックを受けている瀬流彦先生はとりあえず放っておくとして……。これ、もう切り分けてもいいのだろうか。エヴァは二人で食べるとか言ってるし。勝手に切って配るのはどうなのだろう、なんて思っていたら茶々丸さんが切り分け始めた。

……あなた、たまにマスターのこと無視するよね。



「はい、いいえ。マスターは高畑先生達が既に来ているだろうと憶測していました。このケーキは、初めから三人——或いは五人で食べることを前提として作られています」なるほど。

今のエヴァの様子からはとてもそうは思えないけれど……。

茶々丸さんは、六等分に切り分けたケーキをお皿に乗せてテーブルに並べた。残った一つを箱に戻して、冷蔵庫へとしまふ。そして、冷蔵庫の近くで手を前に組んで立ち尽くす。

役目は終わった、ということだろう。

そろそろ瀬流彦先生を椅子にして踏み付けそうな雰囲気のエヴァの手を引いて、私の左隣——つまり、高畑先生と挟む形の場所に移動させる。その過程で流石に正気を取り戻したらしく、少しだけしおらしく頬を赤らめた。

同じく正気を取り戻した瀬流彦先生にも空間を詰めてもらい——三人のオツサンが身を寄せ合うという地獄が完成した。なにこの景色。怖い。特に、真ん中にヤクザがいるのが本当に怖い。

「おいタカミチ、もう少し詰める。タバコの臭いが鼻につく」

「ええ!! いやあ、はは。神多羅木くんのタバコじゃないかな?」

「俺かよ」

「どつちでもいい、詰める」

やはり狭いのだろう。エヴァは不愉快そうに文句を垂れる。こればかりはどうすることもできない。そもそもこのテーブルは、これだけの大所帯で囲むことを前提としていない。

「エヴァ、こつち」

なので、エヴァの裾を摘んで、ぐいぐいと引つ張る。

これ以上オツサンたちが身を寄せ合う地獄を見たくなかった。

「んあ？ こ、こら、引つ張るな。お前が窮屈になる必要はないだろ」

「こつち」

「む……。お前がいいなら、構わんが……」

「エヴァは鈴葉ちゃんに弱いなあ。すっかり懐かれてるし」

懐つ……？

人を犬か猫みたいに言わないでほしい。

「エヴァンジェリンと会う時は鈴葉ちゃんを連れていきましよう。怒鳴れませんよ、きつと」

「それはいいね」

「逆鱗に触れて終わりだろ」

「くびるぞ、貴様等……」

また一悶着あるのだろうか、と思ったが、そんなこともなく、エヴァがケーキを一口頬張るのを皮切りに、各々が目の前のケーキへと手を付ける。

神多羅木先生を除いた先生方は「いただきます」と丁寧に手を合わせていたが、私もそうするべきだっただろうか。

作り手である茶々丸を見ると、相変わらず目を閉じて表情を変えことなく立っている。待機モード……マナーモードのようなもののだろうか。そのうちブルブルと震え出しそうだった。

ケーキは——実際に食べるのがこれが初めてだから、他のものと比べることはできないが、間違いなくプロ並みの出来映えと言っているのだから。これだけクリームを使っているのに甘すぎないし、少し酸っぱいイチゴの味が主役として生きている。

先生方もその完成度の高さに感嘆の声を上げる。あの神多羅木先生でさえもだ。

エヴァは無言だったが、満足しているのは誰が見ても明白だった。猫のように目を細めてもぐもぐと咀嚼する姿は、とても何百年と生きている吸血鬼にして大魔法使いであるとは思えない。

茶々丸さん程の高性能ガイノイドともなれば、自身の中でネットワークに接続する術も持っているのだろう。訊けば「某有名店のレシピを抜き出しました、ハッキングで」と

か言い出しそうだ。

しかし——これを、茶々丸さんという存在を現代の科学で成り立たせるといふのは、どのような技術力なのだろう。少なくとも、生き残っている記憶の常識という項目を掘り返してみても、このような存在は作れないという固定観念にも似た主観を叩き出す。エヴァの魔力で動いているということは、魔法も一枚噛んでいるのだからうけれど。しかし、どんなに魔法が秀でていても、ベースとなる絡繰茶々丸を作った技術者の腕は、やはりどこか現実離れしているように思える。

まあ、私は魔法についての知識もごっそりと抜け落ちているので下手なことは言えない。考えても詮無きことだ。

それからケーキを食べ終えた先生方は、役目を終えたと言わんばかりに去っていった。

去り際に「家に持ち帰った仕事を片付ける」と言っていた。それでなくたって明日には明日の仕事がある。あまり夜更けまで遊び続けるといふ訳にもいかないのだろう。

エヴァは「やつと帰ったか」と言つて、広くなった空間で足を伸ばした。斯く言う私も、ベッドに背を預けながら凝り固まった身体を伸ばす。

左手首に着けた時計を見れば、既に二十二時を回っていた。彼等が来てから三時間程が経過している。

「さて、鈴葉。今日はまだ寝させんぞ?」

エヴァは冷蔵庫を開けて先程茶々丸さんから渡された瓶を取り出して、そう言った。その横に立つ茶々丸さんとは言えば、相変わずマナーモード待機。寝ているのかもしれない。ガイノイドが寝るのか——と言われると、分からないの一言を返す他ない。

「安酒で悪いが、別荘にあるものはまだ寝かせておきたいのでな」

……お酒だった。

「エヴァ……私、未成年」

「細かいことは気にするな」

無理がある。

飲酒に興味がない訳ではないが、それとこれとは別の話である。法律遵守は常識だ。

そもそも私が飲酒することになんの意味があるのか。どんな理由が必要なのか。

逆にどのような意義と大義があれば酒を飲めるというのだろう。

残念ながら、そのようなものは見つからなかった。

「ほら」

しかし、私のそんな思考とは裏腹に、エヴァは瓶の中身を食器と共に持って来たのだらうグラスにそそいで私へと渡してきた。嗅ぎなれないアルコールに、脳がビツクリしているような気がする。

「……んー」

受け取ってはみたが、受け取ってしまったけれども、これを口にするのは少し勇気がいる。

「安酒とは言ったが、不味くはないと思うぞ。フランスのブルゴーニュで作られた白ワインだ。正規輸入品だから安心して飲むがいい」

……逆に考えよう。

今の私は法律とは無関係な立場にいる。少なくとも、法律に守られているというよりも——法律から守られている。

食人という行為は、学園も絡んだ立派な犯罪行為である。エヴァは死んでないから……傷害罪、だろうか。たとえ合意の下であろうと、エヴァが訴えれば立派な事件になってしまう。いや、現実的ではない話なのだが。

そもそも吸血鬼は法律に守られているのか——いや、そもそも国籍は？ 国民扱いなのか？ もしかしなくても不法滞在在外国人なのではないか？

「……」

「なんだ、そんな見つめて。これは私のだからやらんぞ」

いつの間に自分のグラスに白ワインを注いでいたのか、それを胸に抱きながら私の視線に異議を申し立てる。いや、私も持つてるし——持たされているし。なにより、そん

な積極的にかめつくお酒を飲もうとは思っていない。

なんというか、エヴァにこんなことを言ったら怒られてしまうかもしれないけれど、封じられた場所が麻帆良で良かったね——と、そう思わずにはいられなかった。

さて、麻帆良が法外の地であることを認識した今、法律という壁はなくなつた。先生方に見られれば全力で阻止されるに違いないが、生憎と、今はエヴァと茶々丸さんと私だけしかない。

グラスの中で揺れるワインを矯めつ眇めつ見る。見た目からは美味しいのか不味いのかすらも判断できなかつた。

ごくり、と、固唾を呑む。

「ふむ……。やはり悪くない。わざわざまほネット注文しただけあつてクオリティは確かだな」

唇で触れるように飲む姿はいつそのことソムリエが如く。いや、本物のソムリエなど見たこともないので、ただのイメージの話だが。

……美味しいように飲んでいる。

美味しい……。のだらうか。

うん、もうこの際、ごくごく飲んでもおおう。どうせ怒られることもないし。なにより、やっぱり、少しだけお酒に興味がある。

グラスに口をつけて——思いきって、天を仰いだ。

重力に従って流れ落ちるお酒を舌で受け止めて、喉に流し込む。

「んんっ!?!」

なんだこれは。これは飲み物なのか。一瞬、喉が焼けたかと思った。

「おいおい、あまり一気に飲まない方が良いぞ」

勧めた本人が心配するのだから、良くない飲み方をしたのだろう。大学一年生じゃあるまいし、一気飲みなどするつもりは無かったのだが、凶らずしてそれに近いことをしてしまったらしい。

びつくりして気道に入りかけた。咽る。

「むう……」

落ち着いてから、手に持っているお酒を睨みつけた。

これは、とても飲み物とは言えない。フランスだかなんだか知らないけれど、これを飲み物として認めるのは私の中の常識が崩れる。

……もう一口。ちびちびと、舐めるような飲んでみる。

口腔内が痺れた。

これ毒だ、毒だよ、エヴァ。

ほら、だつて……。



また一口、飲む。

「んっ！ んっー！ んんんん……」

「……あー、辛口だからな。飲み辛いなら無理はするなよ？」

無理？ 無理というのはつまり行動に起こせないということだ。つまり私がお酒を飲むことすらできないとでも言うつもりなのだろうか。既に口に行っているのに。それは矛盾のようななにかなのではないだろうか。

まったく、エヴァは何を言っているのだろうか。

もう一口。

「……鈴葉？」

「なに？」

「いや、大丈夫なのか？」

「至って健康だけど」

「お、おう」

全く——全く全く。今日のエヴァは少し変だ。瀬流彦先生と妙に親しげに話していたし、高畑先生とは相変わらず仲良さそうだし。タカミチって呼んでるし。

今日のエヴァを思い返していると、茶々丸さんが「録画を開始します」とか呟いた。ここにはテレビもないのに、一体なんの録画をするのだろうか。

「エヴァ」

「な、なんだ？」

「……誰が本命なの？」

「ぶほっ！」

吹き出した。汚いなあ。

タオルはどこだっけ。んー、まあいいか。

ぐくぐくと喉を鳴らして、グラスの中のワインを全て流し込む。

「本命って——なんのことだ！」

「誤魔化さないで。瀬流彦先生なの？ それともやつぱり高畑先生？」

「バカか!？」

「私はそんなにばかじゃないよ？」

「いや、そういうことじゃなくてだな……。タカミチは昔のクラスメイトだし……。あの

若造は知らん」

「瀬流彦先生と急に仲良くなるわけ無いでしょ」

「お前、いつもの喋り方はどうした」

「誤魔化さないで」

「酔うとめんどくさいな、お前！ ていうかも酔ったのか!? 弱すぎるだろ！」

「私は……?」

「は?」

エヴァの服をつまんでみる。くいくいつと引つ張る。

「私は本命?」

「ぶほあつ!」

また吹き出した。

吹き出す度にお酒が無駄になっている。

勿体無いなあ、なんて考えていると、茶々丸さんが空になったグラスにおかわりを注いでくれた。感謝の言葉を短く伝えながら、また一口。お腹の奥が焼けるように熱い。

平衡感覚が家出して、三半規管がうねる。

「な、ななつ、なにを!」

「ずっと一緒にいてくれるって言った」

「そ、そうだな」

「だから、私が本命?」

「そもそも本命ってなんだ!」

「パートナー。恋人。結婚相手。伴侶」

「いやいやいやいや——なぜそうなる!」

「むう……答えてよ」

答えられないっていうのはそういうことだよ、エヴァ。だめだよ、日本は一夫多妻制じゃないから。ちゃんと選ばなきゃ。

「ぐ、ぐう……。パ、パートナーという意味なら、茶々丸だが」

「茶々丸さんにも手を出したの？」

「違う、違うぞ……。そうではなくてだな！」

「……………浮気者」

「ぐはっ……………」

——それから、私は眠くなるまでずっとお酒を飲み続けた。

相手の顔を見るより先に、頭で物を考えるよりも先に言葉を口走って、最終的にエヴァに説教のようなことをしたような気がした。「私のことはなんとも思っていないの？」とか、「好きって言うてよ」とか。思い出すだけで怖気の走る言葉の連続。正直、気色悪いとしか言いようがない。

アルコールで頭が吹っ飛んでいたのだろう。

暑くなって着ていたワンピースを脱ぎ始めたり、エヴァに抱きついて泣きついたり――

—それはもう、めんどくさい性格になっていたと思う。

お酒は人の本性を顕にするとかなんとか、言われてるけれど、あれが私の本性だなんてことは絶対にありえない。私の部屋の直上に居座っている教会に手を合わせて誓おう。私は、あんな性格じゃ、ない。

なにか辛いつて、記憶が飛ぶとか、そんな都合のいいこともなく、全部しつかりと憶えている事だった。

結局私の部屋で寝落ちしたエヴァは、起きて第一声に「勧めといてなんだけどな、お前、酒飲まないほうがいいかもしれん」と言った。

私もそう思います。本当に、心から。

ちなみに、余談だが——

起きたエヴァはシャワーを浴びて、茶々丸さんがログハウスから持ってきたインナーやシャツに着替えて、そのまま学校へと向かった。

放課後には私から中等部エリアに出向き、エヴァをお迎え。一度ログハウスへと帰宅。鏡とにらめっこしながら結った髪はやはりうまくいかず、結局エヴァに結び直してもらった。「ツインテールだと首元が冷えるだろ」とのことで、ツーサイドアップ。編み込みとかそういうのは時間がある時に教えてくれるそうだ。

それから着替えを済ませたエヴァと茶々丸さんの三人でイルミネーションを見て

回った。瀬流彦先生が言っていたことは間違っていないようで、そこかしこに電飾がぶら下がっており、まるで降らずに留まる雪のようで綺麗だった。

更に、「昨日渡せなかったから」と言われて、エヴァからクリスマスプレゼントを貰った。

白のマフラーだった。どうにも手作りらしい。こういうものはなかなか時間がかかるのではないかと思うのだけれど、ちくちくと進めてくれていたのだろう。この三日間私の部屋に來なかつたのは、間に合うように追い込ませた結果なのかもしれない。エヴァの腕なら——もう何十年と積み重ねきた腕と魔法を使ったのなら、容易く時間もかけずに作り上げてしまいそうだが、魔法も使わずに丹念な作業の上で完成させたのだろう。

夜空とイルミネーションの下でマフラーを巻いてもらうというのはなかなかロマンチックな光景だったが、当時の私は歓喜のあまり小躍り——あくまで暗喩だが——してあまり周りのことなど見えていなかったし、齒に衣着せぬエヴァの物言いはとてもロマンチックとは言い難かつたような気もする。

だが——それで良かったのだろう。

今更飾のような、齒の浮くようなことを言い合うような仲ではない。

ロマンなど要らない。

ドラマも要らない。

ただ、この日常が永遠に続けば、それでいいのだ。  
さて……私の部屋に残ってるお酒、どうしよ。

## E p. 13

雪が舞っている。

天上から緩慢に漂う一欠片を眺めたところで、それは幾つもの白雪と交錯し行方を眩ませる。存在すらもあやふやな、だけれど確かに存在する幻が如く一つの雪結晶は、最早埃程の価値すらも失くした。こうして視界を揺らしている間にも、足元を見ずとも目に入る深雪の一部となり果てていることだろう。それを指差して見つけたと言え、雪は驚いてくれるかもしれない。しかしひと粒の結晶が身動いだところで——当然、身動くことなど無いのだけれども、仮に跳ねるなり震えるなりしてくれただころで、私はそれを捕まえることもできないだろう。

傘が重い。

誰かも分からぬ女生徒が、雪の中で立ち尽くす私を見て何を思ったのか、手渡してくれたものだった。

私は笠地蔵か。残念ながら、道祖神になるつもりは甚だ無いし、恩義に報いることもできない。

なにより、地蔵になる為に立ち尽くしている訳ではない。



呼び出し——とは少し違う。約束とも少し違う。ただ、エヴァが言うには、「会わせた  
い奴がいる」とのこと。

地下の部屋は未だに立ち入りの規制があるため、私から出向く他なく、こうして放課  
後の時間を狙って中等部前に足を運んだという、それだけの話である。

現在、時間にして十八時五分。ここについたのが十七時のちよつと前だったから、既  
に一時間ほど待ちぼうけを食らっている。折角なら時間の指定までしてくれば良い  
のに、と思わなくもないが、どうせやることもないので恨みもない。足を棒のようにし  
て待つていれればいいだけなのだから、難しい要求でもなかった。

校舎から出ていく生徒の数は疎らながらも少なくもない。

放課後であることに間違いはないと思うのだが——会わせたい人とやらと話が混み  
合っているのかもされない。エヴァが会話に熱中している姿は少し想像が難しいが、そ  
れ以外に考えられる可能性も少ない。忘れられている、というのが最も辛い、それは  
有り得ないだろう。そこまで疎かな人ではないし、人間関係にルーズと言うわけでもな  
い。

まあ、なにをどう考えたって、私はここで待つしかない。

「——ありや、こないな場所ぞどないしたん？」

ふと、そんな声をはつきりと鼓膜が捉えた。

少し視界を校舎の昇降口の方に向けて見れば、女子中等部の制服を着た女生徒が私のすぐ隣に立っていた。傘に邪魔されて顔までは見えないが、その太腿にも届きそうな黒髪には見覚えがあつた。

「ゲ……なに、子供？」

「ハルナの知り合いや。ウチの親戚の子らしいで？」

「ふうん？ 別になんでもいいけど、雪に埋りそうになつてるわよ……」

木乃香さん——だろう。

その背後で、なにやらオレンジ色の髪の毛が二束、揺れている。

傘をずらして、顔を覗き見る。相変わらず、どこか母性を感じる柔らかい表情の持ち主は、やはり木乃香さんだった。

傘をずらした拍子に、降り積もった雪が私の足元に落ちる。なるほど、雪に埋りそう、とは比喻でも何でもなかったようだ。地蔵から雪だるまへジョブチェンジするところだった。

「木乃香、さん」

「名前覚えてくれとつたん？ なんや、嬉しいわ〜」

例に漏れず、自己紹介などした覚えはない。

これはこれで一方的なのだろうか——なんて、あの図書館島の亡霊を思い出す。

私の名前を知っているのは、エヴァと茶々丸さんと先生方くらいなものである。

「木乃香く、寒いから早く帰りたいんだけど〜!」

「んー、でも放つとけんわ」

ツインテールの女性は、私こと地蔵には興味もないらしく、体を震わせながら帰宅を提言する。しかし木乃香さんは構うことなく、私と目線を合わせるようにしやがんだ。

人を安心させるような柔和な笑みだった。

「中等部に用があるん?」

「……………」

そう言われると困る。エヴァと会うためにはここで待つのが一番効率的というだけの話なので、中等部に直接用事がある訳ではない。

なにより、白い息を吐きながら両手を擦り合わせて少しでも暖を取ろうと必死になっている女生徒が気になった。

木乃香さんは「気にするな」と言ったところで「ほな、さいなら〜」と帰ってくれるような人ではないだろう。そういう人格ならば、こんな寒い道端で足を止めてまで私に話しかけることはいらない。

「……………人、待ってる」

用はない、と言えば、無理矢理にでも帰宅を促されそうだったので、素直に答えるこ

とにした。

どう返したところで、木乃香さんに「ほな帰るわ〜」と言わせることは難しい。ツインテールの人には犠牲になってもらおう。いや、痺れを切らせば勝手に一人で帰るなり木乃香さんを無理矢理ひきずって帰るなりするだろう。

「ほな、呼んできたるか？ 誰を待つとるん？」

おっと。

そう来たか。

うーん、困った。

エヴァを待つてると言ってもいいものなのか。そもそも早乙女さん達と同じクラスなのかも分からない。仲良さそうだったけれど、クラスメイトじゃなきゃ仲良くなれない、という訳でもないだろう。

「……………エヴァ」

逡巡したものの、私はこれまた正直に答えることにした。

勝手な判断であることは承知しているが、木乃香さんは変な勘違いもしないだろうし、ツインテールの人は私に興味なさそうだし——取り立てて問題になることもないだろう。

「えづあ…………？ もしかして、エヴァンジェリンのこと？」

意外にも、答えたのはツインテールの人だった。

「んー、エヴァちゃんかあ。まだ教室におけるかな？」

……………んん？

「どうかしら。珍しく超チャオさんと話してたような？」

木乃香さんは、今、エヴァのことをなんて呼んだ？

エヴァちゃん？

もしかして、普通に友達なのだろうか。

エヴァは進んで人間関係の話をすることはないし、私も深追いはしない。なので、知る機会がない。

深く考えたところで詮無きことであるとは思うのだが……………エヴァの友好関係の謎は深まるばかりである。

……………あんな性格だからなあ。しかし、木乃香さんみたいなんびりとしたマイペースな人とは、存外に相性がいいのかもしれない。

「ほんなら呼んできたるわ〜」

「……………仕方ないわね。私も付き合うわよ。君、名前は？」

ツインテールの人が、初めて私と目を合わせた。

人見知り——とは違う。ただ、なんだか、私のことが苦手なようだ。第一印象が〃雪

に埋まりかけてた人”だから、少しインパクトが強すぎたのかもしれない。だからってそれだけで苦手意識を持たれるというのはなんとも言えない。雪だるまにトラウマでもあるのだろうか。

「……蒼井、鈴葉」

——その刹那。なにか、鋭い気配が、首元を掠めた気がした。なんとなく後ろを振り返ってみるものの、人の気配は無い。

それは、敢えて言うならば、視線というもののなのだろう。だが、視線にしろ視界にしろ、それはあくまでも感覚受容器であり、受動的な情報獲得媒体ではない。

他者の視線を身体で敏感に察知するなんて芸当は、私には出来ない。

ならば、それは視線ではなく、なにかしらの——。

「鈴葉ちゃんね。それじゃ、呼んでくるから。木乃香もここで待ってて」

「あ、待ってくなあ、アスナ。ウチも行くえ？」

「いいわよ、私一人で。鈴葉ちゃんのが気になるんでしょ？」

「それはそーやけど……」

「放っておいたらまたお地藏様みたいに立ちっぱなしになるわよ、その子」

「ん〜……。せやなあ、ほんなら任せるわ。鈴葉ちゃん、とりあえず学校ん中入ろ？ こ

ないなとこにおつたら風邪ひいてまうで？」

何故誰も彼もが私を地蔵扱いするのだろうか。立ち尽くしているという自覚はあるけれど、少なくとも私は石ではない。

不服と言う程ではないしても、どこか複雑な心境の私の手を引く木乃香さんに身を任せる。

ツインテールの人が先行して校舎に入ると、その下駄箱の奥の廊下に、見慣れた金色が流れた気がした。

いや——気がしたというのは、今回ばかりは気のせいではなく、それは私が普段の日常から目にする見慣れた地面にも届きそうな長い金髪だった。

「あ、エヴァンジェリンと……超さん」

「む……？ ……神楽坂明日菜か」

「ちようど良かった。アンタにお客さんよ？」

「あちやー、これは待たせてしまったカナ？ すまないネ、エヴァンジェリン」

「だからあの女のことなど構うなど言っただの、全く……」

「タハハ、しかしあの人の予定が狂ったのも事実ヨ。……ふむ、しかしなるほど、なるほどなるほど、この娘が、ネ」

エヴァの隣に、知らない少女が立っていた。

両側頭部で髪をシニヨンに纏めて、そこから三つ編みにされた束がちよこんと伸びて

いる。それに加えて、なんだか変わった訛り口調だった。

その少女はエヴァのことを追い越し、ツインテールの人のことも無視するようにして、真つ直ぐに私の眼前へと躍り出た。それから観察するように矯めつ眇めつ私を眺める。とても居心地が悪かった。

思わず木乃香さんの背後へと隠れようとするものの、彼女はお構いなしである。

それから何かを納得したように、何度か頷きながらエヴァを見る。

「いやー、エヴァンジェリンの愛人なんて言うから、どんな人物かと思えば、これはなかなか、可愛らしい子ネ！」

爆弾を投下しやがった。

さて、愛人とはどういうことだろうか。いや、読んで字の如くなのだが。しかし読むで字の如くだとしてそれを事実であると称するのは無理があるだろう。

「ややわく、超りん。鈴葉はウチの子やで？」

意外にも、エヴァが口を開くよりも早く木乃香さんがなにかを宣う。いや、親戚という扱いなので間違いではないのだが。しかし身内かと言われるととても判定が難しいところに位置している。

それでも、いつの間にか私のことを呼び捨てにしているあたり、なにか確信的なものを感じた。



「アイヤ！ 木乃香サンも鈴葉サン狙いネ？ これは思わぬ刺客ヨ、エヴァンジェリン。知ってる力？ 三角関係の物語はどれも報われない結末を迎えるヨ」

「ひゃー、そないない言い方されるとなんや恥ずかしいわあ」

「流石に木乃香はそういう趣味じゃないでしょ……？ 委員長いんちよじゃあるまいし」

「そもそも三角関係に巻き込まないでいただきたい。一番刺されやすいポジションではないか。」

恋愛小説は苦手なのだ。起承転結は大事だと思いが、如何せん転ずるところでこちらの感情を揺さぶってくる。胸が苦しくなる。そこから先を読む気力さえも奪われる。端的に言えば、その感覚が嫌いだ。

さて、奇しくも早乙女さん達と似たような弄られ方をされているような気がするのだが、エヴァのご機嫌は如何でしょうか。こちら、怖くて確認できません、オーバー。

「はん。貴様の戯言に付き合っている時間はないのだがな——喧嘩なら買うぞ、超鈴音」  
買わないで。

「剣呑剣呑——喧嘩など売ったつもりはないのだがネ。事実を並べたまでヨ」

「推測を事実と称するか。少なくとも『鈴葉が私の愛人だ』などと言った覚えはないが」

「推測とは事実を明るみにするための手段に他ならんヨ。推測を事実と呼ぶつもりはさ

らさらないが、事実には迫った推測は、最早事実と呼んで差し支えないネ」

「事實は事實、推測は推測だ」

「それは短絡的ヨ。私は私の推測に自信がある。そしてそれはいつだって事實として昇華されるネ」

「妄想を具現化する能力でも手にしたつもりか。思い上がりも甚だしい」

「そんな魔法のようなことはできんヨ。だが敢えて言うならば——事實を妄想することはできるネ」

「妄言だな。透視や未来予知を騙る下賤で陳腐な詐欺師にでも転身するか？」

「一定の法則に沿って物事を並べれば透視も未来予知も可能だろう。魔法など無くともネ。それは科学の領分を出ない——ただのパズルと相違ないヨ」

気付けば喧嘩のような——或いは口撃のような応酬がそこにはあった。シニヨンの少女は「売ったつもりはない」とは言ったものの、その架空の商品はどうかやら正式に取引が成立したらしい。

一触即発——とは言うまい。その導火線には既に火が着いている。あとはその小さな熱源が火薬へと到達するまで身を竦ませながら待つばかりである。

「直接目にした訳でも、ストーリーを聞いた訳でもない人間関係ですらパズルか？ 足りないピースを樹脂で埋めただけの出来損ないだな、不愉快だ」

「何を言うか？ 私は今、この目で、エヴァンジェリンと鈴葉さんと木乃香さんを直接見ているヨ。人の表情や目線だけでも人間関係など明白ネ」

「実験心理学ごっこか、くだらん。表情も目線も、傾向にあるというだけの話だ」

「だが蓄積されたデータはやはり事実に基づいているヨ？」

「基づいたからと言って全ての事実現象に当てはまるものではない」

「——だが、エヴァンジェリンが鈴葉サンのことを大切に想ってるのも、鈴葉サンがエヴァンジェリンのことを大切に想ってるのも事実ネ。木乃香サンが鈴葉サンに向ける庇護欲も、逆にあまり関わりたくないと距離を置くアスナサンも、ネ」

そこで、エヴァは言葉を詰まらせた。いつの日かのように、「うぐっ」と奇妙な鳴き声を上げる。心なしか頬も赤く染まっているようだった。校舎内とは言えども、雪も降る冬のこの時間は健康に障る。外ももう暗くなっている訳だし、そろそろ導火線の火を踏み消してもいいのではないだろうか。

そんなことを思っていると、ふと背中からぎゅっと抱きしめられた。少し引つ張られたせいで、重心を完全に預けてしまう。思わず漏れた「あう」なんていう情けない声も、気にもせず、私の背後の木乃香さんがほんの少しだけ柔らかさを消した声色で、

「二人とも、なんや口喧嘩しとるみたいやし、とりあえず鈴葉はウチが預かるで？ こないなところまで長話してたら体調崩してまう」

そんな、極めて常識的な言葉を二人に投げかけた。

まあ私としては、例に漏れず陰湿な図書館の亡霊から贈られたパーカー（加護付き）を着ているので、寒くはないのだが。これで体調を崩すとすれば、それは別の要因があると言つていいだろう。

「ちよつと、木乃香！ まさか私達の部屋に連れて行くつもり!?」

「なんや、アスナ。こんな寒空の下に鈴葉を置いていく気なん?」

「そうは言わないけれど……」

「ほな、ええやんな?」

時折思うのだが、木乃香さんは時折とても強引だと思う。それは棘というよりも、誘導するような、とても頑固な意思というかなんというか。形容し難いけれど、とにかく折れてくれない一面がある。

いや、直接言葉を交した回数など高が知れているのだが——それでもその一本通った太い芯は、傍から見ても明白であろう。

「待て待て待て、近衛木乃香」

「そうヨ、木乃香サン！ ちよつと待つヨロシ！」

と、先程まで犬猿の仲が如くがみ合っていた二人が、ここに来て、呼吸を合わせて木乃香さんに視線を向けた。犬の背中に乗る猿もいる、ということだろうか。決して犬

と猿が仲が悪いばかりではないといういい例だろう。

……犬とか猿とか、そんな例え方をしているといつか怒られそうな気がした。

「なんや?」

「鈴葉はこれから……ちよつと病院に用があるんだ。定期検診のようなものでな」

「そ、その通りヨ! 私もその付き添いを頼まれていてだネ!」

「ほんなら、喧嘩しとる場合とちやうな?」

「む、むう……」

「……そうネ」

流石に正論を並べられてしまつては押し黙るしかないらしく、二人は大人しく身を引いた。

「とうか病院とは?」

「そんな話は聞いていない。」

「もう喧嘩せえへん?」

「……こんな奴との軽口の叩き合いはもううんざりだ。売られたつて買わん。だからそろそろ鈴葉を返せ、近衛木乃香」

「ええけど、あんまいじめんといてな?」

木乃香さんの目には、エヴァが人をいじめる人に見えるらしい。否定しきれないから

なんとも言えない。

だが、逆に考えてみれば、人を人として見ていないような時すらあるエヴァが売り言葉に買い言葉とは言えどもまともに対話をしているのだから、シニヨンの少女はきつとエヴァにとつては「どうでもいい人間」と言う訳ではないのだろう。少なくとも、話を聞く価値はあると判断していると言え、多少その態度も可愛げがある——と、言えなくもない。

それから、木乃香さんは私を抱き寄せていた腕を離した。それと同時に、シニヨンの少女から逃げるようにエヴァの背後へと回る。会話から察するに、この少女は私を——或いはこの場にいる人間全てを見透かしていると考えていいだろう。そういう目線は、あまり好きではなかった。

「はあ——とりあえず目的も達成したわけだし、もういいでしょ。帰ろ、木乃香」

威嚇をするような私の行動にシニヨンの少女が目丸くしている中、ツイーンテールの人がそう言つて昇降口を出ていった。

「せやなあ……。鈴葉、氣い付けてな？」

「……………んっ。ばいばい」

エヴァの背中越しに手を振ると、木乃香さんも小さく手を振つてくれた。なんだか深く惜しんでいるような表情だったが、なにか思うところでもあるのだろうか。まさか私

を抱きしめることに喜びを覚えている訳でもあるまいし——いや、ない話でもないのか。なにせ、母性の塊だ。

それから、もう真つ暗になった外に消えていったツインテールの人の背中を追いかけて——やがてその姿は見えなくなつた。

「……………行くか」

「そうだね。あまり待たせすぎると、あの人は凄く怖いヨ」

エヴァは私の手を取ると、木乃香さん達の後を追うように歩き出した。エヴァを挟んでシニヨンの少女も横に並んで歩いている。

いつの間にか雪は止んでいた。

## E p. 14

「私は超鈴音<sup>チャオリンシエン</sup>。エヴァンジェリンの数少ない友人の一人だよ」

シニヨンの少女——超鈴音は、そう言つて私へと手を差し出した。なにやら皮肉も混じっていたような気もするが、先程の木乃香さんの言葉もあつてか、多少睨みつけるような目線はあつたものの、エヴァはその言葉を受け流した。

それが、数十分前の話。

今、私は病院——ではなく、大学に付属する施設へと足を踏み入れていた。生物工学科の研究施設エリアらしい。

大学エリア自体、訪問するのは初めてだったこともあり、珍しげな視線をあちこちに飛ばさざるを得ない。研究施設と言うだけあつて、恐ろしいほどに無駄なものがない。潔癖症の集団なのかもしれない。

時折すれ違う、大学生なのか研究員なのかも分からない人達は皆一様に白衣を身に纏い、チャオに対して「お疲れ様です」と声をかけて頭を下げる。チャオは中等部の制服を身に纏っているし、その幼さの残った顔からしても中学生であるはずなのだが——何故か、人々は彼女を会社の上司であるかのように敬意を払つて接しているようだった。



「チャオ、すごい人？」

多少は警戒心も解けて、チャオの屈託のない笑みに惹かれつつある私は、そう問いかけてみた。

特に意味はなかったし、それを知ったところで私にはなんの得も無いのだが、時には会話も挟まなければ不安になる。エヴァと違って、無言の時間でさえも居心地が良いと思える人と言うわけでもないし。

まあ、どんなに無益なものでも、気になってしまった疑問というものは無条件に気持ちをややもやとさせる。それを解消することまで無益とは言えない。

「ん〜？ 私、火星人ヨ。地球人は皆私を尊び敬うネ。そういう意味では凄い人と言っても過言ではないカナ？」

「……………」

なんとなくチャオの手を握った。

熱は無さそう。平熱が低いのか、むしろ少しだけひんやりとする。

「そう、だね。月は、宇宙船。太陽、は、実は熱くない。うん、信じてる、よ」

「そう言う割には可哀想な人を見る目をしてるネ」

そんなつもりはない。思想は自由だ。妄想するだけならタダだから。しかし、事実を妄想すると宣っていたこの少女にとって、自身が火星人であるという妄想すら事実なの

だろうか。

いや、妄想であると決めつけるのは良くないとは思う。しかし、どうしたって火星人というものを認めるのは、少しだけ難しかった。

チャオから手を離して、エヴァの隣へと戻る。そして、チャオよりひとまわりほど小さな手を取る——そんな所作も、もはや特別感すらない、日常の一つとなっていた。

いつからそうなったのかは覚えていない。初めてエヴァと二人で外に出たときから、自然とそうなっていたような気がする。さもありません。

そのまま他愛も無い話を時折しながら歩き続けていると、やがてチャオとはある部屋の前で足を止めた。エヴァと私もそれに倣って立ち止まる。ドアには「第四特殊研究室」と表記されているが、どのような目的を持った部屋なのかは想像しにくい。研究をすることに違いはないのだろうけれど、なにを研究するのかは明確ではない。なんとなく不安になって、エヴァの横顔を覗き見た。いつもと変わらない、どこか思案するような表情だった。

チャオが胸元に掲げていた証明証を認証パネルに掲げると、それは無機質な音を立ててロックを解除させた。ドアをスライドさせると、コーヒーとタバコの臭いが全身を打ち据えた。高畑先生や神多羅木先生のおかげで慣れてはいるものの——かなりキツイ。

「待たせたナ、教授」

「私が人を待ったことなんて一度もないわよ。待つほど暇じゃないの」

「形式のようなものネ。気にするナ」

「皮肉よ。暇じゃないのは事実だけれど」

部屋に入つて、まず、驚いた。

床は比較的綺麗だが——問題なのはテーブルの上だ。私の部屋が二部屋も四部屋も収まりそうな広い空間には、四脚程のテーブルがあり、ドアから向かつて右側には幾つものモニターやらパソコンやら名称もわからない機材やらが散在する壁と一体になったテーブル（というより、出っ張りとも言おうべきだろうか、名称が分からない）もある。それらの上に積み重なり、いくつかの山は既に崩れ去っている、そんな書類の数々。一息吹けば大惨事は免れないだろう。整理整頓が苦手とか、そういうレベルではない。よく見渡せば、向かつて左側にはなにやら薬品などが収納されているらしい棚もあるのだが、そこでさえも薬品よりも書類の方が優勢な群れとなって乱雑に詰め込まれていた。

「エヴァンジェリンと鈴音<sup>リンシエン</sup>は適当なところに座つて待つててください。鈴葉ちゃんはこっちなね」

言われて、一際大きなモニターの前に座っている女性を見た。

あつちこつちに跳ねている真っ黒な髪の毛は妙に脂ぎつていて、数日間シャワーすら

浴びていないのだろうと憶測できた。目の下にはくまができてゐるし、頬も痩せこけてゐる。目やら頭皮やらを執拗に搔いてゐる。痒いのだろう。

不健康というよりは、不衛生である。どのような生活を送ればこのような状態へと成り果てるのだろうか。

廊下ですれ違つた人々とは違つて清潔感の欠片もないくたびれた白衣が全てを物語つてゐるような気がした。

兎も角として、私は女性に言われたとおり、女性と向き合う形で置かれた椅子に腰掛けた。傘は椅子に立てかけて、マフラーも外して折り畳み、テーブルの上の僅かな隙間に置かせてもらう。そんな一連の動作を見守つていた女性は、一泊だけ呼吸を置いてから口を開いた。

「さて——こうして意識的に顔を合わせるのは始めてかしら。私としてはちよつと前までは毎日あなたの顔を見ていたせいでそんな気はしないのだけれど」

「毎日……?」

「毎日よ。美少女の寝顔というのは目の保養にはなるけれど、実際目にはしているのはモニターだったから、私の眼精疲労はマツハよ」

現在進行形でね、と。彼女は続けた。それもまた皮肉だったのかもしれない。

彼女は胸の内ポケットからタバコを取り出して火をつける。吐き出した紫煙が吹き

かけられたが、わざとではないのだろう。恐らく、距離感すら掴めていない。

「教授、あまり時間も無いはずヨ。さっさと本題に入ってはどうかナ？」

いつの間にか椅子に座って優雅にコーヒーを飲んでいたチャオは、促すようにそう言った。コーヒーカーップなんて、この部屋のどこにあったのだろうか……。

エヴァはエヴァで、なにやら資料を手にしてにらめっこ。難しそうな顔をして一枚ずつ目を通していった。珍しがっているのかもしれない。

「それもそうね。まずは——あなたがあなたの異常性に気付いたということだけれど、どれくらい自覚があるのかしら」

それは、言うまでもなく、エヴァの肉を捕食するという特性のことだろう。捕食という、なにかと物騒な響だが、この言い方がしっくりくる。「食事」などと美化してオブラートに包んだところで、つまるところは食人行為——カニバリズムである。

これについては、私は良く理解していない。実のところを言えば、何故「エヴァの肉なのか」すら分かっていないのが現状だ。肉であれば何でもいいという訳ではないのだろうけれど、肉以外の食べ物も私は正常に摂取できる。吸血鬼の肉でなければいけない理由など、想像もつかない。

「まあ、自覚レベルなんて正直どうでもいいのだけれど、確認だけはさせてちょうだい」「エヴァを、食べる——食べて、きた。それだけ」

「ん、甘美な響きネ！ やっぱり愛人なのではないか？ それもエヴァンジェリンがネコとは、恐れ入るヨ」

「アホか、貴様ツ」

「鈴音、茶々を入れないで。——でも、そう、なるほど。それだけなのね。まあ、そうよね。むしろノーヒントでそこまで辿り着いたのなら重畳よ。それについて、あなたはどう考えるかしら」

どう考える——と、言われましても。

もしもそれがエヴァと一緒にいられる口実になり得るのであれば、私はきつとそれを「嬉しい」という言葉で形容するのだろう。何故か——私はエヴァに酷く執着している。流石に、それくらいの自覚はある。それをどうにかしようとは思わない。おおよその事には理由がある。意識的だろうが無意識だろうが、基本的には原因論が適用されるだろうと言うのが私の見解だ。それは私の失われた記憶の底にある帰巢本能のようなものかもしれないし、雛鳥のインプリンティングのようなものかもしれない。

ただ、多分、私は、エヴァさえいてくれれば、それでいいとすら、思っている。

——これを、どのように言葉にすればいいのだろうか。

「少し難しかったかしら。無理に回答を出す必要はないわ。決して、あなたを責めている訳ではないの。それだけは理解してちょうだい。それじゃあ——これも他意のある

質問ではないのだけれども、あなた、これからどうしたい？」

「……………」

質問の意図が読み取れず、私は首を傾げた。

いや、意図は分かる。分かるけれど、意味が読み取れない。否、意味だって、理解できないわけではない。ただ……なんて言えばいいのだろうか。

端的に言えば、なにかをしたいという欲求がない。これからの生活水準を高めたいという野望もないし、今の生活よりも水準が下がると言われても——程度にはよるが、私はそれを受け入れるだろう。

「なんでもいいのよ。これは学園長を含めた学園の意思であり、慈悲よ。——慈悲は言いきかしたら。まあ、ようするに、今までの全てに対する罪滅ぼし——保障ということよ。流石にこの学園を長期に離れるようなことは実現が難しいけれど、学園内でできる事ならば此方としては力の及ぶ限りサポートするわ」

これもエゴだけれどね、と彼女は続けた。

サポートすると言われても、いきなりそんなことを言われても、思い浮かぶものがない。たとえばいきなりじゃなかったとしても、答えることはできなかったと思う。

既に生活水準は十分な域に達している。なにより、今まで私は相応にわがままを言ってきたし、それは叶えられてきた。学園側になにか恨み言がある訳ではないし、それを

利用してなにかを企むような度胸もない。

「……いきなりこんなことを言われても困るわよね。別に無理強いする訳じゃないし、あなたにはその権利があるのだと認識して貰えればそれでいいわ」

「……例えば？」

私は決して無欲ではない。だがしかし、事実、今この瞬間に私自身になにか自由意志があるのかと言われると、怪しいものだった。自分で自分を縛っていると云っていいかもしれない。

だから、例を欲しがった。

せっかく貰えた権利を自ら無価値とするのは愚行だろう。

「例えば……ね。今から魔法を習得したければ、誰かに教鞭を執らせるわ。気分を変えたいのなら引越しまししょう。学校に通うこともできるわよ。お金を稼ぎたいというなら、あなたの望む形で融通しまししょう。——あなたが自分のことを知りたいと望むのなら、それも叶えましよう。失った記憶にしても、今のあなたの状態にしても、ね」

提示されたものは——魅力的かと言われると、そうも言えないものが多かった。魔法に関しては今や興味もない。気分で引越すほどフットワークは軽くない。学校は——未練がないと言えば嘘になるかもしれないけれど、今から集団行動に混じれるかと言われると不安要素でしかない。



その一方で——記憶は兎も角、自分が何者なのかについては、知っておいたほうがいいのだろうかと思う。

お金も、正直に言えば欲しい。別に大金が欲しいわけではないけれど、あつて困るものではないだろうし。資本主義社会で無一文と言うのは、流石にダメだろう。

「そんな深く考える必要があるカナ？」

とりあえず、提示されたものを整理しようと考え込んでいると、チャオがその思考を遮った。

見れば、チャオはいつの間にか私のすぐ隣に立っていた。しゃがんで視線を合わせ、私をじいっと見ている。その表情は——知っている。たまにエヴァが見せるような、悪戯を思いついた少年のような顔だ。

「自分の欲求に従えば、自ずと出てくるものネ」

「欲求……？」

反芻する。

「そう、欲求ネ。他者から与えられるのではなく、自ら欲するものヨ。ほら、すぐそこにいるダロ？」

言いながら、チャオは横目にエヴァを見た。未だに資料を漁っているその姿は、真面目な学者然としている。チャオと私の視線くらい気づいていそうなものだが、どうなの

だろう。

そんなことを考えていると、エヴァは数枚の用紙を手に、視線をこちらへ寄越した。

「おい、これ以降の研究資料はどこにある」

「……すぐ近くにありません？」

「この山の中から見つけろと？」

不満そうな顔のエヴァに、女性は「仕方ない」と言いたげな表情で腰を持ち上げた。その歩く姿は、なんと言うか、人間味がない。これは、どちらかと言うとゾンビだ。

「何故片付けをしないのだ、貴様は」

「資料なんて、本当は残すだけ無駄なんですよ。私は全部記憶してますし、これは第三者に伝えるためのカロリーカットな手段に他ならないのです」

「尚更整理整頓すべきだろ、それは……。茶々丸を貸そうか？」

「そうですね、それは助かるかもしれません」

そんなことを言いながら、女性は一つの高層ビルが如く積み重なった用紙の中から目的の資料と思しき冊子を迷うことなく引き抜いた。おかげさまで、ビルの上層は崩れ、周りの資料を巻き込んで一つの山となった。

……こうして山が出来上がるんだなあ。

女性はその山を数秒間だけ眺めて、「まあいいか」と独りごちた。杜撰が過ぎるだろ。

「それと、コピーも寄越せ。持ち帰る」

「構いませんが、まだあの無茶な構想を企てているのですか？ 成功率は極めて低いと、それは私とあなたの共通認識だったはずですが」

「黙れ。……いや、すまん。あとで相談させてもらいたいことがある。時間は？」

「来週の木曜まで待つて貰えれば確保できるかと。しかし、最近は娘のこともありますから、予定がどうなるかは不確定です」

「構わん。ある程度予定が決まったら連絡を寄越してくれ」

「仰せのままに」

意外だなあ、なんて、思ってしまった。

エヴァは、どこかで他人と線を引く。それは恐らく、深く関わらないことで面倒事を避けるためとか、一定の人間たちから嫌われていることを理解しているから無駄に刺激しないためとか、そういう理由がいろいろあるのだろう。

だからこそ、エヴァが人に相談を持ちかけるような姿は今までイメージできなかつたし、人に謝るような姿だつて、想像できなかつた。

エヴァは他人には冷たい印象があるけれど——それは、決してコミュニケーションが苦手だからということではない。それは知っていたけれど、分かっていたけれど、いざ目の当たりにすると、私が見たことのないエヴァの一面に少しだけ面を食らう。

「——鈴葉サン、エヴァンジェリンと一緒に暮らしてみたいとは思わないカ？」  
唐突に、チャオはそう問いかけてきた。

それは、少し、答えにくい。だけれど、魅力的な言葉であることも確かだった。エヴァと一緒に、ひとつ屋根の下……ふむ。

いや、だが、しかし。

あのログハウスにはエヴァが一人で住んでいると言っても過言ではない。茶々丸さんはロボットだし……他の同居人と言えば大量の人形くらい。要するに、あそこにはエヴァが一人暮らせるだけのものが揃ってあればいいということだ。つまり、私があのログハウスへ移り住むとなると、話は簡単ではない。今の私の部屋にあるものを持つていくとして、置き場がないだろう。

エヴァの私室というものすらないあのログハウスで、私はどこで寝るといふのだ。

まさか、エヴァと一緒に、あのベッドで？

毎日？

……ふむふむ。

「考え、とく」

「そう——即決即断とはいかないカ。だが、もう少し素直になるといいヨ」

私は十分に素直だと思っているのだが。

ただ、これに関しては、私一人の問題ではない。それこそ記憶を失う前に住んでいた借り家に引越すのとは訳が違う。既にそこに住んでいる主人がいて、その家に泊まるどころか暮らすともなれば、いろいろな了解が必要になってくる。だから、まずは考えて——それから相談も重ねた上で成り立つ話だ。

自分の我儘に責任を持たぬほど、私は人間を捨てていない。

——エヴァのことをじいっと見つめていると、その視線に気付いたのか、彼女は小首を傾げた。それから隣のチャオへと視線を移し、睨みつけるように目を細める。

「おい貴様、超鈴音。鈴葉にないを吹聴している」

「ヤヤ!? なんにも言っていないヨ! ただのアドバイスネ! そうやって人をすぐに疑うのはよろしくないじゃないカ?」

「さて、普段の行いが軽薄かつ悪徳な人間の言うことではないな」

「鈴葉サン! エヴァンジェリンがいじめるヨ! 助けてほしいネ!」

そうは言われなくても。悪徳とは思わないが、出会った最初の発言が既に軽薄だったのだから、エヴァの言っていることは決して間違いではない。しかし、ここで私も加わってチャオを虐めるのはなにか違う気がするので、ひとまず、その頭を撫でてあげることで場を収めることにした。私は寛大なのだ。よきにはからえ。

「さて——」

女性は自分の椅子に戻って腰を掛けると、灰皿に煙草を押し付けてその火を消した。そして、そんな様子を伺っていた私の目を真っ直ぐに見つめて、口を開く。

「あら、ある程度、話は決まったのかしら？」

「……まだ、考えてること、もある。でも、教えて。記憶は、別に、いい。私の、身体に、ついて」

エヴァと住むことよりも、お金よりも、それは大事なことだった。誰だって我が身が一番かわいい。だからこそ、知らなくてはいけない。

なによりも、今までエヴァを食べさせられてきた理由くらいは、知っておくべきだろう。

「教えると啖呵を切った手前申し訳ないのだけれど、こちらも全てを把握しているわけではないの。判明していることは、ほんの一部。それでもいいのなら、話しましょう」  
頷く。

既に片足を突っ込んでいるのだ。

今更逃げることはできないだろう。

「瀬流彦さんからは『事故にあった』と聞いているらしいわね？ その事故のせいで、あなたの身体は少しだけ特殊なものになっているの。人間と呼んでいいのかも怪しいのだけれど——私含めたチームの見解では、肉体そのものはまだギリギリ人間ね。問題

は、あなたの魂。或いは精神体。魔力どころか、その根幹にある生命エネルギーそのものにも影響を及ぼす変質よ。現状、不自然なくらいに落ち着いているのは、なんとか僥倖なのかしらね。なにせ前例がないから、把握が難しいのよ。さて、前置きはこんなところでいいかしら。あなたの身体の性質は三つ。まず一つ、あなたの全身を巡る血液は、平均的な人間のそれではないの。あなたが意識を失っていた期間中、血中の魔力濃度が五倍——酷いときには十倍にも膨れ上がっていた。魔力と言えども、この数値は十分に有害よ。本来ならば致死量であり、まともな生命活動もままならない。でも、先述した通り、今はそこそこ落ち着いているわね。残念ながら、理由は不明よ。次に、成長の停止——少なくとも、この三年間、あなたの身長は一ミリも伸びていない。これは恐らく、あなたの変質した精神体が成長を阻害していると考えられるのだけれど……詳細は不明ね。元来、生物として細胞分裂をする以上は老いは避けられない。このまま少しずつ老化していくのか、或いは完全に不老なのか。残念ながら、私としては皆目検討もつかないわ。十年単位で観察が必要よ。そしてそれに関連しているのかいなのか、あなたの身体は傷を再生する能力を保持している。あなたの無意識下においてもそれが働くことは確認済みで——こちらも原理は不明。吸血鬼の再生能力や強力な治癒魔法は、その代謝を促すことで、まるで時間を逆行させているような錯覚を見せるわ。しかし、あなたの再生能力は、代謝の促進というよりは正しく時間の逆行と呼ぶ他

ないわね。最後に、吸血鬼ことエヴァンジェリンの肉を捕食するということについて——こちらに関しては、エヴァンジェリンの肉でなくても構わないと考えているわ。厳密には“一定以上の魔力を保持する人間の肉”が必要な。要するに魔法使いとしてある程度修行を積んでいるか、或いは先天的に魔力の許容量が多い人間の肉ならなんでもいいのよ。或いは、人間でなくてもいいのかも。それこそ、ドラゴンのような幻想種ならば——残念ながら本国からの輸入は不可能だし、実験はできないわね。では何故そういった肉を食べなくてはならないのか——こちらについては、ある程度は理解できるのよ。あなたの精神体と肉体はギャップがありすぎる。不均衡なのよ。精神体が精霊化や神格化に近い現象を起こしているにも関わらず、肉体は人間のまま。その精神体を維持するには、魔力を生成する能力、つまり自然エネルギーを変換できる限界値が釣り合っていない。呼吸をするだけで——生きているだけで魔力を消費し続ける。そのために、魔力を余所から補充しなくてはいけない。しかし、あなたの精神体は最早人間のものではないから、契約による魔力供給をしようにもそもそも契約が成立しない。なので、吸血鬼という別格の質を持つ彼女の肉を捕食することが最も効率的なの。なにより、エヴァンジェリン本人がそれを認め、受け入れ、自ら餌になることを申し出た、と。

……理解できたかしら？」

その話はあまりにも矢継ぎ早で、咀嚼する暇もなかった。だけれど、掻い摘んで要約



すれば、即席ながら理解できなくもない。

私の血液は魔力濃度がおかしかった時期があり、そのくせ魔力を作る能力は魂の格と比べてあまりに乏しいということ。そのためにエヴァの肉——もとい魔力を捕食という形で得る必要がある、と。しかし人間と同等のスペックでしかない肉体は何故か高い再生能力を持っており、そのせいで成長がストップしている。

まあ、理解できたところで実感できるかと言われると、話は別なのだが。

それよりも——思ったよりも冷静に話を聞いている自分がいることに驚く。

人間だった頃の記憶がないからなのか、或いはもつと別に要因があるのか。

エヴァに私が食べている肉について聞いた時も、訊くまでは葛藤のようなものがあつたものの、結果を聞いてしまえばどこか腑に落ちる。胸の突っかかりが、すつと消える。チャオの言葉を借りるならば、パズルのピースがあるべきところにきつちりと嵌まったようなものなのだろうか。或いは、シンプルに現実味がない話に拍子抜けしているのかもしれない。

なんとなく、エヴァを見た。

相変わらず、資料を只管に読み進めている。

「鈴葉サン？ 大丈夫か？」

チャオは、本気で心配しているかのような表情でそう問い掛けてきた。

「教授、もう少しペースを考えてあげるべきヨ。飲み込むのにも時間がかかるネ」  
「私、そういうの苦手なのよ。知ってるでしょ？」

「あなたはもう少し人の心を知るべきネ……」

私の考え込む姿を見て、思うところがあつたのだろう。軽薄な火星人にも人を気遣う心があつたらしい。

その一方で、エヴァはつまらなそうな顔をして未だに資料を眺めている。どうせ心配されるならエヴァから——なんて。

「……私は、大丈夫」

ある程度の覚悟はしていた。

むしろ、判明していることの少なさに驚く。それこそ吸血鬼のように、個別の名称とその性質がはつきりとしていない。

「前例がない」と言っていたか。

私は一体、何者なのだろうか。

「——さて、今日のお話はここまでかしら。鈴音が言った通り、少し詰め込みすぎたようだし、これからのことについてはまた後日、考えましょう。それから、今日は改めて検査をさせてもらうわ。採血とかMRI検査とかCTスキャンとか、いろいろね」

断る理由もないので、私はそれを承諾した。

この不潔の代名詞とも言える部屋から一步出れば、そのギャップに驚く。先程まで歩いていたはずの廊下なのに、見違えるほどに綺麗であると思えてしまった。

そして別の部屋に移動して、血を採られる。注射の痕跡は確かに綺麗に消えてしまい、自分の身体の不思議について、ちよつとだけ実感する。それからまた部屋を移動して、また移動して、移動して——慣れない環境だったこともあつてか、なんだか異常に疲れてしまった。

検査結果に異常があれば知らせるとだけ言われ、特に会話を交わすこと無く大学を後にした。

## E p . 15

深雪を踏みしめながら、夜道を歩く。

教会までの道程は記憶しているので、視界不良はそこまで問題ではない。むしろ、すこし特別感がある。こうして夜の道を歩くのは、クリスマス以来だ。なにより、今回は一人である。なんだかんだ言って、夜の帰り道は誰かが隣りに居てくれた。

あの変態からパーカーを貰った日の帰りも、途中からとは言えエヴァが迎えに来てくれたし。

——大学を出てからすぐのところで、チャオがエヴァに話があると持ちかけた。なんでも重要な話らしい。場所を移して落ち着ける空間で話したいと言っていた。

帰り道が不安なら話が終わるのを待っていてほしいと言われて、少しだけ迷った挙げ句の果てに、私は一人で帰るという選択肢を選んだ。

先述したとおり、道は記憶していた。大学エリアから女子中等部校舎に行つて、そこから教会へ向かうという、ちよつと遠回りなルートになつてしまふが、仕方ない。私の記憶は事実には基づかない。ルートというパズルを組み合わせて近道を割り出すような芸当は出来ない。決して自分の頭を信用していない訳ではないが、冒険はしない主

義なのだ。

一人で帰るといふ行為は冒険なのではないかと言われると、否定しにくいのだが。

ただ、今日は少し疲れた。どうやら、私は慣れない環境での活動が不得手らしい。早く部屋に帰って眠ってしまいたいという気持ちでいっぱいだ。考え事は、別に明日起きた後にもすればいいだろう。

そもそも、誰かに相談しなければ解決しないような考え事ばかりである。一人で黙々と思考に耽つていても仕方がない。

例えば——別にエヴァの肉を食べなくても、それこそ吸血鬼のようにエヴァの血を飲めばいいのではないか、とか。

例えば——身体は人間だとは言うものの、では、何故私には空腹感が無いのか。事実、一週間飲まず食わずでも問題なく生きているのか、とか。

こんなこと、素人の私が考えたところで考察の域を出ない。もう一度、あの女性の部屋を訪れて、話を聞くしか無いだろう。

……あの部屋に行かなくてはいけないというのは、なんとも億劫な話だ。私のスタミナを奪ったのは、間違いないあの濃厚な煙草の臭いとハウスタストである。それに加えて、チャオよりも露骨な観察するような女性の眼。ああいう眼は好きじゃない。見られたいいけないところまで見られてしまっているような気がする。それこそ、私の汚いと

ころとか——。

そういえば、あの女性、名乗らなかつたなあ。

チャオも教授と読んでいたし、エヴァに至つては「貴様」である。もしかしたら素性を隠しているのかもしれない。名前で呼ばれることに、なにか不都合があるとか。

まあ、これも、考えたつて詮無きこと。

この暗い道——憶えていなければ迷子も必至な、この道のような話だ。情報も不揃いなものを考察したつて、どうして正解に辿り着けるだろうか。時には思考停止だつて美德になるということだ。妙に勘繰るよりはマシという意味ではないが。

街灯の下で、なんとなく腕時計を見る。一人になつてから、既に三十分以上が経つていた。そろそろ中等部校舎が見えてくる頃だろうか。思ったよりは早く帰れそうだった。

なんて、そんなことを思いながら街灯の光から離れた瞬間——私の身体が一瞬だけ宙に浮かんだ。

足をなにかに引つ掛けた。なんてことはないシンプルな原理だ。しかし、それは引つ掛けたと言うよりは——引つ掛けられた、と言うべきだろう。唐突にバランスを失つた身体を制御するなんて出来ない。前のめりに倒れていく私の肩を、後方から誰かが掴んだ。

その手が倒れそうな私を助けてくれるなんてことはなく、むしろ強引に地面へと押し

付けるように力が加わった。力が強いというよりは、力学を利用する手段を知っているようで、私の体はまるで催眠術にでもかかってしまったかのように無抵抗のまま地面に吸い込まれた。

雪が積もっていてくれて助かった。顔面から倒れた割に、痛みは最小限である。怪我らしい怪我もないだろう。

そんな思考も束の間、私の体の上に誰かが跨り、背中を抑えつけられた。肩甲骨の動きを阻害されているようで、腕の動きが制限される。同時に肺も押し潰されて、息が苦しい。

——気配なんてものは一切無かった。足音だって、雪が積もっているとは言えども、絶対に聞こえて然るべきなのに、それすらも無かった。

視界不良とは言えども、暗闇に慣れた眼であれば、人程の大きな物体が動けばそれに気付け無い訳がない。

魔力に関しては、今もなお感知できずにいる。

まるで幽霊に襲われたような感覚だった。

その幽霊こと襲撃者は、少しだけ不思議そうに、ぼそりと呟く。

「——怖がらない……？」

いいえ、ただ無表情なだけです。

いや、私から相手の顔が見えないように、相手も此方の表情は見えていないはずだ。ならば、それは雰囲気の話なのだろうか。

心まで無表情になった覚えはないのだが。

「やはり只者ではないな、貴様。外見に騙されてやる程、私は甘くないぞ。——蒼井家の残党め」

いいえ、こちら只者的な一般市民なのですが。

いや、只者ではないのか。吸血鬼の肉を食べる人間を只者とは呼ばない。

——それよりも、何故蒼井という姓名を知っているのか。残念ながら、襲撃者の声に聞き覚えはない。少なくとも私の知り合いではないし、見ず知らずの人間に恨みを買われるようなことを、地下暮らしの私がどうしてできる？

これは、冷静に「人違いです」だけでも答えるべきだろうか。

「答えろ。木乃香お嬢様に近付き、なにを企んでいる」

木乃香お嬢様……？

私の知り得る木乃香という人物と云えば、近衛木乃香以外には存在しない。つまりは、近衛木乃香のことなのだろう。

驚いた。お嬢様と呼び慕う部下がいるということは、彼女の地位は想像よりも遥かに高いところに位置しているということだ。最早、ただ魔力を多く持っているだけの女子



中学生とは呼べないだろう。

しかし、よくよく考えてみれば、これだけ大規模な施設を経営する理事長でありながら、東の魔法使いのトップである近衛おしい右衛門ちやんの孫なのだ。むしろ、何故、考え至れなかったのだろう。その立場は、もしかしなくても次期会長か、その伴侶である。そりゃ、部下の一人や二人を抱えていてもおかしくはない話だ。

訂正しよう。

思考停止など、美徳でも何でもない。ただの怠慢だ。

——しかし、それを考慮した上で、解せない。

私は木乃香さんに恨まれるようなことをしたのだろうか？

今日の「鈴葉はウチの子やで」発言は、もしかして、「鈴葉（の首）はウチのや」という意味だったと？

それは……剣呑剣呑。

「……………」

いや、剣呑とか言ってる場合ではないぞ、これは。

この人——或いは木乃香さんは、なにか勘違いをしている。私はなにも企んではないないし、下心すらない。

出会いは全て偶然だし——むしろ、二度の出会いでなにを企めると言うのだろうか。

元々目的らしい目的も持っていない、平々凡々とした地下暮らしの私に、なにを企めと  
言うのか。

勿論、こんなものは私の都合だ。向こうからすれば知ったことではないのだろう。不  
用意に近付いてくる輩という見られ方をしてしまえば、それまでだ。

まあ、でも、いきなり襲わなくても、いいのではないだろうか。

「まず、確認、させ、て」

「……言ってみろ」

「あなたは、誰？」

「安易に名乗るほどに愚かに見えるか？」

いや、そもそも見えないんですって。

できれば面と向かって会話をしたい。

表情が分からなくては、読み取れるものも少ない。

それは、そちらも同じはずだが。

「もう一度問うぞ。貴様は、何を企んでいる？」

「なに、も……」

「……………そうか。あくまでも答えたくないと言うなら、答えたくなるようにしてやる

まで」

肩を掴まれる。

もしかしなくても、関節を外すつもりだろう。尋問というのは、いつの世の中でも正攻法の一つだ。如何に人道的ではないと言っても、痛みを勝る恐怖は無い。答えてしまえばそれまでなのだから、その痛みは答えなかつた奴の責任と言う話だ。自身に正当性を持った暴力であると言いつてもできるため、罪悪感も少ない。

ぎしり、と。

強い握力に、骨が軋んだ。

「——そこまでにしていただけませんか、桜咲利那さん」

その声は、私の前方から。襲撃者と相対するような位置から聞こえてきた。

抑揚のない無機質な声。

幸いにも、それは聞き覚えのある——聞き馴染みのある声だった。

「絡繰さん……？」

絡繰茶々丸。ガイノイドにして、エヴァの従者。

流石、悪の大魔法使いに仕えているだけあって、有名なのだろう。襲撃者は僅かに動揺しているようだった。

「マスターの命により、お迎えに上がりました。桜咲利那さん、今すぐ鈴葉さんから退いてください」

「——そうですね、あなたが……あなた達が首謀者、乃至協力者ということですか」  
「いいえ。話の一部始終を聞かせていただきましたが、桜咲利那さん、あなたは勘違いをしています」

「……………」

「あなたの言う蒼井家は、あなたの知っている情報そのままの状態です。鈴葉さんを関係者と呼ぶのは無理があります」

「信じろと?」

「私の記憶データをお渡ししても構いません」

「データなんて、いくらでも改竄できるのではないか」

「そんなことが出来るのは私を開発した葉加瀬と超鈴音しかいません——それでも信用できないと言うならば、学園長に直接お話を聞いては如何でしょう」

それから、襲撃者は熟考を始めた。私の上で、数分間、悩み続けた。

実に迷惑な話だが、ここで身動きをして妙な警戒をされても仕方がないので、あくまで無抵抗を努めることになる。パーカー着てて良かった。寒空の下、冷たい雪の上で寝かせられるというのは、それだけで拷問だろう。

それから、襲撃者は携帯電話でどこかに連絡を取り始めたようだった。茶々丸さんの言うことにも理があると結論をつけたのだろう。その電話の向こうからは確かに

学園長の声が聞こえた。

やがて、襲撃者の拘束力は弱まっていき、代わりに身体の震えが私に伝わってきた。マナーモードかな？

「あつ……あ、ああ…………！」

やがて、電話を終えた襲撃者はうわ言のように口を震わせた。顔を見なくても、その表情が青ざめていることがわかった。

茶々丸さんの発言からして、彼女は何かの勘違いをして私を襲ったということになる。

そして、なにより——木乃香マノカさんに意見を仰ぐ前に学園長へ確認の連絡を取ったということは、彼女の自己判断で私を襲ったということである。

主人の名前を出して襲ったのに、それが勘違いだったなんて、そんな失態は部下としてあるまじき話だろう。

青ざめない訳がない。

それから、唐突に身体が軽くなり、雪を掻き分ける音がした。

「す、すみませ——申し訳ありませんでしたッ！」

身体を起こして振り返って見れば、雪を掻き分けて後退った痕跡があり、その先——実に十メートル程離れたところで、女の子が綺麗な土下座をしているようだった。

暗くて良く見えないけれど、間違いない。あれは、女の子だ。いや、声からして分かっている。はい、たけれども。

「ま、ま、まさか記憶を失くし、今や学園長の保護下にあるとは露にも思わず！ 最早お嬢様の妹様と呼んでも過言ではないあなたに、なんて御無礼を！ どのような処罰でも受ける所存です！ 切るなり煮るなり焼くなりなんなりとお申し付けください！」

お、おう。

あまりそういうことは言わない方が良いのではないだろうか。容易く言質を取られてしまう。

「……まず、顔を、上げて」

「は、はい……」

桜咲刹那と呼ばれた少女は、おずおずと土下座の姿勢を崩した。髪の毛をサイドテールで纏めて、整った顔を捨てられた子犬のように歪めている。背中には長い得物がぶら下がっているようだ。もしかしなくても、刃物だろう。抜かれてなくて良かった、と安堵する。

「おすわりして、わんって、言って」

折角言質を取った——というか貰ったわけなので、つついそのような要求をしてしまった。

丁度、チャオに“もつと素直になれ”と言われたばかりである。これもまた、素直になるための練習だ。そういうことにはしておこう。

「へ……………!？」

刹那さんは素つ頓狂な声を上げた。どうやら私の言ったことが理解できなかったよ  
うなので、もう一度、聞こえるようにゆつくりと告げてあげる。

「おすわり、わん。これ、処罰」

「ぐつ…………。ご、御慈悲を——」

「じゃあ、にゃーん、つて、言つて?」

「そ、そんな……………」

まあ、こんなものはただの冗談だ。まさか鵜呑みにはしないだろう。

そもそも、処罰なんて大袈裟な話である。現代日本の個人的な人間関係にそんな制度は存在しない。私刑は禁じられているのだ。他人の尊厳を欠くような行動を強制するなんて、人間性が疑われてしまう。

「……………にゃー、ん……………」

お……………?

お……………。

これはなかなか。

正座のままだし、本当にただ「にやーん」と呟いただけの話なのだが——高揚感。これが上に立つ人間の優越感というものなのだろうか。まるで劇薬だ。

なにより、暗がりでも分かるほどに顔を赤くしている刹那さんを可愛いと思った。でも、この可愛さは、どちらかと言うと、虐めたくなるタイプのものである。

うーん、本当に劇薬だよ、こういうの。自重しなくては。

……これ、どうしよう。

勢いに任せてにやーんなんて言わせてみたはいいものの、実はこれ、なんの解決にもなっていない。

彼女——桜咲刹那さんにかける言葉が、他に見つかからない。それに加えて、私を迎えに来たと言う茶々丸さんもいる。このまま刹那さんを放置して茶々丸さんと帰途につくのは、はたして正解なのだろうか。

別に、私は刹那さんの主人という訳ではないのだから、気にしても仕方のないことではあるのだが。

とりあえず、主人である木乃香さんに連絡をするべきだろうか。茶々丸さんならば木乃香さんの連絡先も簡単に入手できるだろうし。主人として彼女を回収してくれれば此方としては御の字。あとは向こうで処罰なり何なり自由にやればいい。

……未だに正座のまま畏まっている様子を見る限り、今の「にやーん」を処罰とは捉



えていない。真面目な女の子なのだろう。

「刹那、さん」

「お、恐れ多くも、私のことはどうか呼び捨てにしてください」

正座を崩し、片膝を立てて頭を垂れる。それはまるで、中世の騎士のような佇まいだった。

……形式を重んじる人なのかなあ。私は刹那さんの主人ではないと、彼女自身もそれは理解しているだろうに。

「じゃ、刹那」

「は、はい！」

「今日の、ことは、なかった、こと、に、する。いい？」

「なっ……い、いえ！ そんな！ それでは私の気が収まりません！」  
うーん。

これは真面目とは少し違うのかもしれない。

由緒ある家系ならば良くある話だ。

気に食わなければ身内の従者であろうとも捨て置くこともある。貸し借りを作り、それを盾にして主人に無茶なお願いをするなんて、有り触れた物語の一部だろう。

刹那は、それを恐れている——そう仮定すれば、ここで処罰もなしに引き下がること

もできないという意思も、理解できなくはない。

「あなた、の処罰、は、木乃香さん、の、仕事、でしょ?」

主従の関係であるならば、それが事実である。

「これでも食い下がって来るようならば——私は、まだ警戒されているということだろう。」

「わ、私は……お嬢様の護衛であり、正規の従者ではありません。陰ながらお見守りすることこそが務め。……なにより、お嬢様は裏の世界のことをなにも存じておられないのです」

——それは、真実なのだろうか。

分からない。

裏を読むならば、せめてその責任を主人から遠ざけようとしているように見える。如何せん、主人が認識すらしていない従者の責任は、従者の責任でしかない。

処罰とは、言い換えれば「これでチャラにしてやる」ということでもある。

その処罰を今此処で形にしなければ、今後なにに利用されるのかも分からない。

——要するに、私のことを学園長おじいちゃんから聞いて認識した今も、油断していない。

なるほど、優秀なワンちゃんだ。

だからこそ厄介である。

如何せん、私は人に処罰を与えた経験など無い。なにが処罰になって、なにが処罰にならないのかすら分からない。私からすれば、さっきの「にやーん」が既に処罰なのだが。

「……どう、しよ、茶々丸さん」

だから、投げた。

私の隣に立つて事の成り行きを眺めている茶々丸さんならば、なにかいい提案をしてくれるかもしれない。なにせ、彼女はエヴァの従者である。この高性能ガイノイドがヘマをするとは思えないが——なにかしら罰を与えられたことくらい、あるかもしれない。

「……過去の刑罰を検索したところ、最もポピュラーな刑罰はやはり斬首刑かと思われるます」

「違う、そうじゃない」

いきなり死刑は流石に重たすぎる。

「では、市中引き回しの刑などが良いでしょう」

あなたは刹那をどうしたいの。

抗議の眼を向けると、茶々丸さんは首を横に振った。

「すみません。私も、こういうった事例は判断しかねます」

「どうやら、茶々丸さんもエヴァから罰を与えられた経験はないらしい。

まあ、もしかしなくてもそれは当然なのだろう。この現代日本で従者に与える罰なんでもものは存在しない。あくまでもこの社会に当てはめるならば、損害賠償請求や解雇だろうか。損害賠償して貰うほどの行為はされていないし、解雇するかどうかなんて、それこそ私の意思で決めることができるものではない。

「——ふおつふおつふおつ。予想外の連絡に驚いて来てみれば、なかなか面白いことになつとるのう」

魔法、だろうか。

ライト代わりに光球のようなものを空中に漂わせながら、その人は此方へと近付いてきた。その長い後頭部を見て、今更誰だ等とは聞きますまい。つい先程、刹那が連絡を取った学園長その人である。

「——学園長！ 申し訳ありません！ 言い訳のしようもない失態です。何卒、何卒お許しください……！」

「良い、刹那くん。あまり容易く頭を垂れると、器量さえも疑われるぞい」

「は、はい……。すみません……」

——こう見ると、流石はおじいちゃんと思わずにはいられない。いや、私がおじいちゃんと同じことを口にしたとしても、刹那はきつと引き下がらなかった。こればかり

はその人の性格と地位と能力だ。私には、真似することもできない。

「さて、すまんのう、鈴葉。わしが刹那くんに伝えておけば、誤解されるようなことも無かったじやろう」

「ん……」

くしやりと、頭を撫でられる。初めてあつた頃からそうだが、この人は私をまるで身内であるかのように扱う。恐らく、記憶を失う前からとてもお世話になっているのだろう。それこそ、祖父と孫のように。

「学園長の責任などでは御座いません！ 全てはこの桜咲刹那の責任です！」

「さて——刹那くんはこう言つとるが、どうする、鈴葉」

どうすると言われても、どうすることもない。

別に怪我をさせられたわけでもないし——怪我をしたところで私の身体は即座に完治するらしいし。

この場には悪人なんていないし、責任もない。

刹那の忠誠心が仇になつただけの話だ。では、忠誠心に責任を取らせるのかと言われれば、それは現実的な話ではない。

「……いふむ、では、こうしよう」

無言のままの私を見て何を思ったのか、おじいちゃんは顎に蓄えた長い髭を撫でなが

ら、宣った。

「——明日から三日間だけ、刹那くんには鈴葉の従者になつてもらおう。鈴葉は刹那くんを自由に扱つて良いし、刹那くんは目的である木乃香の護衛が果たせなくなる。これは、罰以外の何物でもあるまいて」

——斯くして、私は三日間、この優秀なワンちゃんを飼うことになった。

## E p. 16

「おはようございます、妹様」

左側頭部で髪の毛を纏めた少女——刹那は、私の部屋の前で跪いていた。

時間にして、午前十時の出来事だった。

いつも通りの時間に眼を覚ました私は、身体を襲う疲労感と倦怠感に従って二度寝を決行。そのまま二時間ほどぐっすりと眠った後、流星に起きなくては生活リズムに支障を来たしてしまうと判断し、上体を擡げた。

シャワーを浴びたら、昨日一日手の付かなかった人形作り（初級者向けの簡単なもの）を再開させようと考えながら部屋を出てみれば——この、目の前に広がる光景が飛び込んできたのである。

「おは、よう。……なに、してるの?」

「起床時間を伺っていなかったの、五時から待機していた次第です」

つまり、五時間もここにいたと?」

「労るよりも先に畏怖を覚えた。」

「誰がそんなことをしてくれと頼んだのか。まさか、おじいちゃんか? いや、考える」

までもなく刹那の独断だろう。

そもそも、この地下区画は立ち入りが制限されているはずだが——まさか、掻い潜つて来たのだろうか。

そういうえば、過去にもシスターさんが迷い込んでいたか。あの教会には見張り番がいる訳でもないし、門番がいるわけでもない。シャークテイ先生がその身一つで管理していると言つても過言ではない現状、刹那であれば、この地下への侵入など、赤子の手を捻るよりも簡単なことなのだろう。

いや——この部屋の場所を知っているということは、おじいちゃんから話を聞いたのだろう。ならば、この区画への侵入は許可済みか。

「……とりあえず、入つて」

「は、」

昨日の、あたふたしていた少女はどこへやら。硬い表情で、刀のような雰囲気纏っている。なんというか、扱いづらい。触れただけで皮膚が裂けそうだ。

とりあえず部屋に入ってもらい、テーブルの前に座らせた。一先ず、茶の一つくらいは出すべきだろうと考え、紙コップを取り出す。

「——妹様！　このような毒物をお吸いになられているのですか!？」

何か慌てるような、そんな声に振り返つて見ると、一本のくたびれた吸い殻が横たわ



る灰皿が、テーブルの中央に置かれていた。

……あの野郎。神多羅木先生め。さては昨日私がない間に訪れて、ついぞと言わんばかりに吸っていきやがったな。昨晩は帰宅してシャワーだけ浴びてすぐに寝てしまったから気付かなかった。

「私、じゃ、ない」

「……そういえば、この部屋には先生方が良く訪れるそうですね。なるほど。しかし感心できません！ 妹様の部屋で喫煙なんて……！」

まあ、そうでしょうね。

家庭訪問にやってきた教師が突然、煙草に火をつけるようなものだ。どうなってやがる倫理観。まあ、それを許してしまっている私も悪いのだが。

しかし、今の発言からするに、やはり私のことについては多少なりとも教えてもらったのだろう。そうでなければ、この吸い殻についての誤解を釈明するための所要時間ももう少しだけ延びていたはずだ。

くわばらくわばら。

とりあえず、お茶を注いだ紙コップを刹那の前に置く。

「あ、ありがとうございます。——って、なにをしていらつしやるのですか！」

「え……？」

「三日だけとは言えども、今、私は妹様の従者なのです！　主人が従者にお茶を用意するなど前代未聞です！　妹様、そういった雑用はどうか私にお申し付けください！」

そうは言われなくても。

冷静になつていただきたい。

雑用を任せるといふことは、まずこの部屋にある日用品の配置などを一から説明しなくてはならないということだ。

それも、この関係の期間はたったの三日間である。その三日間のために、この部屋の収納スペースの場所や冷蔵庫の中身諸々を教えるというのは、非効率的ではないだろうか。勿論、この部屋の各所スペースについての説明なんて、一時間もかからないのだからうけれど。

なんにしても、そういうことは省かせていただきたい。説明は下手なのだ。それに――冷蔵庫の中のワインを見られたら、それこそ面倒なことになる。

なので、この部屋の中において、刹那にお世話をしてもらう必要性はない。五時間も待つていただいて申し訳ないのだが、これが事実だ。

故に、刹那にお願いできることと言えば――

「……じゃあ、刹那」

「はい！　なんなりと！」

「おすわり、して、わん」

「何故ですか!？」

いや、本当、これくらいしかないんですよ。



——妹様のことは学園長が全て教えてくれました。

まずは自己紹介をしようと思案した時、私は私自身が知りうる自分の情報の無さに驚いた。今まで気にしたことなかったし、一度記憶を失っているのだから仕方がないのだが、まさか正確な年齢すら思い出せないとは恐れ入った。

そうして困っているときに、刹那にそう言われた。自分の知らないところで自分の知ってること以上のことを他人に晒されるといふのは、なんとも言えない搔痒感を覚える。物心つく前にこっそりと埋めたタイムカプセルを見知らぬ人に掘り起こされたような気分だった。

「私の名前は——既に御存知かと思いますが、桜咲刹那と申します。改めて、昨晚の失

態、誠に申し訳ございませんでした。私のような若輩者に汚名返上の機会を与えてくださったこと、心より感謝致します。……斯くして、不肖ながら、妹様にお伝えさせていただくこととなりました。不束者ですが、よろしくお願いします」

刹那はテーブルの向こう側で深々と頭を下げた。土下座にも相当する深さだった。そういう光景に優越感を覚えるほど、私は器の大きな人間ではない。反射的にこちらも頭を下げそうになったが、踏み止まる。私よりも下に位置しようとする少女はそれに對抗するだろう。そうやってしまえばそれはもう本当にただの土下座だ。ここは堂々と胸を張り、それを受け止めることが最適解であると判断し、刹那の旋毛を眺めることにする。

たつぷり十秒ほどその姿勢を保つてから、頭を上げた。端正な顔に、鋭い目つきが目立つ。傍らに侍らせている長い得物も含めて、その雰囲気は武士そのもの。張り詰めた弓のような緊張感<sup>ひしび</sup>は、一度動いただけで射抜かれてしまいそうだ。

「よろ、しく」

小さく頭を下げて、応える。

やりにくい。

こういう眼をした人と言葉を交わすのは初めてだった。今にして思えば、昨日のような闇討ちをする、現役<sup>ひしび</sup>の兵士なのだ。退役軍人のような雰囲気を見せる高畑先生や神多

羅木先生と比べてみても、エンカウントする人物としてはとんでもないレアケース。隠すことすらしない雰囲気、それを実感させる。

「先ずは、ごめん、ね。こんなことに、なっちゃって……」

一先ず、謝罪。

正直、かなり後悔している。昨晩は疲れていたし、もうなるようになれと、その後の事を全ておじいちゃんに丸投げして、そのまま茶々丸さんと帰途に着いた。つまり、打ち合わせすらしていなかったのだ。当然、起床時間も伝えていなかった。故に、刹那は実に五時間もの暇を持て余してしまったのだ。これは謝らなくてはならない。主人とか従者とか、それ以前に、人として。頼んでなんかいないと一言に蹴散らしてしまえばそれもそうなのだが、人の誠意と気遣いを無下にするほど腐っているつもりはない。

なにより、木乃香さんの護衛を名乗った彼女のその任務を、私とおじいちゃんの都合で中断させてしまったことは、やはり謝らせてほしかった。

いや、まあ、処分など必要ないと言う私の意思を飲み込んでくれればこんなことにもならなかったのだが……それはそれ、これはこれ、である。

「気に病まないでください。全ては私の責任です。それに——妹様はお嬢様ととても親しい御方と存じております。妹様にお仕えさせて頂けることを光榮に思うことこそあれど、忌避感など微塵もございません。御安心ください」

その尖った雰囲気を少しだけ柔らかくさせながら、刹那はそう言った。

木乃香さんと親しいかと言われると、疑問も残る。二度、顔を合わせたただけだ。確かに木乃香さんは私を「ウチのや」と豪語するくらいには気に入ってくれているのかもしれないが、それは持て余した母性の矛先が私に向いただけの話だろう。

「あの……その妹様、つて、いうのは……？」

その呼び方も、少し気になった。

如何せん、私は木乃香さんの実妹と言うわけではない。あくまでも立ち位置がそれに近いというだけの話だ。

「血縁関係にないことは伺っております。戸籍上、学園長の娘として迎え入れられていることも、それ故に、お嬢様の叔母と呼んでも過言ではないことです。ですが、妹様の年齢を鑑みるに、『妹様』と呼ばせて頂けると、私としては違和感もないのですが……」

勿論、お気に障るのであれば訂正させて頂きます、と刹那は付け足した。

別に気に障る程の話でもないし、差し障りもない話なのだが——然程付き合ひがあるわけでもない、言わば他人と呼んでも差し支えない木乃香さんの妹と呼ばれるのが、少しだけむず痒かった。

まあ、刹那がそう呼びたいのであれば、それでいいのではないだろうか。別に、敬称を外せとも言えないし、名前に『様』と付けられるよりはマシだ。

“鈴葉様”……うん、似合わない。私は極めて一般的な庶民なのだ。生活水準がどうかじゃなくて、そういう精神性のもので生きている。

「刹那が、そう呼びたい、なら、それでいい」

「ありがとうございます」

有難がられる言われもないのだが。

一通り、自己紹介も済ませたし、昨晚のいざこざも、私の気にしている部分についても、話は終わった。ともなれば、ここから先は、未来の話をしなくてはならない。

これが困りものだった。

はて——主従とは、どういったことをするものなのだろうか？

「えっ、と——刹那？」

「はい」

刹那は真つ直ぐな眼で私を穿ちながら、私の言葉を待つ。それは、なにか、おすわり」という命令を待つ忠犬のようで、私としては居心地が悪い。

「主人つて——従者に、対して、なに、すれば、いい？」

大前提。

エヴァと茶々丸さんという例を頻繁に目にしておきながら、しかし、主従という関係はなにをどうすれば成立するのかが分からない。

まあ、こんな話、『主従ごっこ』に興じればいいだけと考えれば複雑に考えずに済むのだが、それは刹那に対して不躰である。少なくとも、朝から五時間に渡って部屋の前で待機するという真剣そのものな姿勢を見せつけられてしまつては、中途半端には出来ない。

「言われてみれば……」

しかし、私が投げかけた疑問に対し、刹那は顎を撫でながら思案顔を浮かべた。どうにも、考えたことすらなかったらしい。

だが、それも当然なのかもしれない。

刹那は昨晚、自らのことを『従者ではなく護衛』と訂正していた。それに加えて、刹那自身が主人という立場を経験したことは、多分、ないのだろう。主人の為すべきことなど、主人経験者にしか分からない。

なにより、刹那の主人である木乃香さんは、自身の置かれた立場どころか、魔法のことすら知らないときた。つまり、木乃香さんは刹那の主人であるという自覚がないのだ。言わば、刹那の一方的な忠誠心。刹那からすれば、木乃香さんから『主人としての命令』なんてものを授かったこともないはずである。

主人像として木乃香さんを例に持ち出すことが不可能であるならば、誰を参考にすればいい？



………エヴァは、ちよつと、私とは性格が違いすぎるしなあ……。あの立ち振る舞いを真似するのは少し大変だ。どこその図書館の亡霊からは及第点を貰ったとは言えども、それは無意識的に影響された部分があったというだけの話であり、決して意識的に真似していた訳ではない。というか、真似した結果、口が悪くなるなんて——それはエヴァに対して失礼が過ぎる。殺されはしないだろうけれど、不機嫌になること間違い無しだ。それすら理解して私に及第点を与えたと言うのであれば、あの亡霊の性格の悪さは私の理解を超えた先にあると言つても過言にはなるまい。

「妹様」

と、刹那が思考の海から浮上してきた。

「やはり、主人である以上は、従者である私に雑用なりなんなりを命令することこそが相応しいのではないでしょうか？」

それは盲点でもなければ、意外性も皆無な解答だったが、故に、最も正解に近い帰結だったと言えるだろう。執事や家政婦——主人という名の雇用主が存在するそれらの役職は、どこまで言つても主人の命令に従事する存在である。主従関係とは、概念的に捉えれば、お世話する者とお世話される者の関係だ。これは、やはりどう間違えようとも見失うことも出来ない明白な事実であつた。

では、そのように——と、言うことができれば、どれほど楽なことか。

「私、お世話される、ような……そういう、こと、しないし」  
家事なんて、既に人任せ。

調理も洗濯も、言わずとも誰かがやってくれている。入浴はシャワーで済ませるから前準備も必要ない。歯磨きを他人の手に任せるなんて、想像もしたくない。  
命令すべき雑用が見当たらない。見当たらなくては、手もつけられない。

「ふむ……」

再び、刹那は思考の海へと沈んでいった。

刹那の解答を容易く一蹴しておきながら言えたことではないが、やはりこの問題はとても深刻な話だ。私という人間が主人の立場に置かれる以上、それはやはり『主従ごっこ』の域を出ない。先述したとおり、それはあまりにも酷な話だ。真剣で真面目な刹那という少女を弄んでいるようで——心が痛む。

最善手が無いわけではない。

三日間の契約そのものを破棄すればいい。

刹那は普段通り、木乃香さんの護衛へと戻れるし、私も無い頭を悩ませる必要性が無くなる。

しかし、難儀な話で、それをすると眼の前の少女は甚く悲しむのではないか——なんて、そんな自惚れた憶測をしてしまう。

いや、自惚れでも何でもなく、やはり、それは刹那になにかしらの感情と課題を抱かせてしまう。

無能の烙印と受け取るか。

無力の証明と受け取るか。

なんにしても、どんなにオブラートに包んだ言い方をしようとも、それがネガティブな言葉であることに変わりはない。

「妹様。妹様は、今、なにか人にされたいことは無いのですか？」

されたいこと……？

「思い、浮かばない、かな。家事も、洗濯も、自分でやつてるわけじゃ、ないし……」

答えるまでもなく、というよりは、つい先程のやりとりが答えである。お世話されるようなことは、既に間に合っている。

「ああ、いえ、”してほしいこと”ではなく、”されたいこと”です」

……言いたいことは、なんとなく分かる。

してほしいこととは即ち、自分が主体となり、相手がそれに従うことで成立する要求。“されたい”とは、自分主体ではなく、相手の行動に自分の利害が一致した場合の都合の良い解釈——相手を主体に据え置いた希望的観測。

この二つは、確かに、よくよく考えてみれば似ているようで相対的な言葉だ。

「家事等の事務的なことが既に間に合っているのならば、それ以外の雑用——いえ、雑用というよりは、お願いのようなものです。なにかありませんか？」

必要性の有無ではなく、私自身の些細な願望要望。

されたいこと——無いわけではない。しかし、それを昨日の今日出会ったばかりの刹那に依頼するのは、やはり気が引ける。

と、先程の刹那を做うように顎を撫でながら思考に耽っていると、なにやら唸り声のようなものが部屋に響いた。

「……………」

刹那を見れば、お腹を隠すように片手で抑えながら、頬を赤く染めて、私から視線を逸している。

思えば、当然の生理的欲求である。五時間前には私の部屋の前に待機していた訳で、朝食を摂ったのは恐らく六時間程前の話。ならば、その空腹というパッドステータスは、なにも不自然なものではなく、むしろ自然的な——当たり前のものである。

「ご飯、食べに、行こっか」

「い、いえ！ お気になさらず！ 過去には絶食の経験もありますので！」  
どんな経験だよ。

## E p. 17

空腹など毛ほども気にならないと言いたげな刹那を『命令』という手段で説得した後、私は浴び損なつたシャワーを手早く済ましてから食堂棟へと足を運んだ。刹那は私の背後——三歩程離れたところを付かず離れずといった様子でそれに連なる。護衛としてその身を落ち着かせているとは言えども、従者としての心得は獲得しているらしい。

お金に関しては私は文無しの身。なにより一般的な食事が必要としない私は刹那の食事風景を眺めようとしていたのだが、それを刹那自身に制された。

曰く、

「お身体のごことは聞き及んでいます——朝食は一日の活力です。お金のことは気にせず、この三日間だけでも朝食を摂ってください」

とのこと。

朝食以外は好きにさせてもらうとして、ともかく、朝食だけは刹那のお世話になることになった。

少し遅めの朝食というよりは、少し早い昼食と呼んだ方が正しいのかもしれない。

誰かこの時間からご飯を食べるのは、実に数カ月ぶりの経験である。慣れないこと

もないが、食べ方が変ではないか、なんて妙なことを気にしながら、焼き魚の定食を私は無事に完食した。

いつまでも食堂棟に居るのは得策ではない。

刹那は制服に身を包んでいるし、私は見た目が児童である。食堂棟の職員が生徒指導担当教員に連絡をつけてしまえば、簡単に補導されてしまう。おじいちゃんに連絡さえ取ればその場はなんとか収まるとしても、やはり面倒事に違いはない。

食堂棟を後にして、私と刹那は食後の散歩に興じることにした。厳密には、散歩をしているのは私だけで、刹那はその護衛なのだ。

昨日の内に降り積もった雪が溶け切らない日影を避けて、のんびりと日光に照らされながら歩く。冬とは言えども、雲一つない青空は暖かい。吹き荒ぶ北風さえ無ければ、最早春の陽気と呼んでも過言ではなかっただろう。

「学校は、おやすみ？」

中等部から離れるように、食堂棟から逃げるように道を進みながら、ふと、そんなことを尋ねた。

元々制服を着用していることから、朝のうちに挨拶だけ済ませたら登校する予定だったのか、ということも含めた質問だった。

「はい。学園長から許可は頂いています。私のクラスの担任は高畑先生なので、欠席の

理由も上手いこと誤魔化してくれているかと」

「そっか」

なるほど、と。

元々刹那を私の従者にしてはどうかと提案したのは、他の誰でもない学園長だ。おじいちゃん刹那が動きやすいように配慮するのは当然の務めだろう。

しかも、世間とは狭いもので、あの白スーツのダンディメガネが担任とは。

確か、彼はある日迷い込んできたあのシスターさんの担任であるとも言っていたか。つまりは彼女も刹那のクラスメイトということである。奇妙な縁と言うか、なんと言うか。まあ、そのシスターさんとは、あまり言葉を交わすこともないのだが。時折シャークテイ先生とおしゃべりをしている時にふと目が合うくらいの関係だ。それを縁と呼んで良いのかは、判断しかねる。

それでなくとも、エヴァの担任も高畑先生だし、つまり早乙女さん達もクラスメイトということだろう。私の人生の登場人物が全員知り合い同士というのは、なかなか世間の狭い話である。

しかし、正直なことを言わせてもらえるならば、学校にはちゃんと登校すべきだと思う。いくら主従関係になったとは言えども、私如きに時間を割くよりは勉学に勤しんだ方

が有意義であることは明白な事実だ。

だが、学校を欠席することを咎める資格など、私には無い。如何せん、おじいちゃん  
がそれを許可している以上、私が口出しするなんて、烏滸がましいことこの上ないだろ  
う。なにより、それは刹那の意思を尊重しての判断に違いない。ならば、私もそれと同  
じようなスタンスで受け止めたほうが自然的だ。

——そこで、会話らしい会話は打ち切られた。

元より会話を得手としない私は話題を振る術など持ち得ていないし、刹那は未だに気  
にかけてような目線で私を探っている。

やはり、まだ油断すらしていない。

どんなに私を主と呼び親しんだところで、彼女の真の主は木乃香さんであり、私は警  
戒対象でしかない。彼女の真面目な性分と、私が学園長に保護されている身という肩書  
きさえなければ、今からでも私という存在を問い質したいに違いなかった。

彼女は私のことを『蒼井家の残党』と呼んだ。アオイなんて姓名はさして珍しいもの  
ではないだろうから、やはりそれは人違いなのだろうけれど、彼女にとつてそのような  
些事は関係ないのだろう。刹那からすれば、なにかしら因縁のある一家と関連すること  
を匂わせる人物であることに、変わりはないのだから。

しかし、やはり兵士プロと言うべきか。



その探るような目に不快感はない。

チャオという好奇心の塊とは違う。

あの研究者のような探求者とは違う。

探った結果、対象が不快を顕にし逃亡してしまつては、意味がない。そもそも目線を感じさせないことこそがプロなのではないかとも思うが、警戒している以上、心理的にそれは不可能である。故に、目線は目線として隠すことなく、雰囲気を変えているのだろう。

そんなことが可能なかどうかは兎も角として。

……或いは、私が考えているような『警戒心』とは違った別の感情で私を見ているのか——。

「……あら、刹那」

と、そんな私の探るような思考を断絶させるように、その声は聞こえた。

「刀子さん……?」

お互いに名前を呼び合っているということ、考えるまでもなく顔見知りなのだろう。

彼女は、私の前方にいた。制服ではなくベージュ色のスーツを着ている。教員だろうか。だとするならば、非常に不味いエンカウトだ。刹那という女子生徒を名前も含め

て把握している時点で、私達は補導対象でしかない。それでなくとも、刹那は制服に身を包んでいるというのに。

「こんなところで会うなんて、奇遇ですね」

こんなところ——というか、こんな場面で、できれば遭遇したくなかった種類の人間だ。刹那と同様に、その立ち振舞は真面目そのもの。知り合いだからといって、見逃してくれるような雰囲気はない。

「刀子さん、今は授業中のはずでは……？」

いや、刹那。それは多分、私達が訊く立場ではなく、訊かれる立場だと思うのだけだ。

——いや、『刀子』……？

「今は空き時間なので、こうして見回りをしているのです。そう、丁度、あなた達のように学校をサボって遊び呆けている生徒を糾すために」

ほら、言わんこつちやない。

いや、何も言っていないのだけれど。

「あ、いえ——これには訳があつて……！」

刹那は今更のように慌てふためく。私も、なにか言い訳のようなものを考えておいたほうがいいのかもしれない。いや、学園長の名前を出して確認さえして貰えれば、収まる

ことに違はないのだけれど。しかし、教員の立場としては、いちいち学園長トッブに確認を取るという手間を重ねる必要性はない。どのようにしておじいちゃんに連絡を取らせるべきか……。

そんなふうには、柄にもなく、内心であたふたと、てんやわんやと思考を重ねていると、刀子さんはくすりと笑いながら言った。

「分かつていますよ、学園長から話は聞いています。——はじめまして、蒼井鈴葉さん。刹那の新しい主人になったそうですね。この子、どうにも愚直なところがあるから、むしろ扱い難いでしょう?」

ここに来て、初めて、彼女は私に目を合わせた。薄つすらと浮かべた微笑みが似合う、大人の女性である。地味に、こういう人と会うのは初めてかもしれない。シャークティ先生は、こうして微笑むことはあまり無いし。

むう、大人の余裕というやつか。私とは縁遠いものだ。

「お恥ずかしながら、返す言葉もありません……」

「ふふ……そう萎縮することもないでしょう。しかし、あなたが主人を変えることを許容するなんて、どういう風の吹き回しです? 神鳴流は元より傭兵のようなものでもありませんが——あなたはあまり浮気をするような性分ではないと、そう思っていました」

——それは、そう。

私もそこは疑問だった。

昨晚の邂逅も含めて、未だに数時間という短い付き合いではあるものの、刹那の誠実な精神性というものは理解できる。何度だって言わせてもらうが、五時間もの間を飲まず食わずで人を待てる中学生なんて、果たしてこの世界にどれだけいるだろうか。いや、まず、いない。そんな精神性は、ただの中学生が持つていいものではないのだ。

ならば、そんな彼女の誠実なまでの忠義とは、忠義を持つことのできる程の誠実さとは、やはり、見ず知らずの他人と呼んでも差し支えない私に向けていいものではない。彼女の主である木乃香さんを差し置いて、私が主になるなど、あつてはならない現象だった。

しかし刹那は、三日間という制約があるとは言えども、私を主として据え置くことを認めた。

それは矛盾と呼んでも過言にはなるまい。たとえそれが罰であったとしても、彼女が「わん」と鳴くことを拒否したように、それを拒絶することは可能だったのだから。

だからこそ、私は探ってしまう。疑ってしまう。

彼女は、やはり真面目で誠実だから、真の主である木乃香さんの安全を確保するために、主従関係という皮を被った上で私を見極めようとしているのではないか——見極め

た上で、いつでも私を組み伏すことができるように、その側に控えているのではないかと。

「浮気だなんて、そんな……」

——そんな、鋭利な雰囲気を纏った私の中の刹那を崩すように、刹那は顔を赤くさせながら口籠った。

生娘か。いや、生娘なのだろうけれど。

「いいえ、悪いこととは言いません。むしろ、いろいろと硬すぎるあなたには良い妙薬にもなるでしょう」

それは、つまり、私が妙薬だとしても言いたいのだろうか。

良薬は口に苦しとも言うが。

「ただ——鈴葉さんは木乃香お嬢様と同様にとてもマイペースな女の子と聞き及んでいきます。やはり、刹那はそういう女の子がタイプなのですか？」

「刀子さん!? やはりとはどういうことですか!」

ああ……。刹那もそっち系か……。

私もエヴァという女性に対して、ある種そう言った感情らしきものを抱いているので理解できないはないが、いざ私がそういう対象に含まれるとなると、なんとも言えない複雑な気分だった。

いや、流石に私をそういう目で見ているということはないだろう。刹那は私と違って、良く知りもしないうちから、恋に恋する乙女のように人のことを好きになるような類の人間とは思えない。

いや、待て。私は恋に恋するような、そんなめんどくさい生娘のような性格をしていないつもりはない。

意図せずして、自分で自分をそのように形容してしまったことが、無性に腹立たしい。「冗談ですよ。或いは冗句というものです」

「は、はあ」

刀子さんは事も無げにそう言い放ち、刹那は溜息にも似た相槌を打った。

……と、言うか、誰がマイペースか。

私ほど相手のペースを気にして人と接する人もそうそういないだろうと自負しているのだが。

「ところで——蒼井鈴葉さん。神多羅木先生、もとい私からの贈り物は気に入っていただけですか？」

唐突に、刀子さんは私へと話題を振った。

そうだ——この人は、神多羅木先生の相談相手である。今までヘアアレンジセットやら下着やら——なんだかんだ言って生活の中で役に立つものを、そういった日用品をプ

レゼントしてくれた人なのだ。比率的に男性が多く、女性的な贈り物の少なかつた状況を、間違ひなく翻してくれた恩人。それが、葛葉刀子さんという女性だった。

こうして顔を合わせるのは、確かに初めてだった。

なにより、話に聞く刀子さんの印象と、現実として確実に存在する刀子さんの印象が違いすぎた。

もつとこう、粗暴な人なのかと。

「ん」

と、頷く。

私一人の手には有り余るものの、ヘアアレンジセットは確かに有意義なものだった。主にエヴァに遊ばれるために存在しているが——新たなコミュニケーションツールになつてゐることは間違ひない。

下着は——まあ、履ければなんでもいいから。

紐。パンだろうがティーバックだろうが。

誰かに見せるものでもないし。

「それなら良かったです。如何せん、あなたとの面会はなかなか難しく、感想を聞こうにもあの人は言葉が足らなくて……。これからも神多羅木先生を経由することにはなると思いますが、欲しいものがあつたら言つてください。お力になれると思いますよ」

私との面会——と言うよりは、あの地下区画への立ち入りが難しいのだろう。規制自体は多少緩和されたようだが、しかし刹那のような年端もいかない女子生徒に許可が下りたことこそが奇跡なのだ。

まあ、そんな奇跡も、紐解いて見てみれば、ただのおじいちゃん気紛れでしかないのだが。

### 閑話休題。

刀子さんのその心遣いは、正直、無用なものだ。自慢ではないが、私は私の欲しいものすら分からないのだから。いや、本当に、自慢にはならないのだけれど。

「……もしも、のときは、お願い、します」

しかし、彼女のご厚意を受け取らないというのも失礼な話だ。なので、ここは社交辞令。社交性など皆無な私が見せる精一杯の社会的行為だった。

それを知ってか知らずか、刀子さんはにっこりと微笑んだ。

「ああ、それと——刹那、今夜時間が空いたら学園長室に来るように、と。学園長から直々の呼び出しです」

「え……。学園長から……?」

「ええ。木乃香お嬢様のことも含めて話があるそうですよ」

言伝を預かっているということは——なんだ、偶然会ったように見せかけた茶番か。



刀子さんがどういう人なのかは分からないけれど、奇遇というよりは、こうなるべくしてこうなったのだらう。存外におちやめな人なのかもしれない。

補導されるのではないかと焦って損をした気分。いや、実質的にはなにも損はしていないのだけれど。気持ちの問題だ。

「それでは、鈴葉さん。今日はこんなにも心地良い冬日和ですから、快くまでお散歩を楽しんでください」

一体、どこまで把握しているというのか。

ここまで来ると嫌味に近いと思う。

不愉快とまでは言わないけれど、不快ではあった。もしかしたらどこからかのタイミングで尾行されていたのかもしれない。或いは、最初からか。

別に追求するようなことでもないし、どうでもいいのだけれど。

私は領いてから、止めていた足を動かして刀子さんを追い越した。それに追隨する刹那の気配と――

「刹那、あまり呑まれてはいけませんよ」

という刀子さんの意味も有りげな、意味深長な言葉を耳に残して。

## E p . 1 8

「ほう、コイツが、鈴葉の従者にな。……いや、なにがどうしたらそうなる？」

エヴァは、眉間に皺を寄せながら小首を傾げた。

話は少しだけ遡る。

随分と長い時間をかけて散歩をして、それから無事に帰宅。時計を見れば、短針は四という数字を指していた。

約四時間も歩き回っていたのかという驚きと、刹那のことを気遣うならばもつと早くに帰るべきだったという反省と。

刹那は部屋に戻っても座ることはなく、扉の前で静かに立ち尽くしていた。それは立ち尽くすというよりは、まさに護衛らしく、部屋へ侵入しようとする不逞の輩を阻止すべく金剛力士像が如く立ち塞がっていると形容すべきなのかもしれないけれど、この部屋が危険などとは程遠い場所であることを知っている私からすれば、それはやはり立ち尽くしているのだなと思わざるを得ない。

座つてもいい、と許可を出したところで、刹那はそれをやんわりと拒絶する。なるほど、扱い難い。刀子さんの言葉は確かに間違いなかった。

——そんな刹那の様子を眺めるだけの時間を過ごすわけにもいかず、私はこれから何をしようかと悩んだ。予定らしい予定はなかったし、別になにかをしていなくてはいならないという訳ではないのだけれど、人に見られていると思うとなにかをしたくなる。

しかし、作業風景を他人に見られるのは、好きじゃない。

特に、人形作りに関しては、まだまだ出来ないものを量産するだけの素人でしかない。もとより手先が不器用なようで、片腕だけ長くなったり、左足が右足になったり、まるで怪談に登場する恐怖の人形である。

それでも、自分で作ったものとは愛着が湧くもので、そんな不出来で奇々怪々な人形たちを捨てたりせずタンスの中に陳列してしまうというのは、良いことなのか悪いことなのか。

なんにしても、そういうったものを見られるということに羞恥心がないわけではない。素人だから仕方ないとか、これから上手になるとか、そういう子供騙しの激励など不要だ。私はどちらかと言うと人知れず努力するタイプなのだ。いつの間にか影も薄くなり消えかかっていたライバルキャラが、主人公のピンチに現れるとなんか知らないけれど凄く強化されていたりする——ああいうタイプなのだ。

なので、まあどうせやることも無いし、私はテーブルに教材を広げて来週の分の課題に手を出した。

それから二時間程。

集中力を切らした私は、相変わらず扉の前から動かない刹那に一つだけ質問をした。

「『ざりたいこと』、一つだけ、あるんだけど、いい?」

それは、やはり出会ってから一日しか経っていない人間に頼むようなことではないのだけれど、しかし、強いて、無理強いに、無理矢理にこじつけるように挙げるならば――

―それは確かに『ざりたいこと』の一つだった。

刹那はまるでおやつを差し出された子犬のように瞳を輝かせ、

「はい、なんなりと!」

と、二つ返事でそれを了承した。

小物入れの中から取り出したのは、一本の棒。ずっと昔に『日用品』という名目でプレゼントされた、一級品。それを如何程のものかと訊いてみれば、『最高級の心地良さ』とプレゼントされた、紛うこと無き本物。

乳白色のふわふわとした梵天がチャームポイントの――耳かき棒。

「これ、やって」

「耳かき……ですか?」

「ん」

これでも、こまめに部屋の掃除をしたり、シャワーに執着心を抱く程度には、綺麗好

きな私である。耳垢が溜まるのはどうにも我慢ならなくて、ほぼ毎日のように耳かきをしてきた。しかし——どうにも、極上の心地良さというものがいまいち感じられない。

これを持ってきてくれた瀬流彦先生の話を疑うつもりはない。パツケージは確かに量産品とは違った雰囲気を感じし出していた。

では、この耳かき棒が偽物ではないとするならば——私が下手くそであるという話に落ち着くのは、自然的な着地点ではないだろうか。

とは言うものの、誰かの手に私の耳を任せることはやはり不安と恐怖でしかなく、今の今まで、私の頭を悩ませる一つの命題だった。

「だめ？」

渡された耳かき棒を見つめて固まる刹那にそう問いかける。

事実、無理強いをするつもりはない。

「いいえ——是非、私に任せてください！」

いや、そんな、意気込まれても仕方ないのだが。

それから、刹那はベッドに腰掛けて、私は横になつてその太腿に頭を預けた。

いわゆる膝枕と呼ばれる行為だが——なんか、これだけでもういろいろと満足だった。

「それでは、失礼します」

頬にかかる私の長い髪の毛が、遠慮がちでくすぐるような手つきをした刹那の指によつて、耳の裏へと避難させられる。

ひんやりとした空気が耳を打ち据えた。耳を露出することは決して少なくもないが、それはつい最近、あのヘアアレンジセットを貰つてからの話である。慣れているか慣れていないかで言えば、断然、後者だった。

静かに聞こえる刹那の呼吸音からは、ちよつとした緊張が感じ取れる。

それも束の間、私の耳の穴に、慣れ親しんだはずの木製の棒が侵入した。

「んっ……」

と、息が抜けるような声が漏れた。

やばい。

なんだろう、この——これは。

凄く新鮮だ。

自分の意思とは違う——自分の思い通りに動かない、その木の棒が、私の耳の中の外壁を、優しくなぞる。

自分でやるのと、他者にやられるのと——その違いは、明確だった。

「んん……んん……んん……」

足の爪先まで力が入る。

こそばゆい。こそばゆいのだが——それが、とても心地良い。

夢心地というか、新天地というか。敏感な耳の中の皮膚が、その快感を増幅させて、全身に巡らせた。

「す、すみません。痛いですか……?」

漏れた声と、身動きした私の反応に、刹那が不安そうな声を上げる。当然、耳の穴から耳かき棒が引き抜かれてしまい、お預けを食らう。

「ちがう……。でも、ちよつと、慣れない……」

「……優しくしますから、あまり動かないでくださいね。危ないですから」

「ん……」

その言葉通り、更に慎重になったその手つきは、しかし逆効果だった。こそばゆさにより一層、拍車がかかる。

他者に触れられたことのない神経が、その激しくないはずの刺激を、脳に激しく伝達していく。

「妹様は、こんなところも小さいのですね……。少しだけ動かしますよ」

耳の話なのか、或いは耳の穴の話なのか。

というか、〃も〃とはなんだ。〃も〃とは。

身体が小さいとでも言いたいのだろうか。いや、それは認めざるを得ない現実なので

異論を唱えることはできないのだけれど。

そんな私のちよつとした不満を知ってか知らずか、刹那は私の頭の位置を調整する。やはり耳の穴が小さいと、角度によっては見えづらくなるものなのだろう。

「どうですか、気持ちいいですか？」

耳の奥まで見える角度を見つけたのか、刹那は再び耳の中に耳かき棒を入れる。ごそごそと、鼓膜のすぐ側で聞こえてくる音に、腰が震えた。

「ん……、良い……」

刹那は、耳かきの才能があるようで——私の耳の中にある気持ちのいいポイントを的確に突いてくる。

これでは、耳かき棒が優秀なのか、刹那が優秀なのか、判然としない。まあどちらにいたところで、私の不器用な手指ではこのような体感を得られることはないだろう。或いは、耳かきとは、元より自分でやるものではないのかもしれない。そもそも自分で耳の穴の中を見ることなど不可能なわけで、そんな状態で耳垢を取り切れるとも限らないのだから。

「妹様、もしかして、短期間の内にいじり過ぎたりしていませんか？」

「ん、ん……？　ん、ほぼ毎日、してる」

「やり過ぎは良くありません。ほら、こことか、少し赤く腫れていますよ」



ほら、と言われても、私にはそれは見えないのだが。

しかし腫れているとなると確かに剎那の忠告は受け流すわけにはいかない。

どうせ出血しようがなんだろうが、私の身体はすぐにその傷を塞ぐ——らしい。しかし、中耳炎のような病気がすぐに治るのかは、分からない。あの煙草とハウスタスト塗れの研究者に話を聞けば、もしかしたら解答を得られるのかもしれないが、やはり、あの人ももう一度あの場所で話するのは気が引けた。

「でも、自分でするのも、好きだから……」

「だめです。せめて一週間に一度とか——とにかく頻度を抑えた方がいいかと」  
むう。

まあ、仕方ない。言われたとおりにするのが吉だろう。

「良ければ、これからも私にお任せください——」

剎那の言葉は、そこで遮られた。

「貴様等、一体なにをしている!？」

「ひっ!？」

「んなあ!？」

エヴァの怒声と、扉を蹴破る音は剎那を驚愕させるには十分な音量だったようで——それと同時に狂った手元が私の鼓膜が突き破ってしまったのは、まあ、仕方のないこと

だったのかもしれない。

産まれてこのかた、出したこともない声が出た。



「なんだ、耳掃除か、そうか……。全く、ややこしい会話をしおつてからに……」

一体いつから私と刹那の会話を聞いていたのかも、なにがどうややこしい会話だったのかも分からないが、兎に角、状況を飲み込んだエヴァは溜息を溢しながら丸テーブルの上で肘をついた。

それから、何故私の部屋に刹那がいるのかと訊かれ、そのまま「従者になったから」と返したら、冒頭に記述したように、エヴァは困惑した表情を見せたのだった。

「なにがどうしたらそうなる？」

というセリフと一緒に。

ちなみに、そんな私の従者であるところの刹那は、私の横で土下座をしている。

刹那が悪いわけではないから、そんな必死に謝られても困るのだが——そうしてしま

う気持ちは分からなくもない。

私だつて他人の鼓膜を破つたら土下座する。むしろ自分の鼓膜を破つて「これでチャラにしてくれ」と懇願するかもしれない。

しかし、このままでは、刹那は一生その体勢を維持したまま私の横に居座り続けかねない。私起きてこないからと言つて五時間も部屋の外で待機し続けるような人間なのだ。きつと、きちんとした理由さえあれば、一生を土下座と謝罪に捧げることだつて厭わないのだろう。是非とも、その貴重な一生をもつと有意義に生きて頂きたい。

耳かき棒に付着した血をティッシュで拭いながら、私はその視線をエヴァに移した。「なにが、どうしたら、と、言われても。複雑、怪奇。難透、難解。説明、しづらい……」エヴァは相変わらずむすつとした顔をしている。どうにも、なにかが気に食わないらしい。普段から気を食っているのかと言われるとそういう訳ではないだろうけれど、どちらかと言うと、私の認識では食われる側に立つエヴァである。食べさせてくれる側、とも言う。

「別に、構わんがな。どうせジジイが一枚噛んでいるんだろ？ なら、奴に話を聞けばいいだけの話だ」

言つてしまえば、伏線も兆候も皆無なこの状況を、ひと目見ただけでおじいちゃんも絡んでいふと言う正解を導くあたり、流星は幾百年という時を生きる吸血鬼である。い

や、そういう妙なことには例外なくおじいちゃん絡んでいると言う、ただの偏見かもしれないが。

「しかし、お前が従者なんて引き連れても持て余すだけだろうに」

それは、そう。

「だから、耳掃除、してもらった」

「そうはならんだろ」

それは、そう——なのだろうか？

いや、明確な主従関係を持つエヴァが言うのだから、そうなのだろう。

茶々丸さんに耳掃除をしてもらっているエヴァの姿は、なんとなく想像できなくもないが、それはその外見が故の話だろう。

いや、決して、見た目が子供だからとか、言うつもりはないけれど。本当に。

「お前たちの言う主従というものがなんなのかは知らんが、少なくとも、魔法使いに於ける主従とは違うのだろうか？ いいところ、ハウスキーパーと家主のようなものか」

その通り。

魔法使いに於ける主従関係なんて、私には必要ない。

私は魔法使いではないのだから。況してや、刹那のような武闘派の従者を得る必要は、端からありはしない。

「そういうものにはな、きちんとした契約が必要なんだよ。家主が求めるものと、使用人に求められるもの。それがはつきりとしないうちに契約を成立させるなんて、愚の骨頂だ」

むう。

「明確な必要性と、必然的な目的。それが無くしては、主従関係は立ち行かん。——まさか、耳かきしてほしくてその契約にサインしたわけでもないだろうに」

茶々丸さんの主人としてその地位を確立しているエヴァの言葉は、決して軽いものではない。むしろ、現実的な話だ。

刹那が私に仕える理由は「罰」であり、そこに目的はない。あくまでも、「罰」という目的のための手段である。故に、刹那が私の従者になったという事実さえあれば、成立してしまう。成立してしまうからこそ——そこに中身が伴わない。

そりゃ、何をしてもらえばいいのか、分からないのも当然だ。

如何せん、前もって「してほしいこと」があつてこそその契約である。

契約した後に「してほしいこと」を探すなんて、本末転倒もいところだった。

なるほど。本格的に茶々丸を従えているエヴァから見れば、今の私と刹那の関係は兎戯にも等しく、滑稽なものなのだろう。

これでは、おままごとの延長線ではない。

うーん。それを認識してしまうと、尚更、刹那に対して申し訳ないと思う気持ちも積もっていく。三日間、木乃香さんを放つたらかしにして私の兎戯に付き合え、と言っているようなものなのだから。

「それに、耳かきくらい、別に従者に頼むようなことではないだろう。なぜ私を頼らないのだ」

睨みつけるように、エヴァは私を見る。

そりや、エヴァに耳かきなんかされたら、きつと私の人生の満足度は天井を叩くに違いない。エヴァの魔力と太腿とその柔らかな金髪で私の矮躯を包みながら、その迷走神経を刺激しようものなら、間違いなく私の人生は完成してしまう。

だがしかし、耳かきを依頼する仲とは、なんぞや？

親が子にそういうことをするのは、分かる。

恋人同士が戯れるようにそういうことをするのも、分かる。

では、私とエヴァの相関図とは。

少なくとも私はエヴァのお腹から産まれたわけではないし、告白をした覚えも、された覚えもない。

つまり、現実的な私とエヴァの関係は、友人に留まる。

友達に耳かきをお願いするのは……ね？

「それは、ハードルが、高い……」

刹那にお願いできたのだって、それが形骸的なものであったとしても、  
 “主従関係”  
 という名目があったからこそである。

漠然とした、“従者は主の言うことを聞くもの”というイメージがあったからこそ、  
 なのである。

「私は、お前に信用されていると思っていたのだがな」

しかしそんな私の言い分など知ったことではないと言いたげに——エヴァは腕を組  
 んで、そっぽを向いた。

なんか、怒ってるというか、拗ねてる？

他人の耳掃除を趣味や生業にしている人間というのは——もしかしたら一定数いる  
 のかもしれないけれど、それでも極少数だろう。少なくとも、そういう話は聞いたこと  
 がない。いや、他人様の趣味なんて、そもそも、あまり聞くこともないとは思うのだけ  
 れど。

エヴァの趣味を完全に把握しているなんて思えば上がっている訳ではない。

ただ、エヴァが耳かきを趣味にしているという話は聞いたことがなかった。

信用以前に、信頼以前に、知らない話を参考にすることはできないのだ。

「信じ、てるよっ……」

——ただ、ここは、まず、私のエヴァに対する信用云々よりも、エヴァの私に対する信用を取り戻すべきだろう。

『信用しているということを利用してくれ』とは、言葉にすると少し滑稽なものだが。  
「……………」

エヴァは困ったような顔で、私を見つめた。

なにかおかしいことを言っただろうか？

信用されていると思っていた——つまり、思ったよりも信用されていなかったのか、というエヴァの勘違いを正した結果になったのだが。

エヴァは、一つ、咳払いをしてから切り出す。

「ま、まあ、別にいいのだがな。つまり何が言いたいのかと言えば、耳かきくらいならば私もやってやる、と。そう言いたいわけだ」

何かを、或いは何かに言い訳するかのようない方だったが——分かってもらえたのならば十全だ。

しかしエヴァに耳かきを要求するというのは、それにしたってハードルの高い話だった。ハードルというか、最早それは壁だ。屹立する壁。刹那に対してお願いするのと、エヴァに対してお願いするのでは、その難易度が桁違いである。

それは、自分の耳を任せる事に対する不安ではなくて、耳の細部を見られることに対



する羞恥心。あまり人に見られるものではないから——というよりも、耳垢という自分の身体の汚いところをお世話してもらうことが、恥ずかしい。

どうにも、私の耳の中は赤く腫れているらしいし。

エヴァに耳かきをされるならば、まずはそれを治してから、耳垢どころか耳毛すらもない綺麗な状態で挑みたい。

本末転倒な話だが。

「さて——それはそれとして、桜咲刹那。貴様、いつまで惨めつたらしく頭を垂れているつもりだ」

今の今まで、その土下座という姿勢を一切崩すことなく維持し続けた刹那に送られた言葉は、賞賛ではなく叱責だった。

いや、元はと言えばエヴァの強引な乱入が招いた事故が原因なのだが——私は私の鼓膜の紛失に対する責任の所在を追求するつもりはない。

そういう意味では、エヴァの言葉には大方同意見である。

鼓膜はとつくに再生しているし、痛みも引いたし。

土下座されているというこの状況は、むしろ居心地が悪い。

「し、しかし」

「しかしも駄菓子もあるか。主である鈴葉が許すと言っているのだから、それを甘受す

るのは従者の特権だろう」

「いいえ——それでは私の気が収まりません！」

刹那って、実はマゾなのだろうか。

なんて言ったら、それこそ不躰なのかもしれない。

でも、こう考えてしまふ私の気持ちもどうか察して欲しい。

昨晚の一件と言いい今回のこれと言いい、自ら罰を受けたがるその姿勢を尊ぶことは難しい。

「刹那、本当に大丈夫、だよ？　もう、治った、から」

「治れば良いというものではないのです！　たとえ、たとえ私の手元を狂わせた理由が、エヴァンジェリンさんの唐突な乱入と大声であつたとしても、妹様の鼓膜を穿ち貫いたのは私なのです！」

「……………」

刹那は、その全てが自分の責任であると言いたいのだろう。

図らずしてエヴァに罪悪感を植え付けるような言い回しになっているのは、多分、故意ではない。むしろエヴァの責任さえも背負おうとしているのかもしれない。

ただ、額を床に擦り付ける刹那には、ばつが悪そうに目線を逸らしているエヴァの姿は見えないのだった。

それにしても、なんだか既視感を覚える光景である。まさか人が土下座している姿を連日目にするとは思わなかった。

「エヴァ。どう、しよ……？」

とりあえず、投げてみた。

茶々丸さんとは立場が違う——正しく、主人という地位に鎮座する大魔法使いであるエヴァならば、こういった場合の対処法を知っているかもしれない。

「知るか。言うことを聞かない従者など縊つてやればいいんだ」

「ええ……」

事も無げに言う。

主従ともなれば考え方も己己己己ということなのだろうか。結論に至るまでの過程こそ違えど似通った終着点を迎えるのだから、なんとも興味深い話だ。

勿論、私は刹那を縊り殺すつもりはない。刹那もまた、縊り殺されようとしている訳ではないだろう。

……満足するまで土下座させておけば、意外とそのうち勝手に立ち直るのでは？

いや、それは楽観視が過ぎるか。この土下座モードの刹那はやけに頑固である。それは昨晚のファーストコンタクトで証明済みだ。ここでも動かない——と言うよりは、てこがなくて動かない。

罰てを持っていない私からすれば、それは動かざること山のごとし。とは言えども、野となれ山となれ——と投げ出すこともできまい。

「そもそも」

と、エヴァが言った。

「従者とは主に従う者のことを指す。読んで字のごとくだ。桜咲刹那——貴様が何をどのように勘違いをしているのかは興味もないが、その醜態を晒す意義など、今この現状においては無価値であると知れ」

無価値——無意味。

それは、こうして言葉として発するにはあまりにも冷たいものだったが、その一方で、無慈悲なまでの正論でもあった。如何せん、私はその土下座に意味を見出してはいない。刹那の独り善がり。自己満足である。

いや、本当、冷たい言葉だが。

「妹様……」

そんな言葉に恐怖すら覚えたのか、いよいよ刹那は顔を上げた。懇願するような——或いは救済を求める子羊が如く顔だった。

忘れそうになるが、彼女はただの中学生。年端もいかない少女である。怒られれば、そりゃ、そんな顔にもなるのだろう。

昼間の引き締まった様子こそ、年齢不相応というものだ。

このような顔で見られてしまうと、私はとても弱い。困っている人を助けたいと思えるほど善人ではないが、無視するほどの悪人でもない。

血の色が多少こびり付いてしまった耳かき棒をテーブルの上に置いて、私は刹那の小さな頭を優しく梳くように撫でた。

「妹様……?」

「今は、私が主。だから、私の言うこと、聞いてほしい」

刹那を助ける——つまり、罰を与えるということとは、何度でも言わせてもらうが、私にはできない。折り合いを付けようにも、刹那が受け入れてくれる妥協点を見出すことも困難。ならば、私の意思を刹那に吞ませる他になかった。

「……………」

不承不承といった様子で土下座モードを解除。正座を保ちながらも目を伏せる姿は、本当、叱られた直後の子犬が如くである。刹那の頭に犬のような耳が着いていたならば、それは力なく萎びて垂れ下がっていることだろう。

——何故、これ程までに罰を欲して、罰を受けられぬ事に対して気を落とすのか。いや、そうではないのかもしれない。

刹那にとっての『主』というイメージ——理想像。

それと、私という人格が、決定的に不適合なのだろう。

私は、良くも悪くも中庸的で、あまり物事に白黒つけるタイプではない。誰かの都合が悪くなるならば、それを回避して、逃避する。

それに対して、刹那はその逆で、物事をはつきりとさせている。それは、昨晚の襲撃からも見て取れる。黒ならば黒、白ならば白。そして、その判断に忠実に従う。故に、それを『主』という存在イメージにも適合させている。

刹那という抜き身の刃を収めるには、少し緩すぎる——そんな鞘こそが、私というわけだ。

分かりやすく言えば、自分にとつての常識が通用しない相手と対話をしていることに相違ない。それは、囟らずとも、お互いを否定し合っているのと、なんら変わらないことなのかもしれない。

「妹様は、優しすぎます……」

ふと、刹那がそう呟いた。

それは、もしかしたら苦情だったのかもしれない。

従者のくせに生意気な——とは思わないが、ちよつとした意趣返しにその頭を撫で回してやった。

それから、刹那は部屋を後にした。

学園長からの呼び出しもあり、今日は早めの解散というわけだ。

刹那曰く、明日は私が寝るまで付き添うつもりらしいが、彼女にはプライベートという概念が無いのだろうか。私にはプライベートという概念が存在しているので、是非とも具体的な解散時間を定めたいところだったりする。

こういう部分も、きちんと話し合った上で主従関係を結ぶべきだったのだろう。先程のエヴァの苦言が耳に刺さる。

「全く——面倒事に巻き込まれる体質だけはいつまで経つても変わらん、お前は」  
ベッドの上に腰を下ろしたエヴァは、私を見下ろしながらそう言った。

面倒事に巻き込まれているという自覚はあまり無いのだが、それは記憶を失う前の私との比較なのだろうか。回避や逃避こそがアイデンティティであると自負する私にとって、それは死刑宣告のようなものなのだ。

「面倒、なんて、思っていないよ?」

「だから面倒事に好き好まれるのだ」

さいですか。

まあしかし、こればかりは主観の問題である。私という一個人が、エヴァが言うところの面倒事を、面倒ではないと認識している以上は、その面倒事は面倒事たり得ないのだ。

「面倒なことは嫌いなくせに、それを許容する——。あれだ、ダメ男に惹かれる女みたいなものだな」

「むう……」

「或いは嫌よ嫌よも好きの内ということか」

「そんな、曖昧な、線引きは、してない……はず」

「ふん、どうだかな」

やはりと言うべきか、どうにも、今日のエヴァは虫の居所が悪いらしい。触らぬ神に祟りなしとは言うものの、まあ、触るくらいなら許されるだろう。いかんせん、エヴァは神ではなく吸血鬼だ。

ベッドに座るエヴァの足に体重を預けるように擦り寄る。

邪魔だ——と、文字通り一蹴されるかと思つたが、そんな私の行動に、エヴァは困惑しているようで、視線を寄越すだけだった。



## E p. 19

「それでは、失礼します」

深々と頭を下げ、彼女——桜咲刹那は理事長室を後にした。

部屋の中に残された近右衛門は、深く溜息を吐く。座ったまま椅子を僅かに動かし、夜天が大きく広がる窓の外を見遣った。

冬の夜空は澄み渡るほどに空気が張り詰めている。少しでも触れてみれば、それは瓦解して、夜天に輝く星が崩落してしまいそうだった。

この麻帆良を覆う壮麗な星空を見てそう感じてしまうのは、どうにも有耶無耶で掴み所のない雲のような話を模索していたからだろうか——と、どこか悲観的な自身に苛立ちを覚える。

「蒼井家の残党——学園長は御存知だったのですか？」

「うむ……」

近右衛門の横に立ち控えていたタカミチが、深いため息に似た声色でそう訊ねた。

それに対し、どう答えたものかと考え倦ねる。

知らなかったわけではない。しかし、確証を持っていたかと言えばそれも嘘になる。

近衛近右衛門は知っているだけだった。

なにより、その確証も持てない不確かな情報を組織に開示したところで、一つの軋轢を生む装置にしかなり得ない。故に、隠匿した。誰も知らないのを良いことに、そうすべきであると判断した。

蒼井家の経歴を知っている者がいるなど——それはイレギュラーでしかない。

——全く、と。

翁は胸中で独りごちる。

それから、言葉を探りつつ、静かに口を開いた。

「……蒼井家そのものは、確かに存在した。呪術協会が今の名を冠する前の——昔の話じゃ」

故に、その存在を直接目にしたことはない。今から口にすることは全て、文献から見知っただけの追憶である。

呪術協会の汚点——それを口にすることは、どうにも憚られた。

「江戸前期頃、陰陽師を始めとした退魔師は全体的に衰退していった。妖共を討伐し、狩り尽くし、やがて退魔師と妖はある条約を結んだ。それを守る以上は双方矛を収めると言った、単純な不可侵条約のようなものじゃ。その結果、人々は安寧な日々を手に入れ、やがて、妖を幻想のものとして認識していった。そうなつてしまえば、退魔師なんての

はただのオカルトに成り下がりで、陰陽師なんてものは星を眺めるだけの変わり者としてか認識されず、やがて国からも必要とされなくなつた。そこで、当時の青山と蒼井はある悪巧みをした。蒼井が妖共を唆し百鬼夜行を演じ、青山がそれを討伐するという、まあ、兇戯のようなものじゃ。しかしそれが思いの外効果的だつたようだな、それから幾度か、その演目を繰り返した」

そうしていくうちに、人々は人外魔境に土地と穀物と命を奪われる恐怖を思い出し、また、命を救われることの意味を覚え直した。

「じゃが、それはその二つの一族による独断で決行された計画でな——当然、本家にその悪行を看過された。しかし青山は既に国から英雄視されておつたし、この一連の百鬼夜行が身内による犯行であるとバレてしまえば信用問題にも繋がる。故に、青山は当主を戦死と称する形で処刑され、世間にも認識されていかなかった蒼井家は根切りとなつた。じゃが、蒼井家の当主は命からがらに生き延び、その怨恨を残しながらどこかへと姿を消した」

それは、紛うことなき呪い。

しかし、その矛先は呪術協会ではなく、自らの一族へと受け継がれていったと言うべきだろう。

「その蒼井家が、本当の意味で滅んだ——と言うのは？」

「はて——すまんの。わしも知らんのじゃ」

如何せん、呪術協会と蒼井家はもはや関係性を築いていない。先述したとおり、それは汚点であり、故に蒼井家は呪術協会の歴史から消し去られた。それでも長として責任を背負うものには教訓としてそれは語り継がれ、また、その口は固く閉ざされてきた。故に、知<sup>……</sup>っているだけ。

蒼井家はその血脈を絶やそうが、呪術協会の耳には届かないのである。

「刹那くんの師匠は独自に探っていたようじゃがの。それが何故なのかは、彼女本人に聞くしかあるまいて」

「そう、ですか」

普段からどこか老獪な様子を見せる近右衛門に、タカミチは僅かながら懐疑的な視線を向けた。しかし、嘘をついてるようにも見えないその面持ちはあまりにも歳相応な疲労感に包まれていて——。

「蒼井鈴葉は既に死んでいるはず。故に、あの蒼井鈴葉は偽物だと思った。過去に出会った蒼井鈴葉と瓜ふたつなその姿に憤りを覚え、また、木乃香と接触する様子を目にしてしまったために、その本懐を問い質すべく闇討ちした——と。……刹那くんは出鱈目を吐けるような子ではない。しかし、わしの知<sup>……</sup>っている鈴葉は鈴葉だけじゃ。タカミチくん、わしは自分の孫娘のようなあの子を、どのように捉えればいい」

「僕にもそれは判断しかねます。——ですが、さつき刹那くんも言っていたじゃないですか。『見た目だけでなく、その性格も昔の蒼井鈴葉と瓜ふたつだった』と。それだけの年月が経っている今、刹那くんの記憶を頼りにすることは難しいと思いますが……鈴葉ちゃんも鈴葉ちゃんである、ということに変わりはないかと思えます。……ともかく、刹那くんのお師匠さまとやらに直接話を聞きましょう。それが一番の近道ですよ、学園長」

「そうじゃのう……。しかし、あやつはどこか奔放でな。はてさて、まずはその在り処を探すことから始めねばならんな」

心の奥底から、何度目かも分からないため息を零した。



「おはようございます、妹様」

いつもよりも早い時間に起きてしまった私が、恐る恐る部屋の扉を開けてみれば、そこには昨日と寸分変わらない様子で跪いている刹那の姿があった。一瞬、昨日という一日

の中に囚われてしまったのとか思ったが、そんなはずはないだろうと、寝惚けた頭にツツコミを入れてみる。

「……おはよう」

まあ、土下座じゃないだけマシなのかな、なんて思いながら、返答する。

どちらにしても頭を垂れていることに変わりはないのだが、床への接地面積を基準に据え置いて考えれば、こんなものは剎那にとつて足裏二つ分と相違ないのだろう。端的に言えば、一般人で言うところの直立と同義だ。

いや、知らないけど。

とりあえず剎那を部屋の中へと招き入れ、私は日課の朝シャワーへと赴いた。いつもよりも機敏な動作で服を脱ぎ捨て、籠の中へと放る。

今日の私の目標——勝手ながらも定めさせてもらった一日の予定には、剎那を学校へと送り出すという項目がある。その第一関門には時間制限がある。ゆつたりとシャワーを浴びている暇はない。

更に言うならば、剎那は私に朝御飯を食べさせるつもりでいる。それ自体はなんとも有り難い話だし、否定するつもりもない。だが、朝の時間を圧迫する項目であるということに変わりはない。

兎にも角にも、いつもの三倍くらいのスピード感で動かなくては、剎那を学校へ送り

出すことは不可能である。

いや、まあ、なにも一時限目に間に合わせずとも良いのかもしれないけれど——それはそれ、これはこれである。

体感三分程でシャワーを済ませ部屋に戻ると、小さな丸テーブルの上にお弁当箱が並べられていた。

「不肖ながら、朝御飯を用意させていただきました」

「おお……」

身の回りのお世話をされる隙など無い程に、とつくの昔から身の回りのお世話をされてきた私の唯一の隙を、これでもかと突き穿ちたいらしい。

「ですが、まずは御髪おぐしを失礼します」

その威圧感すら覚えるお弁当に圧倒されている私に出来た隙を、刹那は間髪入れずに突いてきた。

立ち尽くしていた私をベッドの傍らに誘導すると、僅かな力で肩を掴まれ腰を下ろされる。頭に巻いたタオルははらりと剥ぎとられ、いつの間にか用意されていた新しいタオルを掛けられる。更にいつの間にか用意していたドライヤーで、タオルの上から温風を煽られた。

——動きに迷いが無い。

まさか、昨晚私が開き直って今日の予定を臆気ながらも立てていたように、刹那もまた、今日という日を従者として開き直って接するように決心していたのだろうか。

昨日のエヴァの言葉には、〃従者ならば従者として主人の言うことを聞けばそれでいいのだ〃というニュアンスが多分に含まれていたように思えるのだけれど、あの冷めた激昂を、もしや熱い激励と勘違いしたのではあるまいな。

いやしかし——なるほど。

されるがままというのは私の人生においてはそう珍しくもないシチュエーションだが、まるで人形のように脱力していても朝の活動が終わっていく感覚というのは、なんだか甘美な蜜を吸わせて頂いてるようで癖になりそうだった。

これが蜂の子の気持ちというものなのだろうか。

最早抗う気力もなにかかも吸い取られ、端的に結論を述べるならば、朝の活動の殆どを刹那に委ねてしまった。

しかし、私とて私の今日という日の目的を忘れたわけではない。

元はといえば学園長が言い出し、それに従う形で刹那は三日間だけ私の従者となった。それならば、刹那が満足するまで自由に私につき従えばいい——それが刹那のためになるのであれば、それで万事解決、と。そう思っていた。

しかし、結論から言わせてもらえば、私は刹那の主人足り得る素質は皆無であるとい



う事実がそこに屹立したのである。

それは刹那と私の相違であり、差異であり、誤差。

納まるべき鞆から抜け落ちる白刃。

白刃を納められぬ締まりの悪い鞆。

それが私と刹那の相関図だった。

だからこそ、私がすべき事は——まあ、言つてしまえば責任の放棄である。いや、言葉にすると酷いものだが。

いかに私が刹那を連れ回して散歩をしようとも、いかに刹那が私の部屋の前で金剛力士像が如く立ち塞がろうとも、それでは不完全燃焼だろう。

ならば、私と接する時間を制限し、その制限された時間で刹那に多少なりとも注文をする。そうすることで、密度の高い時間を錯覚させ、あたかも燃焼したかのように——お世話し尽くしたように思わせようと言う、私なりの策略である。

まさしく、開き直り。

しかし、これもまた一つの解答である。

起点を正せば、これは刹那の罪滅ぼしなのだ。

どんなに長い時間を共に過ごそうが、刹那が満足感を得られなければ意味がない。しかし、生憎と私の一日なんてものはたかが知れている。

故に、刹那がこうして私のお世話に奮闘してくれたことは、実のところ、私にとつてはとても都合がいい。

本来ならば私が注文しようとしていたことを勝手にしてくれたのだ。

……こうなってしまうと、勝手に自己満足してくれそうなものでもあるのだが。

まあ、それはそれ、これはこれ。

更に本音を重ねて言わせて貰えるのなら、やはりプライベートな時間が欲しい。別に特別な日課があるわけでも無ければ、プライベートな時間を侵害されているわけでもないのだろうけれど、私はどうにも繊細な生き物のようで、知り合ってから数日と経たない人間に付き纏わられることに微弱なストレスを覚えるのである。

もちろん、先日エヴァに言ったとおり、この状況を迷惑だと思ふことはないし、面倒だと思ふこともない。これはただの私の性質の話だ。

「なので、刹那は、学校に行く、べき」

——なにかと適当な理由をでっち上げてそう告げてみれば、刹那は「それが妹様の御意向ならば」と二つ返事にそれを飲み込んだ。

刹那の性格や性質を把握しているつもりはないが——意外だった。「主の側で付き従うことこそ我が本望」を地で行く精神の持ち主であると思っていただけに、呆気ない。一度でもそれを拒否されるようであればこちらが溜飲を下げようと考えていたのだが、

「どうやら杞憂だったらしい。」

「——木乃香お嬢様とは、どういった経緯で知り合ったのですか?」

朝の太陽に照らされながら、もうそろそろ女子中等部の校舎に辿り着こうかという頃、刹那は唐突にそう訊ねてきた。

木乃香さん——近衛木乃香。

初めて顔を合わせたのは、凡そ二ヶ月ほど前。思い出すだけで胸騒ぎを覚える、あの図書館の亡霊と出会った日。

今にして思えば、ファーストコンタクトの時からなにかと距離が近かったような気がする。

——木乃香さんの護衛を名乗っている刹那だが、そういえば、私と木乃香さんが接触するときにはその姿を見せていない。

「陰ながらお見守りすることこそが務め」と言っていたか。その文言通り、影からひっそりと護衛しているのだろう。

で、あればこそ、陰ながら見守る護衛であるところの刹那が、私と木乃香さんのファーストコンタクトを知らないのは不思議な話である。まあ、そうは言っても、刹那と人間である以上、四六時中木乃香さんを見守り続けるのは不可能だという——至極当然な話なのだろう。

「図書館島で、知り合った」

経緯と呼ぶには杜撰な回答だが、これが全てだ。木乃香さんの距離感があまりにも近いので、私自身も親しい仲であると錯覚してしまいそうになるが、前回を含めても顔を合わせたのはたったの二回。正直、馴れ初めなんてものがある程の仲ではない。

敢えて言わせてもらえるならば、今現在こそが馴れ初めの最中である。

「なるほど、道理で……」

しかし、刹那にとつては私の杜撰な回答でも十分だったようで、なにか得心がいったと言わんばかりの相槌を打ち、しかし、まだなにかパズルのピースが合わないといったような思案顔を見せた。

まるで、私と木乃香さんが出会うことそれ自体が、不可思議であると言いたげに。

——出会いや邂逅に、不可思議なんて言葉は、あまりに似つかわしくない。外を歩けば人とすれ違う。その中で、偶然にも、会えば言葉を交わす仲になったというだけの話。学園都市という閉鎖的な空間であれば尚更、長い目で見れば誰とだつて知り合う機会と  
いうものは転がっている。

それにしたつて、随分と世間の狭いコミュニティを築いてるな——と、私自身も思わなくもないが。

「それでは、妹様から見て、お嬢様はどのような御方に見えますか？」

それは、また、なんとというか、含意の広い質問だ——私が木乃香さんについてどう思っているか。

私とて、言葉を交わした相手についてなにも思わないほど無機質的な人間ではない。だが、意識して考えたことがあるかと言われれば、そうでもない。

印象とか、イメージとか、そういうものは、ある程度のレベルで自動化されているものだ。

改めて彼女のかんばせを頭の中で思い浮かべてみれば——

「……優しい人、って、思う」

——まあ、これに尽きるのではないだろうか。

二度の邂逅において、彼女はそこまで親睦の深くない私に対して、深い心遣いを見せている。図書館島での休憩所までの道程でも、しんしんと降り積もる雪の道端でも、彼女は私を気にかけてくれていたと思う。

それこそ、本当の姉のように。

それが当然と言わんばかりに。

「あと、懐か、しい？」

それは、エヴァと初めて対面した時を彷彿とさせる。

あそこまで露骨なものではないが、あの母性と魔力には、どこかノスタルジックな雰

困気が紛れ込んでいたことも事実だった。

だからこそ私は彼女に成されるがままだったし——それも、当然なのかもしれないと、受け入れていた。

まあ、人形のように抱き抱えられてしまえば、拒絶のしようもなかった、というのも一因ではあるのだが。

「懐かしい——ですか？」

「……ん」

先述したとおり、エヴァほどの確信があつた訳ではない。ただ、ほんのりと、そう感じただけだ。

エヴァに対する印象がそうであつたように、記憶を失つた私は、しかし完全にそのすべての記憶を喪失したという訳ではない。それこそ、記憶を失う前の人間関係に、彼女と似た友人知人がいたのだろう。

そう言えば、エヴァや先生方を除いて、記憶を失くす前の私を知っている人物には、会えていないな、と——ふとそんな思考が過ぎる。

しかし、その一瞬の疑問にも似た思考は、意外なものに遮られた。

「せつちゃん、と——鈴葉？」

噂をすれば影が射す、と言ったか。

私と刹那の背後から聞こえたそれは、つい一昨日あたりに聞いたばかりの、柔らかな声だった。

足を止めて、声の出処へと目を向ける。

切り揃えられた前髪の下から覗くまあるい目は、驚愕の色に染まっていた。

「……………それでは、私はこれで失礼します」

「へ……………」

まるで、避けるように。

先程までの調子とは打って変わって、冷たさすら覚える声色で刹那はそう言う、いつの間にか眼前にまで迫っていた中等部校舎へと足早に歩みを進めた。

いや、事実、避けているのだろう。

陰ながら見守るといふそのスタンスからして、裏の世界そのもののような——兵士のような自分を、木乃香さんから遠ざけたいという意思があったとしても、おかしな話ではない。

「あつ……………」

彼女は、名残惜しそうに手を伸ばそうとするものの、刹那は構わず足を動かし続け、や

がて校舎の中へとその姿を消した。

……微妙な空気だ。

なんだか居た堪れない。

「木乃香、さん？」

その後ろ姿の残滓を眺めるように視線を固めてしまった少女は、しかし、私が呼びかけてみれば表情をハツとさせて、いつもよりもどこか希薄な笑みを浮かべる。

「おはよー、鈴葉。こないな早い時間に、どないしたん？」

「木乃香あ、急に走らないでよ……って、この間のガキンチョじゃない」

木乃香さんの後ろから、息も切らさずに走り寄ってきたのは、あのときのツイインタールの人——確か、名前は……アスナさん、だったか。なにかと人から甘やかされている傾向にある私からすれば、アスナさんのつつけんどんとした言動はなかなか新鮮だ。

まあだからといって人のことを指差して「ガキンチョ」と呼ぶのはいかなものかと思うが。

さて——なんだか、木乃香さんと会うときはいつもこんなタイミングだ。なにかを誤魔化さなくてはいけないというか、なんとというか。とにかく、下手なことを言えば墓穴を掘りかねない。

詳しいことは話を聞かなければ分かりかねるが——刹那との関係は、赤裸々に語って



いいものではないだろう。元より、木乃香さんは裏の世界のことはなにも知らないらしいし。

陰ながら見守っているという刹那と、そんな刹那を「せつちゃん」と親しげに呼ぶ木乃香さんと——なんだか複雑な関係性が見え隠れしている。できれば私の前では隠れてほしいのだが。

「朝の散歩、してたら……道に迷っちゃって。困ってるとき、あの人が、中等部になら、案内できる……って」

——と、いうことにしておこう。

私が私の定住地から自力で中等部にまで足を運べるという情報は開示済みだし、時間も時間だから、刹那が中等部まで私を案内するという構図は不思議な話ではないはずだ。

刹那が私のようなガキンチョを助けるような性格をしているのかどうかは、置いておくとして。

「なに、迷子？ あんたはこんな時間から……。木乃香、どうする？ 遅刻にはなっちゃうけど、この子の家まで送る？」

「せやなあ。また道に迷ったりしたら大変やし……」

これは想定外。少し——いや、かなり困る。私の住んでいる場所とえば、教会の地

下であり、その所在を知られてしまうのは些か不都合な気がする。少なくとも、普通ではないその定住地を晒す行為は、妙に勘ぐられるだけの条件を満たしていることに違いない。

適当な住所をでつち上げるには情報不足だし、仮に地下を案内しなかったとしても、教会に住み込んでいるという設定を作らなくてはならない。

木乃香さんの親戚であるという設定を開示してしまっている以上は、孤児として教会に引き取られているという筋書きは無理がある。

なので、その厚意については全力で拒否したい。

勘ぐられる勘ぐられないという話については、「初等部に送る」ではなく「家に送る」という提案が出ている時点で手遅れな気もするが、こんな時間に散歩へと繰り出し迷子になるような小学生もなかなかないだろうから仕方がない。親と呼べる人がいて、健康的に学校へと通っている環境にあるならば、朝の散歩なんてそもそも許可されないものだ。多分。知らないけど。

「ここから、なら、道はわかる。だから、大丈夫」

「そうは言ってもねえ……」

私の拒絶を、受け取りにくそうにするアスナさん。

この前は私を雪の中に放置してきつさと帰ったそうにしていたように記憶している

が、なにか心境の変化でもあったのだろうか。

いや、状況が違うのか。

望んであの場に立っていた私と、迷子になった結果導かれた私——同じ私であることに変わりはないが、私がここに立っている理由は大きく異なる。

「ほんなら、おじいちゃんのとこまで連れてくのはどうやる」

どこか思案顔を浮かべて考え倦ねていたアスナさんに、木乃香さんがそう提案をする。

「おじいちゃんって……学園長？」

「せや、おじいちゃんならいつも暇そうにしとるし、鈴葉のことも家まで送ってくれると思うんよ」

「……あー、そういえば木乃香の親戚だったっけ、この子。それなら確かに、それが一番いいかもしれないわね」

私の意思に関係なく話が進んでいく。

まあ、別にいいのだが。

私にとって都合が悪いことにはきちんと口を挟ませてもらうことに変わりはない。されるがまま——というのは、こういう惰性じみた性格が起因しているのかもしれない。

嫌よ嫌よも好きのうち——ではない。嫌なことは嫌と言わせてもらうがそれ以外は好きにしてくれ、が正しい。

「ごめんな、鈴葉。鈴葉のことを信じてない訳やないんやけど、ウチら心配やねん。せやから、おじいちゃんと一緒に帰ろ？」

少しだけ身を屈めて、私に視線を合わせながら、木乃香さんはそう言った。

おじいちゃん——学園長は、言わずもがな、私のすべてを把握し、すべてを掌握している数少ない人間のうちの一人だ。彼ならば、私が木乃香さんとアスナさんを引き連れてその門戸を叩いたとて、違和感なく対処してくれるに違いない。

「……ん」

問題ないと頷いて見せれば、彼女はにぱつと笑って私の頭を撫でた。それから、「ええ子や」と言うのと、そつと私の手を握る。

なんとなくそれを握り返してみれば、木乃香さんはもう一度、華やかな笑顔を見せてくれた。

うーん、これは母性。やはり抱擁力が天元突破している。

おじいちゃんが定期的にお見合いの場を用意する理由が、少しだけ分かった気がした。

如何せん、それを有り余らせるのは、少し勿体無い。

いや、中学生相手にお見合いって、それにしたって時期尚早だと思うけれど。

## EP・20

母を知らない私が、母性という、過去に抱くからこそ懐古することのできる感覚を誰かに想起することは、きつと間違っているに違いない。しかし、近衛木乃香という一人の女子中学生が私に寄せるその感情を、他にどのように言い表せばいいのだろうか。一体、どのように言い換えればいいのだろうか。

刹那には「懐かしい」と形容して見せたが、それが正しい言葉として収まっているのかを問い質されれば、私は否と答える。

先述したとおり、懐かしむような記憶はない。

加えて、私が記憶している——記録を再開したこの数年間に、彼女のような女性は存在したことがない。

人が本能的に求める感情——それが遺伝子に刻まれているとでも言うのだろうか。或いは、魂に。核に。克明に、鮮明に、鮮烈に、須らく刻み込まれているとでも言うのだろうか。

科学的に見れば魂という概念は有無を証明することのできない不確定事項だが、魔法的観点で見るとすれば、魂という概念は確定的に存在するとされている。

魂に刻まれた記憶が私の奥底に存在しているとすれば、きつと、こんな話は悩む必要性すら無いのだろうけれど。

「……—鈴葉、ちよつとだけ痛いわあ。そない強う握らんでも、ウチは逃げへんよ？」  
妙な胸騒ぎを覚えて——それから、そんなことを木乃香さんに言われて、思わず肩が跳ねた。いつの間にか強く握っていた手を緩めて、彼女の顔を見上げる。注意するような言葉とは裏腹に、慈愛に満ちた柔らかい表情を浮かべていた。

「ん——……もしかして寒いん？」

悴んだ指先の感覚を失っているのではないかと勘繰ったのだろう。言いながら、彼女は私の頬に優しく触れた。むしろ木乃香さんの手が冷たくて驚く。少しでも暖めてあげようと、その薄い手に頬擦りをする、彼女は少しだけくすぐったそうに笑った。

「この前も思ったけど、あかんえ？ こないなさぶい日にそないな格好しとつたら、風邪ひいてまう」

さぶいば製造マシンこと図書館の亡霊の呪い——という名の加護付きパーカーに、丈の短い黒のワンピースという、季節違いな格好をしていることを指摘された。むしろ、指摘されて然るべきものなのだろう。着ていく服を悩むのが億劫とは言えども、やはり外見だけに注目されれば、こんな服装は違和感でしかない。しかし、今日も今日とて加護は絶好調のようで、微塵たりとも寒冷的な空気を感じさせない。

とは言えども、これをどのようにして伝えれば良いのか。魔法という単語を私が口にしたところで彼女はそれを真に受けたりはしないだろうけれど、刹那の努力を無に帰するような事は憚られる。

「ん。でも、大丈夫」

だから、こんな言葉でしか誤魔化せない。

「……ほんなら、せめてこれだけでも着とき？」

当然ながら、そんな言葉では誤魔化されない木乃香さん。繋いでいた手を離して自分の首に巻いていたマフラーを脱ぐと、私の前に立ち、それを私の首へと宛てがったかと思えば、慣れた手つきで巻き始めた。

木乃香さんの体温と匂いが残っていて、ちよつとだけ特別感。

「どーや？ 苦しかったりせえへん？」

「ん……。あり、がと。……暖かい」

頷き、返礼すると、女神のような——それでいて無邪気な笑顔を返された。なんだか、母性がどうか懐かしさがどうかと悩んでいた自分が馬鹿らしくなる。こんな慈愛——母性と言わずしてなんと言う。

「そやけど、あれやな。足とかまだ寒そうやな。後でアスナのマフラー借りて足にも巻き付けよか？」



いや。

私はミノムシか。

ちよつとした抗議の目を向ければ、木乃香さんはくすくすと笑った。

「冗談や」

それだけ言うと、再び私の手を握り、歩き出す。

ちなみにアスナさんとは下駄箱で別れた。木乃香さん曰く、朝礼の時間に間に合わなかったら先生に理由を伝えてほしい、と。二人で遅刻するというリスクを回避した形だ。本当にしつかりした人だと思う。それでいてこの包容力と、可愛らしい意地悪を口にするその姿は、同性の私からしても魅力的に見える。この人、なんで結婚してないの？

——まあ、それはともかくとして。

こうして女子中等部校舎の廊下を歩くのは二度目なのだけれど、前回と違う点がある。とすれば、それは今日という日が祝日でもなければ長期休暇でもなく、教育機関として正常に動いている状態にあるということが挙げられる。

部活の朝練を終えたのだろう生徒たちの群れとすれ違うのは、はて、これで何度目だろうか。その度に、どこか奇異な視線を隠すことなく向けられるのだから落ち着かない。幸いにも、隣を歩いてくれる木乃香さんと私は、早乙女さんからお墨付きを頂く程

度には似ているらしいので——あくまでも髪型やらなんやらが似ているだけだと思うのだけれど——他人からすれば、姉の通う学校を見学しに来た小学生にしか見えないはずだ。

そうと分かっているても、見ず知らずの他人から不躰な視線を集めるのは居心地が悪い。

「鈴葉——」

呼ばれて、また知らないうちに手を強く握ってしまったのかと思つて木乃香さんの顔を見上げる。

その目は、私を見ていなかった。なにかを思い出そうとしているかのように瞼を落として、なにかを懐かしむように口元を緩めている。そんな様子が、なんだか妙に印象的で、私は彼女の顔を眺めることしかできなかった。

「——ウチな、昔にもこうやつて誰かと歩いてた気がするんよ」

「……誰か、と」

「そーや。こうやつてマフラーを巻いてあげて、こうやつて手を繋いであげてな——そやけど、それが誰だったのか、全然思い出せへん」

昔のことやからかなあ、と、苦笑いをする。

なるほど、思い出せないほど昔のこととは言えども、経験があるならば、私にマフラー

を巻いたときの慣れた手つきも納得できる。

この母性に近いお姉ちゃんのような雰囲気は、そういった経験に育てられたのだろう。

お姉ちゃん、か。

もしも私にお姉ちゃんと呼べる存在がいたとしたら——家族がいたとしたら、きつと、こんな感覚なのだろう。

そういう身内の愛情とは、求めるまでもなく庇護されて、求められるまでもなく側にいて——それが当たり前の世界として、生まれるよりも先に構築されているものだ。

いや、知らないけど。ただの憶測だけけど。

ある意味ではエヴァがそれに近いポジションにいるのだが、如何せん、あの人は母性とか庇護欲とかとは少々無縁な位置にいる。お姉ちゃんと言うよりは、それこそ親友のような感覚だろう。

……お願いしたら、木乃香さんは私の姉になってくれるのだろうか。

そんなことを考えてみると、なんだか、体の奥が痒くなつた。手の届かない場所を誰かにくすぐられていよう、とても居心地が悪い。多分だけれど、罪悪感のようなものなのだろう。如何せん、それは木乃香さんの言う「誰か」の居場所を奪うような行爲だ。既に忘却された空席とは言えども、それは、きつと許されるものではない。

「せやけど、鈴葉のことを見ると、ちよいちよい思い出すんや。なんでやるなあ」  
……なんでやるなあ。

なんて、言われましても。

木乃香さんも自覚しているように、思い出すということは、結局のところ、今と類似した状況を経験したことがあるという——いわゆる既視感のようなものに他ならない。私に対する扱いがそうであるように、きつと、過去に妹のような存在がいたのではないか。実妹のことを忘れる人なんていないだろうから、きつと、それこそ親戚に私のような人がいたとか、近所の子供から慕われていた記憶とか、そういう話に違いない。

ただ、そういう憶測を円滑に伝えるだけの語彙力も伝達力も無いので、私は木乃香さんを眺めながら小首を傾げるに留めた。

「こないな」と言われても困るだけやんな、すまんすまん」

そんな私の様子を見て何を思ったのか、彼女は苦笑しながらそう言った。

困るか困らないかで言えば、別に困るほどのことではないのだけれど。でも、なにかしらの答えを期待されるのは確かに困る。自分自身の記憶すらない私が、どうして他人の記憶を読み解けようか。

いや、木乃香さんがその答えを求めてその話を切り出したとは考えにくい。私が木乃香さんの人格や性格をある程度のレベルで認識しているように、木乃香さんもまた私の

人格や性格を理解しているはずである。過ぎた時間も、交わした会話も高が知れているが——少なくとも、私が外見不相応に、とある現象に対して追求し、言及するような人間ではないという結論に帰結することは、最早自然の摂理と言つても過言ではない。口数も少ないし、傍から見るとマイペースに見えるらしいし。

要するに、こんなものはただの雑談と相違ない。

もしもそうでないとするならば——いいや、戯言か。

兎にも角にも、このまま無言で首を傾げ続けるのは、まるで無視を決め込んでいるようにうで少しだけ居心地が悪かった。

「……分から、ない」

故に、こうして素直な胸中を吐き出してみることにした。

先述したとおり、木乃香さんの問いかけは困るほどのものではなかった。ただ、少しだけ、胸騒ぎを覚える。意味もなく、胸中が騒いでいる。空騒ぎ。こういう感覚は何度か経験している。ただ、慣れない。きつと、これから先、幾度となくそれに襲われたとしても、慣れることはないのだろう。

もしかしたら、こういうものを女の勤と呼ぶのかもしれない。

そんな不定形な感覚を正しく形容することが、少しだけ難しかった。

「ただ、羨ま、しい」

「羨ましいい？」

「ん……」

いつの間にか足元に落ちていた視界に、彼女の顔は映らない。ただ、その声色から察するに、とても不思議そうな目線を向けているに違いなかった。

「その誰かは、多分、幸せだった……と、思う。木乃香さんと、一緒にいると、暖かい、から。だから、羨ましい」

もう少し素直になってみればいい——と、あの自称火星人は言っていたか。

しかし、私の口から零れた言葉は、存外に卑しいものだった。

羨ましい——幸せを妬むような、忌むような言葉。

勿論、自分自身を清廉潔白人間であると思つたことなど、一度たりともありはしない。自覚があつても自重はしない——そういう自分の性格は、理解しているつもりである。でも、それにしつたつて、他人の幸せを自分のものにしたくないなんて——やつぱりそれは、せめて自分の胸中にしまつておくべきものだった。

後悔したところで、もう遅いのだが。

「ほんなら、今の鈴葉も幸せやんなあ」

……ん？

「ウチに世話されるんが幸せやつちゆうんなら、そーゆうことやろ？ なんや、えらい褒

められてるみたいで照れるわあ」

「……………ん。木乃香さんは、すごい」

いろんな意味で。

「あん、そない褒めんといてえなあ、恥ずいわあ」

困ったように頬に手を当てながら、その頬を赤らめながら、しかし満更でもなさそうに笑う木乃香さん。

彼女が意識してそう言ったのか、それともただそういう性格をしているだけなのかは分からないけれど、それは確かに真理だった。

幸せを妬むということは、転ずれば、今の私が幸せではないと言っているようなものだ。だが、それはどうだろうか。私は、幸せではないのか。

言うまでもない。

人間という一つの括りからはみ出しながらも——エヴァという吸血鬼の肉を食らって生きてきたという事実を肯定されても尚、私はそれを不幸だと思うことはなかった。

敢えて宣言させてもらえるのならば、私は他の追隨を許さない程度には幸せだと言える。

好きなように時間を過ごし、好きな人と時間を過ごし、好きな人の時間を追いかける。なにより、それを許可されている。なんて贅沢な話だろうか。今の私を幸せと言わずし

て、なんと言う。

確かに、時折人肌恋しく思う事くらいはあるが、それを不幸と言い換えるのは無理がある。

——じゃあ、なにが羨ましかったのだろう。

木乃香さんという存在と共に過ごす時間か。

或いは、木乃香さんという存在そのものか。

それとも、それこそが木乃香さんに対して抱く懐かしさの正体なのか。

そもそも、その誰かのことが羨ましかったのか、木乃香さんのことが羨ましかったのか。そんなことすら分からなくなる。

——まあ、考えても詮無きこと、か。

そうやってお得意の思考停止に帰結したのとほぼ同時に、木乃香さんは足を止める。前を見れば、一際目立つ木製の扉が、目の前に屹立していた。

「おじいちゃん、入るで〜?」

扉を二回ほどノックしてからそう呼び掛けると、木乃香さんは返事を待たずして扉を開けた。本来ならば無遠慮とされる行為も、祖父と孫の関係ならば許されるのだろう。

扉の先には、だだっ広い空間があった。その中央には客人用のものと思われるソファとテーブルが置いてあり、その先に、大きな窓から差す朝日に照らされた机が鎮座して



いる。逆に言えば、それ以外のものはなにも無い。学園長室なのだから、それがそれとして機能すればそれでいいとでも言いたげな佇まいだった。

よく見れば、部屋の角にサイドテーブルがあったり、どこかへと続く階段があったりと、決して物や設備の数が少ない訳ではないのだが、部屋の広袤がそれを打ち消している。

斯くして、日差しを受ける机の上に積み上げられた書類の間から、その老大人は顔を出した。

「ほ……? どうしたんじや、木乃香。そろそろ鈴も鳴る頃じやろうに」

「あんなく、ちよい相談があんねんけど……なんや忙しそうやね?」

朝から書類に埋もれている祖父の姿を見れば、少なからず心配してしまうのが孫心だろう。

学園長という立場に加え、彼は関東魔法協会の理事長も務める身。その多忙さとは、想像を絶するものなのだろう。その延びた後頭部は、その作業量に追いつくために脳が発達した——そういう生物としての末路なのかもしれない。いや、知らないけど。

「うむ、少しばかり急な仕事が多くてのう。して、その相談とは——鈴葉のことかおう?」

その双眸を私へ向けながら、おじいちゃんは簡潔に問うた。

予想通りなどと言うと少々大仰だが、しかし、正しくそれは目論見通りだったと言える。狼狽するような素振りも見せず、まるでこの瞬間が来ることを予知していたように、彼は毅然とした様子で孫娘の言葉待たす。

「流石おじいちゃん、話が早くて助かるわあ」

木乃香さんは両手の平を合わせ、微笑みながらそう返した。祖父におねだりする孫娘の姿とは、はて、祖父という立場からすると、どのように見えるのだろうか。その様子をあざといと言うつもりはないが、どこか頭のキレる木乃香さんのことである。多少は狙っているに違いない。

そんな邪な思考を巡らせていると、逡巡するような間を一拍だけ置いてから、木乃香さんはその相談事を口にした。

「とりあえず、鈴葉に合うサイズのタイトツとか見繕ってくれへん？ 見てるだけで凍えそうやし、風邪ひいたらかなわんやろ？」

——あれ？ そんなことをお願いするためにここに来たんだっけ？

そんな疑問を抱きながら木乃香さんを見遣るが、私の視線などなんのその。もしかして、私が思っている以上に、私の服装が気に食わなかったのだろうか。もしかしなくてもそうなのだろう。そうでなければ、たとえ冗談だとしても、人のことをミノムシにしようなどとは思わないはずだ。

「むう……。そうは言うがのう、木乃香。当然じゃが、わしは女兒用のタイツなど持っておらんぞ」

当たり前だ。持ってたらキモい。私の中ではそこそこの地位にあるおじいちゃん一株が大暴落。バブル崩壊どころの騒ぎではない。紙屑のマルクだ。

「ややわあ、おじいちゃん。ウチがお見合いから逃げる度に遅い時間まで探し回ってくる心優しい人等がおるやろ？」

うわあお。

木乃香さんの柔らかい声と表情に変わりはない。悉くを包み込むような柔和な空気からは、しかし、鋭い棘の先端がはみ出しているように思えた。

なんか、私、ここにも良いのだらうか。何故かは分からないけれど、体がこの場から逃げようとしている。この感覚を敢えて形容するならば、本能か。

木乃香さん、あなた、不本意なお見合いを強要するおじいちゃんに対する不満をここぞとばかりにぶつけてませんか？ それについては、私も無知ながら少しだけ関わっていた時期があるので、本当に居た堪れないのですが。空気がとても痛くて堪らないのです。

「む、むう……。相分かった、すぐに用意させよう」

孫娘の威圧感に負けたおじいちゃんは、その小さな背中を丸めて携帯電話を手を取っ

た。もはや、数秒前の毅然とした態度は影すら見えない。

暫く事務的な会話が聞こえたかと思えば、一分と経たずして、黒いスーツにサングラスを装備した、神多羅木先生のような格好の女性が部屋へと入ってきた。彼女は私の前で腰を深く折り曲げると、丁寧な口調で言う。

「鈴葉お嬢様。お着替えのため、別室にご案内させていただきます」

「……………ん」

不満というほどではないけれど、その呼び方はとてもむず痒いのでやめてほしい。しかし、彼女も仕事の一環でそう呼んでいるだけなのだろうし、私の我儘と仕事で板挟みにするのも可哀想なので私が呑み込むことにした。なにより、この空気から合法的に逃がしてくれるというこの女性は、私にとっては都合の良い救世主だ。文句など、不満など、いくらでも呑み込もう。

それから、近くの教室へと案内された私は、その光景に言葉を失った。

数えるのも馬鹿馬鹿しくなる程に陳列された、タイツとタイツとタイツ。本来、タイツの山の土台となることなんて想定されていないであろう机達から、なんとも言えない視線を寄越されている気さえする。

おじいちゃんの電話から、未だ五分と経っていないのに、どうやってこれらを用意したと言うのか。なにより、仮に安物を揃えたとしても、その金額は計り知れない。勿論、

近衛家が用意したそれが安物であるはずもなく——普段から動くことを良しとしない怠惰な私の表情筋も、この時ばかりは口角を大きく引くつかせたのだった。



予鈴が鳴って、本鈴も鳴って、さて、どれだけの時間が経つただろう。なにを聞きつけたのかどこからともなく続々と部屋に入ってくる職員と思しき女性達に、なんの違いがあるのかも分からないタイツを代わる代わる履かされ、下半身の皮膚が削れて紛失するのではないかと考え始めた頃に、私の身柄は解放されることとなった。

梱包された様子からしてそれらのタイツが新品であることは間違いなく、その封が次々と切られていく様には戦慄すら覚えた。一度履いたくらいならば返品も可能なのかもしれないけれど、それだつて気が引ける。受け取れと脅されているようで気が気じゃなかった。

加えて、タイツを履いただけで、果たして下半身が温かくなったのかと言われると、疑問が残る。如何せん、脱がされては履かされて、と——その繰り返しによる摩擦熱なの

か、タイトの性能なのか、今の私には判断がつかない。そもそもパーカーを着ている以上、私の体温はある程度のレベルを一定に保っているのです、これを脱がない限りはタイトの効果など不明瞭だろう。その点で言えば、やはりこのパーカーは呪われている。こんな便利な機能さえ搭載されていなければ、流石の私も着る服に気を遣った訳で——このような羽目にはならなかつたはずだ。

恨んでやるからな、図書館の亡霊め。

責任転嫁とは言わせない。

だつてほら、あの男は今、私の脳内で愉快そうにころころと笑っているではないか。

足を持ち上げるといふ動作をおおよそ一生分は熟したであろう私を横目に、けたけたと腹を抱えているではないか。

慣れないタイトのしめつけに思わず顰めつ面を披露する私を指差して、くすくすと笑っているではないか。

ああ——もう。

明日からはちゃんとした冬服を着よう。見た目くらいは暖かそうに見える、そういう服は、洋服ダンスの奥に眠っているはずだ。帰ったらそいつらを叩き起して、まとめて洗濯カゴに放り込もう。シャークター先生とその生徒には迷惑をかけるかもしれないが、致し方なし。

「——疲労困憊、といった様子じゃのう」

ソファに腰掛けて慣れないタイツの感触を気にしていると、紅茶を淹れたおじいちゃんがそれを私の目の前のテーブルに置きながらそう言った。ハーブの香りが鼻腔をくすぐる。

私がこの学園長室に戻ったときには既に木乃香さんの姿はなく、残っていたおじいちゃんはどこか疲れた様子で萎びていて、とても私を氣遣う余裕など無さそうなものだったが、どうやら立ち直ったらしい。切り替えの早さには感服せざるを得ない。

「こういうの、慣れない、から」

少しだけタイツを摘んで見せる。

模様が入っているものからシンプルなものまで、はて、どれだけの数を履き、どれだけの数を脱いだのか。あの女性職員は試着がどうのこうのと云っていたが、その必要性を感じなかったのは私だけだろうか。終いには私の髪をサイドで束ねて控えめなヘアアレンジまでしていったのだから、職務そっちのけで楽しんでいたに違いない。そういう遊ばれる状況というものはエヴァで慣れているが——理事長の直轄する部下が職務中にそれに興じるのは如何なものだろうか。甚だ疑問である。

「……………似合うとるぞっ」

「そっいう、( )とじゃ、ない……」

別に、今すぐ脱いでしまいたいなんて思わないけれど、これは似合ってるかどうかなんて話の問題ではない。まあ、順応性はそこそこ高いと自負しているし、慣れてしまえばそれまでの話であることは確かなのだが。

「まあ、農から見ても寒そうな格好をしていたことは明白じゃ。木乃香の心配も理解できるじやろうて」

それは確かにそのとおり。否定はできない。

私が顔を顰めているのが珍しいからか、随分と嫌がっているように見えているのだろう。おじいちゃんの声色は論すようなものだった。

亡霊を恨んだ手前、これを言うのも言い訳がましいかもしれないが、別にそこまで嫌悪感があるわけではない。ただ、こういうものには心の準備が必要なのだ。高畑先生から貰った腕時計だって、慣れるまでは身に着ける度に抵抗感を覚えていたのだから。

見るからに高級そうなタイツを揃えられた上に、そのうちの十足ほどを譲るなんて言われれば、動悸が激しくなったりもするのだ。

「分かってる。……いただき、ます」

せっかく用意してくれたのに飲まないのも礼儀ではない。差し出された紅茶を手に取り、一口だけ喉を通した。高畑先生が用意するハーブティーとは少しだけ味も匂いも違う。使っている葉っぱが違うのだろうか。こういうものにはどうにも拘りがないせ



いで、無知極まれり。それこそ、いつの日か高畑先生が紅茶について語っていたような気がするが、覚えているのは高畑先生の言葉が右耳から左耳へと言葉が抜けていったことだけだった。

「ふう……」

私の対面ではおじいちゃんが自分の紅茶を口にして息をつく。切り替えたとは言っても、蓄積された疲労は簡単に抜けるものではないだろう。しかし、なにをそんなに疲れることがあったのだろうか。私が木乃香さんとおじいちゃんを残して部屋を後にしてから、凡そ一時間程度か。私も人のことは言えないが、一時間程度でここまで疲れるようなことがあるだろうか。

「……なにか、あった？」

「む……？ うむう……、お主のことについて少し、木乃香から質問攻めされてのう」

私について、質問攻め。

その意味するところは、木乃香さんが私に対しての疑問を複数個抱えていたということだ。はて、疑問を持たれるような身に覚えは——ありすぎて困るなあ。

「辻褄を合わせるのも一苦労でな、拙老には堪えるものがあつたんじやよ」

なんというか、お気の毒様、と。どこか他人事のように溢れかけた言葉を飲み込んだ。木乃香さんが私についておじいちゃんに質問を投げかけることは私が仕込んだこと

ではないので、謝るほどのことではないと思うのだけれど、しかし決して他人事だと切り捨てるようなことも言えないだろう。

自分事とも思えないが。

「……刹那くんとは、上手くやっておるのか？」

過ぎた話をしてもし仕方ないと考えたのか、おじいちゃんは話題を変えた。

例の主従関係について、提案者であるおじいちゃんからすれば私と刹那が微妙な関係性になってしまふのはなんとも後味の悪い話だ。昨晩、刹那を呼び出したのも、恐らくは私の様子を知りたかったからだろう。私についてやけに詳しく、性格やら性質やらを把握しているおじいちゃんである。私が慣れない環境を嫌っていることから、多少は思うところがあるのかもしれない。

「ん……。昨日は、ちよつと、大変、だったけど。特別、反りが合わない、ことも、ない」  
反りが合わないというよりは、尺度が合わないと言ったほうが正しいし。

こればかりは私がどうか刹那がどうかとかが問題ではないだろう。相性の問題だ。そんなものは、どんな人間関係にだって存在する。蓋を開けてしまえばそれだけの話だ。誰だって、誰かとの間に妥協点を見い出す。そうでなければ、関係は続かない。

エヴァが私の奇行をある程度のレベルで受け入れ、私がエヴァの蛮行にある程度の理解を示すように。

それらを妥協した先に、初めて、反りが分かる。

一度鞘に刀身を収めなくては、その程度は知れない。

……そういうえば——エヴァは、私についてどう思っているのだろうか。

部屋にノックすることもなく入ってくるエヴァを、なんなら蹴破ってきたエヴァを、私は許すとか許さないとかいう範囲の話で捉えていない。

私を外へと連れ出すときには自分の歩幅とペースで、私の手を引く。普段から基本動作が遅延している私にとって、それは多少の疲労感を覚えさせるが、それを疎ましいか疎ましくないかという範囲の話で捉えたことはない。

傲岸不遜たる態度を、唯我独尊たる様子を、どうとも捉えたことがない。

さもありなん、だ。

では、エヴァは？

遅鈍な私を、疎ましく思っているのだろうか。

曖昧な私を、浅ましく思っているのだろうか。

優柔な私を、痛ましく思っているのだろうか。

昨晩は、どうにも虫の居所が悪い様子だったが、私はエヴァにとっての妥協点を踏み越えてしまったのだろうか。

……なんだか自信が無くなってきた。なんとなく、謝ったほうが良いような気がする

る。でも、自覚もなしになんとなくで謝っても、許されるはずもない。  
むう。

「——そうは言うが、やけに難しい顔をしておるぞ。思うところでもあるのかのう？」  
おじいちゃんの声に、沼に嵌まりかけていた思考が浮上する。

「んーん」

首を横に振る。

「なにも、ない」

「そうか、ならば僥倖。刹那くんにとつても、良い経験となるじやろう」

刀子さんも言っていたか。良い妙薬になるとか、ならないとか。なんの根拠があつて  
そう口を揃えるのかは分からないが、忠犬が如く指示があるまで動かなかつた昨日の刹  
那と比較してみれば、今朝の積極的な様子は進歩と言えるのかもしれない。

私がかしたのかと言われると、何もしていないのだけだ。どちらかと言えば効い  
たのはエヴァの言葉で、そしてそれを受け止めたのは刹那だ。当事者であるはずの私は  
蚊帳の外。当然と言えば当然なのだ。

他者に影響を与えられるほどのなにかを、私は持っていない。

そんなナーバスな気持ち飲み下すように、紅茶を啜る。

ティーカップをテーブルに置くのと同時に、力が抜けた。

かくん、と。

まるで関節が壊れた球体人形のように。

糸の千切れた操り人形のように。

視界が白む。

霧に包まれるように。

薄氷に閉じ込められるように。

「——すまぬ。このようなやり方、褒められたものではなからうて……」

おじいちゃんがなにかを言っている。

だけれど、なにを言っているのかは分からなかった。

言葉は聞こえてるのに、それを理解することが出来ない。

思考がなにかに絡めとられている。

兎にも角にも、この強制的な脱力感の正体がおじいちゃんの手によるものなのだとす

るならば——まあ、別にいいか、と。

私は溶けた意識に身を委ねるように、瞼を落とした。

## EP. 21

季節の変わり目——春を背に、夏へと向かう時期。降ったり止んだりを繰り返す雨にも飽き飽きしていた頃、久しぶりの真つ青な晴天に心を踊らせて、修練の前の空いた時間に、私は妹と二人で外に出て遊んでいた。

川は増水していたせいで近づけなかったから、色付き始めた木々の間を縫ってかくれんぼ。もつとも、■は私の位置を、私は■の位置をいとも容易く把握できてしまうし、私は対して体を動かすことを不得手としていることもあって、こんなものはただの茶番に過ぎないのだけれど。そんなことはどうでもよく、私達は私達だけで過ごす揺り籠のような時間に只管に陶醉した。

やがて、かくれんぼに疲れた私達は、見晴らしのいい崖の縁に腰掛けてその景色に浸ることにした。■は私の横で猫のように身を包ませて、風に耳を立てている。もしも、それこそ、自由の許された猫であったならば、私達は二人揃ってゴロゴロと喉を鳴らしたことだろう。

そんな折、崖の下の開けた獣道で女の子が一人、棒立ちしているのを見つけた。

最初にそれに気付いたのは、私ではなく、人の気配に敏感な■だった。

私達にとって、背の高い樹が項垂れ凭れ掛かり合うように立ち並ぶこの場所は、もはや庭に等しいが、他人からすれば話が違うことは明確だった。ましてや、それが同い年の女の子であるならば、なおさら。景観の代わり映えがしないこの一帯は、土地勘それ以前に、脱出不可能の不可侵領域である。

どう考えたって、あの子は普通じゃない。それだけは明瞭だった。

この山は父様が結界を張っているのだから、ただの一般人が侵入することは叶わない。ましてや、一人で山を出ることも叶わない。

まさか幽霊か——なんて考えたが、さて、父様の結界をただの霊体がすり抜けてくるなんてことがあるだろうか。どれだけ考えたところで、あの女の子の正体も目的も分かりかねる。

「ねえ、■■■■。どうしよっか」

首を傾げながら、■■■■は言う。

「…………どうしようね」

首を傾げながら、私は言った。

触らぬ神に祟りなし——なんて言葉を知っているが、あれは神様なんていう大仰なものには見えない。

……考えたところで仕方がない、様子を見てみよう。そう思って立ち上がったのと同時

に、横にいた■は崖を軽快に、静かに降り始めた。同じ思考に落ち着いたのだろう。情けない話だが、私は■ののように身軽ではない。なんとか■の居場所を把握しながら、いつもの道程をなぞって降りた。

合流してから、二人で木陰に隠れて女の子を観察してみる。

別に、あの女の子が不審者だろうが侵入者だろうがどうでもいいのだけれど、童心ながらに気になってしまう。しかし、それも仕方のないことだろう。私達は、私達以外に、同世代の人間なんて見たことがなかったのだから。

やがて、きよろきよろと辺りを見渡していたその女の子は、針葉樹の隙間から見え隠れする太陽の位置を頼りにするように天を仰ぐと、恐る恐るといった様子で小さな足を動かし始めた。

その足取りは覚束ないが、山に慣れていないという訳でもないのか、転ぶこともなく緩やかな傾斜を登る。その様子を、私達はお互い、木陰を使って気配を消しながら追いかけた。

——この山を庭として見ている私達だから分かる。

あの子の正面、その方向には、何も無い。

ただ山を超えるだけならばそれでも問題はないように見えるかもしれないけれど、この領域に入ってしまったのは不運だった。父様が認識しない限り、山越えは達成し得な



い。

やがて、女の子は一本の樹に手をついて、足を止めた。一息つくつもりだったのだから。

あと数分ほど歩けば、彼女は来た道を戻ることになる。それは少し可哀相だから、せめて現実を教えてあげようと、私は木陰から顔を覗かせながら声をかけようとした。

その瞬間、女の子が重心をかけていたその足を、湿気った土が掬い取った。

「あつ——！」

短い悲鳴。

咄嗟に樹に捕まりでもしない限り、あれは豪快に転ぶだろう。緩やかな傾斜とは言え、足を滑らせてしまえば多少は転がり落ちることを私達は知っている。

反射的に体が動いた。どうせ私が助けようとしたところで、私のような貧弱な子供では二人で絡み合うように転がり落ちるのがオチだと分かっている。冷静にそれを見過ごせるほど冷徹ではない。

しかし、その動きを、体中に走る激痛が制した。

「——おふださん、おふださん」

そんな情けない私を置いて、■■■は袖の振りから呪符を一枚取り出した。

「あの子をたすけてあげて」

彼女は口元に持つてきたそれに息を吹くようにそう念じて、投げつける。それは、紙屑のような見た目に反して鋭く空気を裂き、女の子の足元へと突き刺さる。

それから、ふわりと、女の子の体が僅かに浮く。彼女の胴体と四肢には、地中から急激に発芽し成長した植物が纏わりついていて、それらが意思を持つようにして女の子のことを掬い取っていた。

ほっと胸をなでおろして——体中の鈍痛を引きずりながらも、呪符を投げた張本人である■■■のそばまで寄ると、私はその頭を優しく梳くように撫でた。身長が全く同じなせいで、少しだけ不格好だけれど。

——はて、苦痛は、隠せているだろうか。

「■■■はすごいね、えらいえらい」

私の自慢の妹。

私の自慢の半身。

残念ながら私には呪術を扱う適性が家系から引き継がれなかったが、それに対して彼女はそれを色濃く継いだ天才児である。しかし、だからこそ、護らなくてはいけない。私にできることなんて高が知れている。だからこそ、この身を犠牲にしても——。

にへら、と。

■■■は破顔した。

普段から表情を動かすことを良しとしない彼女だが、感情が喪失している訳ではない。嬉しければ喜ぶし、悲しければ泣くのだ。

私のかわいい■■。

私だけの、かわいい妹。

「うわわ、わー!?!」

——と、そうやって我が妹を愛でていると、なにやら素つ頓狂な声が鼓膜を揺らした。見てみれば、植物の力で宙に浮いた女の子はまさしく地に脚つかず、わたわたと四肢を暴れさせている。目からは僅かに涙を浮かべ、開いた口は塞がらない。完全に混乱している。

私と■■は顔を見合わせて、それから、撫でるのを止めた。■■はどこか物足りなさそうに私の手を眺めていたものの、不承不承といった様子で女の子へ視線を送ると、彼女を地面へと降ろした。

腰が抜けているのか、女の子はその場にへたり込み、立ち上がる様子はない。

私達はどちらからともなくその子に歩み寄り、正面に立つと、しゃがんでそのかんばせを覗き込むようにした。

「大丈夫?」「大丈夫?」

どちらからともなく、そう訊ねる。

良く見てみれば、女の子の腰には質素な鞆に収まったドスのような小太刀が提げられていた。

あからさまな凶器。

自然と、目が細くなる。

「あ、あなたたちは……?」

それは、この敷地一帯を所有する父様の娘である私達の方こそ聞きたい質問だった。少なくとも、侵入者に訊ねられる筋合いはない。

しかし、まあ、どうせ後か先かの違いしかないことも確かだった。

淀み無く、そしてどちらからともなく、私達は答えた。

「私は■■■■」「私は■■■■」

やまびこのような聞こえたであろうその回答に、女の子は首を傾げる。

「……ふざけているのですか?」

暫し、理解が出来ないというように眉を顰めていた彼女は、不満を零すように口を窄ませ、そう問いかけた。私はともかく、■■■■に対してそのような言い草はあまりにも不敬ではないだろうか。なにせ、彼女が怪我もせず、そこにへたり込んでいるのは、■■■■が呪符を使ってまで助けてあげたからなのだから。

少しだけむっとする私を余所目に、しかし、■■■■は彼女の真似をするように小首を傾

げた。

「ふざけてないよ？」

「私達はちゃんと名乗った」

「じゃあ、次はあなたの番」

「ね、早く教えて？」

そうやって囁し立ててやれば、彼女は「うう」と唸るような声を上げながら、私達に怯えるように体を竦ませた。

そんな様子に対して、私達は無慈悲に畳み掛ける。

「答えないの？」

「私達は答えたのに」

「教えてあげたのに」

「言えないの？」

「自分の名前なのに」

「私達は教えたのに」

「寂しいね、 ■ ■」

「悲しいね、 ■ ■」

私達は顔を見合わせて、肩を落とした。

「——わ、わかった！ 教える！ 教えるさかい、堪忍して！」

交互に聞こえてくる私達の声に嫌気が差したのか、女の子は降参と言わんばかりに佇まいを正し、叫ぶように言った。

「ウ、ウチは刹那や。桜咲刹那。これでええやろ？」

刹那と名乗った女の子は、母を求める仔犬のような、潰れたか細い声を挙げながら私達を見つめる。その姿が、あまりにも可愛らしくて、どうにも、私と■■■の小さな加虐心に火を付けてしまったらしい。

「うーん……でも、寂しかった」

「そうだね。とても悲しかった」

「だから」「だから」

「おすわり、して？」

「わんつて鳴いて？」

「そしたら、許してあげる」

「そしたら、撫でてあげる」

じりじりと詰め寄ると、刹那は度を失った様子であわあわと口を開いた。

「か、堪忍してや〜！」

声を震わせる刹那が少しだけ面白くて、私達はくすくすと抑え気味に笑う。椰揄われ

ていると理解しているのか、刹那は頬をぶつくりと膨らませていた。軽く謝罪しながらその頬を指で突いてやると、風船のように口の中の空気が抜けて、同時に刹那の気も抜けたようだった。

「——ごめんね。これ以上は思い出しちゃうから、だめ」

どこからともなく刺さる視線を無視して、私は静止した世界でそう言い放った。

涙目のまま恨みがましく私達を見る刹那と、それを見てくすくすと笑う■■。こうして客観的に見ると、意地悪で悪趣味な出会い方だったと思う。でも、刹那は聡明で、なにより寛容的な子だ。■■に助けられたことも、故に、私達に害意がないことも、すぐに理解して、すぐに打ち解けた。それからの日々は、今でも鮮明に覚えている。

——そんな思い出を、目の前から掻き消す。

風に切られた蠟燭の火のように容易く。

陽光に焦がされた薄氷のように切なく。

きつと、見たかったものは見れたはずだ。これ以上は、私にとって、網膜を侵す毒のよう、耐えきれない。堪えられない。

、

「二人は特別だけど、でも、だめだから」

嗅ぎ慣れた匂い。

脳の中枢に突き刺さる、本能的に能動的に、時には理性的に受動的に、丸呑みにしたくなる衝動を刺激する——私の大好きな匂い。

それに釣られて目が覚めてしまう自身の煩惱に、少しだけ呆れた。

その大好きな匂い——つまるところのエヴァは、ソファで横になっっている私の一つ隣に座っているらしく、頭上から微かな体温と気配が伝わってくる。少し身じろいで、芋虫のなりそこないのように体を伸ばせば、エヴァの太もも辺りに私の頭頂部が刺さる。そのままぐりぐりと押し付けてみれば、そのうち頭を撫でてくれたりしないだろうか。淡い希望を抱いてみたものの、どうにも反応がない。頭を撫でてくれなかったのなら、むしろ鬱陶しそうに押し返すか逃げるかくらいはしそうなものだが——小さくあくびをしたせいで涙が溢れる寝ぼけ眼を手の甲で拭いながら、上体を持ち上げてエヴァの方を見遣れば、脚と腕を組んで俯いたまま寝入ってしまったようだった。



朝や昼にエヴァと会うことは稀だ。私の部屋に訪れるときは決まって夕方——学校活動を終業させた後のこと。こうして眩しい太陽に照らされるエヴァを見るのは、なかなか希少だ。

それも、こうして寝穢く眠り呆けている姿は、なかなか見れるものではない。

やはり吸血鬼。

夜行性なのだろう。

そう思うと、やはり蛇か猫か、兎も角獰猛な肉食獣のような、或いは愛らしい小動物のようではいか。思わず、くすりと笑ってしまう。人の寝ている姿をまじまじと観察するのはどこか不躰かもしれないけれど、これもいい機会だ。いや、いい機会というのは少し違いかもしれないが、まあそれも些事の内。興味に駆られて、その寝顔に視線が釘付けになる。

病的に白い肌。流れるような金色の髪は絹糸が如く。その奥に碧眼を隠す脛を飾る長い睫毛の一本一本ですら完成された芸術品そのもの。筋がはつきりとしている鼻は童顔に相応しくちよこんと小ぶり。厚すぎない唇はほんのり桜色。

美形の顔というものは、裏を返せば極端に特徴がないことと同義だとか——なにかの本で読んだことがある。それは、確かに、そのとおりなのかもしれない。ただ、あまりにも理想的すぎて、それこそが特徴であるとも言えるのだろう。

微動打にしない姿はまるで西洋人形のように、思わず、その頬に手が伸びた。起こさないように、慎重に、人差し指で小突いてみる。柔らかな皮膚に指先がふわりと沈んだかと思えば、あまりのハリの良さに跳ね返された。

「おお……」

感嘆の声が漏れる。

起きてしまわないかと怯えながら、普段ならば叶わないと確信できる能動的な零距离の接触に、僅かな背徳感が芽生えた。鼓動が早くなる。

しかし、考えてみれば、その薄い首元を度々甘噛みしているような私が、今更こんなことに怯える必要性などあるのだろうか。わざわざ鼓動を高鳴らせる程に高揚する理由は、もつと別のところにあるのではないだろうか。それは、多分、エヴァという、私のために己の血肉を文字通り捧げてくれた恩人——乃至、神様とも呼ぶべき存在に対する、情欲にも似た満足感に等しいのではないか。

……斯くも卑しい自分に呆れる。

これが私の感情なのだということを、全面的に否定したくなる。

思い返して、思い返して、繰り返し思い返して、その末端へと辿り着けば、エヴァと会ったその日から、今のこれと似たような気持ちはどこかにあった様な気がする。

ならば、これは、やはり私の感情というよりは、もつと別の、帰巢本能のような性質

が起因しているのではないだろうか。

エヴァと会うより先に、エヴァの血肉と挨拶を交わしていた、その異常性故の、不具合のようなものだ。

どこか過敏な魔力感知能力さえ無ければ、きっとこうはならなかったに違いない。こんなもの、言い訳に過ぎないが。

「……起きたのか」

勝手に満足して、勝手に落ち込んでいた私に、その言葉はふわりと降りてきた。

「ん……」

と、短く返事をして、声の出処であるエヴァを見る。どこかぼうつとしている様子で、眠気眼を擦っていた。手の甲をくしくしと動かす様は、猫のよう。

やはり吸血鬼にとって、この時間は深夜に等しいのだろう。

そういうえば、茶々丸さんの姿が見当たらない。彼女のことだから、授業よりは主に付き従うことを優先しそうなものだが。

私の記憶が正しければ、エヴァと茶々丸さんはクラスメイトとして同じ教室に在籍しており、しかもその担任は高畑先生だったと記憶している。昨日の刹那のように、多少の融通は利きそうなものだ。

刹那のように——と言うのであれば、どれほど誠実な従者であったとしても、四六時

中一緒にいることが難しいというのも、また事実。それこそ、放課後、エヴァ宅の家事に勤しんでいるように、なにかしら別件の仕事があるのかもしれない。

そういえば。

私が寝る前の記憶を引つ張つてみれば——どこか混濁としていて、まるで頼りにならない記憶を手繰つてみれば、私はこの部屋で、学園長室で、この部屋の主である学園長おじいちゃんと二人で喋っていたはずである。なにを喋っていたのかも、いつの間に寝てしまつていたのかも、何故か思い出せない。思っている以上に、私も寝惚けているのかもしれない。そんな寝惚けた頭でも、ひとつの回答を導き出すことは容易かつた。

エヴァの太腿に頭をごしごしと擦り付けていた様も、エヴァの頬をつんと突いた事も、おじいちゃんに見られている可能性だ。

如何せん、起きてから今の今まで、私は周囲を見渡すという行動に至っていない。

大きなあくびをしているエヴァから視線を外し、テーブルを挟んで対面にあるソファへと目を向ける。

——意外性も何もなく、おじいちゃんは紅茶の入ったカップを手にしながら、私とエヴァを視界に映していた。

別に、エヴァとのやりとりを見られて困るようなことなどない。

ないのだが、途端に羞恥心がふつつつと湧き出て来る。

誰もいないと思つて歌を歌っていたら、存外近くに人がいて、がつつりとその歌を聞かれてしまったような——そういう類の、声にならない本気の羞恥心である。

当然、私の視線に気付いているおじいちゃんやんは、突き立てた人差し指を口元へと持つていった。この場合、そのジェスチャーは「静かにしろ」という意味ではなく、「黙つてあげる」という心遣いのそれに違いなかった。

## E P . 2 2

「……………」

真空を錯覚する。息の詰まる静かな台風の目。可視も不可視も一切の区別なく、圧迫された空気の中では身じろぎ一つとして許される者もない。窓の外を揺蕩う綿雲だけが、童女に睨まれる長頭長髯の翁を嘲笑うように形を変える。

部屋の主を凌駕し新たな主となった童女——エヴァンジェリンは、腕を組み、脚を組み、何度目かも分からぬ溜息を零した。苛立たしいのか、組まれた脚にぶらりと繋がる小さな足が、赤べこの様に規則正しく振られている。脱ぎかけの、つま先に引つかかっている革靴は、暴風に煽られる提灯が如く、されるがままで頼り無い。

傍から見れば、私物を弄ぶ、手持ち無沙汰の童女。しかし、その冷えきった双眸は、幾百年を生きる老獪な魔女の歯牙そのものである。魔力を、能力を、あらゆる含蓄を封じられていたとしても、この童女が真祖の吸血鬼であるという事実は揺るがない。

当然、対面に座る近右衛門とて、有象無象とは一線を画す魔法使いであり、全盛期ならいざ知らず、弱体化を超えて最早ただの人間相応になった童女に負ける道理などどこにもない。

その老体を打ち据える寒冷とした圧力は、しかし、エヴァンジェリンの全盛期にも劣らない魔力を錯覚させる。肩の力を抜くことなど、近右衛門の本能が許さなかった。

「……貴様とて」

鋭い声に空気が震えて、近右衛門の鼓膜をじんわりと焼く。

「あいつの内側に直接触れることの危険性くらいは認知しているはずだ。……違うか？」

それは、ただの確認。お互いの認識に相違がないかを知るための言葉。

耳が痛いのは、エヴァンジェリンの冷えきった声に鼓膜が凍ったから——なんてことはなく、その忠告にも似た言葉を無視することができなかつたからだつた。

「分かつておる。だからこそ、儂が直接覗いたのじゃ」

勿論、近右衛門とて貧弱な蛙のままではいられない。蛇の餌食となつて逃げることもなくその瞬間を待つだけならば、気は軽い。しかし、学園長として、関東魔法協会の会長として、自身の行動に伴つた責任から逃れることだけは許されなかつた。

「ふん——だからこそ、か」

しかし、エヴァンジェリンは近右衛門の言葉を嘲弄するように舌で転がした。

「樂觀的過ぎるな。いつぞやの暴走を忘れたわけでもあるまい。アレはなにかが鈴葉の深奥に干渉したことがきっかけであるという結論に落ち着いた。逆に言えば、それ以外

のことは分からずじまいだったはずだが？」

——誰かが何かを隠そうとしているほど、不自然にな。

エヴァンジェリンは確信的な眼差しで老体を穿ちながら、いつからか話題にすら挙げられなくなった過去の疑問を声に乗せた。耳が痛い——というのは、なんの比喩でもない。まるで真空に投げ出されたように、酷い耳鳴りがする。分かりきっていたことだ。エヴァンジェリンに気付かれた時点で、この程度の詰問は受けるだろうと、想定はしていた。エヴァンジェリンだけにではない。蒼井鈴葉という存在を認知している魔法関係者の耳に届けば、その真意を糾されていただろう。故に、想定外でもあった。特別な処置を申請すれば大事になる。それを避けるために、必要最低限の工程で完結させた。故に、魔法は使わず、証拠の残りにくい希釈した魔法薬を使用した。刹那——木乃香が鈴葉を連れてきたことこそ偶然だったが、都合は良かった。絶好の機会だったことに違いはなく、運命的に完璧な隠蔽も可能だった。

しかし、エヴァンジェリンの嗅覚は、人間の体であったとしても人間離れたものを発揮させた。それは、ひとえに魔法使いとしての勘だったのかもしれない。或いは、彼女の足を黒猫が横切ったのかもしれない。それがどのような因果だったとしても、近右衛門が術を行使するその直前に扉を足蹴にして彼女が入室を果たしたという事実だけが、淡々とそこに残された。



「根拠もなく、不穩なことを言うものではないぞ。誰かがなにかを隠そうとするならば、その結論へすら導かれなかつたらうて」

額を伝う汗が凍るようだった。まるでエヴァンジェリンの魔力に中てられたように。

当然、彼女はただの童女でしかない。牙を抜かれた吸血鬼に、そんな力はない。

「そうだな、こんなものはただの妄想でしかない。だがな、どこかの火星人も言っていたが、裏打ちされた憶測はもはや事実と呼んでも差し支えはないそうだ。癩だがな。今ならその本意も理解できるといふものだ」

シニカルに笑みを浮かべる。外見不相応に。年齢相応に。

片眉を吊り上げるようなその表情は、どこか幼く、彼女の言う火星人のような、天真爛漫とも取れるような雰囲気醸し出す。

呑まれるようだった。近右衛門とて、全知ではない。火星人というものがなにを示しているのか。或いは、なにかの比喩なのか。焦点が合わない。しかし、その口振りからしてふざけている訳ではないことくらいは察せられる。

猫の口のように、多くは語らずと、彼女は言葉を紡がない。

それは暗に、「分かっていることを議論するつもりはないのだ」と告げているようだった。

「わしよりも知っていることが多そうじゃのう。是非とも、この無知な老翁にも教えて

ほしいのじゃが」

「ほぎけ。貴様の学園だろ」

「全てに手が届くならばそうしておるよ。そう上手くもいかぬからこそ、タカミチ君たち頼つておるんじや」

自嘲気味に、近右衛門は俯いた。ここ最近の鈴葉のことも含めたあらゆることが脳裏を過ぎり、肩を落とす。いかに熟練の魔法使いであろうとも、いかに洗練された魔術師であろうとも、肩に押し掛かる事柄について、投げ出したくなる衝動にかられることがあるだろう。近右衛門にとつて、今がまさにその時なのかもしれない。――

「爺が落ち込むな、気色悪い」

辛辣な言葉に、近右衛門の垂れた髭は萎びていくようだった。

当然、この童女が老体如きに同情してくれるような感情を持ち合わせていないことは知っている。彼女の優しさは歪な茨に包まれている。

彼女が、他人に優しくしようとしても、優しくできないサガの持ち主であることを、理解している。彼女の心は鉛のように重く、彼女の足を掴んで離さない。性格の一言で済ませてしまえばそれまでなのだが、他人に対する不信を暴いてみれば、虐待された子猫のような存在なのだろうと思うと、その難儀な性質に顔をしかめたくなる。

――優しくされたかった訳ではない。一瞬の気のゆるみが見せた本音の一部だ。枯

れた咳払いをしてみせれば、いつも通りの己がそこにいる。

「返す言葉もないわい。じゃが、わしも考えなしに行動している訳ではない。鈴葉のパートナー候補であるお主に相談の一つもしなかつたのは失念じゃつたが」

「茶化すな。何故このような行動に走つたのか——その動機くらいは理解しているつもりだ。私が言っているのはそんな些末な話ではない。方法の話だ。もしもあの時——鈴葉が図書館島へと単身赴いた日、私が帰宅に寄り添わなかつた場合、あいつは今頃、地下監獄へと逆戻りだつた。その危険性を孕んだ方法を、貴様が手段として行使したことに問題があると言っている」

「むう……」

「唸るな」

「じゃがの?」

「言い訳をするな」

もはや、喋らせるつもりもないらしい。

エヴァンジェリンの言い分は至極真つ当なもので、近右衛門の行動は強行とも凶行とも言えるものだつた。それを自覚的に行つただけに、どのような言葉も所詮は結果論であり、言い訳のしようもないことは確定的だつた。それを理解しているからこそ、エヴァンジェリンはその急所へと棘を刺す。

「鈴葉に対する様々な権限を貴様が握っていることを自覚しろ。あいつを呪物にも聖遺物にも——人間にも変えることができるのは、貴様と一部の上層部だけだ。裏を返せば、あいつの人間的な部分を殺すとき、それは貴様の手で行われる。孫娘を泣かせたくなければ肝に銘じておけ」

——後悔のないようにな。

エヴァンジェリンはそう付け足すと、組んでいた四肢を解き、立ち上がった。彼女の憤懣やる方ない気持ちは決して溶けていない。霧散するどころか、むしろ昂つているに違ひなかった。だが、矛先を向けるべき明確な対象を前にして、背中を向けようとしている。

わざわざ呼び止めるような酔狂な真似はしないが、それで疑問が払拭されるわけでもない。

そんな近右衛門の複雑な心境を見透かしてか、否か、エヴァンジェリンは振り返ることもなく、呟くように言った。

「その長い頭を充分に冷やしておけ」

扉の閉まる音に掻き消えそうな小さな声。

どうにも、老翁に説教をするつもりはないらしい。

圧迫感だけが微かに残った部屋で、近右衛門は肩を落とした。先程までエヴァンジェ

リンと鈴葉がいたソファを見つめながら、あり得たかもしれない未来を想像する。血に濡れた床。酷く抉れた壁。肉を刻まれ骨を砕かれ——倒れ伏した自分と、発動した封印に囚われ、駄々を捏ねるように自我を失った鈴葉。最悪のシナリオ。避けなくてはならなかった結末。

「……過保護なのはお互い様じゃのう、エヴァ」

無意識に零した言葉は、反省から程遠く、また一つ、近右衛門は唸り声を上げた。

——理事長室から退室したエヴァンジェリンは、サボタージュに使用しているいつもの屋上で頭を抱えていた。

日の当たらない陰にいることもあって、菌糸類が生えてきそうな雰囲気すら醸し出している。冬の風は冷たく、皮膚を貫通して心臓を刺すようだ。陽に当たれば多少は和らぐだろうに、吸血鬼としての癖なのか、どうにも眩しい紫外線は好きになれずにいた。

そんな中、*「後悔のないように」*と零した自分の声が、頭に反響する。

遠くを照らす太陽が煩わしかった。自分の言葉を何度も何度も反芻してしまうのも、すべて太陽のせいなのだ、責任を転嫁したくなる程に、忌々しい。

後悔したくないのは自分だ。

別に、他人なんてどうでもいい。愛してくれた両親は遠い過去に死んだ。愛した男は約束も守らずに近い記憶の中で死んだ。死ぬはずもないかつての旧友の半数以上が行方を眩ませている。狭い籠に囚われた哀れな一匹の蝙蝠は、その過去と未来に蓋をされた。

鈴葉という少女も、そのうちの一人に過ぎないはずだった。

ロンドンで彼女が行方を眩ませたとき——またか、と思った。

それと同時に、自覚してしまったのだ。

どうでもいい他人のうちの一人に対して、旧友に似た感情を抱いていたこと。

少女の振る舞いは、思い返せば、自分が愛した男に対して行ったアプローチと似たものだった。相手の都合など知らず、ずかずかとその心象に踏み込み、相手の活動の都度に理由もなく目の前へと立ちはだかる。くだらない理由で連れ出そうとするし、くだらない理由でついて来ようとする。

理不尽だし、面倒くさい。愛しきなんて抱けないし、突き放すようにあしらった。

あの男も、きつとこれと同じような感情を己に抱いたに違いない。

「まったく、歳をとったつもりでいたのだから……」

恋慕の感情も。

友愛の感情も。

喪失の感情も。

全てを過去に置いてきたと思っていた。

だが、考えてしまった。何度となく、脳裏に過ぎってしまった。幾度となく、思い出してしまった。

——鈴葉という少女を、自分の魔法で凍らせたあの日を。氷の棺の中へと閉じ込めたあの感触を。それからの、喪失感の日々を。

虚無と呼ぶには長すぎる時間だった。

諦めてしまえば、無限の時間に囚われしもう気がした。

だから、あの女性に助言をした。自分の仮説を実践して見せた。それでも、全ては憶測の域を出ない。そのもどかしさに、いつからか、諦めという感情に支配されていたのだろう。それが厳密にいつなのかと言えば、彼女の元氣そうな姿を目の前にした、あの時だ。なにもかもを忘れてしまった少女の目が自分を映した、あの時だ。

「失うくらいなら今のままでいいなどと——」

独白にも似た言葉は、自戒も込められた杭のようなものだった。

嫌気が差す。

近右衛門に対する言葉はすべて本音だ。だが、そこに八つ当たりのような意思がなかったのかと言われれば、嘘になる。生温い学園生活に身を浸した結果か、慣れたはず

の恐怖という本能が顔を覗かせた。

それを自覚したのは、数か月前の話だった。



「——にゃーん」

そんな鳴き声を上げる鈴葉に、眩暈がするようだった。

金曜日という、鈴葉にとつては一週間に一度の「給餌」の日のことである。

いつものように学業を終えたエヴァンジェリンは、一度自宅のログハウスへ帰りロングコートに身を包むと、教会へと向かった。地下へ向かう階段を降りて、ノックをすることもなく鈴葉の部屋の扉を開けたのだが、しかし、そこに鈴葉の姿はなく、ベッドの横のサイドテーブルの上で項垂れるランプに照らされた一枚の紙切れだけが家主の代わりに自己主張していた。これだけなら別になんてことはなかった。暫時待たされるくらいなら構わないかとベッドの上で寛いでいたのだが、二〇時を過ぎても帰ってくる心配がない。



鈴葉の性格や特性なら、ある程度は把握している。あの少女は自力で迷子になるような冒険心など持っていない。知らない人間についていくような童心すら持っていない。あどけない少女の見た目とは裏腹に、堅実な現実主義者である。一部の突発的な行動を除けば、大人しい子供のそれである。

故に、エヴァンジェリンはこの現状を異常と判断した。近右衛門へ携帯電話で短い報告と指示を出し、紙切れを手にして部屋を飛び出した。

ロンドンに行く前の鈴葉ならば、心配は無用だったろう。年齢に対して過剰な成長速度を見せた魔法使い見習いの蒼井鈴葉ならば、この程度のことではエヴァンジェリンが身を乗り出すことはなかった。しかし、今の鈴葉は魔法など扱えないし、身体能力で言えば見た目そのままの幼女である。そのくせ、内側に孕んだ呪いはまさしく化け物と呼ぶ他になく——久方ぶりに、アレは爆弾なのだと思い知らされた。

紙切れに残留した僅かな魔力の名残りと少女自身の魔力を感知したのは、猫耳を付けた当の本人がエヴァンジェリンを見つめながら首を傾げた時からだった。今更ながら、学園結解が解除されたのだと察したのと、気が抜けたのと、吸血鬼として月明かりに照らされる懐かしさから、鈴葉を見つけた報告と一緒に学園結解の現状維持を近右衛門へと念話で指示した。何かを察したのか、近右衛門はそれを快諾してくれた。

——それが、明暗の分かれ目だったのだろう。

不快な呼ばれ方に一瞬だけ気分が崩れそうになったものの、冬の澄んだ空に浮かぶ月が心地よくて、いつそのことワインでも持ち寄って時期遅れのお月見に洒落込もうかとすら思えた。

鼻の奥を冷たい空気が通っていくのを感じながら、小さな少女の手を引いて、引いて引いて、ぽとり、と、その手が離れた。

「……鈴葉？」

振り返れば、鈴葉が道の上で倒れ伏していた。糸の切れた操り人形のように。

それから刹那のうちに、得体の知れない魔力がぞわりと沸き上がる。それは渦を巻き、鈴葉を呑み込んだ。その魔力の出所は、追及すれば鈴葉の体そのもの。魔力が持ち主を襲うような構図に、その異常性が詰め込まれていた。

その矮躯を、貪るように、どこからか肉質的な咀嚼音が聞こえてくる。その度に、鈴葉の伸ばされた手が空を掴もうとする。苦しいのか、小さな喘ぎ声が漏れていた。

「バカな……」

放心する。見る見るうちに鈴葉の魔力が侵食されるように消えていく。

そこで初めて気付いた。

——鈴葉自身の魔力が、なぜか、いつもよりも少ない。

一週間に一度の食事は、最低限の話ではない。特殊な魔力供給方法による事故を防ぐ

ための安全マージンである。真祖<sup>エヴァンジェリン</sup>の吸血鬼の魔力を、消化器官から取り込むのだ。注意を払ってデータを取りながら導き出された正確な解答である。契約による魔力供給は、基本的にその場で使い切る消耗品であるのに対して、鈴葉のそれは“生命維持”に近い。“他人の魔力を他人の魔力のまま行使する”のとは訳が違う。過度な供給は毒にもなる。魔法を行使する術を知らない鈴葉は、過度に蓄積されたその毒のような魔力を発散することができない。

しかし、逆に言えば、一週間に一度で充分である、という結論もまた、確かなものだった。

それに反して、鈴葉の内側にいる化け物とも呪いとも呼べる異常は、どうにも、腹が満たされずその鎌首を擡げたらしい。

吸血鬼の夜を見通す瞳が、鈴葉の周囲の変化を確かに映した。服の隙間から、赤黒い液体が意思を持つように流れ出て、行き場もなく彷徨い始める。本来ならば好物のはずの、血液。今だけは、それを啜りたくなる本能も引つ込んでしまう。

「——、……さ、い」

謔言の様に、鈴葉の口が動く。

呆然としていたエヴァンジェリンは、その声に無意識的に反応した。鈴葉を抱き起こし、その口を自分の肩口へと押し当てる。

「ごめ、——い」

「なんだ、なにを言いたい。まだ意識はあるのか？ 答えろ、答えてくれ、鈴葉ッ」

「あ、——あ、……」

食われる覚悟は出来ている。いつでも食べばいい。学園結解が解除されている今ならば、どれだけ食われようと再生できる。食い千切られる痛みに耐えるだけだ。だから、早く食べてくれ——。

頭の中で、ぐるぐると思考が回転する。対処の仕方など知らない。分からない。これが正解なのかも不明だ。それでも、なにもせず立ち尽くすだけなど、言語道断だった。——どろり、と。鈴葉の喉が裂け、生暖かい体液が零れ落ちていく。それを皮切りに、全身に裂傷が現れ、不健康な白い肌を鮮血が侵していく。

「ごめん、なさい、い」

「なにを謝っているんだ……？ 鈴葉、私の声は聞こえてるか？ 鈴葉ッ！」

「ごめん、なさい。ごめんなさい。ごめんなさいッ、ごめんなさい！」

膨大な魔力が、エヴァンジェリンごと鈴葉を包み込もうとする。それを撥ね除けんとばかりに、吸血鬼は真祖の魔力に外部への志向性を持たせる。具体的な名前もない魔力のコントロールを、魔法と呼べるのかは別として、とにかく暴力のような魔力から鈴葉を守ろうと歯を食いしばる。

「大丈夫だ——大丈夫。大丈夫だから」

——不死性を持つ吸血鬼にとって、治療は縁のない技術だ。それでも、意識を失いそうな人間に対しては声をかけ続けるべきであるという初歩的な知識くらいならば持っている。要領を得ない謝罪の言葉を並べ立てる鈴葉に対して、エヴァンジェリンは少しでも自分の声が届くようにと声を上げる。

呪いとも呼ぶべきその症状は、今の今までずっと鳴りを潜めていた。だからこそ忘れていた。この爆弾がなにかをきっかけにして暴発しようものなら、最悪、その矮躯ごとまとめて封印されて無かったことにされる。そして、その命は、殺す方法が見つかるその時まで、延々と鼓動を叩く。

そうなつてしまえば最後、二度と、会話はおろか、会うこともできなくなるだろう。

——思い至った瞬間、吸血鬼の魔力は一つ、大きな波を描くように跳ねた。

「エ、ヴァ……う？」

その吹雪のような寒冷な魔力が届いたのか、鈴葉は謝罪を繰り返すことをやめて、吸血鬼の名を、乾いてしゃがれた声で呼んだ。裂けた喉に冬の風が染みるのか、空気の抜けるような呼吸に苦悶が混ざる。

純白のコートが汚れることも厭わず、自分の存在を示すためにも強く抱きしめる。今の鈴葉の感覚がどこまで生きているのかも分からない——少なくとも、ロンドンでの鈴

葉は錯乱し、痛覚を始めとした五感に鈍くなっていたように記憶している。あの時と近い状態になっているのだとすれば、もしかしたらもう自分自身のことエヴァンジェリンを認識するのも困難なのかもしれない。だから、強く抱きしめる。その裂傷に、自身の体温と魔力を浸透させるように。

「そうだ、私だ。安心しろ、大丈夫だ。だから——」

言葉を繋ぐようとして、躊躇った。その言葉は、長らくの間、抱くこともなかった、慟哭に近い。

「——だから、ここにいろ。どこにも行くな」

鬼の目に、雫が震える。

数百年を生きた鬼にとって、その心象は毒だった。両親に泣き継り、甘え、屈託のない笑みを浮かべる一〇歳の少女へと回帰する。そこに芽生えたのは、恐怖と不安だった。原初的で本能的な、肌が粟立ち、脊椎を撫でられるような、未知へと踏み出せない臆病な思惑う幼子。

理不尽など味わい尽くしたはずだった。

恐怖に震える手など千切り捨てた。

躊躇する足など砕いて這った。

不安に揺れる目など抉り打ち据えた。

弱音に怯える舌など吐き捨ててやった。

不要と判断した脆弱性が、影から絡めとろうとその手腕を伸ばす。

「エヴァ……—どひ……？」

息が止まる。

手指が力む。

「ハハハだーハハハにいるー！」

歯が軋む。

この異常は、鈴葉の首に付けられたチョーカー型の監視システムによって、既に近右衛門を始めとした関係者に伝達されている。一〇分と経たずして到着するであろう特殊班に、歯噛みする。エヴァンジェリンを含め学園が把握している対処法と言えば、十分な魔力を供給し、ほとぼりが冷めるのを待つことだけだ。それですら特殊班の機材は必要不可欠である。「眠りの霧」で意識を奪ったとて、根本的な解決には至らない。

場合によっては深い地下へと鈴葉を送り返すことになるだろう。

最悪な未来を払拭するように、エヴァンジェリンは体を強張らせた。

「——あ、いた」

神経が狂つたように震えた二本の腕が、エヴァンジェリンを捉えた。

「鈴、葉……？　——ッ！」

瞬間、エヴァンジェリンの腕をなにかが突き刺した。それを皮切りに、腹を、胸を、二の腕を、足を、首を——全身のありとあらゆる箇所、痺れと激痛が駆け抜けた。唐突な神経の反乱。内臓を抉られたのか、口角からどろりと血が垂れる。刹那の衝撃に四肢の力が抜けていくのと同時に、その鋭利ななにかが瞬間的に引き抜かれていく。

血の気が引く。真祖の吸血鬼は不老不死である。致命傷など存在しない。それでも——不安と混乱に支配された今のエヴァンジェリンにとって、*「鈴葉に攻撃された」という事実は、心の臓に杭を打たれたのと同等の絶望感に等しかった。倫敦の夜が走馬灯のように脳裏に投影される。*

鈴葉の体を捕まえていた腕が、落ちていく。ぐにやりと、三半規管が揺れた。

今度は自分の番だと言わんばかりに、鈴葉がエヴァンジェリンの肩を掴み、固いアスファルトの上に彼女を押し倒す。後頭部を襲う鈍い音に反応が遅延する。引き延ばされた時間の中で、鈴葉の両手がエヴァンジェリンの頬を包み込んだ。

「あつ、ぐう……」



ぐつと顔を寄せて、馬乗りになつた鈴葉がエヴァンジェリンを覗き見る。視界が失われているのか、息と息が混じる距離まで、上気した顔の温度が伝わる距離まで、じいつと虚ろの瞳でエヴァンジェリンの顔貌を確かめる。その双眸は、毛細血管が破裂しているのか、赤黒く染まっていた。目尻から垂れたのだらう血液はくすんだ焦げ茶色に乾いている。

「エヴァ……。一人は怖いし、寂しいよ」

言いながら、鈴葉の体内からこぼれ出た血液の一部が志向性を持つて形を作つた。それは鈴葉の指先へと集まつていき、鋭い刃となつて顕現する。馬乗りのまま、喉の下から下腹部にかけて指を振るうと、バターナイフ程のそれは、器用にもトグルに留まつていたコートのループを切断し、下に着ていた制服をきれいに裁断してみせた。

「は——？　ぐツ、あツッ！」

言葉の意味を聞こうとしたが、その言葉は喘ぎ声に塗り替えられる。裂かれた服を強引に肌蹴させた鈴葉は、肩口に小さな犬歯を食い込ませ、薄い皮膚を柔らかい筋肉ごと噛み千切つた。外気に晒されてはならない体の内部に、冷え冷えとした空気が侵入してくる。全身に鳥肌が立つ。いつもの医療的な採取とは違う。痛覚を麻痺させる魔法薬も使用されず、ただ獣のように乱暴な歯牙に抉り取られる。しばらく、耳の傍で咀嚼する音が続く。ゆつくりと、その噛み応えを確かめるように。食用ではない肉の繊維に苦

戦しているようだった。調理されていない皮膚と肉は、決して、その小さな顎に優しく  
ない。

「ごくり——と。耳の傍で嚙下する音が響く。

「はあ——、はあ——……」

恍惚とした吐息が傷口と鼓膜を撫でた。

反撃しようと思えば簡単にできただろう。

鈴葉の四肢を千切り飛ばし、氷の棺に閉じ込めてしまえば、それで終わる話だ。少  
くとも、鎮圧するまでに要する時間はもの数秒である。今のエヴァンジェリンならば  
それができた。学園結界の支配下から解放された吸血鬼にとつては、赤子の手を捻るよ  
うなものだ。

しかし、同時に不可能でもあった。

鈴葉に依存されていると思っていた。まだ滑舌もあやふやな小学生の頃から矢鱈と  
話しかけてくる少女は、どんな理由からなのか、エヴァンジェリンに話しかけることで  
何かを解消していた。それが癖となり、習慣となり、終いには依存にまで発展したのだ  
と。

だが、違った。

依存していたのはエヴァンジェリンの方だった。

“光に生きてみる”と、愛した男はそう言い残した。

その男が死んだと噂された時、生き方が分からなくなつた。エヴァンジェリンにとつて、光とは男だつた。道を照らす街灯であり、道標だつた。それが潰えて、消えて、途絶えて、光が失せた。

道はまた、暗い闇に包まれた。

殺せばいい。潰せばいい。奪えばいい。

死ねばいい。

闇の世界とはその連続だ。生きるために殺すし、生きるために死ぬ。殺すために生きるし、死ぬために生きる。酷く簡潔な、絶対的なルールだ。

だが、麻帆良学園で学生生活を強いられたエヴァンジェリンには、その闇すら指標にならなかつた。

ひとえに、虚無だつた。

——正義とは何か。

年端もいかぬ少女にそう問われた時、三日三晩に及び考え続けた。ボランティアでもすればいいのか、悪政を敷く政治家を殺せばいいのか、犯罪から被害者を守ればいいのか。そのどれもが釈然としない。少なくとも、自分は正義を張つてそれらを成し遂げるような性質ではないと結論付けた。

今となつても、その本質の答えは出ない。  
だが、当時、思つてしまつた。

これが最後の機会なのだろうと。

飽きることなく話しかけてくる少女が、立派な魔法使いとなるその時まで、或いは、その後の、彼女の行く先にこそ、求める光があるのではないかと。

——しかし、その道は閉ざされた。

少女は、もう光の魔法使いにはなれない。その志すら忘却した少女に、光や正義など、既に無関係だつた。

切り捨てれば良い。この少女は道標ではなかつたのだと。二度と、あの男の遺言を叶えることはないのだと。その機会など、端から無かつたのだと。失われたと勘違いしていたのは自分だけで、運命は既に決まっていたのだと。

「んぐ、ぐ……」

「ツ——！ 鈴、葉あ……！」

出来なかつた。

この少女を切り捨てることが、できなかつた。光などどうでも良くて。正義など露程も知らず。ただ、横に座つて呆つとしているだけの少女との日常が、只管に愛おしかつた。気付けば、学園生活の半分以上を、蒼井鈴葉という少女が締めていた。それが心地

よかった。どこか自分と似ている、世を捨てたような双眸で遠くを眺める姿に、親近感すら抱いた。

「あーむ、んぐ」

「くっ……う……」

今更、失うことなど、無理だ。

エゴだなんだと言われても、胸の深奥にある自我は、融通が利かない。

自分の体に跨つて自由を奪いながらその血肉を貪る目の前の少女を、蒼井鈴葉と呼んでいい存在なのかは不明瞭だ。言い換えれば、些末な問題である。錯乱して誰に対してかも分からない謝罪を繰り返そうとも、いじらしい声で名前を呼ぼうとも、その歯牙で人肉を食い漁ろうとも。その表層にいる人格が、たとえ蒼井鈴葉ではなかったとしても、その中に彼女が存在していることに違いはない。

それは、独占欲に似ている。

食えども食えども再生する肩の肉を何度も何度も噛み、時に下顎の小振りな歯が剥き出しの鎖骨を撫で、再生する前の噛み痕をざらついた猫のような舌でなぞって内側の肉を削ぎ落とそうとする。基本的に無欲で、なにかを強く欲することのない蒼井鈴葉の珍しい姿に、脳髓の奥がゆらりゆらりと揺れ動く。無意識に動いた両腕は、もう一度、その矮躯を慈しむように抱きしめた。

覚悟はしていても、突き抜けるような激痛は体を震わせる。

エヴァンジェリンと鈴葉の血が混じるように溶け、アスファルトに赤黒い水溜りが出来ていく。荒くなった呼吸に、寒冷とした空気が肺を凍てつかせた。唯一熱を持つているのは、噛み痕だけ。頬を紅潮させながら親鳥に恵まれた雛のように忙しく餌をついついてる鈴葉の熱い吐息が、晒された肉と骨を焼く。

食い千切るだけの工程に遂に飽きたのか、鈴葉は肩口からそつと離れ、耳の下側へと潜り込み細い首筋に歯を当てると、柔らかい皮膚に食い込ませた。今までと同じようにその皮膚を破れば、諸共に引き裂かれた静脈から、どくんどくと赤ワインのような血液が止め処なく溢れ出す。

「んんっ……」

露になった傷口に唇を当て、啜るように窄めれば、舌の上をあつさりとした鉄臭い液体が転がっていった。こくりこくりと、小さな喉仏が上下運動を繰り返す。

「つっ……いっ……」

慣れて麻痺し始めていた痛覚が、違う方向性の刺激に再び反応した。飛び出そうとする悲鳴を我慢しようとして唇を噛めば、吸血鬼を吸血鬼たらしめる鋭い犬歯が薄い皮を突き破り、僅かな血がゆつくりと白い肌の上を滴り落ちる。無我夢中になって濃厚な血を文字通り飲み干そうとする鈴葉の動きが一瞬だけ止まり、首から口を離すとゆつくり

と体を起き上がらせる。心なしか赤みがかつた黒髪を妖艶に垂らし、その黒ずんだ目で、息も絶え絶えなエヴァをじいつと見つめる。

「ごめんね」

小さく、短く呟くと、再びエヴァの頬を両手で包み、血の垂れた唇に一度だけ舌を這わせた。唐突な、接吻に似た行動に驚くこともできない吸血鬼は、ただ呆然とその少女へと視線を向ける。いつぞやと違い、理性を失っているようには見えない。むしろ理性的で、それどころか、なにか既視感のようなものを覚えた。いつもと変わらない、掴みどころのない無表情なのだが、なにか雰囲気が違う。その違いが、妙に胸をざわつかせた。

気付けば、いつもの黒いワンピースの下から覗く肌からは裂傷も消え、陶器の様にきめ細かい綺麗なそれが夜の闇に眩しく主張していた。同様に、首の傷も再生しきったエヴァは、整わない息を無理やり飲み込み、疲れ切った声で問うた。

「もう、大丈夫、なのか？」

魔力は供給されたのか。体調に異変はないのか。理性は保っているのか。人間の形をしたものを食べたことに罪悪感はないのか。いつもとは違い調整されている訳でもない量の肉を食べたことで何か違和感を覚えていないか。

ふつつつと湧き上がる疑問は絶えることを知らない。出てきた言葉は酷く端的なもの

のだったが、同時にその全てが集約されていた。

鈴葉は答えない。なにかと物憂げに眉を潜ませている。なにかを言おうとして、しかし、思いとどまるように口を閉ざす。それを何度か繰り返しているうちに、瞼が落ちていき、うつらうつらと頭が揺れていき、やがて――

「む……」

――エヴァンジェリンに覆い被さるように倒れてしまった。

自分の体の上で穏やかな寝息を立てる鈴葉に、先ほどまでの貪欲な姿はとても想像できない。なんとなく鈴葉の頭を撫でてみれば、数秒前までの出来事がまるで夢のようで、今この瞬間こそが現実であると実感が湧いてくる。奪われた魔力は微々たるものだが、精神的な疲労感はあまりにも大きく、このまま瞼を落として眠ってしまいたい欲求が頭の中で囁く。

「お待たせしました、マスター」

聞き慣れた抑揚のない声。それと同時に、複数人の足音が聞こえてくる。そのどれもが忙しくなく、むしろ、今の自分自身を取り巻く空気こそがズレているのだろうと声もなく苦笑した。

優秀な班員たちが鈴葉を素早く丁寧に抱き上げる。エヴァンジェリンに詰問をする様子は見られない。事情聴取は任務に含まれていないのだろう。声の主である茶々丸



にゆつくりと抱き起こされ、ブランケットを背中にかけてられる。

「マスター、怪我はございませんか？」

「ん？ ……ああ、無事だ」

主人が吸血鬼であることを忘れているのか、茶々丸は至極当然と言わんばかりにその矮軀を氣遣う。しかし、無理もない。押し寄せてくる倦怠感に意識が覚束なくなっていることは、本人であるエヴァンジェリンが一番理解していることでもあった。

班員の恙無い作業を見つめながら、今日の夜は長くなることを予想しながら、エヴァンジェリンは空を仰ぐ。

「茶々丸」

「はい、マスター」

「私の服を直せるか。明日の朝までにだ」

「お任せください」

「頼む。それと、少しだけ、休む。五分後に起こせ」

「仰せのままに。……おやすみなさい、マスター」

返事を待たずとして、エヴァンジェリンは臉を落とし、茶々丸の肩に寄りかかるようにして意識を落とした。

幼気な少女のような寝顔。それは、距離を置いたところで機材と班員に取り囲まれた

鈴葉の表情と、どことなく似ている。

お互い、疲れ切つてしまつたのだろう、と、認識する。二人とも、その矮軀に収まらない強大なものを内部に秘めている。茶々丸にとつて、エヴァンジェリンのこんな寝顔は、体調を崩して弱り切つた時以外には見たことがなかつた。

「どうか、ゆっくり休んでください」

周囲には聞こえない範囲の小さな声でそう呟きながら、少しだけずり落ちたブランケットを掛けなおして、預けられた小さな小さな体重を支えた。

——その後、忠実な従者は、一秒のズレもなく、五分後に主人を叩き起こしたのだつた。